

その室及孫子の墓

醫學漢學を修む

生年

著書

小寺清光との關係  
鬼翁の號  
肖像

書なりと。中なる碑は、表に義光貞順大姉、左側に、關鬼翁室、鳥越氏は笠岡の人なりと、北端なる碑は、表に關雅之助墓、左側に文久貳年壬戌三月二十四日とあり。丸山氏云はく、雅之助は鬼翁の子なる景秀の子なり。幼にして歿すと。景秀の墓は、同町觀照院内にあり。碑の表に關景秀方禎の墓、右側に「嘉永七年甲寅三月二十七日病歿、享年三十二」とあり。嘉永七年は、即、安政元年なり。丸山氏云はく、方禎にあらず。方願なりと。景秀の碑の南に接して、子女の碑三基あり。丸山氏云はく、鬼翁通稱は立介、小田郡吉濱の社家、關藤左京政信の子なり。後に後藤氏を改めて關氏と稱す。夙く父母を失ひ、二弟を養育す。二弟の内一人は、即ち、福山藩の儒官、石川文兵衛（即關藤藤蔭）なり。鬼翁若くして京都に遊び、村山伊豆守と云ふ人につきて、醫學及漢學を修む。國學は本居派を執し、書は千陸風に働ふ。景秀の外に二女あり。長は同國淺口郡大島の人、坪田氏に適く。景秀父に先ちて歿せしが故に、代助と云ふものを養ひ、次女を以て之に配すと。通泰按するに、鬼翁名は政方（マサミチ）又政三千、政御路、萬沙御路、磨裝密など書けり。國學の號は嘉平田舎（カヘアノヤ）又、雞頭樹屋と書けり。以上備字例及短冊による。天明六年丙午十二月に生る。丸山氏の藏せる短冊に、吟味老來田舎中、風流三昧一鬼翁。時逢生日嘉平月。偶夜立春歎那窮。雞頭樹屋丙午生」と書けるが、あり。歌の外、詩及俳諧の作あり。著書の版に上れるは、備字例一卷なるべし。其版に上ほりしは、天保十三年なり。笠岡の人小寺清先に從學せし事あるにや。備字例の自跋に、吾摺園大人と書けり。父政信が清先の神道の弟子なりし事は確なり。關代助の女某が藏せる神籙（カミヤク）極秘の傳といふ卷の終に、「右授藤原政信儀之莫怠也、安永七年八月二十一日。雲齋藤原清先とあり。鬼翁、一種の服を製し、之を鬼衣と稱してより鬼翁と號す。

代助の女某の藏せる扇面に、鬼翁の像あり。鶴色の衣と、青き色の羽織に、朱盤色の紐を付けたるとを著たり。自跋に「水鳥の名におふころも、打きつゝ、鬼の翁と、人によばれむ」とあり。丸山氏云ふ、鬼衣は初弟石川文兵衛が、其主阿部侯より賜はりし侯の禮服を、鬼翁に贈りしを、改め製せしなり。色は鶴色地は、隨手にて、紫と白との染分の紐を附けたり。されど、こは節日の外は用ひず。常は質素をとふとびて、鼠金巾の黒き紐を附けたるを用ひきと。丸山氏の藏せる懷紙に、左の如きものあり。

六十一になりけるとし、人々來つどいて、ほぎごとせむといひける時によめる。  
述懐の歌。 鬼翁

思ふにし、まかせむものか、世の中は、あやしきものか、わが齡は、たち餘りを、ふたつ、みつ、すぎくるときに、垂乳根の、母を手離り、ちゝのみの、父におくれて、みなしごと、なれるふたりの、ばらかちの、をさなきこ等を、撫子の、なておふしつゝ、うつせみの、世のいとなみに、入穂塵の、からきめ見つゝ、すみなれし、家をも離り、あるときは、子戀の杜に、立袖の、なげきこりつみ、後はまた、身もいたづきぬ、いかさまに、爲りなむものぞ、行末も、猶やかゝらむ、吾よはひ、長くは、あらじ、とおもひつゝ、在こしものを、魂ちは、ふ、神のたもてる、命こそ、あやしかりけれ、うれしき、おもひしものつばかり、我は、まさりぬ、悲しき、父の、齡は、みつばかり、我におとりにぬ、千代にも、思ひしものを、今更に、せむすべもなし、柞葉の、母のみことも、現身の、世にしいまきば、うみの、この、うまごひひこら、かきつられ、まつさは、ましましを、父母を、萬世ませと、打つどひ、いはひて、ましましを、吾世をも、つぎて、千代にと、もるともに、いはひて、ましましを、今さらに、せむべもなし、おもふに、まかせぬものは、世の中のみち。

これによれば、政信は文化四五年の比、五十八歳にて歿せしなり。又余がもてる短冊に、  
神遺方考註を、義門法師、京までもてゆきて、やむことなきわたりへ御覽させつ  
といひおこせたる返事に、  
政御路  
あしたづの、つばさにかけて、かへらずば、雲ぬのちりと、いかであがらむ。（井上通泰氏）

高橋正翁 文祇

生歿

生 二四三九、後桃園、安永八年、  
歿 二五二一、孝明、文久元年六、目八三、

高橋正翁



總叙

〔歌學三〕 越後國、北蒲原郡、越岡村、大字長戸村に、高橋文祇といふ歌人ありき。過きし、文久元年六月、八十三歳にてみまかりけるか、その頃、越後地方には、歌人として、指を屈するに足るもの、甘人ばかりだになかりしといへり。文祇、嘉永年間、のころより、正翁と號し、詠歌をたのしみとして、日をおくられき。

### 山崎知雄

生歿

生 二四五八、光格、寛政一〇年、

歿 二五二一、孝明、文久元年九、二三、**目六四**、

〔通稱〕 彌左衛門、**關**、武陵、**家**、**號**、蝸牛舎、又瓢菴、

〔國學〕 岸本由豆流、

〔書〕 喜多武清、**一**、知雄

(以上、古學、下)

姓名

學統

總叙

日本紀校正に志す

〔古學下〕 江戸ノ人ナリ、傳馬町瓢菴新道ニ住シテ、家主ナ務、岸本由豆流ニ從ヒテ、國史ヲ學ビケルガ、日本紀畧ヲ讀テ、印本ノ無キト、且傳寫ノ訛脱、居多ナルヲナケキ、慨然トシテ是ヲ校正セント思ヒ、塙保己一ニ謀ル。保己一、是ヲ慫慂シテ、其功ヲ成ンコトヲ勵マシヌ。知雄オモヘラク、紀畧ノ書ハ、光孝天皇以前ハ、六國史等ヨリ抄出セシモノナレバ、要ナラズ、醍醐天皇以後ハ、全ク當時ノ記載ニテ、未ダ正史ノ體ヲ得ザレドモ、六史ニ繼モノ、是書ヨリ外アルコトナシト、醍醐天皇以後ヲ分チテ、古寫本十數本ヲ比校シ、又扶桑畧記、一代要記、公卿補任等ノ諸書ヲ參考シ、其同異ヲ上層ニ標シ、嘉永三年庚戌十月

病歿

梓ニ上セヌ。玉山堂ト云書肆アリ。知雄ガ厚キ志ヲ感ジ、書肆ノ冥利、又續後紀ヲモ校正シ、次テ三代實錄ヲ校セシガ、安政乙未ノ歲、火災ニ妻子ヲ失ヒ、大ニ力ヲ落シタレド、又馬伏波ノ老當益壯ノ語ニ奮發セシガ、文久元年ノ春ノ比ヨリ病ニカ、リ、是歲九月廿三日身マカリヌ。年六十四。知雄傍ラ書ヲ喜多武清ニ學ビ、肖像ナドヨク書レタリ。人ト爲リ然諾ヲ重ンジ、約セシコトヲ違ハザリケリ。黒河春村、内藤廣前、色川三中ナド、最モ知音ノ友ナリ、ト云。

久シク煩ヒテ、コ、チ死ヌベク覺エケル比ヨメル、

六十ぢあまり、住し此世の、別れかと思へばぬるゝ、我袂哉。

十月十五日ノ夜、山崎氏ノ法廷ニ侍リテ 秀

堅

神無月、もちの月影、さゆれども、しぐるゝものは、涙なりけり。

〔古學下〕校 日本紀畧

校續 日本後紀

### 小林瓦齋

生歿

生 二四六〇、光格、寛政一二年、

歿 二五二二、孝明、文久二年正、一〇、**目六三**、

〔園〕 淺草北清島町法算寺、

山崎知雄 小林瓦齋

辭世歌

住所



姓名

通稱 三右衛門 美影、  
平田篤胤——瓦齋

(以上、忌辰、上)

生歿

生 二四三八、後桃園、安永七年、  
歿 二五二二、孝明、文久二年二、八、  
田八五、

住所

江戸三番町、淺草西福寺、

姓名

通稱 田兵衛 元雄、  
子駿、鬘髷岳堂、雲衣堂、  
鶴林院盤譽歌城居士、

(忌辰、上)

學統

村田春海  
本居宣長——歌城

經叙

村田春海門

〔後言〕 小林歌城名は元雄字は子駿、鬘髷と號し、又雲衣堂とも號せり。通稱は田兵衛と云ひ、歌城は退隱剃髮後の稱なり。徳川幕府旗下の士にして、祖先田兵衛藤原元次は、大坂夏陣の際、敵將大野道見を捕へし功を以て、八百石の采地を河内に賜はり、代々大番の隊士たりき。歌城は軀幹壯大にはあらざれども、剛毅不屈の氣象ありてかつ弓術に長ぜり。年十九村田春海の門に入り、深く國學を攻め、廣く群籍に涉れり。詞八衛の刻本成れるとき著者本居氏より一本を春海の許に贈りぬ。春海之を歌城に與へて語法を講せしむ。歌城乃ち師命を奉じ日夜講究して、遂に重訂増補の一書を撰せり。文法語格に精しきこと當時歌城に及ぶ者なかりきと云ふ。文久中に歿し、齡は九十歳に近かりきとぞ。墓は淺草西福寺にあり。歌城歌集四卷は、嘉永中門人久貝某(因幡守)が輯録印行せる者なり。(百家説林、所載)

雜載

〔歌城家集序〕 江府旗下世臣。小林先生。壽過七十。多咏和歌。而樂之。自號歌城。養翠久貝君。從先生受業。今爲大番頭。在京欲爲先生刊其集。而傳之於後。因人命其序於彌彌辭以不知和歌。則君曰。先生平生。不好世所謂歌人者。所以託子也。先生之說曰。和歌發於人情。固無朝野之別。然今爲公卿搢紳家之業。至於武士。則不可專好之也。武士而好和歌。則軟柔移性。士氣萎爾。不感國家緩急之用焉。吾之咏和歌。猶人之園茶。點茶。或玩盆樹籠鳥。聊以遣興耳。未嘗以此忘於勇士喪元志士在溝壑之木職也。世之歌人。輒謂我邦之道。在和歌。則家不齊。國不治。其妙可動天地。感鬼神矣。而顧其爲人。則皆羸弱如婦。女。退懦遠。巡。臨難苟免。安能事君。能致其身哉。故今之歌人。無可與語者矣。先生之言如此。子幸題數語。則先生必喜也。彌聞而驚。先生之老而益壯。且飲其說。有裨於士人。因以爲翁之好和歌。出於遊戲之餘。未始妨其武進。蓋如曹操之善草書。劉玄德之好結髦耳。嗚呼。先生其六々山人之流亞乎。元和坂之役。山人獨出。營。跳盪斬首二級。以犯軍令。黜居京北。詩歌自娛。而終身不復渡。水。與公卿搢紳交游。其氣節風采。人皆景慕焉。今承平百餘年。四境無事。先生雖無事跡可見。而氣象之相肖似也。可想矣。故彌不以不知和歌。固辭。而作之序。嘉永二年巳酉暢月。浪華長堂 篠崎彌撰并書

著書

〔慶著〕 歌城集 四  
〔編者補〕 桂園一枝遺評 一

### 久松祐之

總叙

〔慶著〕 號幽篁。稱五十助。江戸人。  
〔同上〕 近世事物考 一 いさゝむら竹

清友雜錄

小林歌城 久松祐之

一三九五



### 長野義言

生歿 二五二二、孝明、文久二年五、一五、  
住所 近江國坂田郡志賀谷村、後同國彦根、  
姓名 主馬、後主膳、鹽桃舍、  
經歷 日本教育史資料<sup>五</sup>

事に坐して斬  
に處せらる

雜載

國學國語に精  
通す

調を藩主に請  
ふ

「古學答問錄」

〔日本教育史資料<sup>五</sup>〕 嘉永五年四月二十六日、藩主直弼、聘シテ藩士ト爲シ、二十口俸ヲ給ス。六年十月六日、弘道館國學方ト爲ル。安政四年四月四日、特ニ田祿百五十石ヲ賜フ。文久二年五月十五日、年日、抽誠ヲ賞シテ、直弼、手ヅカラ傳來ノ刀ヲ賜ヒ、併セテ百五十圓ヲ賜フ。文久二年五月十五日、年來ノ丹誠ヲ賞シテ、直憲、特ニ田祿百石ヲ加賜ス。八月二十四日、事ニ坐シテ監倉ニ禁錮シ、二十七日終ニ斬ニ處シ、家名ヲ斷絶セシム。

(以上日本教育資料、五)

〔同上〕 伊勢國飯高郡瀧野村、長野次郎祐ノ弟ニシテ、天保十二年、近江國坂田郡志賀谷村、阿原忠之進ノ家族ト爲ル。或ハ云フ、義言ハ出石藩ノ義士、仙石左京ノ子ニシテ、雖テ避ケテ跡ヲ晦マシ、氏名ヲ變ズル者ナリト。然ルヤ否ヤ、眞偽ヲ知ラズ。或ハ云フ、精神家ノ落胤ナリト。蓋シ此ハ人ナシテ已レテ尊信セシメンガ爲メ、故ラニ流言セシメシナラン。義言、皇國學ヲ善クシ、正史以下、物語、歌書ニ至ルマテ、該博ナラサルハ莫シ。故モ語學ニ巧ミニシテ、兼テ音韻ノ學ニ通シ、殊ニ詠歌ヲ善クス。初メ天保中、其志賀谷村ニ在ル、直弼ノ皇國學ヲ好ムヲ聞キ、人ナシテ刺ヲ通シテ詠ヲ請ハシム。時ニ直弼、諸子ニシテ尾末町ニ邸在リ。乃チ召シテ面語シ、大ニ意ニ適フ。約シテ師弟ト爲リ、皇典詠歌ヲ研究ス。直弼、天地開闢、日月晝夜、顯幽明暗等ノ疑難ヲ質問ス。義言、答辨書ヲ作リ、古學答問錄ト題シ、五卷ヲ呈ス。直弼、服セズ。自カラ顯幽晝夜之差別ト云フヲ書シテ詰難ス。義言答フルヲ能ハズ。其古學答問錄ヲ著ハスヲ大ニ悔ユト云フ。直弼、又世ニ近江ノ事蹟ヲ詳記セ

ル者無キヲ憾ミ、義言ヲシテ之ヲ撰述セシム。名ヅケテ淡海舊跡考ト曰フ。未ダ稿ヲ脱セズ。成ル

著書

〔同上〕 未分櫛

活語初の榮

和歌葉の枝折

四

櫛の蔭葉

金花集

古今集姿鏡

三〇

小倉百首姿鏡

韻鏡還元鈔

韻鏡諸鈔正義

一

井伊家紹運圖

字音袖鏡

勝元振

一

古學答問錄

淡海舊跡考

### 熊谷直好

生歿 二四四二、光格、天明二年、

〔同上〕 二五二二、孝明、文久二年八、八、  
住所 周防國岩國、居住大阪、西念寺、

(以上、櫛、三九)

〔なには草〕 直好の墓は、山小橋の西念寺本堂の北手なる、生垣ゆひめぐらしたる中において、少し傾けり。表に「熊谷直好之墓」と題せるのみにて、他の文字見えぬ。本堂に安置せる位牌には、「不識庵香一居士 文久二年壬戌八月八日」とあり。

桂園の名家も、無縁となりては、あはれに、香火冷かなり。

〔通稱〕 八十八、後助左衛門、信賢、後直好、

〔柵三〕 熊谷直好と八田知紀と

(森鷗外氏)

長野義言 熊谷直好



直好と知紀との評論

歌は理路に涉るべからず  
天美と術美

天美を抑へ  
術美を取る

歌の理想

歌は専門の藝なりや

香川景樹が古今集正義につきて、熊谷直好と八田知紀と争ひ論ぜしところは、要するに左の數條に過ぎざるか如し。

第一、歌の本質は、理路 Logik に涉るべきものならずとは、熊谷も八田も、思へりしと見ゆ。こは二人の師、香川景樹がつれに思慮といふこと、作意といふことなどを戒めし好結果なり。されば八田は、天美 Das Naturschoene と術美 Das Kunstschone との別を立てずして、ひたすらに紀記萬葉の純粹を尊び、遂に極端なる無邪氣主義 Nativist に陥り、古今の歌の中には、文華の代の風は逸れがたく、作意に落ちたるも交りけんとて、貶めんとせり。熊谷は然らず。歌は美術なりといふことを思ひ得たりと覺し、天美を抑へ、術美を揚げ、古今集を以て、獨秀てたりとせり。作意を用ゆる眞の歌にあらざるとて、鳥虫の聲を羨むべからずといふ。歌は無思慮より出て、巧める如く、飾れる如きをよしとすといひ、人は事業の上より、義理の中にありて、俗語を用ぬなれたれば、歌よみても、工もあるべしといふなど、皆此の意ならざるはなし。若し八田が論を正しとせば、ヘルデルが民謡集をめぐる餘りに、キヨオテ、シルレルの作を卑み、毛詩を取りて、李杜の篇を捨つるに至らん。此條においては、熊谷が説を通ぜりとす。

第二、歌の理想 Ideen につきては、熊谷と八田との考略同じけれど、哲學上の用語に乏き時に當りて、強て緻密なる議論をなさんとせしより、無益の言葉たゞかひをなすに至りしと思はる。歌は理路を避くるものなれど、理想は無るべからず。鶯蛙の聲の歌に異なるは、鶯蛙の聲に理想なくして、歌に理想あればなり。熊谷が常に義利と云ふ字を避けながら、歌は俗話の言葉を備ふて用ゐるものなれば、義もあり理もありと云へるは、理想ありと云はんとして、其語を得ざりしなり。理想を説かんとて、俗話の言葉を用ひたりと云ふは、きはめての窮策なるべし。八田が三十一文字すら、年の内に春は来にげり云云、袖ひぢて結びし水の、理りいづれば、禽獸の物に感じて鳴きいづるとは、更に混ざべからず。彼「あなにやし」あづまはやなどの類は、やゝさる方に近しと分疏せしは、熊谷か歌は、歌聲にて、鶯蛙の聲におなじといふ、迂闊なる説を破するに足りぬべし。此條においては、八田が説を精しとす。

第三、歌は専門の藝なりや否やといふことにつきては、熊谷は、歌は誰れにも詠まるゝものなれば、師弟の道あるべからずといひ、八田は、千歳此方、歌は歌よみばかりよむものなれば、専門の藝なり。師弟條業の行作を止むべからずといへり。歌は美術なり。天稟 Talent なき人は能くよむこと能はず。熊谷が誰にてもよむべしといひしは誤なり。然りとて、専門美術論に傾きて、師弟修

歌と治道との關係

結論

木下幸文と直好

持とす。

第四、歌と治道との關係につきては、熊谷、漢詩と和歌との間に差別を立て、成孝敬、厚人倫、美教化、移風俗等の事は皆詩の徳にて、大和歌にはなきことなりといへり。その本質より論ずるときは、漢詩も和歌も、西洋の「ホエジイ」も同じく、必ずしも風俗と因果を相爲せざること、レッシンが言の如し。漢詩は教化を美しくせしと云ふは、詩を説くもの、樂天主義のみ。法朗西の文學と美術とは、風俗を壞りしといふルウソオが厭世主義のみ。八田いはく、詩も禮樂も、治道に妙用ありげに見ゆるは、畢責聖人の代にして、政事の正しき中により事なり。その正しからざるときは、其妙用いかでか施しどころあらん。其政事正しき中によりては、大和歌といへども、時として其妙用、國事に及ぶことも亦無からんや。此條においては、八田が説を卓といはむ。

以上おしなべて見るに、熊谷は思考こまやかなれども、言葉足らず。屢みづから矛盾に陥り、心づかざることあり。八田は理を見ること極めて鋭く、その筆力もこれに適ひたれど、時としては極端に傾く弊を免れず。この評は、唯古今集正義總論補注論と「古今和歌集正義追考序」の上につきていへるなれば、二人の性を盡くせりとて定めがたし。姑く録して同社の友に質すのみ。

〔柵三〕直好は桂園第一の弟子也。恒に曰、歌は師に受け習ひもて至る道にしもあらず。折にふれ物につけて、心の動くまに、言出されたるは、かな言なれば、殊更に、書留などせぬこそよけれ。疾く忘れんも又悪しからじと、歌集浦の鹽貝三卷、拾遺四卷は、ともに門人の輯むるに任せて、更に顧みざりしとぞ。又吹笛を嗜み、其奥秘を極めぬ。但しこれは、入文を作らん料にせしにて、寄居歌談に、歌はよみ口なれど、さのみ心をいれず。常に笛のみ吹き響かしければ、其師なる香川の翁も、口惜きことに云とぞと云へるは、非なり。桂園の門人中、直好と駢べ稱せらるゝは、木下幸文なり。通稱は民藏、論中長尾村に生る。直好は歌に秀て、幸文は文に長ず。或時、幸文は漢華に、直好は



經歷

桂門に入る

岩國に赴きをりしに、二人の書、同じ頃、桂園にとゞきぬ。然るに咫尺の浪華より來れる書は、其長き實に一尋にあまり、天涯の岩國より來れるは、殆ど尺に満たず。而してともに、其言はんと欲する所を盡せり。景樹笑つて傍人に謂て曰、二人の歌、相距ると正に斯の如しと。(井上通泰氏)

桂門十哲の一人

詠歌

〔柵三九〕直好、姓熊谷、初、八十八と稱す。後、助左衛門と改む。岩國の人なり。岩國、熊谷氏入家あり。熊谷清家、總本家とす。直好の祖直賀は、其弟たり。別に家を立。七世の後、直好とす。直好人となり、身長甚高く、魁偉人に異なり、頭髪を結ぶ鬢、至て大なり。文才あり、學を勤む。少して物頭を奉役し、又究方を勤む。罪人を糺彈する時、書記をして、口供を筆記せしめず。口供畢りて後、自筆を把りて書下すに、緊要の處、一條をも遺漏せず。法曹至要抄を熟讀し、註解頭書を作れり。嘗て郷人吉田某に就て和歌を學ぶ。初めて詠せし歌、雪の題にて、

夜なれど、土の白きは、しる雪のほととぎすに、降ればなりけり。  
某、畏るべき才なり。己れ教ふべきに非ずとて、他に往學ばしむ。後、京師香川景樹翁の門に入、和歌を學ぶ。翁、始めて其歌を見、大に驚き、咏草の後に、

誠拙和尚に參  
禪す  
妻を離別す

みにならん、秋を思へば、小山田の、いね難きまで、嬉しかりけり。  
其才を愛し、後を待み思はれしが、果して桂門十哲の一となれり。後、直好京師に出し、事數度なり。或時、海上船覆り、携へし咏草海に沈めり。其内に富士山、  
富士の根の、すそ野の草と、みえつるは、千年を経たる、松にぞ有ける。  
近江湖水の畔に遊びて、  
吹は笛、うつつは鼓の音にして、はるの海邊は、波風もなし。  
此の歌ありきと云。皆浦の鹽貝に載せず。然ども此咏草の内、取揚し、什もあり。即鹽貝に、大堀綱光に與ふる掛物一軸に添へたる歌に、

景樹景嗣の紛  
議に與る  
岩國を脱走す

べしとて、渡し遣したり。其親披き見れば、唯和歌一首を書たり。  
葛がづら、己がすみかに、すみあきて、隣の軒に、色付にけり。  
文政五年、景樹の使、川面藏人(徳大寺内)岩國に來り、景樹と香川景嗣との紛議に付き、岩國に訴出てしに、香川家の宗家は岩國にあり、事不遂し事あり。直好も其事に與かりしが、此より岩國と、香川師家雙方の中間に在りて、不都合を生じ、岩國に居がたく、不平の景況なり。文政八年乙酉九月十七日、遂に意を決して脱走す。妻於春と、兒、鐵之助とを携へたり。此日先祖の位牌に金を結付置、又手飼の猫と兎とを一つに繫付おけり。机の上一首の歌を書置けり。

直好は鯉魚の  
如し

熊谷直輔の歌

世の中を、思ひ定めし、朝より、雲と水とに、ゆくこゝろかな。  
此歌の意にて、今度不得已して、出奔すれども、素より再び他に仕を求る一念なく、此世を蟬蛻の如くなし、心情を見るべし。此後も故郷を思ひ忘れざる和歌、鹽貝にあり。世の君を後にせし者とは異なり。藩主吉川謙光公、直好を師と頼みたまへり。此不慮の擧を聞玉ひ、深く怒れる色なく、嘆じて曰る、には直好は鯉魚の如し。小き池にて養ひ難しと、後果して天下に名を揚たり。  
岩國熊谷直輔(俗稱大吉)和歌を善す、嘗て人を斬殺し、士道を立し事あり。は、直好に和歌を學び、尤親善す。此擧を聞きて、詠せし歌の内、

子鐵之助

かなしきの程はたとへん、方もなし、親にもまさる、君にわかれて。  
入月を、をしと思ふは、ぬば玉の、やみに成べき、ことの有ればぞ。  
朝露のおくても、今は、かりはて、たのみなき世に、成にける哉。  
直好の子鐵之助、書を能し、三嶺と號す。後備後尾道に居れり。直好、大阪に出、住居すること四十年、文久二年八月八日死す。年八十一。墓誌紀州春田厚撰す。然ども墓に刻せず。直好遺命と云。又大阪平瀬儀退の作りし行狀記あり。

右は岩國の人、藤田葆氏が、曾て編輯せられし嚴藩略史の中より抜出て、送られしなり。(井上通泰氏)

著書

〔慶著〕法曹至要抄注解

梁塵後抄

四

古今集補注

熊谷直好



浦の志保貝

三

浦の志保貝拾遺

四

歸國道の記

一

埴 忠 寶 次郎

生 歿

生 二四七四、光 格、文化十一年、

住 所

二五二二、孝 明、文久二年一二、二四、  
江戶、四谷寺町安樂寺、  
目録 次郎、温温故堂、

姓 名

保己一 忠寶

系 圖

〔編者補〕 父、保己一の後を承けて、和學所を管す。流言あり、曰く、安藤老中の命に因りて、廢帝の  
故事を案ずと。遂に浪士のために其門前にて暗殺せらる。

經 歴

〔慶著〕 南朝編年稿 四二  
近世武家名目一覽 一  
集古文書 二四  
古簡雜纂 一二  
和學講談所書目 二  
觸目私抄 一  
現存書目補正考 五

著 書

近世花押分類  
現存書目補正考

山崎美成

生 歿

生 二四五七、光 格、寛政九年、

總 叙

〔兎園小説〕 美成は、通稱を長崎屋新兵衛といひ、後に久作と改む。字は久彌、北峯、又好問堂と

與清門

耽奇漫錄

著 書

異稱日本傳	二	八部祓講釋	一	皇學者後言	二
讀四刑書管見	一六	法曹至要鈔集解	六	職原鈔辨證	二
制度提綱	三〇	四禮通考	四	軍防知新	二
榮花物語解話	八	歌話	二	和字萃	四
文教温故	二	歲時要略	四	好問質疑	六
蓮響雜記	一二	駝背	三	掃葉編	一〇
猜彙	二	致古詩譚	二	燮理類纂	六〇
讀書箋記	四	隨書半千	四〇	隨帶編	一〇
名家略傳	四	赤穂義士隨筆一名赤穂落穂集四	四	琉球入貢記	一
〔慶著〕六史輯釋	二〇	涉史臆斷	一〇	史論潜評	一〇

埴 忠 寶 山崎美成

一四〇三



農家必讀	三	刪補和漢年契	一	年數早見	一
大江戶圖說集覽	二	下谷小志	二	新吉原略記	一〇
書家錦囊	一	世話千字文講釋	一	金石叢書	一〇
耐煩居雜著	二〇	撩天間話	四	世事談綺糾謬	五
耽奇漫錄	二〇	提醒紀談	五	好問堂海錄	二〇
三養雜記	四	世事百談	四	天保妙々奇談	二
正字玉篇大全	一	早引和玉篇	一	增補文選字引	一
四聲正韻字林	一	早引永代節用大全	一	空也鉢敲考	一

### 加藤千年

#### 總叙

〔慶著〕 稱又左衛門千蔭孫。文久三年歿。  
 〔同上〕 萬葉集略解顛末 二 大父君行實 一 謠曲改正本草草案纂 一  
 家祖年譜 一 事言類攻 合二五

### 鈴木重胤

#### 生歿

生 二四七二、光格 文化九年、  
 歿 二五二三、孝明 文久三年八一五、**目五二一**

#### 住所

生地 淡路國津名郡仁井村、**居住** 同上、江戸、**園市** 谷長延寺、

#### 姓名

姓 穗積、**通稱** 雄三郎、後勝右衛門、又府生、**關樞** 廻家、

#### 系圖

○穗積重威  
 (母) 岡本氏 子 重胤

#### 學統

大國隆正 重胤

#### 經歷

〔國學家略傳〕 鈴木氏數世、皇學に名あり。故を以て重胤、夙に國典に通ず。弱冠にして京坂の間に遊學し、汎く諸名士に交る。操行不羈、小節を修めず。二十五歳、江戸に遊ぶ。學風自ら一家を成し、從學の徒多し。嘗て日本書紀傳を著はし、其秘蘊を發し、世に敬重せらる。幕府の旗下、稻垣鉞之丞の家來分となり、後に、同旗下、淺野長祚の家來分となる。文久三年八月十五日、黃昏、二士あり、松平山城守の使と稱して、本所小梅の僑居に來り、重胤に面し、卒然、刀を抜きて之を斫る。兎徒直に逃れ、何人の所爲なるかを知らずと云ふ。(鈴木謙吉氏、重胤傳)

#### 著書

〔慶著〕日本書紀傳	一四四	古始大元圖	一	開闢圖	一
祝詞講義	三四	經緯歌	一	詞のさかみち	一
詞の塵芥	二	語學捷徑	二	今古和歌幼學	二
世繼草摘分	三	和歌字ひまなび	八	神代瓊の御統	一
〔編者補〕雅言解	四	神名式	一		

加藤千年 鈴木重胤

(以上、國學家略傳)



富の小川 一

### 氷室長翁 豊長

生 二四四四、光 格、天明四年正元、  
歿 二五二三、孝 明、文久三年一〇、一、  
[目八〇、

住所 尾張名古屋、後全國海東郡津島村、  
津島小沼常樂寺、

姓名 経歴 初兵治、後兵庫、伊織、  
將監、  
[目豊長、  
[目椿園、

妻陳子  
桶映吊古碑を  
建つ

筆蹟の鑑定に  
精し、  
雜載

〔目三五〕 豊長は、尾張藩士松井小十郎弘喬の二男なり。文化四年、年二十四にして、同國海東郡津島神社の神主、氷室勘解由種長の養子となり、其女陳子を娶り、職を繼ぎて、御朱印地、同郡向島村一圓、千二百九十三石を領す。氷室家は南朝の皇子の裔なり。豊長三男一女あり。同國熱田神社の大宮司、千秋氏の二男、泰長を養ひ、女と娶せて、早く家を譲りぬ。妻の陳子も、歌をよくす。景樹の門に入りしは、文政の初年なり。毎月歌の會を催ふし、社中四百餘名に及ぶ。桂園社中の大會をも、屢催しぬ。在職中、社殿を修營し、又、よく配下の社家、及、領内の人民を撫す。嘗て實弟泰鼎と謀りて、桶映吊古碑といふを建つ。さるは松井氏の祖先は、今川家の士大將にして、彼戦にて、討死しければ、老後には一室を其一隅に造り、三老居と名けて、いとのかに世を送りぬ。歿後に、門人等、碑を名古屋門前町大光院の境内に建て、長翁一代の秀歌を刻す。其歌

〔目七〕 氷室長翁は久しく景樹に親炙したりし人なればとて、景樹が筆蹟の鑑定を乞ふもの多かりけり。長翁も、亦竊に、鑑定の精きに誇れり。或時、景樹の短冊一ひらをもて來る者あり。長翁

姓名 著書 一目見るより、こはいとよき出来なりと云ふに、さらばこれはとて、萩より取出るを見れば、こは如何に、歌より筆つきより、墨色に至るまで、前のと聊も違はざりけり。一方を偽とは知れど、何れとも分けためらひしが、いたく心にはぢらひて、之よりはまた、鑑定をものせざりけり。長翁、初の名は豊長、椿園と號す。尾張津島の神官なり。著書は、くさくあるべけれど、我見しは、吉野日記のみなり。妻の陳子も、亦歌を能くすと云ふ。

〔慶著〕 桂花餘香 芳野日記 須磨日記

### 萩原廣道

生 二四七三、光 格、文化一〇年、  
歿 二五二三、孝 明、文久三年、  
[目五一、

住所 備前岡山、  
[目大坂、  
[目大阪西成郡浦江村妙壽寺、

姓名 〔古學下〕 松野眞維云フ、翁ノ寓居、大阪ニテシバ、  
轉セリ。始メ北野村ニ居リ、伏見堀ニ移リ、  
高麗橋ニ轉シ、江戸堀、心齋橋ニト居シ、最後、北濱白子町ニテ歿ス。

〔古學下〕 藩ニ仕ヘシ時ハ、藤原小平太演雄ト云ヘリ。浪人ノ後、萩原鹿藏、又今ノ名ニ變タリ。

〔同上〕 誰ヲ師トイフコトナケレド、松野云、其著書ニハ、先師本居、幼ヨリ國書ヲ讀ムコトヲ好マレ、中ニモ源氏物語ヲ誦讀セラレシコト數回、故ニ其評釋ハ、畢生ノ力ヲ見ルニ足レリ。

源氏物語評釋 松野云、翁文章ヲ評スルコトヲ創意シテ、源氏物語評釋ヲ作ル。總論ニ卷、其所見ヲ述盡セリ。然レモ此書、始メヨリ全部ノ稿ヲ成セシモノニアラズ、當時篠崎竹陰、緒方洪庵、中玉樹ノ輩、春日寛

氷室長翁 萩原廣道



本學提綱

平ノ宅ニ會シテ、源氏ヲ講ズルヲ聞ク、其時ノ筆記ヨリ成レルモノナリ。故ニ猶本居氏ノ古事記ニ花宴ノ卷マテ出來テ、後中風ニカ、リ、講筵モ絶エ、稿モ續カズ、惜ムベシ。傳ニ於ルガ如シ、傍ラ漢籍ニモ精シカリシト見エ、本學提綱ト云書ハ、先皇ノ大道ヲ本トシ、歷朝ノ沿革ト、外教ノ得失トヲ精シク辯ジ、學藝ヲ十科ニ分チ、神道ノ今日ニ用アルヲ論ゼラレシ書ナレバ、其學風ヲ見ルニ足ルベシ。玉匣補註ハ經濟ヲ論シ、西戎音譯字論ハ、他邦ノ語ヲ譯スルヲ論ジ、其他、心ノ種、葉山ノ菜、古言譯解等、皆重寶ノ書ナレバ、實用ニ志ザセシ人ナリ。兎ニモ角ニモ、書物ノクミ合セ方面白シ。惜カナ、中年ヨリ中風ノ病ニカ、リ、百事皆廢ス。病間左筆ニテ、書セルモノ、僅ニ短冊書牘ノ類ナリ。嘉永七年、久貝因幡守正典ノ斡旋ニテ、佐々木春夫資ヲ捐テ評釋ノ初ノカタヲ刊行セリ。云、野月抄ノ板元某ヨリ、種々故障出來テ、出版ナリガタカリシヲ、久貝因幡守正典朝臣ノ斡旋ニテ、前田健助夏蔭門人萩原某ノ名義ニテ、許可ヲ得タリ。然レモ、詠歌ノ事ハ、百首異見摘評一卷學風ハ、野々口前田ノ流ニアフサルヲ、著書ヲ以テ知ルベシ。詠歌ノ事ハ、百首異見摘評一卷アリ。其持論ヲ見ルベシ。

雜載

先師とは先輩の意義にすぎず

〔帝國文學〕 廣道、宣長を先師と云ひしは、先輩といひしに過ぎず。

廣道が其著書に、しげく、先師本居翁と書けるを見て、世は隔たりたれど、宣長のみまかりし頃には、廣道未だ生れず、心に宣長を師と頼みしなるべしとは、誰も思ふことなり。やがて廣道の弟子なる松野眞維も、其著書ニハ、先師本居翁ト稱シテ、鈴屋翁ヲ尊ベリ。と云へり(古學小傳)されど、こは誤りたる考なり。そもく、廣道が先師と云ふ語を用ひしは「みまかりし師」と云ふ意に用ひたるにはあらで、「先輩」と云ふ意に用ひしなり。即普通の用語の例に違へるなり。その證は、廣道が撰みし遺文集覽の凡例に、

著書

さきに蓮阿と云ふ僧の、板にあらせたる文苑玉露といふ書ありて、近き頃の先師だちの文を挙げたり。

とあり。玉露の作者は、二十餘人にて、その中には、名の聞えざるものあり。廣道、この人々を悉く心に師と頼まむや、この人々を悉く尊ばむや。思ふべし。もとより、廣道は、宣長をしたひしなるべし。されど先師と云ひしをもて、宣長を慕ひし證とはすべからざること、上に述べしが如し。

〔古學〕源氏物語評釋 一四

本學提綱附錄一 三

心ノ種 二

小夜時雨 一

遺文集覽 二

巨爾乎波畧圖義解 二

手爾袁波係辭辨 一

玉篠草紙 二

萬葉集畧解補遺 五

住吉物語松風抄 二

西戎音譯字論 一

葦ノ葉ワケ 一

玉匣補註 五

葉山ノ菜 一

古言譯解 一

鶯ノ聲

蒜園文集 一

柿ノ落葉 一

出居家集

百首異見摘評 一

〔慶著〕開卷驚奇俠客傳 五

〔編者補〕心の種拾遺 二

西田直養

生歿

歿 二五二三、孝 明、文久三年、

〔慶著〕號彼舍。字浩然。稱庄三郎。肥前人。本居大平門。

西田直養



惟既絶食して死す  
東紫神社

〔國學家略傳〕 豊前小倉藩なり。文久三年、攘夷の勅に依り、下ノ關にて、毛利氏、外艦と戦へる時、小倉藩の勅を奉じざるを慨き、食を絶ちて死せり。維新後、東紫村に其社を建て、東紫神社と號し、村社に列せらる。

著書

〔同上〕 神事考

古事記集解

萬葉長歌格

著書

詠歌眼目

彼舍學則

金石志

著書

金石年表

四天王寺舊地根元考

彼舍漫筆

著書

〔編者補〕 柳村筆記

五

### 中島廣足

生歿

生 二四五二、光格、寛政四年三、五、

住

歿 二五二四、孝明、文久四年正、二一、**目七三、**

姓名

生地 肥後熊本藩 **居** 肥前長崎、大阪、熊本城下白川邊、**園** 肥前萬日山、

系圖

**通稱** 太郎、**春臣**、**園**、**園**

總叙

○廣足——養行長崎諏訪神社宮司

(以上、欄五)

〔欄五〕 翁は、寛政四年三月五日に誕生せられ、中島太郎源春臣と名のりて、世々、肥後國細川の君に仕ふ。享和二年に家を續ぎ、同十二年、病によりて仕をやむ。かれて御國學、歌の道にこゝろざしふかゝりければ、をり、肥前國長崎に通ひきつゝ、つひに其地に住て、家の庭に榎を植ふる。それより世に榎園の翁と呼べり。文政十一年の秋、國にかへりけるをり、廻島といふ處にて、題に

國學師範役

墳墓

逸話

中村元道の請によりて上京す

教を請ふもの二百人

著書

〔慶著〕 詞の八衢補遺

詞の玉緒補遺

六

玉霞窓の小篠

五

中島廣足

一四一一

あひのちられたる船、くつがへり、すてに命もあやふかりしを、辛くしてのがれられしは、其頃、著はし置れたる廻島浪風記に、くはしくみえたり。此後、榎園に久しくすまれしに、安政三年の春、都のかたにのぼり、嵐山、吉野の花にあそび、歸るさに、難波の里に、五年のほど、とゞまれり。ざるを文久元年の秋、國守よりめされて、故郷に歸られしを、國學師範役に任ぜらる。かくて家所を、白川のほとりにたまはりてすまれたり。著はされし書ども、いとさはなるを、かつ、梓にみらせつるに、いまだ、なかばをだに、はたさずして、文久三年五月ばかりより、こゝちそこなひて、打ふされしが、又のとしの正月廿一日に、はかなくなられたり。かれて定めおかれし、萬日山といへる山のいたゞきに、榎と紅葉とを植ふるおほし、奥津城を構へて、かくしまつりぬ。翁別號を黃口といひ、書を嗜まれ、世間自畫贊のものいと多し。翁の養子、中島廣行翁、今長崎諏訪神社宮司を勤め居らる。八十歳の老翁なり。

〔同上〕 わが友なる中村元道老人が、大坂城に勤めし頃、府命を帯びて長崎の港に赴き、滯留のふし、榎園の翁、中島廣足の門に遊べり。後元道、事はて、歸るに臨み、懇に翁にすゝめて、京攝の間、に遊ばんことをもてせり。翁も意なきにあられど、くさく、のこことありて、いまだ、え果さてありつるよしをいふ。元道、猶切にこひて別れぬ。歸りてこれを友人に謀るに、皆々國學師なきに苦める折からなれば、打喜びてこれに同意し、翁を望むこと、旱天の雨の如し。是において、家居を北濱二丁目、に設けて、更に書翰をもて、翁を請じければ、翁もこたは、もだしがたくて、乃ち意を決し、はじめ、て京にあそび、遂に浪華にとゞまりぬ。をしへを請ふもの、日に多く、一時は二百人程もありきとぞ。翁常に茶磨山のほとりなる、雲水庵の風景を愛て、こゝぞわが墳墓の地なれと、物語られしも、如何せん、その終焉の故郷にてありしかば、此事の叶はざりしは、いと遺憾にこそ。以上中村のおきなのかたられしまゝを記しぬ。

附けていふ。中村家に、廣足の書簡數十通を藏しあれば、他日老人に請ひて一覽し、斯道に益あるものを擇びて、こゝに抄出せん。(以上、足立正枝氏)



雅言類聚	七〇	不知火考	肥後國舊地考	二
歷水考	一	水江物語	うなゐのすさび	二
樺島浪風記	一	金海山詣記	東海日記	二
玉岡山花宴記	一	觀清人戲場長歌	蘭船入津長歌	一
檜垣翁家集補註	二	くさくさの物語	樺のくち葉	一
相良日記	一	野坂の浦づと	海人のくづつ	一
片糸	一	背燭談	螢火の説	一
廣足辨	一	なやらひ	頭椎劔	一
蝦考	一	上古嫁娶辨	同附録	一
夜の夢	一	瓊浦集	鳥飼翁物語	一
玉の浦歌合	一	きとさせの差別	佐嘉日記	一
しのすだれ	一	樺園雜錄	樺園文集	三
樺園歌集	三	はしの山ふみ	つくし歌	三
波良比波良閑の辨	一	筑紫路日記	竹島廢志の考	一
樺園答問書	一	樺園長歌集	樺園隨筆	二
〔編者補〕増補雅言集覽	五七	片糸	敏鎌	一

伴林光平

生 歿 二四七二、光 格 文化一〇年九、九、  
 二五二四、孝 明、文久四年二、一六、  
 住 所 河内國志貴郡林村、後大和寺法隆寺、  
 姓 名 〔通稱〕六郎、齋齋、岡陵、斑鳩隱士、法名周永、又大雲、  
 學 統 中村良臣、  
 飯田秀雄、光平、  
 加納諸平

(以上、欄九)

總 叙 中村良臣の門に入る  
 旅僧に伴はれて因州に赴く  
 飯田年平と兄弟の契をなす

〔欄九〕伴林光平は、河内國志紀郡林村の産にて、以前は眞宗の僧侶なりしが、天保の頃、攝津國川邊郡下市場村の道場に移り住みて、只管佛の道にのみ心を入れたりしに、程近き伊丹の里なる中村良臣、歌の道に名あるを聞きて、其教子となれり。されど最も貧しくて、ものゝ本はさらなり。筆墨をさへ心にまかせざりけるを、良臣いたく憐みて、其家に呼びとり、稚子の手習ふわざなど、とりまかなはせたり。光平、其いとまには、専ら歌よみ、文かく事をつとめ、講釋の席にも列なりけるに、心ばえ賢しく、記臆つよかりければ、見聞くこと、かりにも忘れたることなかりしとぞ。其頃、因幡國なる僧侶何某、伊丹に來りて、詞のことども解きさとせるを、そこにも行通ひて學びしが、後、此僧といもは、因幡國に行き、氣多郡勝宿なる飯田秀雄が許を訪ひ、やがて交り深くなりしより、そこに久しうとゞまりて、其子年平と兄弟の契を結び、其頃加納諸平、願玉集を選めるに依り、秀雄も常にふみ通して、親しきなからひなれば、光平に勤めて、紀の國にやり、そが教を受けし

伴林光平



加納諸平の教  
をうく  
還俗して伴林  
六郎と稱す  
南山の義舉に  
與みす

軍敗れて捕へ  
らる

「踏雲録」  
獄中に死す

逸話

船中に梵學を  
論ず

む。それより光平は、諸平が許に在り、鶯雪の功を積みて、學力全く備りぬ。これにてとみに敬神の心を起し、還俗して伴林六郎と稱す。そは本居神を伴林神社といへるに據れるなりとぞ。後、文久二年の頃、侍從中山忠光卿の、南山の義舉にくみし、藤本鐵石など、勤王の人々と謀り、大和國に兵を擧げて、高取城を攻めたりしかども、戦利なくして、軍を天の河といへる所に引あげ、要害を守りてたゞかひしに、終に破れて、鐵石はじめ、義士みな討死せり。光平は問道より遣れて、忠光卿に隨ひ、長門國におちゆくべき心構へなりしかば、葛城山の高嶺をこえ、驢駒山遠くたどり來れど、五十をこゆる齡なれば、痛く疲れてあゆむことかなはず。斯るほどに、卿はおち行き給ひしかば、今は頼みとすべきたつきもなければ、自刃せばやと、劍に手をかくる折しも、軍勢追ひ來りて、つひに捕はれとなりぬ。其時よみし歌とて、

楫をなみ、乘て通れむ、世なられば、岩船山も、かひなかりけり。

この岩船山といへるは、葛城驢駒の同じ峯つゞきにある山なり。さて、光平は、奈良の奉行所に送られき。久しく獄舎に繋がれたる内、徒然なるまゝ、踏雲録といへる書を著して、思ひをはるげしに、元治元年、俄に京都にうつされしが、程なく、獄中にて身まかりぬ。此は光平と交り深かりし人より、聞傳へたるなりとて、大坂なる彈琴緒語れり。(足立正枝氏)

〔同一〕 伴林光平、還俗して後、大和平群郡の班鳩の里に住し、自ら蕪齋と號し、門人を集め、皇典、又は國歌などを授けしが、先君子と廬里相近かく、文雅の交いと深し。今耳底にのこれるものを書きしるして、足立正枝大人の物されたる傳の遺を補ふと云爾。十一月一日夕、三田慶應義塾において、森虛舟、光平年未だ若かりし頃、京都に遊び、梵典を學び、傍ら、漢學をも修めしが、ある歳の夏、故郷なる河内に歸省せんとて、伏見より三十石てふ小舟に投し、漢江を下りしに、船中に因幡の士人ありて、共に梵典漢學を論じ、乍ち士人の爲めに論破せられ、大に悟るところやありけん。其門人となりて、教を請けんと請ひければ、士人は答へて言ふ、船中勿々、何をもつて契を結ばんや。光平、少らく呻吟して、光てふ字は、本願寺の諱名にして、眞宗僧徒の忌みて用ひざるなり。拙者は今より、光平と名のるべしと言ひけるに、士人其言の奇なりとして許し、共に因幡へつれかへり、教ふること一年あまりにして、いたく光平の、進學の速なるに舌をまき、勸めて東都に遊ばし

む。其後ち郷にかへり、佛堂の柱に、

本是神州清潔民、誤作佛奴、說同塵。如今棄佛々、休怨。本是神州清潔民。

佐々十竹と一  
副對

歴代山陵の荒  
廢を慨す

光平、平常、尊王の志厚く、年頃、歴代山陵の大に荒れはて、寒煙枯草の中に埋もれ、樵夫牧童の外は、訪ふ者もなく、且つ未だ明かならざるも、多きを嘆げき、探索せんとて、數々、大和、河内のあたりをさまよひ、いつも國境なる茶亭に足を休めしが、亭主はいつか、光平の歌よみなることを傳へきて、先生何にても苦しからず、歌よみて玉ひれと言ひけるに、光平はうち笑みつゝ、いと易きことなりとて、坐の傍らに、天狗の假面の風呂敷に包みたるを見て、

くらま山、かすみのきぬに、つゝまれて、高根のはなの、見えずもあらなん。

とよみて興へければ、亭主は吾宿の寶なりとて、こよなう喜び、是れよりこの茶亭、名高くなりぬ。○文久二年、南山の義舉を聞き、其の教へ子と共に、直に馳せ加はり、中山大納言の爲に、大に用ひられ、軍中の文章は、悉く光平の手に司とりしが、あるとき、彦根勢の攻め寄するとき、直に長槍を提げ、躍りいて、山路を奔る、折しも、谷間に菊の花の、今をさかりと咲きみだれたるを見て、一枝を手折りて、籠に挿み、矢立をとりて、一首の歌を書き添へぬ。

身をすて、千代をいのらぬ、丈夫も、さすがに菊は、折りかさしつゝ。

軍敗れて捕へ  
らる  
獄吏を集めて  
直毘靈を講ず

南山の義舉に  
加はり中山大  
納言に用ひら

著書

〔柵一四〕 家集

三

南山踏雲録

一

月瀬紀行

一



### 大隈言道

總叙

〔續日本歌學全書〕 姓は清原筑紫の人なり。文久年中、難波に出て、門弟を導きたり。歌のさまゝいと新らしく、世の常ならず。

著書

〔同上〕 草徑集

### 竹村茂枝

生歿

生 二四七〇、光格、文化七年六、

姓名

名 二五二四、孝明、元治元年一、二四、目五五、

系圖

直太郎、平九郎、園花庇陰、

學統

竹村茂雄の條(一一九四頁)を見よ。

十二歳にして本居大平の門に入り、大平歿後、松坂の殿村安守に従ひ、又書を狩谷校齋に學ぶ。尤も歌文をよくし、鈴木八束、萩原正平等其門に出づ。(以上、全編編者見聞録)

### 平野國臣

生歿

生 二四八八、仁孝、文政一一年、三、二九、

住所

筑前福岡、

系圖

〔編者補〕〇能榮吉

乙宣磨

國臣一種二

能忍卯八郎

能得三郎

(以上、據維新史料、三九二)

總叙

〔維新史料三九〕

平野二郎、名ハ國臣、猶醒軒ト號ス。筑前、福岡人ナリ。父、名ハ能榮、吉三ト稱ス。人ト爲リ、氣節ヲ尚ビ、使棒、及、綁縛等ノ術ニ精シ。福岡藩ニ仕ヘ、先鋒隊ノ師範ト爲ル。都甲氏ヲ娶リ、四子ヲ産ム。長ナ乙宣磨ト曰ヒ、都甲氏ヲ冒ス。次ハ、卯八郎、名ハ能忍、平山氏ヲ冒ス。次ハ、三郎、名ハ能得、平野氏ト稱ス。兄弟、皆聲譽アリ。國臣、最モ著ル。國臣ハ、文政一一年、戊子三月廿九日、ヲ以テ生レ、幼シテ機敏ナリ。群兒ト嬉戲スルハ、己レ常ニ頭目トナリ、衆ヲ麾テ馳逐シ、衆皆之ニ役セラレ。隣里、之ヲ視テ、皆國臣ヲ指シテ曰ク、此子、凡種ニ非ザルナリト。藩ノ銃手班頭、小金丸種一、之ヲ奇トシ、請テ養子トシ、妻スニ女ヲ以テス。國臣、乃チ、小金丸氏ヲ冒シ、名ヲ種徳ト更メ、源藏ト稱ス。藩ニ仕テ、銃手ニ列シ、尋テ普請方手附ニ轉ス。始メテ、江戸ニ祇役スルニ當リ、途ニ京師ニ入り、關ヲ拜シテ、憲泣シ、和歌一首ヲ賦シ、以テ奏誠ヲ寓セリ。既ニ、江戸ニ抵リ、一日、寛永増上、二寺ヲ過ギ、其莊殿瑰麗、大ニ九重ノ比ニ非ルヲ觀テ、憮然トシテ曰ク、此ハ、特リ、將軍ノ廟壇ノミ。僧者乃チ、此ノ如シ、他ハ、知ル可シ。是ノ時ニ當リ、外船、相踵テ入津シ、幕府ニ迫リ、通市ヲ要求ス。幕議有安、拒絕スル能ハズ。慷慨ノ士、群起シテ、之ヲ咎ム。國臣、意、亦攘斥ニ在リ。將ニ、大ニ爲ス有ラントス。加フルニ、同僚ト相容レザルヲ以テ、遂ニ職ヲ辭シ去ル。此ヨリ、專ラ、兵學ヲ講究シ、武技ヲ研練シ、旁ラ、武家ノ故實ヲ蒐討シテ、博ク之ヲ通習ス。嘗テ、古式ヲ考ヘ、自ラ烏帽子、直垂ヲ製

意攘斥にあり

小金丸氏を冒す

大隈言道 竹村茂枝 平野國臣



道路、指目して狂生となす  
本姓に復す

國事に奔走す

西走す

月照と交る

崎嶇家に還る

シ、時ニ或ハ之ヲ束裝シテ出テ、行々、横笛ヲ吹キ、路上ニ逍遙シ、旁若無人ナリ。道路指目シテ狂生ト爲ス。父兄、其終ニ養家ヲ累サンコトヲ慮リ、協議シテ約ヲ解キ、本姓ニ復サシム。是ヨリ、平野二郎國臣ト稱シ、姓名寢ク遠避ニ聞ユ。安政戊午ニ及ビ、外事、日ニ急ニシテ、國論鼎沸ス。幕府輕々シク外人ノ游説ヲ信シ、狼狽、措コトヲ失ス。未ダ、奏可ヲ經ズシテ、擅ニ、通市假條約ヲ結フ。事聞ユ。皇上、震怒シ給フ旨アリ。前中納言徳川齊昭ヲシテ、將軍ヲ輔弼シ、教旨ヲ奉行セシム。又、御製ノ和歌ニ、宸衷ヲ述ベサセ給ヘリ。國臣、之ヲ傳誦シ、感激自ラ勝ヘズ。御製ヲ手寫シ、尾ニ繫ルニ自詠一章ヲ以テシ、誓テ教旨ヲ奉戴セント欲ス。既ニシテ、内勅水戸ニ下ルト聞キ、益奮テ曰ク、是、吾力ヲ展アルノ秋至レリト。乃チ、都甲楯彦ト假稱シ、名ヲ遊學ニ託シ、馳テ京師ニ至ル。此時、民部大輔、小林真典、河内介田中綏猷、及、處士梅田定明、頼醇等、相結テ、國事ヲ論ズ。往々、幕府ノ事ニ切齒ス。國臣、乃チ、此數人ト交リ、日ニ其間ニ周旋ス。未ダ、幾ナラズ、幕吏大ニ黨獄ヲ起シ、真典定明等ヲ執ヘ、江戸ニ檻致ス。國臣、事ノ敗タルヲ以テ、京師ヲ脱シ、西走ス。長門人白石某、豊後人小河一敏、筑後人眞木保臣等ヲ歴訪シ、結テ同志ト爲リ、與ニ後圖ヲ議ス。僧忍向ト相托スルモ、亦是時ヨリ始マル。忍向ハ、京師清水寺成就院主ナリ。月照ト號シ、近衛關白ニ眷遇セラレ。平素、亦尊攘ノ議ヲ主唱シ、數々關白ニ侍シ、密議ニ參ス。黨獄起ルニ及テ、自ラ、其株連ヲ慮リ、難ヲ鎮メ、先ツ福岡ニ入ル。捕吏、之ヲ追蹶ノ密旨ヲ傳ヘント欲シ、乃チ、老僕大槻重助ヲ從ヘ、竊カニ西走シ、先ツ福岡ニ入ル。捕吏、之ヲ追蹶ス。忍向將ニ、薩ニ走ラントシ、猶豫シテ未ダ發セズ。時ニ、國臣、適々福岡ニ還ル。之ニ謂テ曰ク、事急ナリ。師、危シ。吾請、師ヲ護シテ、彼ニ赴カン。乃チ、忍向ヲシテ、修驗者ニ裝飾セシメ、己ハ重助ト共ニ、其徒弟ノ狀ヲ爲シ、尾隨シテ俱ニ發ス。海ニ航シ、鹿兒島ニ達ス。既エシテ、逮捕、又迫ル。藩士、四郷隆盛モ、亦、同志ナルヲ以テ、百方救護ノ計ヲ爲セ、竟ニ、敵匿スルコト能ハズ。乃チ、三人相携テ宵遁シ、海ニ浮テ、日向ニ赴ク。已ニシテ、隆盛、忍向、相謀リ、身ヲ躍ラシテ、海ニ投ズ。國臣等驚キ、之ヲ拯フ。隆盛、乃チ蘇ス。忍向ハ終ニ死シタリ。是ニ於テ、薩州藩、隆盛ヲ細シ、重助ヲ囚シテ、國臣ヲ放逐ス。國臣既ニ、鹿兒島ヲ去リ、崎嶇家ニ還リ、深ク忍向ノ非命ヲ悼ミ、爲ニ冥福ヲ修シ、又備サニ、其顛末ヲ叙シ、題シテ、西海波間記ト曰フ。是ヨリ先キ、忍向ノ屍ヲ欲ルヤ。國臣、密旨ノ漏泄センコトヲ慮リ、屍懷ヲ探リ、盡ク文章ヲ收匿ス。是ニ至テ、其遺書ヲ袖ニシ、間行シテ、京ニ入り、近衛關白ニ納還シ、告ル

復西す

薩州侯に通す

利通と志を論ず

單身入京す  
討幕の三策を  
密奏す

上策

中策

下策

ニ事狀ヲ以テス。關白物議ヲ憚リ、侍婢ヲシテ、之ヲ勞遣セシム。國臣、復西シ、赤間關ニ抵リ、白石氏ニ依ル。此ヨリ、薩長肥筑間ニ往來シ、寧處ニ追アラズ。居ルコト二歳、文久元年辛酉、冬ニ至リ、始メテ、薩州侯ニ通ズルコトヲ得タリ。國臣、初メ、以爲ラク、尊攘ノ偉業ハ、雄藩ニ倚ルニ非レバ、以テ濟シ難シ。方今、其倚ルベキモノ、惟、薩州藩ヲ以テ然リトス。因テ、同志士、田中綏猷、清州正明、安積武貞等ト肥後ニ會議ス。議、相合ハス。國臣、乃チ、綏猷等ニ訣シテ、西シ、薩州藩要人ノ使者ト稱シ、書函ヲ携テ鹿兒島ニ入り、人ニ介シ、諸藩聽ニ致ス。啓視レバ、則チ、國臣自ラ藩侯ニ上ル書ナリ。有司、始テ、其假託スルヲ知ル。然レモ、敢テ沮マズ。之ヲ侯ニ上ル。其書題テ、回天管見策ト云フ。慶々七千餘言、天業ニ恢復スルハ、惟方今ノ機會タルヲ極論シ、千載一時萬失フ可ラズト。因テ、六證ヲ條舉シ、其猶豫ス可ラサルヲ申明シ、讒議侃々避忌スル所ナシ。侯ノ生父、和泉之ヲ覽テ、激賞シ、即チ、藩士、大久保利通ヲシテ、答フルニ、侯ノ意ヲ以テセシム。曰ク、孤將ニ明春ヲ以テ入京シ、爲ス所アラハトス。卿、宜シク、姑ク歸リ、時ヲ待ツベシ。國臣既ニ命ノ辱キヲ拜シ、遂ニ、利通ト志ヲ論シ、深ク結テ去ル。途、向田驛ニ及アビニ、同志、薩人數名ト驛舎ニ邂逅シ、與ニ共ニ事ヲ論シ、或ハ國民ノ底蘊ヲ叩ク。乃チ、懷ヲ探リ、一篇ヲ出シ示ス。題シテ、培覆論ト曰フ。其王室ヲ培シ、幕府ヲ覆ス可キヲ謂フナリ。一坐竦然タリ。國臣、既ニ、肥後ニ還リ、松村氏ニ依ル。尋テ、藩ニ歸ル。明年二月、和泉入京ノ期、逕ルヲ以テ、乃チ、國臣發シテ、東上シ、小河一敏等ト俱ニ大阪ニ抵リ、大ニ同志ノ士ヲ募集ス。集ルモノ、幾下三百人。國臣、之ヲ大阪ニ留メテ、和泉ヲ待タシメ、單身、先ツ入京シ、臺華院宮、侯人、吉田重義ニ託シ、封事ヲ密奏シ、盡スルニ、討幕三策ヲ以テス。其策ニ曰ク、●上策○一島津和泉滯坂中、綸命下リ、直ニ花城ヲ拔キ、彦城ヲ火シ、二條ノ城ヲ屠リ、同時一勢ヲ卒テ、和泉將師トシテ上京シ、幕吏ヲ追拂ヒ、粟田ノ宮ノ幽閉ヲ解奉リ、參廷ノ上、聖駕ヲ奉シ、蹕ヲ花城ニ奉還シ、皇威ヲ大ニ張リ、七道ノ諸藩ニ命ヲ賜ヒ、陛下親ク兵衆ヲヒキヒ給テ、函嶺ヲ暫シ行宮トシ給ヒ、幕府ノ科ナ正シ、即チ前非ヲ悔ヒ、罪ヲ謝スル時ハ、官職ヲ削キ、爵祿ヲ削テ、諸侯ノ列ニ加ヘ、若シ命ニ叛キ候時ハ、速ニ征伐スルモノ第一上策トス。●中策○一和泉、出仗ノ上、綸命下リ、上京直ニ幕吏ヲ拂ヒ、粟田宮ノ幽閉ヲ解キ、二條城ヲ拔キテ、是ニ寄り、大ニ皇命ヲ四方ニ下シ、義兵ヲ募リ、其後、華城ヲ拔テ、大駕ヲ遷シ奉リテ、幕罪ヲ正ス。是ヲ中策トス。●下策○一和泉出京、陽明家ヘ參殿ノ上、漸、決



藩獄に押送せ  
らるる  
紙捻を剪りて  
書を著はす

釋されて獄を  
出づ

父に決死を告  
ぐ

議ニテ幕吏ヲ撰テ、栗田宮ノ幽閉ヲ解キ、二條ノ城ヲ拔テ、是ニヨリ官軍ヲ募テ、皇威ヲ張テ、幕罪  
ヲ正シ、華城ヲ拔テ、尊攘ヲ議スル者ヲ下策トス。此ノ書入リ、遂ニ御前ニ達ス。上覽テ、之ヲ領  
スト云フ。會々、藩侯、黒田中將、將ニ江戸ニ赴カントスルヲ聞キ、乃チ京ヲ去リ、駕ヲ播磨大藏谷ニ  
迎ヘ、上書シテ、意見ヲ白ス。昨ニ、中將病アリ、駕ヲ回シテ、國ニ歸ル。即チ、國臣ニ命シテ、扈從セシム。  
國臣、感喜ス。因テ、又、建言スル所アリ。已ニシテ、隨テ、獲テ、途次、縛セラレ、藩獄ニ押送ス。獄中、無聊ニ  
勝ヘズ。吏ニ就テ、讀書ヲ乞フ。許サズ。午餐ヲ廢シテ、筆硯ニ代給セント乞フ。亦、許サズ。乃、紙捻ヲ剪  
リ、多ク、字形ヲ造リ、語ニ隨テ、紙上ニ排貼シ、神武必勝論等ノ諸書ヲ著ハス。固ヨリ、書ノ引用スベ  
キ者ナシ、然レモ、其古ヲ援キ、典ヲ用キ、皆、臆記ニ出ヅ。概ネ、謬戾スル所ナシ。觀者、皆、服ス。居ル  
一年、釋サレテ、獄ヲ出ヅ。本藩、更ニ之ヲ擧用シ、徒罪方屬吏ト爲ス。國臣再ビ、仕途ニ就キ、乃チ保  
國第一篇ヲ撰ビ、藩侯ニ上ル。其、薩筑諸大藩ト連衡シテ、力ヲ尊攘ニ專ニセシム。勸ム。未ダ、幾バ  
クナラズシテ、藩命ヲ受ケテ、京師ニ入ル。因テ、自ラ、著ス所ノ國體辨ヲ學習院ニ呈ス。院ハ、即チ、國  
事議局ノ在ル所ナリ。廷議、特ニ國臣及ビ長門人久坂通武ヲ擢テ、其議員ニ充テ、命シテ、學習院出  
仕ト爲ス。國臣等、深ク知遇ヲ感シ、心ヲ悉シ、區畫シ、力ヲ大和行幸ノ議ヲ贊シ、議已ニ決ス。勅ヲ下  
シテ、中外ニ告グ。時ニ、文久三年秋八月ナリ。會々、侍從、中山忠光、黨典ヲ率テ、大和ニ奔リ、將ニ兵ヲ  
起シテ、幕府ヲ討ントス。朝廷、其、輕舉ヲ憂ヒ、國臣ヲ遣シテ、之ヲ鎮制ス。至レバ、則チ、忠光等、既ニ事  
ヲ擧グ、方ニ幕府ノ兵ト戰フ。復タ、制論ス可ラズ。適チ、京師ニ還ル。俄ニ、朝議中變シ。知國事局、三條  
中納言、以下七卿、西長門藩ニ奔ル。國事局員、之方爲メニ、一變セリ。國臣、大ニ驚キ、抗疏、七卿等ヲ營  
救ス。報セズ。即チ、再擧テ、圖ラント欲シ、京ヲ發シ、但馬ニ赴キ、潛ニ、太田正道ノ家ニ寓シ、同志ヲ招  
募ス。既ニシテ、七卿、周防三田尻ニ在リト聞キ、九月、但馬ヲ去リ、三田尻ニ輒リ、三條卿ニ就キ、擁戴  
シテ、兵ヲ起シ、大和ノ義徒ニ策應セント請フ。聽サズ。又タ、澤卿ニ説ク、乃チ、諾ス。約スルニ、夜ニ乘  
ジ、寓館影賢閣ヲ脱スルヲ以テス。十月朔日、國臣、書ヲ父ニ贈リ、決死ノ意ヲ告グ。其書ニ曰ク、從三  
田尻一輪啓上仕候。益、御泰然、奉恐悅候。次私儀、去々月廿六日、京師ヲ發シ、但州ヘ罷下リ候處、又々、  
京町奉行手ヨリ、同心其外共十人計、探索ニ入込候處、今以テ、爲相知候者有之。去月廿日ノ夜、出立  
山越ニ播州ヘ出テ、當所ヘ馳下リ申候。尤モ、兼テ、當所ヘ下リ候儀ハ、決策モ有之。旁、右之通ニ御座

謠曲を唱ふ

流丸に中る

候。此方ニテハ、三條公ヲ初メ、御脱走ノ七卿方ニモ、追々拜謁、且ツ、長門守殿ニモ山口ニ拜謁、三條  
公ヨリ被命候御用ニテ、御高拜借罷越、家老増田彈正、清水清太郎等ヘモ、追々出會仕候。最早、此方  
ノ都合モ、大概相調候ニ付、不日ニ但州ヘ罷歸リ、義兵ヲ擧グ、大和ノ應援、天下ノ大擧ヲ促シ、奉候  
答ニ御座候。此事ハ多端ニテ難盡筆紙、中句迄ニハ、必ズ御耳ニ入候義可有御坐、就テハ、熊藏儀、却  
テ邪覺ト存候間、暇ヲ遣シ、指返シ申候。永々、付添、心ヲ添吳候ニ付、今日マテ、召連候得共、大事ノ場  
ニ臨ミ候テハ、入用無之、且、親父ガ心配其身ノ不本意ト存シ、右之通ニ御坐候。親元ヘ御返シ可被  
下候。東西奔走仕候義ハ、此者ヨリ、可申上候。最早、此期ニ臨ミ、天朝之御爲、一命ヲ抛候上ハ、再ビ拜  
顔ノ儀、無覺東、万一天運強候ハ、采幣ヲ執テ、拜顔可仕候。唯々、正名、公行ヲ以テ、天下後世ニ鄙名  
ヲ輝シ候テ、御觀被下、是マテ年來我儘不孝ノ罪ハ、山々御免可被成下候。此後ノ摸樣ハ、實功可奉  
入御覽候。云々、國臣、同志士、藤茂弘等ト束裝シテ、閣下ニ立チ、卿ヲ停迎ス。良久シテ、閣上履聲ア  
ルヲ聞キ、國臣、謂ラク、是ナリト。因テ、高ク謠曲ヲ唱テ曰ク、七尺屏風兮、尙可躍而越。綾羅衣袖兮、何  
不可扯裂。卿之レナ聞キ、左右ニ謂テ曰ク、此、國臣ノ聲ニアラズヤ。急ニ、窓ヲ破テ、脱出ス。國臣、同志  
數十人ト共ニ、卿ヲ舟ニ邀ヘ、帆ヲ張テ、東駛ス。播磨海ニ至ル比ヒ、俄ニ、義徒ノ敗報ヲ聞キ、乃チ、策  
ヲ轉シ、舟ヲ舍テ、陸行シ、徑ニ但馬ニ入り、銀山ニ據ル。衆ヲ遣シ、銀山代官、麟會ヲ襲ヒ、其積聚ヲ奪  
ヒ、纒ニ、軍須ヲ支ヘ、遂ニ檄ヲ遠近ニ傳ヘ、告テ曰ク、前日朝議ノ變、皆守護職松平容保等ノ矯詔ニ  
由ル。宸衷ニ出ルニ非ルナリ。澤主水正等義旗ヲ掲ケ、將ニ入京シ、分疏シテ、七卿以下ノ冤ヲ一洗  
シ、盡ク君側ノ奸ヲ掃ヒ、遂ニ庶ヲ轉シテ、東指シ、幕府ヲ討チ、夷狄ヲ攘ハントス。今日ノ事、即チ、其  
發軔ナリ。有志、宜ク悉カニ、來會スベシ。是ニ於テ、各藩ノ脫徒、稍々、來屬ス。土人、亦群起シテ、之ニ應  
ズ。聲勢、頗ル熾ナリ。報聞ユ。京師大ニ騒キ、急ニ、旁近ノ諸藩ニ命シ、之ヲ討伐セシム。出石、豐岡等ノ  
各藩、皆兵ヲ出テ、銀山ヲ攻圍ス。國臣等、乃チ澤卿ヲ奉シ、轉シテ、妙見山ニ據リ、險ニ倚リ、敵ヲ拒グ。  
藩兵四集ス。旌旗野ヲ蔽フ。土兵、本ト烏合ナリ。敵多キヲ見テ、大ニ怖レ、先チ爭テ潰散シ、僅ニ數十  
人ヲ餘ス。國臣、之ヲ勵マシテ、力戰シ、一以テ百ニ當ラザルナシ。時ニ、流丸アリ。國臣ノ腰骨ニ  
中ル。國臣免レザルヲ知リ、急ニ、卿ヲシテ、西奔セシム。卿、已ニ脱シテ、伊豫ニ赴キ、殘兵大ニ敗レ、諸  
國ノ同志率ネ、皆殺虜セラル。國臣、創ヲ裏ミ、脱シテ、細揚村ニ至リ、舟ヲ得テ、匿走シ、中流ニ於テ、追



絶命の詞を題して刃を受く

雜載

國臣贈同志書

兵ノ爲メニ迫ラレ、竟ニ捕ハレニ就キ、京師ノ獄ニ下サル。時は歲十月ナリ。明年七月十九日、長門藩臣、關ニ迫リ、冤ヲ訴ヘ、諸藩衛兵ト血ヲ關下ニ蹀シ、京師大半兵燹ニ罹ル。幕吏、不慮ヲ戒メ、囚徒ノ脱センコトヲ恐レ、明日獄中ニ就キ、國臣等、數十人ヲ執ヘ、首ヲ駢テ、之ヲ斬ル。國臣、將ニ害セラレントスルヲ知リ、乃チ紙筆ヲ乞ヒ、絶命ノ詞ヲ題シ、關ニ向ヒ、跪拜シ、從容トシテ刃ヲ受ク。時ニ、年三十九。其絶命詞ニ曰ク、憂國十年。東走西馳。成否任天。魂魄歸地。其國詞ニ曰ク、見よやひと、あらしの庭の、もみぢばは、いづれ一葉も、散らずやばある。讀者皆流涕セリ。國臣、入ト爲リ、備置大志アリ。小節ニ拘ラズ。幼ニシテ、文武ヲ講習シ、學、年ト共ニ長シ。博ク和漢ニ通シ、尤モ、國詩ヲ善クシ、旁ヲ雅樂ヲ學ブ。樂師富永繼、其才ヲ愛シ、心ヲ傾ケテ誘掖シ、其裨益スル所、音藝ノミニ止ラズ。故ナリ。國臣、常ニ高山正之ノ人ト爲リ、墓ヒ曾テ、固天策ヲ薩侯ニ獻ジ、將ニ去ラントスルニ臨ミ、侯大久保利通ヲシテ、贈スルニ十金ヲ以テセシム。國臣、敢テ自ラ費サズ。後、久留米ニ往クニ及ビ、正之ノ墓ニ謁シ、悉ク、其金ヲ以テ、石燈一基ヲ造リ、之ヲ墓前ニ建ツ。其義ヲ慕フノ篤キヲ、率ネ此類ナリ。國臣、既ニ死シ、未ダ數年ナラズシテ、國勢丕ニ變シ、天業始テ恢復ス。皆、國臣畢生ノ志願ノ如シ。當時事ヲ同フスル者、澤邇以下、諸、世ニ在ル者、往々登庸ヲ蒙リ、躬昭代ニ遭際ス。而テ國臣、則興カラズ。世是ヲ以テ、益其亡ヲ悼惜ス。初、國臣ノ小金丸氏ニ贊スル時ニ子アリ、種ニト曰フ。國臣、本姓ニ復スルニ及テ、之ヲ母家ニ留ム。明治ノ初メ、福岡藩主、國臣ノ後ナキヲ憾ミ、命シテ種ニテテ。祀ヲ承ケシメ、士籍ニ列シ、世祿若干ヲ給ス。又、命シテ碑ヲ福岡千代松原ニ建テ、之ヲ旌表ス。

〔同上〕 文久二年、平野二郎國臣、同志に檄し、御親征あらせらるゝときは、大業、立どころに成るべき事を論じたるものにして、當時頗る名高き書なり。

一橋侯ヲ將軍トシ、越前侯ヲ後見トシ、其外可然人オヲ選テ有司トシ、幕府ヲ扶テ、以テ、外寇ヲ攘フト申御説ハ、去年來、彌大久保、兩兄ヨリモ、拜承仕、且當春、密表ノ趣モ、矢張御同僚之由、然レバ、御一藩之御説、設トモ、被察申、乍併、實ハ幕府ノ犯罪ヲ正シ、天朝ヲ尊奉シ、内政ヲ整ヘ、外夷ヲ御攘斥被成度、御了簡ニ被爲、在候得共、若然スル時ハ、却而、内争ヲ引出シ、外寇ニ隙ヲ窺ハレ、終ニハ、恢復モ、攘夷モ、行レ間敷トノ御懸念ヨリ、止事ヲ得ズ、權道御用被成候トノ御趣意、御最ニ、相聞候得

共、其説ハ、癸丑年ノ朝、幕威未ダ衰ヘザル時ノトニテ、既ニ、宗族ニハ、水戸烈公、尾張公、越前侯、打揃レ、列侯ニハ、順聖公ヲ初メ、土州宇和島侯、杯、色々手ヲ盡サレ、忠告、竭力、有之候モ、却テ、淫罰ヲ蒙ラレ、一事モ行レズ候。子細ハ、已ニ、英斷録ニモ認置候通、天然ノ歸スル處ニテ、徳川氏、自滅スル所以、無疑モノ歟。勿論、其頃迄ハ、久シク、徳川氏ノ制令ヲ受ル餘恩モ有之、人心未ダ、全ク離レザル時ニ候得ハ、右、良族、賢侯等ノ策、尤、當レリト云ベシ。若シ、其時、誤テ、事ヲ舉候得バ、承久ノ亂ノ如ク、却テ、關東ノ爲ニ、傾覆ヲ取ルト、本然歟。然ルニ、當時ノ勢ハ、江戸旗本ヲ初メ、府内ノ人民ニ至ル迄、聊、物ヲ辨ヘタルモノハ、皆幕府ヲ恨ミ、侮リ候程ノトニテ、増シテ、諸國ノ士民ハ、路頭ノ咄ニ迄、不斷惡口輕蔑イタシ候程ニ到リ候幕府ヲ、如何ニ扶候共、徒ニ骨折ニテ、迎モ、角テモ、行ハレ間敷、迂論窮ト云フベシ。假令、天威ヲ獎奉リタル上、勅諭下リ候共、如何ナル人アレバ、一橋侯ヲ城中ニ請シ入レ申ベクヤ。若、奸賊ハ、姦計ヲ震ヒ、當將軍、年若ト雖モ、廢官ヲ快トハ思ヒ申間敷、夫ハ、兎モアレ、角迄天道已ニ叛キ、人心已ニ離レタルモノナリ、何ヲ憑ニ力ヲ盡ベキ。畢竟、天下ノ勢ヲ知ラザル僻論トモ云ベシ。唯、形ヲ以テ御覽被成タル上ヨリ、事ニ、御座有ベク候。惣テ、大小、衆寡ハ、形ニテモ、畫圖ニテモ、見ラレ候モノニテ、約スル處、死物ニテ御座候。人心ノ合離、強弱、弛張ハ、邊陲ニ乍居見ラレ候モノニテハ、無之、極テ、活物ニ御座候。是ニ依テ、考見候ニ、先日、向田ニテ、御議論ニ出ル處、形ヲ以テ御覽被成候處ヨリ起候歟ト相窺レ申候。古來、英雄豪傑ノ所置、多ク勢ニ據テ、形ニハ拘リ不レ申歟ニ候。譬ハ、元弘ノ亂、新田氏、纒ノ兵ヲ以、鎌倉十萬ノ勢ヲ追落候モ、北條氏、人心ノ離レタル故ニテ、義助ノ見ラレタル所ハ、則勢ニテ御座候。且、又、大小、衆寡ハ、會テ論セザル處ニテ、御座候。扱、先日、敵ノ多クレバ多キ程、味方ノシマリト申上候モ、コ、ラノトニテ、所謂小敵ノ強ハ、大敵ノ虜ト申類ニテハ、決而無御座候。怒氣、發候餘リ、細密ノ辨論ニ涉リカタク、一時ノ暴言ハ、御許シ可被下候。且、當時、天下ノ勢ハ、假令ハ、帆船ノ河水ヲ沂ルガ如ク、風帆ハ、台令ノ陽形ニテ、水流ハ、倫命ノ陰勢ニ御座候得者、一度、順風ヲ正シムル時ハ、忽チ、水勢ニ隨テ流レ下候儀、本然ノ勢ニ御座候。其上、苞桑ノ勢タル幕府ヲ壓倒成ガタキ位ノ御微進ナル。天威ニ被爲、在候ハ、イカニ、我々ノ如キ微臣、粉骨ヲ盡シ候共、恢復ハ、勿論、四夷萬國ヲ蹂躪、東海ニ帆影モ、不見儀、夷船殲滅ハ、思ヒモ、不レ依ル處可有御座候。能々、御考、角迄、犬羊ノ夷等ニ踏付ラレ候儀ナル勢ニ相成候時節、久シク御隱居

平野國臣



御同様ニテ、九重ノ上ニ被爲込、楊柳桃李ノ手ニ御生育マシ、ナガラ、不世出ノ明天子、適、御即位被爲遊候事、決而偶然タル儀ニテハ有之間敷、必冥々タル天祖、大祖ノ餘烈、自ラ相願レ候モ、ニテ、愛ニ至テ、天朝恢復、明末ヲ扶テ、西土ノ主トシ、三韓ノ如キ舊貫ニ復シテ、日本ヨリ府ヲ立、年貢ヲ捧ゲシメ、永ク兄弟ノ交ヲナシ、我ヲ兄國トシ、彼ヲ弟國トシ、力ヲ合セ、百蠻蠻文ノ戎奴ヲ馭制シ、諸蠻風伏、華ヲ以、夷ヲ變シ、天之所覆、地之所載、萬緒億端、我神州ヨリ興起シ、皇化之四表ニ光輝スル時節、到來ト可被思召安候。愚見ノ處、大略如此ニ御座候。返ス、モ、天命、人心、御冥シ被成、柔弱ノ御説ハ、何國迄モ、御除キ可被成候様、乍、憚御異見申上候。穴賢、右ノ説ハ、全ク御親征ニアラザレバ、天朝恢復ハ、難爲相作成ト申處ヨリ、起ル譯ニテ御座候。御苦勞ト申迄モ無之、御案内ノ御事ト奉存候。御親征ノ功アルトハ、承久ノ亂、義時如キ、大惡逆サヘ、泰時引返シ御尋候時ノ答、若シ上皇ノ御親兵ニ奉達ハ、脱甲、斷弦、奉命之外、更ニ所置アルベカラズト申候事モ御座候。若、風聲錦旗動時ハ、双ニ不血シテ、忽チ天下一統ノ儀、無疑カルベシ。一着之上、朝鮮遊歴、長毛匪ノ交會、相樂居申候可矣。

著書

- 〔慶著〕神武必勝論 一 古今集注釋
- 征寇說 一 回天管見錄 一 盡忠錄
- 弓馬古意 一〇 制蠻礎策 一 困圍消光錄 一
- 捻紙歌集

前田夏蔭

生 二四五三、光 格、寛政五年、  
 歿 二五二四、孝 明、元治元年八、二六、日七二、

姓名

通稱 健助、鷲鷲園

住所

江戶、淺草誓願寺地中西慶院

系圖



(以上、高等國文)

學統

〔編者補〕清水濱臣——夏蔭

總叙

〔高等國文〕 是は建樹が先年交詢社の紹介を経て、其家より得たる翁の略傳なり。今こゝにしるして、史料に供す。

前田夏蔭、通稱ナ健助ト云ヒ、鷲園ト號ス。父ナ孫七郎ト呼ブ、二子アリ。長子俊藏ハ、寛政十二年、出テ、幕府ニ仕ヘ、別ニ家ヲ興ス。是レ祖父ノ孫七郎ハ、山城國宇治ノ人ナルガ、代々長井ト稱シテ足利家ニ屬シ、久シク宇治ヲ領セリ。前田ハ、外戚善徳院ノ稱ナルヲ冒セルナリ。武家仕官ヲ望ミテ、遠ク京ヲ去テ江戶ニ來ルモ、遂ニ病ノ爲メニ其志ヲ得ザリシヲ以テ、父之ヲ憂ヒ、長子ナシテ祖父ノ志ヲ繼ガシメシナリ。次子ハ即チ夏蔭ニシテ、父ノ嗣タリ。父ハ和漢ノ學ヲ好ミテ、和歌ヲ能クシ、且ツ書ニ巧ニシテ、弟子多カリシガ、夏蔭ハ若キヨリ書ヲ好マズ、自ラ志ヲ立テ、國學ヲ修メ、未ダ齡三十二至ラズシテ、既ニ諸侯ノ弟子、門ニ滿チ溢レケレバ、父モ最悦ベリ。父長逝ノ後ハ、全ク其跡ヲ受ケ、朝夕學ビニ心ヲ傾ケテ政ヲ怠ラズ。且ツ性、清廉謹謙ニシテ、貴顯ノ愛顧ヲ蒙ル淺カラズ。常ニ召サレテ國學ノ指南ヲ勤メ、又々種々ノ諮詢ニ預リシ、其書翰今尙ホ存シテ家ニ藏ス。斯ク浪々タル草門ニ鞍馬繁ク、常ニ市チナスニ至ルハ、全ク勤業ノ効ナリ。遂ニ嘉永六年十一月ニ至リ、初メテ幕府ノ謁ヲ賜ハリ、安政元年新ニ勘定格ト云フニ召出サレ、條百俵ヲ賜フ。且ツ蝦夷志料編輯ノ命ヲ蒙リ、別ニ十人扶持ト、月々十八兩ヲ賜フ。然レモ志料編輯ノ中途ニシテ、病ニ罹リ死ス。于時元治元年八月廿六日ナリ。齡七十二歳。淺草誓願寺地中西慶院ニ葬ル。妻ハ

前田夏蔭

一四二五

門前鞍馬市を  
 爲す  
 蝦夷志料編輯  
 の命を蒙る



其妻  
子健次郎

烈公の愛顧を  
受く  
慶喜公の師と  
なる

本學大意

交友

原氏、幕臣ノ女ナリ。歐文ヲ好ミテ今存ス。三男五女ヲ生メリ。一女後藏ノ嗣ニトツク。末男、健次郎  
今存ス。他ノ六子ハ早世セリ。健次郎其跡ヲ繼ギ、同格ニテ幕府ニ仕ヘ、且ツ蝦夷志料編輯ノ遺業  
ヲ襲ヒ、勵精從事シテ、翌慶應元年ニ至リテ大成ス。依テ蝦夷志料貳百十卷、蝦夷實地檢考錄五十  
三卷、歴檢眞圖三十卷、蝦夷全圖一枚ヲ幕府ニ上リ、黄金時服ヲ賜フ。後チ該書ハ、幕府ノ奥御祐筆  
所部屋ニアリシヲ、明治元年、徳川慶喜公、退城ノ節、共ニ上野ヘ移シテ、中堂ニ置カレシガ、五月十  
五日ノ戦争ニ、兵燹ニ罹リ悉ク焼失セリ。健次郎歸商シタルノ後、明治三年ニ至リ、外務省ヨリ健  
次郎ヘ、蝦夷志料ノ義ニ付尋問アリシヲ以テ、其家ニアル所ノ草稿ヲ獻納セリ。當時亦々金ヲ賜  
フ。夏陸ハ水戸烈公ノ愛顧ヲ蒙ルヲ非常ニ深ク、其初メ未ダ幕府ニ仕ヘザル前ハ、五人扶持ヲ賜  
ヒテ、駒込ノ別邸内ニアル編輯所(水戸弘道館ノ支派ニシテ、當時西野新治ト云ヘル人、此所ヲ預  
ル。此人後ニ西宮宣明ト云ヒテ、維新後山陵ノ助トナル。)ノ學事監督ノ事ヲ托セラル。且ツ常ニ召  
サレテ國學ヲ講ジ、及ビ其道ノ諮詢ヲ受ク。慶喜公モ亦々、夏陸ヲ師トセラル。或時烈公ヨリ自畫  
贊ノ幅ヲ賜フ。畫ハ水邊ニ蛙ノ居ル所ナリ。贊歌ハ「驚ノ園こそしたへ、ひたなる、水の蛙も、友と  
思へば、ト云フナリ。是レハ古今集ノ序ノ意ヲ取レルニテ、龍遇ノ厚キ、此一事ヲ以テ知ルニ足ル。  
夏陸ノ幕府ニ召出サル、ヤ、林大學頭ノ支配ヲ受クルトナリタルヲ喜バズ、國學者ガ漢學者  
ノ下ニ班シテ、其支配ヲ受クルガ如キハ、大ニ本朝ノ爲メニ耻チザルヲ得ズトテ、獻言セシ事ア  
リシモ、其頃ハ學事一切ハ、林家總理タルノ例ナルヲ以テ、遂ニ愛國ノ徵志モ行ハレザリシ。又夏  
陸ガ著ハセル驚園叢書中ニ「本學大意」ト云フ一篇アリテ、本朝ノ古學ハ紀傳、明經、明法、文章ノ四  
道ニ分チシニ基キ、茲ニ西洋ノ諸學課等ヲ加ヘテ、十八種ノ專門ニ分チ、普通學ノ終リシ後ハ、皆  
ナ専門ノ課ヲ修ム可キ所以ヲ論ゼリ。實ニ維新後改正ノ學制ト、殆ンド符節ヲ合スガ如キニ至  
リシハ、蓋シ夏陸モ地下ニ眠セシナラン。又幕府ノ命ヲ受ケテ、英吉利米利堅、魯西亞等ヘ贈ル書  
翰ノ撰文ヲナセリ。幕府ノ時ハ和漢歐三林ノ書翰ヲ贈ル例トシタレバナリ。夏陸常ニ當時ノ  
秀才、英傑ノ士ト多ク交リヲ結ビ、互ニ往來通信セリ。就中平田篤胤、野々口隆正、岡本保孝、兒島五  
一、狩谷棧齋、及ヒ近藤芳樹、中島廣足等ノ諸士トハ、最モ親密ニ相交ハレリ。茲ニ幕臣ニ川路左衛  
門尉ト云ヘル人アリ。此人元ト夏陸ノ門人ナリシガ、性甚ダ刀劍ニ僻アリテ、嘗テ一刀ヲ作り、當

著述

著書

時方正廉潔ヲ以テ、世ニ聞エタル人々ノ合作ヲ、該刀ノ作りニ彫刻シ、深ク珍重セリ。其人ハ淡窓、  
旭窓、驚園、其外今一人ナリシ。夏陸在世中ノ著書亦々夥ナカラズ。其既刻ニ係ル書ニ稻荷神社考  
二卷、茶ノ説一卷アリ。其未刻ノ書ハ、驚園叢書十卷、歴代廟陵考補遺一卷、蝦夷東西攷證二卷、蝦夷  
新定地名考一卷、儒官沿革考一卷、皇朝能書傳一卷、驚園文叢二卷、詞集三卷等ナリ。

〔慶著和〕萬葉集私記

二四

古今集辨誤

八

稻荷神社考

二

日吉山王辨

一

歴代廟陵考補遺後案

一

語例

一八

風土記逸文考證

一〇

古文考異

三

鐫字訓義考

一

皇朝能書傳

一

儒道沿革考

一

童放辨々

一

蝦夷東西考

二

蝦夷新定地名考

一

菅曾辨糾繆

一

木の芽の説

一

街の志於理

一

華加都羅

一

玉の積船

一

机の塵

二

驚園叢書

一〇

驚園雜考

一

驚園文叢

二

驚園歌集

一〇

千代の婦留道

一

綾緒之反轉

二

〔編者補〕宇那爲波奈理辨

一

綾緒之反轉

二

### 竹内享壽

生歿

生

二四七二

光

格

文化九年

竹内享壽

一四二七



住所  
姓名  
系圖

二五二五、孝明、元治二年三、二八、**田五**四、  
**生地** 京都東寺、**園東寺**ノ西郊字、**狐塚**、  
**名** 備後、越中、淡路、**園箭園**、

榎淨門東寺ノ公人上座、次享壽  
字子春、號南郊、子

(以上、欄、五八)

雜載

享壽翁肖像贊  
景樹門

〔棚五八〕享壽翁肖像贊。  
享壽號箭園。故上座榎淨門之次子也。竹内慶壽無子。養以爲嗣。八歲從實州僧正祝髮。性柔順溫和。善與人交。幼而能書。又嗜和歌。入香川景樹門。景樹嘗曰。此兒蓋生於歌林中乎。吐一句即自得和歌之林。裁規矩。晚年益工。名大彰矣。詠歌殆數千萬首。就中有詠古鄉郭公和歌。爲師所獎揚。每自書謙箋以示子弟。亦教導之意也。元治乙丑春。宿痾荏苒。三月二十八日卒。年五十四。至法眼。爲中綱職之長。社友爲謂肖像之贊。蓋享壽服事于余有年矣。披對逼眞。不耐追感之情。因聊記其生平之梗概。云。明治三年龍集康于孟冬。僧正覺寶誌。

八田知紀悼歌

しのお草(八田知紀歌集)四篇に、竹内享壽が中陰の追悼に、寄時鳥懷舊を、ふる里の花たちばなになきすてし、聲わすられぬ、ほととぎすかな。

こは、彼主の舊歌に「古里の花たちばな、香をとめて、山ほととぎす、今やなくらむ」とあるを、桂園翁いたくほめられしとか。さればあまたが中にも、こればしとみづから思はれしにや。いまはの時にのぞみて、此歌を短冊にかいて、殘しおかれしを、社友聞傳へて、やがて題をば設けしなりとかとあり。

享壽の父

平安人物誌、嘉永五年、板敷の部に

榎淨門(字子春、號南郊、東寺山吹町)

榎豐後法眼

とある、これ享壽の父なるべし。

榎淨壽(字子德、號松蔭、堂前入男)

榎大輔法眼

享壽の兄

享壽の遺稿

とある、是享壽の兄なるべし。

〔棚三〇〕其遺稿、あまたありけるを、門人遠藤千胤が預かれりしに、人の許に嫁きたる享壽の女より、父の遺稿を返して呉れよと云越し、かば、惜みもあへず、かへしやりつ。程經て、千胤、人の許にて、兒どもの反故に手習するを見しに、彼遺稿の内なりければ、驚きあわて、持ち返りぬ。されどこは、たゞ一片のみなれば、其余は如何にかなりけん、いとおぼつかなし。(池袋清風大人物語)

〔棚三三〕初は備後と稱し、中ごろ越中と改め、後に淡路と改む。前園(やまぶきその)と號す。東寺の公人上座榎淨門の次子にて、同職竹内慶壽の養子なり。八歳の時、東寺觀智院主寶洲僧正についで祝髮す。法眼に進み、中綱職の長となる。慶應元年三月二十八日歿す。年五十四。墓は東寺の西郊、字狐塚といへる處にあり。幼きより、書をよくし、歌をこのむ。文政十一年四月八日、年十七にして、始めて景樹の門に入りし時、景樹、其歌の自然に調へるに驚きぬと云ふ。桂花餘香に見えたる、故郷郭公、

ふる里の花たちばなの、香をとめて、やまほととぎす、今やなくらん。  
は、古の撰集にも入りぬべしと、稱へられし歌なり。景樹の卒せし後、京師なる弟子、多くは、享壽と、松園坊清根との門に入りぬ。一代の詠、數萬首あり。終身職を休めざりし上に、和歌の添削にさへ忙かりしかば、作りし書は多からず。古今の秀詠を集めて、楯の落葉と云へる書を作らん企ありしかども、成らざるほどに歿りぬ。(以上、宇佐美祐次氏聞書)

桂花餘香に、閑中春曙、  
靜なる、いつはあれども、うぐひすの、なく音ばかりの、春のあけぼの。  
と云へる歌あり。こはもと、しつけさを、いつにたとへん云々とありしを、氷室長翁が、彼集を編みける時、引直して入れしなり。享壽、此れを短冊に書きて、其裏に、引直されしを恨める由、記したるがありとぞ。(加藤行虎隨筆談)



### 香川景恒

總叙

〔柵三〕<sup>カケツチ</sup> 景恒は景樹の子なり。始、式部景周<sup>カケツチカ</sup>と稱す。父に繼ぎて徳大寺家に仕ふ。  
 文政六年三月二十一日生る。  
 嘉永三年二月二十一日、從六位下に叙せられ、陸奥介に任ぜらる。  
 安政五年十月七日、從六位上に叙せらる。  
 慶應二年二月十六日歿す。年四十四。(實は慶應元年十一月十六日歿す。年四十三。)  
 聞名寺に葬らる。法名を勝宗院光阿景恒居士といふ。子二人あり。長を景敏といひ、次を秀五郎といふ。景敏は歿し、秀五郎は存せり。叙任井に名の訓は(井上通泰氏)。  
 〔備考〕<sup>歌學</sup> 古學小傳の始に出てたる古學傳統圖に景周、景恒を二人とせるは誤りにて、景周は景恒の初名なり。(同氏)

### 内藤廣前

生歿 總叙

生 二四四九、光格、寛政元年、  
 歿 二五二六、孝明、慶應二年九、一、日七六、  
 〔古學下〕 内藤廣前ハ、姓ハ藤原ニシテ、遠祖某ナルモノ、幕府ニ仕ヘテ、御先手同心ナリ。牛込榎木町組屋敷ニ住セリ。少ヨリ書ヲ好ミ、最モ史學ニ長シ、系譜ニ精シ。ヨミ歌ハ、得意ニアラズシテ、詠ズルコトマレナリ。人トナリ温和ニシテ強記ナリ。壯年ニシテ勤メテ辭シ、志ヲ所好ニ專ニセラ

大内裏考證を校訂す  
丹鶴類書を編す  
病歿  
交友  
雜載  
碑文

著書

レケリ。文政ノコロ、尾州侯ニテ、裏松家ノ大内裏考證ノ板ヲ買入レラレシガ、原本ノ引書、其他誤謬アルヲ、校訂スベキ由命セラレ、多年ノ間、其邸ニ往來シテ、校訂成就セリ。依テ尾州家所藏ノ日本紀略類聚國史ナドノ古本ヲ見ル事ヲ得テ、自ラノ本ニ校合シ、其原本ヲ寫シテ家藏トセリ。又大内裡圖ハ、考證ニ切圖ノミヲ載タルニヨリ、古圖等ヲ參考シテ、新ニ全圖九數ヲ製シ、藏板トシタルヲ、維新ノ後、其孫某、コレヲ朝廷ヘ獻セリ。又新宮ノ水野家ニヤトハレ、丹鶴類書ヲ編集シ、八代集作者ノ傳ヲ作り、國史拾遺二十卷ヲ著シ、(國史拾遺ハ、國史ニ入ルベキ遺事官符ナドノ政事要略、令集解、其他ノ書ニ見エタルヲ、纂輯セシモノナリ。其微チモ書クベキ心構ヘナリシガ、纒ノ草本ノミニテ果サバリキ。)同家ニテ以前ニ刻ナリシ、尊卑分脈ノ精カラザルヲ訂正セントセシガ、未ダ功ヲ終ズシテ、慶應二年丙寅九月十九日歿シヌ。年七十六。二男一女アリ。男ハ皆先達テ歿シ、女ハ人ニ適ク。伴信友、長澤伴雄、堤朝風、黒河春村ナド、カタミニ親シク交ハラレタリ。藏書モ數百卷アリシガ、長子某、家ヲ治メズシテ、多クハ生前ニ沽却セリト云。歿後、門人伴直清、早川正敏等謀リテ、府内赤城社ノ境内ニ石碑ヲ建テ、行狀ヲ記セリ。其文ハ翁ノ友人小中村清矩撰スト云。  
 〔編者補〕 此能碑波毛與古學爾勤美志翁乃、事蹟見乍僂登、建鶴石曾。其人氏乎藤原。名乎廣前止云。豆。遠祖從東能遠乃朝庭爾奉仕在俊。翁。早久仕乎退豆。文書見事乎。所爲止志。身波乍下。心衰雲井那須。高仁置天有賀中爾毛。國史令式等能御典乎讀耽利。靜那俊窓乃内爾隱利居豆。街比求流事乎。不好有斯加抒毛。其名波志毛。世爾芳久漏聞延天。尾張頭殿仁所召豆波。大内裡圖考證乎校訂志。新宮乃君爾所誂豆波。丹鶴類書。八代集作者傳乎。作天進伎。又大内裡考證圖乎。精細爾考定天。板爾令彫。國史拾遺二十卷。邇年月珥勤美天。齡能末左右爾書畢奴。又姓氏錄乃注乎刀。思立都禮抒。得不果奈毛有祁流。惜哉哀哉。慶應二年止云。年能。九月能十九日登云爾。年七十六爾亭。命過奴。其有斯世。廼狀乎。其女登。其孫登。邇所囑天。辭毛不致。拙伎筆以錄者波。翁止魂合有志。小中村清矩。内藤瀧口女建。碑碼既就建之赤城産土神祠傍。  
 慶應三丁卯年九月、幹事、内藤廣房、森谷純徳、早川正敏、伴直清。  
 〔慶著和〕國史拾遺 二〇 尊卑分脈考證 大内裏考證正誤

香川景恒 内藤廣前



### 黒川春村

**生歿** 二四五九、光格、寛政一一年、  
 二五二六、孝明、慶應二年一二、二六、**国六八**、  
**生地** 江戸淺草田原町、**居住** 全上、本所横網町、又同所大徳院門前、**法號** 淺草新堀端永見寺、  
**通稱** 次郎左衛門、後主水、**法號** 淺草庵、**法號** 東風院道秀芳蘭禪士、  
 (以上、古學、下)

**系圖** 〔編者補〕 春村 — 養眞頼金子氏、  
 子 眞頼文學博士、  
 眞道

〔同上〕 黒川春村 — 眞頼  
 佐藤誠實

**總叙** 幼ヨリ國學ヲ志ザシ、イソシマレケリ。サレド、誰レ師ト云コトナク、ヒトリ螢雪ニ身ヲ抛レケリ。初ハ淺草庵守舎ト云、俳諧歌師ノアトヲツギテ、俳諧歌ヲヨマレケルガ、幾程ナク、其コトヲ止メテ、和歌ノミヨマレケリ。年々ケテハ、ソレハタ要ナキコトナリトテ、ハカ、シクモ讀出ラレズ。専ラ國學ノ道ヲツトメラレ、初ハ狩谷掖齋等ニ、古學ヲ質問サレ、其友トセシ人々ハ、清水演臣、岸木由豆流、村田了阿、北靜庵、伴信友、橘忠實、山崎知雄、梨白院行阿ナド、カタミニ切磋琢磨セラレタリ。翁ノ學ハ、オヨソハ鈴屋翁ニヨラレシガ、神代ノコトナド、彼此トコチタク言ハ、却テナメゲナリトテ、イハレズ。惟音韻ノコトハ、(詞ノ) 乘若干卷アリ。外ニモ、詞ノコトナカ、レシモノ、數部アリ、最得意ナレバナリ。(漢字三音考ノ) アマリニ粗畧ナルヲ、シマレ、音韻考證ト云書ナアラハサル。又萬葉畧解ノ遺漏ノ多キヲナゲカレ、萬葉集墨本抄ト云書ナアラハサレシガ、未成

ニテチハラレタリ。又物ゴト體ナラヌナキラヒ、元書ヲ見ザル孫引ノ書類ハ、必ズ其引キタル人ノ名モ共ニアゲ、又イサ、カノ説ニテモ、人ノイハレタルコトハ、必ズ誰曰ト、其人ノ名ヲ記サレタリ。又人ニ物ヲ頼マレテハ、殘ル所ナク、穿鑿ナトゲラレ、自他ノ別ナカリキ。其篤實ナルコト、コレ等ニテモ思ヒヤラル。何ゴトモ、スベテ眞心ヲ先トシ、都下ノ人トハ思ハレザリケリ。演臣、信友ナド歿セラレシ後ハ、内藤廣前ト、都下ニ二人ノ物シリナリト、人々言ヒノ、シレリ。又書家ニテハ、高橋石齋、畫家ニテハ、龜文龜岳ナド、親シク翁ガ家ニ出入セラレケリ。翁隱者ヲ甘シ、高名ナイトハレケレバ、元ヨリ諸侯ナドハ、立入チキラハレケリ。只堀内藏頭ノ先侯ト、奈須家ノミ、尊卑ノクサメモナキモテナシブリニ、折々ハ參ラレケリ。

篤實

部下二人の物

〔慶者〕大嘗會指圖 一 古葉菟玖波集 二 稱號索 三  
 名字纂 三 古物語類字抄 三 色葉類説 二  
 音韻考證 三〇 音韻啓蒙 三 詞淘金 八  
 詞八衢付考 二 詞格用例 三 增補據字造語抄 三  
 集外歌仙傳 二 異能鈔 三 古文音例 五  
 金石銘文鈔 八 海松訴陣字訓 一 諸使名纂一名使者部類 一〇  
 歴代地方名目鈔 一二 珍書隨觀抄 三 畫工隨觀抄 三  
 增補畫圖一覽 三 逸文風土記 二 本朝猫志 二  
 淡海名寄 二 猿樂考證 二〇 歴代大佛師譜 一  
 肉食辨 一 北史國號考 二 競物名彙伊庭時言同著 一  
 並山日記 一〇 法華八講會年表 一〇 碩鼠漫筆 一五

著書

黒川春村



生 歿

生

二四四三、光 格、天明三年、

### 柳原安子

- |                            |             |    |
|----------------------------|-------------|----|
| 類字常樂記 教覺同著                 | 類字墨水抄       | 二〇 |
| 墨水雜鈔                       | 雜撰雜藝集       | 三  |
| 籛中抄考                       | 墨水鈔別錄       | 二二 |
| 土佐坊昌俊木像考                   | 延年舞考證       |    |
| 一種物考                       | 文永御八講勘文考證   |    |
| 活語四等辨 <small>一名里水抄</small> | 道の邊柳考       |    |
| 船橋文書考證                     | 地頭名義考       |    |
| 瓦經考說                       | 西光寺古佛考      |    |
| 千壽萬歲考                      | 地火爐次考證      |    |
| 天言活用考                      | 圓通大師行狀土代    |    |
| 〔編者補〕節用集考                  | 陸奥國田歌解      |    |
| 詞格對照                       | 語格用例        |    |
| 五十音三内所發圖解                  | 天言圖考        |    |
|                            | 詞格一覽        |    |
|                            | 名乘指南        |    |
|                            | 鏡の佛影        |    |
|                            | 打毬考         |    |
|                            | 下總 山川村古碑文字考 |    |
|                            | 網代圖說        |    |
|                            | 帳垂衣考證       |    |
|                            | 杉山神社神賀歌考證   |    |
|                            | 長谷寺古銅塔銘文考   |    |
|                            | 用字活用考       |    |

系 圖

〇 二五二六、孝 明、慶應二年一二、二八、〇八四、

〇 正親町三條實同前參議、維新後、嵯峨ト改ム 安子

柳原均光正二位、前權大納言

桂園門下の女流にて、秋園古香と共に名あり。

(以上、續日本歌學全書、一〇)

### 秋元安民

〇 二五二七、孝 明、慶應三年正、〇四十未滿、

〇 某姫路ノ城主、酒井氏ノ家ノ子 三郎兵衛

安民大國隆正ノ婿トナル

(以上、櫛、九)

學 統

著 書

〔櫛九〕 文よむ事を好み、殊に歌は讀口なりと聞えしが、野々口隆正の翁、(此頃小野侯に仕へたり)につきて、なほも其道を究めたりとなん。初め藩の學びやに、教へ人となりて、些斗りの縁に家をやしなひたりしが、たつきもいとくくろしげなりしを、その道にはさるものにて、黄金たかちの交ならぬにや、友どちのいと多くて、大方の人は問ひよりける。萩原廣道、近藤芳樹、宮本記臣、越知日月邸などいふ人々こそ、殊にまれくならず、音づれたりけれ。

〔同上〕 青藍集

安政三十六歌仙

柳原安子 秋元安民



### 安野野雁

生歿 二四七〇、光格、文化七年、  
 二五二七、孝明、慶應三年三、二四、  
 住 所 奥州半田銀山人、  
 武藏熊谷町熊谷寺、  
 學 統 塙忠實次野雁  
 性 行 〔續日本歌學全書二〕通稱を力彌といふ。其性不羈質直、常に敗れたる衣をまとひ、繩を帯にし、  
 雨中草履をうがち、雨にぬれつゝ、ゆくやうの人にて、平素酒を嗜む事甚しく、逸事奇話少からず。  
 其畢生の事業は、萬葉集新考の著作にして、旅中も常に筆を放たざりしと云ふ。  
 〔同上〕萬葉集新考 三〇 野雁集  
 文集名 一

力彌記

### 佐々槻子

生歿 二四五五、光格、寛政七年、  
 二五二七、孝明、慶應三年八、一七、  
 住 所 肥後菊地郡木野村、

○正次 養政壽熊本藩士

子 槻子

〔國文〕中島廣足熊本藩士  
 〔繪畫〕齒玉齋狩野派 槻子

詠歌の數、一万首に及び、且貞順にして内を治め、藩主の賞を受けしこと、數度なりきといふ。

(以上、好古集説)

### 岩下貞融

生歿 二四六一、光格、享和元年、  
 二五二七、孝明、慶應三年、  
 住 所 信濃、善光寺樂人  
 通稱 多門會侯、  
 〔慶著和〕天衢 櫻園雨後  
 善光寺史略 二 善光寺別當傳略 一  
 不繫舟 四

(以上、慶著、和)

### 富田禮彦

慶應年間の人。

安野野雁 佐々槻子 岩下貞融 富田禮彦 一四三七



住所

生地 飛驒高山、居住 伊勢

姓名

通稱 稻太、和卿、隨節齋

學統

田中大秀——禮彦

著書

〔慶著和〕十八社考

飛驒後風土記

二〇

宮我圖會

三郡沿革

(以上、慶著、和)

### 吉田敏成

總叙

〔慶著和〕初名年成、稱信之助、江戸人、慶應中歿。

著書

〔同上〕千秋樓漫筆

千秋樓詠草

一〇

木綿通攷

字音平仄便覽

一

### 水野忠央

總叙

〔國學家略傳〕忠央は丹鶴、又、黃菊壽園、又、鶴峯と號し、紀伊國新宮の城主にして、紀伊侯の御附家老なり、食祿三萬五千石にして、從五位下、土佐守に任ぜらる。文學を好み、有職故實に通ず。嘗て國典に通ぜる士を聘して、丹鶴叢書を編輯せり。新宮城を丹鶴城と稱

著書

せるが故に、丹鶴書院の號あり。

〔慶著和〕朝儀部類

二〇〇

千とせのためし

一

野泉帖

二

### 野矢常方

生歿

生 二四六二、光格、享和二年、

歿 二五二八、今上、明治元年八、二三、  
通稱 與八、初駒之丞、後涼齋、隨園、蜉游翁

〔欄一四〕世々、會津藩に仕ふ。幼より和歌を好み、武を嗜む。就中槍術に長じ、藩の師範、志賀典三兵衛

(以上、欄、一四)

幼より和歌を好み、武を嗜む。加茂季鷹を訪ふ。

澤田名垂の後を承ぐ。

茶儀

〔欄一四〕世々、會津藩に仕ふ。幼より和歌を好み、武を嗜む。就中槍術に長じ、藩の師範、志賀典三兵衛重方に學びて、寶藏院流十字槍法の印可を得たり。年廿四、重方に從ひて、山陽、四海、諸國を遊歴し、武名一時に轟けり。其試槍遊歴中、京師に在る日、加茂季鷹の雅名を聞きて、之を訪ふ。時に季鷹、待遇頗る傲慢、東僻の一鄙夫を以て蔑視す。常方聊意に介せず。詠稿を出して、正を乞ふ。季鷹取て沈吟すること數回、驚歎して曰、佳調々々と、忽ち赧然として、更に敬禮を加へしと云。仕へて藩主の馬廻となり、致仕して後、重方歿するに逢ひ、起て槍術の師範となり。後安藤市藏に事ふ。又和歌を澤田名垂に學び、遂に名垂の後を承けて、和學所の師範を兼ね、先藩主、及、今の從三位に侍詠す。常に定家、四行の風韻をくむ。是を以て品調自ら高雅、其名聲、名垂の上に出づ。性寡欲、温にして、訥、和歌を乞ふ者、常に陸續絶えず。野夫と雖、敢て拒まず。粗箋と雖、敢て辭せず。又傍茶を好み、頗る其業に長じ、殊に茶杓を造る事に巧なり。或時、藩主、攝津國丹生山田なる万年屋(大同年中の修造なりといへり)の榎の竹を得られしを、茶杓にもせよとの命により、製造して歌をそへて献ぜし事

吉田敏成 水野忠央 野矢常方



戊辰の役に戦死す

あり。嘗て江戸に役し、歸期近きに及び、家人庭草を刈り、園石を洗ひて之を待つ。常方歸るに及び、齋端に立ち、獨語して曰、庭竹の葉末に置露を觀ん、と心に期せしも、之が風致を減じたる事哉。と以て風采を視るべし。戊辰の國難に、八月廿三日曉、十字槍を提げ、桂林寺町口の郭門を衝し、力戦して斃る。享年六十七。著書山路菴、藝園集あり。集は湮滅見るべからず。亂後門人小川清流、星曉邨等數人、詠歌の記憶に存するものを集録し、「藝の落穂」と題して刊行す。

詠歌

藝の落穂の内

初春霞　こぞきりし、大はら山の、たきぎこそ、けさはみやこの、かすみ也けれ。

浦春曙　しほがまの、浦わの春の、あけぼのは、いかでみやこに、移さざりけん。

山　花　みよしの、もとは一木の、種ならん、山をつくして、さくさくらかな。

神　祇　わたらひの、新宮づくり、ちかいらし、木曾のみやまに、袖たてゝけり。

吉野懷古長歌并反歌

梓弓、末の中ごろ、九重の都のうちに、風たちて、ちりもまどはし、村雲の、おほひかさなり、大宮も、安からなくに、すめろぎの、神の御子たち、み自ら、弓矢とりおほし、御いくさを、あともひつれて、天さかる、都のさかひの、遠近に、わかれいましぬ、大君は、大御車を、はるくと、南の山の、みよしの、よしの、山の、山の上、に、めぐらしたてゝ、すめみまの、御子の、尊の、みしるしの、三種の、寶、身にそへて、持たす限りは、此山も、同じ都と、おひしげる、しもとかりそけ、行宮を、いとなみたてゝ、落瀬津、瀬の、ひゞきの、あらましき、山の、ひたへに、すゝふくや、あら山風を、身にしめて、おほましき、しかしあれば、百の、司も、おのが、がじし、岩根木のもと、とりと、に、假庵作り、朝夕に、つかへまつりて、春秋の花に、紅葉に、御心を、なぐさめまつり、久方の、月日の、光、かくて世に、消ずしあらば、又もその、もとの都に、天か下、しらすさんものと、頼みつゝ、有けんものを、かひなきや、春咲花の、櫻花ちりの、まがひに、大御蔭、かくれし山か、あはれ此山。

反歌

宮どころ、うつろひはてし、みよしのに、雲井の、さくら、猶ぞにほへる。  
〔柵二〕　近藤芳樹が寄居歌談に、おのれ、江戸なる麻生の屋形に、びととせめて、國にかへらむとの詠歌

補公父子訣別の詠歌

鎗の名人

戊辰の役に戦死す

せし時道をまげて、下野のかたより、みちのくの會津にまかれりしことありけり。春もやうへ、なればならむとせし比なりしかど、白川の關にやどれる夜などは、おぞれふりてわびしきまるねなりけるに、あるじ情ある男にて、(中略)會津の道の名所などをしへて、かしの殿人に野矢常方ぬしとて歌よみこおはせ。補正成卿の、正行ぬしにわかれたまへるかたかける畫に、賛したまへるのとて、このわたりにて、ほむるうた侍り。そは  
君が爲、ちれとをしへて、おのれまづ、あらしにむかふ、さくら井の里。  
とか、うけたまはりしとなんいひし。げにをかしき歌なりけり。さるにても、かゝる作者を、今まて名をだにきかぬことよとおもひて、かしのにいたれる夜、すなはち尋ねけるに、この人は、鑓の上手にて、そのわざにては、世にゆるされたる人なりとなん云々。と書しるしてより、幾年なりけむ。年の名を戊辰と云へるに、軍起りて、會津の城の圍まれけるとき、常方(通稱は與八、家の名は藝園)齡六十七歳にして、夙く仕を退きて、城外に住したりけるが、軍起りぬと聞く、すなはち家人に扶けられて、城に驅入り、一方の門を守りぬたり。城落るに及びて、人々、常方の老いたるを憐みて、逃げよと勧めけれども、耳にもかけず。例の鎗を揮つて、敵に驅向ひ、一人を討取りて、つひに亂軍の中に斃れぬ。櫻の歌に  
弓矢とる、身にこそしらめ、時ありて、ちるをさかりの山さくらばな。  
とよみけむも、いたづら言ならて、いとあはれなり。

〔慶著和〕山路菴

藝園集

橘手曙覽

生歿　二四七二、光格、文化九年五、  
二五二八、今上、明治元年八、二八、三五七、

橘曙覽



住所

姓名

系圖

學統

總叙

橘諸兄の末裔

世を果敢なみて佛に歸せんとす

生地 越前福井石場町 福井城西田谷村萬松山  
幼字 五三郎 中年 尙事、後 曙覽、日曜黃金谷、藁舎、志濃夫廼舎、

〔編者補〕 五郎右衛門 曙覽 今茲

〔同上〕 漢 學 賴山陽 見玉士敬 曙覽

學 國 本居宣長 田中大秀

(以上、橘曙覽全集)

〔橘曙覽全集〕 先子姓は橘、幼字は五三郎、初め尙事(易經に、不事王侯、高尙其事。といふにとるなり)と稱し、後曙覽と改む。井手左大臣橘諸兄公三十九世の孫なり。父を五郎右衛門といひ、母は山本氏。文化九年五月を以て、福井石場町正玄家に生る。正玄家は福井橘七郎の一にして、著名の舊家なり。

越前名蹟考(福井藩の史官井上素良の著)に曰く、橘宗賢の、二十四輩圖會云、此舊蹟は在家たりと雖ども、其姓氏正しく、橘諸兄公の正統なり。故に禁廷より、醫藥の繪旨(世に所謂薄墨の繪旨にて、今現に奉持す)を賜ふといへり。承元元年二月、親鸞上人、越後へ左遷の時、此家に寄宿して、教化ありけるに、主人歸依して弟子となり、法名を了善と賜はり、自筆彌陀の畫像を授與す。其外、法物三五種、今猶傳來せり。いにしへは、橘三郎左衛門といひし凡俗の家にして、六百餘年退轉なく、相續するといと有がたし。○素良案ずるに、此家誠に久しく相續して、所々に免除地多く、橘七屋敷と稱す。

先子二歳にして母を喪ひ、十五歳にして父歿せり。此に於て大に感ずる所あり。佛に歸せんとし、日蓮宗の巨刹、大道村妙泰寺住職明導に就き、佛經を學びたり。明導漢籍に通じ、詩歌を能するを以て、傍ら之を習得す。是れ後に意を文學に傾くるの端緒となりしなり。親戚等、爲めに家業の衰頽を招かむことを憂へ、百方之を制すれども、兎角家産を屑とせず。専ら意を學問に注ぐ。後遂に

兒玉三郎塾に學ぶ

家を弟に譲りて専ら文事を事とす

田中大秀に學ぶ

藁舎と號す

中根雪江と交り厚し

古道の哀頽を慨す

窃に京師に赴き、故賴山陽の高弟、兒玉三郎の塾に入る。居ること數月にして、又親戚の迎ふる所となる。此時親戚相勸めて、三國港の富商、酒井氏の次女を娶らしむ。即ち室直子なり。天保十年、江戸に遊び、數月にして還る。時に年二十五。此に於て遂に意を決して、祖先相傳の家業財産を擧げて、弟宣に譲り、飄然として城南の足羽山に退去し、専ら文學に従事す。自ら謂らく、文を修むる國文に如くはなく、學問は本居宣長翁の遺風を祖述せざるべからずと。然れども、翁既に歿し、門人の世に在る者亦稀なり。偶ま飛驒に田中大秀の在る有り。就いて問ふべしとて、即ち穴馬の險を冒し、飛驒に臻り、大秀に親炙して、皇道の大旨、國文の要領を授かり、大に得る所あり。藁舎詠章中、師翁の許に物學にまゐりて、詠める長歌あり。此時の光景を詳叙せり。

弘化三年、京師に上り、仁孝天皇の御葬儀を拜觀し、其佛式を以てせらるゝを慨歎して、「ゆゑしくも、佛の道に、曳き入るゝ、大御車の、うしや世の中。の詠あり。嘉永元年、城西の三橋に轉居し、雅號を藁舎と稱す。蓋古歌の「世の中は、よきもあしきも同じこと、宮もわら屋も、はてしなれば」に取られしなるべし。此に至りて學問大に進み、自得發明頗る多く、而して讀書に耽り、著作に勉め、時に廢食を忘るゝに至れり。福井藩の重臣、中根師賢、雪江と號す、賢にして學才あり。先子に長ずること數歳、交最も厚く、意氣相投す。遠邇之を見て、愈先子を信重し、賢を執りて門に進む者益多きを加ふ。

師賢、先子の行狀を叙して曰く、翁は素より才賢かりければ、いちはやく、其梗概を悟り得て、昔より此福井の里に、果敢く、しき古風の歌よむ人のなきを憤慨し、おのれこそはと思ひ興したり。云々。神習ふ古學の道に、靈眞柱突立て、夜も日もすがらに勉め勵しみ、遂には妙に奇しき顯幽の道の奥所も、殆んど學び究めて、惟一向に神の道の衰へよりして、種々なる外國の説等の參入來て、朝廷の大御稜威も、古のやうには坐しまさぬを、朝暮に歎き慨み、あはれ斯道の明り行きて、古の大御代の大御手振に挽回さむ折もがなと、深く志願してぞ有ける。故福井の里はもとよりにて、越の國內に物習ひする人々の、次々多くなりて、後には然らぬ儔輩までも、皇國の尊さを、かつく、辨へ知るも出來にけり。然して歌をも廢ずて、其よみさま漸々に思ひ上り、尋常の風を抜出て、最上世の心げえを主とし、世間に有のこと、意衷に思ふ隈々を、具其儘



清貧に安ず

名を晴賢と改む

藩主、學を講ぜしむ  
萬葉集中の秀歌を撰す

宣長翁の墓に詣つ

「神黨」

藩主その草庵を訪ふ

に打出られしが、此集の歌にて、類なく宮比やかにぞ有ける。いつも髪そそげ、鬚も剃りやらす。散れ垢づける衣着て、綾錦の中に立交れど、恥らふ面持もなく、元來家貧しかりければ、米など乏しき折々もあれど、露ばかり心とせず。それをしも面白げにうたひ出などして、すべて直ぐ正しき神習ふ道の上にとりて、瑕瑾なきあまりは、世を思ふ儘に振舞てぞ有ける。余は始めの程こそ、先達めきて物しつれ。暇なき官路に老朽果にたるを、翁はたゆまふ事なく、鋭意に高峰の雲路に分け登られたれば、今はしも仰ぎ瞻るさへ目ばゆかるを、云々。

嘉永七年、大患に罹り、死に瀕せられしが、からうじて癒えぬ。此時、自ら晴賢と改め名づけられたり。あけみは、赤實にて、其桶姓の縁に由れるなり。

師賢の行状に、或年宰相の君（春嶽公）御嶺の折もて、此家を願はせたまひ、何くれと御問答の序に、晴賢といへる名の縁を尋ねさせ給ひけるに、其姓の桶の實によれる由を、聞え奉りたりといへり。

藩主松平慶永侯、亦其名を聞き、時々侍臣を遣して、道を聞き、學を講ぜしめらる。安政の大獄起るに及び、慶永侯幕府の讒を蒙り、江戸靈岸島の邸に幽居す。先子に命じて、萬葉集中の秀歌數多を書せしめ、室の四壁に貼付せらる。即ち同集に就き、最も其撰を讀み、莊嚴方正、氣節慷慨の意味なるものを書して上る。是一は侯の幽鬱を慰し、一は暗に王室を思ふの念を鞏固にせむとの微衷なり。人其措置宜しきを得たるを稱す。

文久元年九月、伊勢の神宮に參拜し、歸路山室山に登りて、本居翁の墓に詣て、「おくれても、生れしわれか、同じ世に、あらば香をも、取らまし翁に」と詠せられたり。それより大和を経て、大坂に至り、中島廣足の嬌居を訪ひ、京師に出て、皇居を拜し、太田垣蓮月尼に面會す。尼、大に其歌論に服し、先子も亦、尼は學問深かられど、其歌の真相を得たることは、世の歌人を以て自ら居る者の、をささ企及ざる所なりと感稱せられたり。此時の旅行日記を神黨といふ。元治元年二月、再び、神宮に詣て、月瀨に梅花を賞す。

慶應元年二月、慶永侯、特に狩獵に托して、先子の草庵を訪ひ、宮比男を見まくほりする、心より、伏りはへてとふ、蓬生のやどの歌を賜ふ。即ち「賤夫も、いけるしるしの、ありてけふ、君來ましけり、伏

屢城中に召さるれども固辭す

年々廩米を賜ふ

大政奉還に逢ひて喜悅す

大政明分を明にす

屋のうちにと詠て答られたり。此時の光景は、慶永侯の自らものせられし、晴賢の家に至るの詞、及、志濃夫の屋歌集に詳なり。抑此事たる、今の世となりては、ことわけて主張するばかりの談にあられど、封建の世、武門專權の時にありては、規制嚴格、苟くも堂々たる一大藩主にして、躬自ら一介の處士を、草庵に顧訪するが如きことは、曾て其例なき所にして、人皆其異數なるに驚くと同時に、始めて先子の、尋常人に非るを知り、併せて侯の權貴を挾まず、賢を愛し、士に下るの謙徳に感ぜざる者なし。後侯、亦侍臣川崎致高を使として、時々城中に伺候して、隨意、古典、又は、物語文等の講義を進めむことを求めらる。然れども、「花めきて、しばし見ゆるも、すゞ菜その、田伏の廬に、さけばなりけり」とて固辭せり。侯も亦、「鈴菜園、田伏の廬に、咲く花を、強ては折らじ、さもあらばあれ」と、返して止まられたり。爾後侍臣の往復は、ますく、頻繁を加へたり。或る時、侯又烟草を贈りて、「安御代は、かまどの烟のみならず、けふりくゆらせ、賤が伏屋に、とよまれければ、烟草、賤が伏屋に、くゆらせて、君のめぐみに、むせぶ朝夕」と答へられたり。蓋侯の安御代といひ、賤が伏屋といひ、かまどの煙といふ、皆暗に普天卒士、王土王臣ならざるは無きの深慮を含めるにて、侯は是等の事には、經意最も周到なり。淺薄に解釋すべからず。

同三年六月、藩主松平茂昭侯、先子の年來斯道に志篤く、且清貧に甘んじ、節操を保ちつゝあるを嘉みすとて、年々廩米若干を賜ふべき旨を傳へらる。此時、御めぐみの、露いたゞかむ、片葉だに、具へぬものを、杜の百草、我うへに、かゝるあやしや、民草を、うるひ洩さぬ、露にはあらめど、など詠せられたり。

此年、幕府大政を返上し、萬機御親裁に出づるに定まりければ、先子、喜悅限り無く、天にも昇りし心地にて、「新しく、なる天地を、思ひきや、我か眼くらまぬ、うちに、見むとは」と詠せられたり。

同四年（明治元年）正月、伏見の役に、皇軍大捷、皇威大に張り、諸道の鎮撫使、續々發向、北陸道鎮撫使の福井城を過ぎらるゝに際し、先子之を路傍に拜觀して、「天皇の、大御使と、きくからに、遙にながむ、膝をりふせて」と詠まれたり。此年春の頃より、心地例ならざりしが、當時諸藩は、奥羽の叛徒追討の爲め、兵を出して、皆之に赴き、福井藩、亦同じく朝命を奉ず。然るに軍人中、やゝもすれば、方向に迷へる者なきに非ず。先子病驛にありて、深く之を憂ひ、病を強めて、百方忠告、折には奮激



病歿  
遺命

其室貞淑

資性

抱負

三條の遺訓

のあまり、之を詠歌に洩されたり古書の、かつ、物をいひ出る、御世をつぶやく、死眼人「天下、清く拂ひて、上古の御まつりごと、に復るよるこべ」太刀はくは、何の爲ぞも、天皇の勅のさきを、畏むため「負氣なく、勅に背く、奴等を罰めつくして、歸れ日を經ず」など皆此時の詠なり。

同年八月二十八日、病大に革まり、遂に簀を易ふ。享年五十七。此日早旦、自ら起たざるを知り、一二後事を遺命し、且、如斯古來未曾有の大御代に遭ひながら、眼前復古の盛儀大典を見奉るに至らず。況やかねての抱負も、將に達するに向むとして、今日はかなく世を去るこそ、返すくも口惜しけれとて、切齒瞑目せられたり。聞く人、其志のほどを悲まざる者なかりき。陵永侯、數島の、道のしるべは、絶えにけり、今より何を、たづきにはせむ。と嘆かれたり。柩は生前最風景を愛し居られし、大安寺村の萬松山に葬れり。子三人あり。今滋、菊藏、早成。室、直子、資性貞淑、先子の曩に、家産を弟に譲りて、退隱せらるゝに方りて、親戚等、其前途甚だ覺束なきを慮り、頻りに離婚を勧めしに、直子笑ひて、院本堀川の段、人の憂き目を見捨つるは、里の耻辱となる哩な」の條を引き、以て決意を示す。親戚強ふること能はず。遂に終始艱苦を共にし、以て内助の功を全うす。今年齡九十に至るも、健康昔日に減ぜず。

先子、性恬澹にして、寡欲、氣宇高邁、風丰俗を凌ぐ。人、以て神仙の姿ありと爲す。博覽強記にして、能く和漢の書に通じ、子史百家、神史小説に至る迄、涉獵せざることを無し。而して最も意を歌詞文藻に注ぐ。曾て人に語て曰く、杜少陵の詩に、爲人性癖耽佳句、語不驚人死不休。の句あり。是最も吾が心を得たりと、其抱負知るべし。依田百川、墓碣銘を撰す。簡にして盡せり。

先子夙に自ら、其稟性の家業に適せざるを知り、父祖傳來の財産を擧げ、悉く之を家弟に譲與し、身を挺して家を去れり。爾來三十年、赤貧洗ふが如しと雖も、親戚に對し、未だ曾て一言の貧を訴ふるに及ぶことなし。故に其家弟の如きも、先子に譲受けたる、父祖の餘澤に浴し、現に市内風指の商家たるにも拘はらず、未だ曾て先子より補助の請求を受けしこと有らずといふ。而して歿するに及び、親戚皆其傍石無きに驚けり。其純正潔白、概れ此の如し、人誰か貧の避くべく、富の求むべきを知らざらむ。唯時の非にして、富の求むべからざるを悟る。故に寧ろ清貧に安ずるの、愈れるに如かずとするのみ。其三子に與ふる遺訓、三條に外ならず。曰く、うそいふな。ものほしがる

梁竦傳をよみて感ず

至誠

著書

子規の批評

な。からだいたはるな。

先子少壯の時、漢書を讀み、梁竦の傳に、大丈夫居世、生當封侯、死當廟食。如其不然、問居可<sub>レ</sub>以養志。詩書可<sub>レ</sub>以自娛。とあるを見て、大に感ずる所ありしと云。其性の謙恭なる、前半は敢て自ら當られたるには非ず。其後半自ら期する所ありしならむ。又時に、法華經譬喻品の、如來已離三界火宅。寂然閑居。安處林野。の語を誦し、佛亦此妙境を有す。我が甚た好みする所なり。と語られたり。

先子の性行を意味せむには、唯至誠の二字、以て之を蔽ふを得べきか。詞藻の推敲に方りては、精神を籠め、精練を盡し、其極處に至るを期す。常に曰く、易經に思之思之、思之不已。則鬼神助之。是なり。と、著書數多あるが中に、歌集、文集、隨筆、日記等の類、既に稿を脱す。其他、日本書紀、萬葉集、古今集等に、註釋を加へむとして、未だ業を卒へざる者あり。又言語通といへるを編するの抱負あり。て、材料の蒐集に着手せられたりしが、天年を假さず、宿志を果されざりしは、限りなき遺憾なり。歌集は、往年既に上梓して、世に公にせり。之に對して諸家の批評も、亦尠からざれども、故正岡子規の論說、頗る詳密にして、最も背緊に申れるが如し。左に抄録して、以て參考となす。

余の初め歌を論ずる、或人余に勸めて、俊賴集、文雄集、晴覽集を見よといふ。其斯くいふは、三家の集が尋常歌集に異なる所あるを以てなり。先づ俊賴の散木奔歌集を見て失望す。いくらかの珍らしき語を用ゐたる外に、何の珍しき事もあらぬなり。次に井上文雄の調鶴集を見て、亦失望す。これも物語などにおいて、普通の歌に用ゐざる語を用ゐたる外に、何の珍らしき事もあらぬなり。最後に橘曙覽の志濃夫舍歌集を見て、始めて其尋常の歌集にあらざるを知る。其歌、古今、新古今の陳套に墮ちず、眞淵、景樹の窠臼に陥らず、萬葉を學びて萬葉を脱し、鑽事俗事を捕へ來りて、縦横に馳驅する處、却て、高雅蒼老、些の俗氣を帯びず。殊に其題目が、風月の虚飾を貴ばずして、眞に自己の胸臆を纏く者、以て識見高邁、風俗に超越するを見るに足る。而して世人は、俊賴と文雄あるを知りて、曙覽の名だに之を知らざるなり。

曙覽の事蹟、及び性行に關しては、未だ之を聞くを得ず。歌集にある所を以て之を推すに、福井邊の人、廣く古學を修め、夙に勤王の志を抱く。松平春嶽、擧て和歌の師とす。推獎最もつとむ然れども、赤貧洗ふが如く、常に陋屋の中に住むて世と容れず。古書堆裏、獨破几に凭りて、古を稽



へ道を樂む。詠歌の如き、固より其專攻せし所に非るべきも、胸中の不平は、他に洩すの方無く、  
 凝りて三十一字と爲りて、現れし者なるべく、其歌の塵氣を脱して、世に翹びざるは、これが爲  
 めなり。彼れ自ら詠じて曰く「吾歌をよるこび涙、こぼすらむ、鬼のなく聲、する夜の窓、凡人の耳  
 には入らじ、天地の心を妙に洩す我が歌、何等の不平ぞ、何等の氣焔ぞ、彼は此歌に題して、「戯に  
 といひし」といへども、「戯れ」の戯れに非るは、之を讀む者、誰か之を知らざらむ。然るを猶強て「戯  
 れ」と題せざるべからざる者、其裏面には、實に萬斛の涕淚を湛ふるを見るなり。吁、此不遇の人、  
 不遇の歌、曙覽と春嶽との關係と、彼が生活の大體とは、春嶽自記の文に詳なり。彼が清貧に處  
 して、獨り安むざるの様、はた春嶽が高貴の身を以て、能く士に下るの様は、此文を見て能く知  
 るを得べし。此知己あり、曙覽地下に眠すべきなり。

曙覽、徳川時代の最後に出て、始めて潤眼を開き、成るべく多くの新材料、新題目を取りて、歌  
 に入れたる逢見は、趣味を千年の昔に求めて、之を目眩に失したる、眞淵、景樹を驚すべく、進取  
 の氣ありて進み得ず、越趨遠巡して、姑息に陥りたる、諸平、文雄を壓するに足る。曙覽は先づ此  
 第一の門口を破りて、歌界改革の一步を進めたり。曙覽は擬古の歌も、新様の歌も詠み、慷慨激  
 烈の歌も詠み、和暢平遠の歌も詠み、家屋の内をも詠み、廣野の外をも詠み、高山彦九郎を  
 も詠み、御魚屋八兵衛をも詠み、俠家の雪をも詠み、妓院の月も詠み、蟻も詠み、虱も詠み、書中の  
 乾蝴蝶も詠み、窓の外の鬼神も詠み、儂頭も詠み、杓子も詠み、見る處、聞く處、觸るゝ處、悉く三十  
 一字に收めざることをなし。曙覽の歌想の豊富なるは、單調なる萬葉の及ぶ所に非ず。曙覽の歌  
 は、萬葉に、實朝に及ばざること遠しといへども、貫之以下今日に至る、幾百の歌人を壓倒し盡  
 せり。新言語を用ひ、新趣向を求めたる、彼の卓見は、歌學史上特筆して、後世に傳へざるべから  
 ず。彼は歌人として、實朝以後只一人なり。眞淵、景樹、諸平、文雄輩に比すれば、彼は鶴群の孤鶴な  
 り。歌人として彼を賞賛するに、千言萬語を費すとも、過贊にあらざるべし。若し夫れ曙覽の人  
 品性行に至りては、磊々落落々、世間の名利に拘束せられず、正を守り、義を取り、俯仰天地に愧ぢ  
 ざる、蓋し絶無僅有の人なり。

又子規は、其墨汁一滴に、萬葉以後に於て、歌人四人を得たりとし、曙覽と元義とは、固より賤しき

實朝以後の一  
人

萬葉以後の四  
人

にあらねど、共に世に容れられざりし人なり。元義の終始不遇なるに對して、曙覽が春嶽の知遇  
 を得たるは、晩年稍意を得たるに近し。しかも二人ともに、王家の臣たる能はざりしは、死して猶  
 遺憾あるべきや。曙覽の見識の進歩的なる處、元義の保守的なるに勝れりとせむか。と論じたり。  
 子規は先子の歿する前、一年に生れし人にて、生前には面識を得ること能はざりしなり。然るに  
 信夫舎歌集を涉獵して、綿密周到其蘊奥を窮め、而して詳悉公正の批評を下す、筆下神ありとい  
 ふべし。先子地下にありて、應に隔世の知音を得たるを喜ばるべし。猶子規は、先子の爲め、小傳を  
 編するに意ありしなり。然るに天この有爲、少壯の文豪をして、志を瀆して世を棄てしむ。嗚呼子  
 規子が蚤世の不幸は、亦先子の不幸となれり。明治三十六年の七月七日、小石川指谷町の僑居に  
 て、橋今滋謹誌。

墓碣銘

〔橋曙覽全集〕 井手曙覽翁墓碣銘

(依田百川氏)

不踏前人之轍跡、自合古法、不襲先哲之聲調、暗符正格、如吾曙覽翁者、可謂歌學之豪傑矣。然其卓識  
 特見、不獨止歌也。竟在振王道於式微、天扶義於將傾、豈尋常國學者流所能及乎。翁諱曙覽、初名尙事。  
 幼名五三郎。考曰五郎右衛門。妣山本氏。越前福井人。系出自左大臣橋公諸兄。世住肥州田邊。因以氏  
 之。崇德帝時、有飛驒守者、移越前。子孫分爲七族。世稱爲橋七郎。織田豐臣二氏、皆重其名。族厚遇之。及  
 徳川氏、仍爲例。君世稱正玄氏。即七族之一也。甫二歲喪妣。十五喪考。哀痛欲歸佛。爲親戚所沮止。乃遊  
 京師。就見玉士敬修學。未幾而歸。天保十年遊江戸。既而意有所決。讓產於弟。專從文學。研究國典。傍善  
 和歌。警景墓本居宜長。傲萬葉集體。然磨練出新。不必踏襲也。學成弘化三年。卜居足羽山。教授子弟。嘉  
 永中。移三橋町。匿跡。名不復出。鄉里突。當是時。福井藩主松平侯慶永。以賢明著聞。翁名。使人質以疑  
 義。安政六年。侯蒙讓幕府。閉居江戸。窃遣使。命翁選萬葉名歌。翁乃選三十六首。皆忠愛憂國之言。侯志  
 益固。蓋翁與有力焉。無幾侯見釋。慶應元年。託言狩獵。親詣翁廬。縱談移刻而去。凡侯伯顯貴。法制甚嚴。  
 出入有度。未嘗有身詣處。士者。於是世始知翁之賢。足以致貴人。且服侯之不。以貴傲人也。侯欲錄之。翁  
 固辭不出。三年。侯命副主茂昭。優給俸。不待以臣禮。不責以職事。翁乃受。明治戊辰。王室中興。翁喜躍  
 不自禁。賦歌賀之。福井藩奉勅討。與羽未服者。翁又作歌。獎勵兵士。其詞激切。今存集中者是也。翁以是  
 年八月二十八日病歿。年五十七。臨終曰。吾幸遭中興。然未能觀其制度朝儀之盛。是畢生之恨也。遂歿。

橋曙覽

一四四九



著書

翁爲人恬澹寡欲。家無儻石之儲。晏如也。嘗笑謂人曰。聞有天狗者。翔乎天地。睥睨乎宇宙。不羈法度。不繫情慾。逍遙自在。以極其樂。然一日三爲業火所燒。余不事王侯。不阿世俗。可謂極天下之樂矣。而一月數不免饑渴之苦。亦天狗境界也。其曠達如此。然翁非好隱逸者。蓋家世名族。雖在民間。不欲風塵武門。其不出仕。有深意焉。而王室中興。未一年而歿。惜夫翁所著。有古今集垣間見。志濃夫廼舍歌集。圖爐裏譚。沽哉集。柳薰。花廼櫻。秀句歌集。古風文集等。配酒井氏資性淑順。善事翁。方翁讓產而去。親戚勸其離婚。氏學院本所曰。遂天家落魄。棄之。是圓里之耻也。今年八十。健康不減。少時云。明治十一年。皇上巡幸。駐蹕岐阜。翁子今滋。爲師範學校長。上其歌集。有相匹賜。今滋葬翁于越前田谷村萬松山後。二十七年。來求余文。余素不識翁。閱其行狀。始知非凡人。乃不敢辭。銘曰。

赫矣先生。能守窮苦。斟酌古道。不泥於古。交遊人間。不與俗伍。石隱靡風。克念汝祖。有子維賢。克履其武。英靈歸然。永埋斯土。銘辭無飾。萬目同視。

〔同上〕志濃夫廼舍歌集 一 藁屋詠草 一 藁屋文集 一  
 沽哉集 一 柳薰 一 圖爐裡譚 一  
 花廼櫻 一

大石千秋

生歿 住所 姓名

生 二四七一、光格 文化八年、  
 歿 二五二八、今上、明治元年一三、一九、  
 住所 葦山園伊豆葦山本立寺、  
 姓名 通稱 清藏、關梅嶺、和歌、善くす

(以上、忌辰、上)

河喜多眞彦

生歿 姓名 著書

生 二五二八、今上、明治元年、京都の人、官軍に従ひしが、軍  
 通稱 眞一郎、關樞園、  
 〔編者補〕六人部是香——眞彦 (編者補)  
 〔慶著〕神皇御系譜 一 神皇正統記標註 三 百人一首梓語 三  
 近世三十六名家集 三 全略傳 二 名家年表 一  
 鑒定便覽 八 花洛名勝圖會 木村明彌全撰 八  
 〔編者補〕文苑紀年大成 市村貞一

田代清秋

生歿 姓名 著書

生 今上、明治初年、  
 住所 香川景恒——清秋、薩摩人  
 姓名 通稱 清秋、子なくして家は絶えにき。  
 顯 戀 我戀は、あらはるゝより、ゆるされて、つゝましからず、なりにける哉。

大石千秋 河喜多眞彦 田代清秋



寄玉戀  
しら玉の響は世にものこりけり、碎くかひなき、わがこゝろかな。  
與女問郭公  
鐘のおとは、うちも忘れて、妹とわれ、なくれかぞふる、ほととぎすかな。

### 神山魚貫

(國學家略傳)

生歿 總叙

明治の初年、**三** 九〇餘

〔續日本歌學全書<sup>ハ</sup>〕 魚貫は通稱三郎右衛門、下總埴生郡飯岡の人。幼より歌を好みしに、近きわたりに誘ひたつる友もなく、導く師もなけれど、自ら思ひ起して、畑うち、田かへす暇に學びて、あるは世のどきをおひ、あるは親のいさめをうけても、猶思ひやまで、遂に道の奥がにいたりたりき。苦清水の自序をよむに、其辛苦のさま、親に孝なる心しられて、いと哀深かり。

〔編者補〕 苦清水 **三**

### 井上淑蔭

總叙 著書

〔慶著<sup>和</sup>〕 稱多藏。武藏人。文雄門。明治之初、官大學教授。

〔同上〕 神兵稜威考 **一**

歴史通覽 **三**

活語新論 **一**

一弦考

### 林良本

生歿

**生** 二四五四、光格、寛政六年正

**歿** 二五二九、今上、明治二年二、二一、**三**七六

信濃松本

通稱 監物、園龜園入道、又萩齋

○良棟——良本——陸夫

香川景樹——良本

(以上、櫛、三八)

〔櫛<sup>三六</sup>〕 家は松木藩の老臣、父に繼ぎて職に居り、規畫するところ極めて多し。歌を學び、文雅の名、遠近に聞ゆ。年七十、仕を辭し、暮ら吟詠に耽りぬ。

〔慶著<sup>和</sup>〕 謝教辨

五十六音歌結

山彦問答

歳々百首

夢のたゞち

若葉日記

### 河邊一也

生歿

**生** 二四六二、光格、享和二年

**歿** 二五二九、今上、明治二年五、二八、**三**六八

(忌辰、上)

神山魚貫 井上淑蔭 林良本 河邊一也

一四五三



總叙  
島山梅軒門

〔續日本歌學全書ハ〕河邊一也、またの名を清意といふ。葎園はその號なり。忍が岡の片ほとりにすみて、自ら忍岡隱士とよべり。梅軒のをしへ子にて、世に隠れたれど、歌の教をうけし人、少なからざりき。景樹翁の、一也の歌を評せられし文、香川翁全集下卷、百十三頁にあり。合せ見るべし。

### 正田千益

生歿

生 二四五三、光格、寛政五年正、一二、

總叙

歿 二五二九、今上、明治二年一一、二九、目七七、

〔欄三八〕千益は、東寺の公人、正田求女の子なり。通稱を右近と云ひ、後に河内と改む。天保五年正月、景樹の門に入る。其外醫術を小森縫之助に、書を松村景文に學びき。又詩をも作り、茶をも嗜みき。平生、洋學の修めざるべからざると、種痘の行はざるべからざるとを説きて、やまざりきとぞ。寛政五年正月十二日に生れ、明治二年十一月廿九日に歿りぬ。年七十七。息源吾氏、今京都にあり。

### 栗原信充

生歿

生 二四五四、光格、寛政六年七、二〇、

住所

歿 二五三〇、今上、明治三年一一、二八、七七、

姓名

生地 江戸駿河臺紅梅坂、國京都梅尾山高山寺、  
通稱 孫之丞、國伯任、國柳菴、隱居樂、シテ

學統

〔漢學〕柴野栗山

〔故實〕伊勢某貞丈子——信充

〔國學〕屋代弘賢

〔以上、萬年草、一一〕

總叙  
「のぶみつ」

〔萬年草二〕信充は江戸の人にて、幕府の家人なり。

信充の訓は「のぶみつ」なり。水雄同志卷の一、柳菴雜筆卷の四等に、かく傍訓したり。

寛政六年七月二十日、江戸駿河臺紅梅坂の自邸に生る。

諸々に斯く記せれど、據る所を知らず。信充の令孫、武田信和氏に質し、に、氏の聞及ばるゝところ、亦此説に同じ。

幼名は陽太郎、信和氏の説、後、孫之丞と稱す。字は伯任。

刀劍圖考等に、

甲斐國源氏、栗原孫之丞信充、  
堀田一知が柳菴雜筆序に、  
柳菴と號す、柳菴ともかけり、  
柳菴雜筆の自序に、  
簪下有、小柳數株、是柳菴之名所、緣也。

晩年別號か樂といふ。

信和氏が余の間に答へられし中に、  
又、樂と號せしは、安政之年、隱居したる時、命名したる稱にして、其以前より、閑散の身なりしに、今又隱居して、樂になりたりとの意味にて、斯く名づけたるやの趣、承居候。

幼時漢籍を柴野栗山に、故實を伊勢某貞丈の子に學び、信和氏の説、後、屋代輪池の門に入り、久しく其教を受く。

正田千益 栗原信充

一四五五



輪池翁に見ゆ

柳菴雜筆自序に、余十餘歳。初見輪池屋先生。先生語云。子幼冲。頗解讀書。須垂帷閉居。講究學問。慎勿損稽古之暇。以生驕慢之意矣。尋入先生之門。受入木之道。又與先生所編古今要覽事。先生藏書。且五萬八千餘卷。多是名山石室之所藏。絕代之奇書。余也幸得嚙掃之間。窺之者。亦先生之賜也。待乎先生。三十年。有所請益。

鞍轡圖式の附言に、

文政八年十二月二十四日、江戸麹町、伏見屋茂兵衛が家にて、一奇鞍を見たり。是を熟視するに、我師、財翁遺書に「エヒ鞍」と云者の法量と同じ。

とあり。財翁、恐らくは前にいへる、伊勢氏の別號にあらじか。

文化中、輪池、壽命をうけ局を開きて、古今要覽を編纂するにあたり、信充亦同所詰を命ぜらる。後脚疾によりて職を辭し、家居して著述に従事し、又門生に授く。

柳菴雜筆自序に、

又與先生所編古今要覽事。……後病脚。去所職。而家居。家之北昌平橋也。四紅梅坂也。占地不盈一畝。爲小圃。爲盆池。老屋數椽。又築土倉二棟。雖無長物。唯書貯萬卷。度置其中。獨坐其中。校讀以取樂。倦則櫻於圃。植以花草。勞則坐於池畔。池水清冽。遊鱗洋洋。亦可以樂也。夜則與兒輩。發經史疑義。及歷代之沿革。又取往時所鈔得。聞見於名流交遊。秘局奇冊。校讐編纂。

信和氏の說に、

柳菴雜筆自序中、去所職云々は、屋代輪池先生、壽命に依り、古今要覽編纂に着手し、奥右筆所に其編纂所を被置たる時、右編纂方の一人として、同所詰と申ものを被命たりしが、其後(年月缺)病に依り、之を辭したりと云ふ事、小生幼年の頃、聞知候。其他に勤務せしことは無之様、承知致し居候間、右編纂所詰を辭したる事にも有之べくと存候。

元和元年春、島津久光の招聘に應じて、薩摩に下り、冬に至りて歸東す。

久光が軍防令講義之序に、

栗原翁、博古之士也。夙用心於本朝古籍。齡已踰七旬。而氣力益壯。著述甚富。甲子之夏。來遊敝邑。

家居

島津久光の招きに應ず

武田と改姓す

訪諸古蹟。大槻如電先生の說に、柳菴が江戸を去りて薩州に往きしは、文久元治の頃なるべし。安政外警以來、武士は甲冑刀槍等を詮索してければ、柳菴の武家放實に明るきを以て、其門甚だ盛なり。殊に薩藩の士大夫の來り學ぶ者多く、柳菴も彼藩邸へ出入して其交り深かりき。かの島津三郎の江戸に來りし時(文久二年)夙く其知遇を得たり。三郎四歸の途次に、英人を斬殺せしより、幕府と薩藩と確執おこりしかば、柳菴と薩人と交るは、幕人の嫌忌する所となる。柳菴心に決する所あり、退身し本姓武田に改稱して、竟に薩州に赴きしなり。明治元年、武田と改姓せしといふは、其再び世に出てしより、名人忌辰錄に載せたるなり。江戸を去る時に、既に武田を稱して、幕府と關係を斷ちしなり。

信和氏の說に、

元始元年甲子二月末頃と覺ゆ、當時の江戸を出發し、三月中旬より、暫時大坂江戸堀に滞在し、全年五月初、鹿兒島に着し、其年の九月頃迄滞在致居候。

明治元年、本姓武田に改む(名人忌辰錄下の卷)同三年十一月二十八日京都に於て歿りぬ、享年七十七、遺骸は梅尾高山寺に葬る。

祖父は明英、父は和恒、もと上野國利根郡榛名村の人なり。和恒若くして江戸に出て、後小普請方を勤む。(信和氏の說)

堀田一知が柳菴隨筆の序に、

信充祖父明英、字士俊。少好學。長與一時知名之士。周旋往來友善。其學專勉經術。未曾臻乎唐以下所謂神官小說。信充幼承祖訓。讀誦數百千言。其十二歳父和恒共來見余。余出蘇陸之文讀之。頗通其儀。

母は前橋の人、小野久兵衛の女なり。妻は甲斐國山梨郡の人、詰田榮次郎の女、名は千勢子、子は女、信晃(初名信光)信允、女の四人なり(信和氏の說)

門人は、幕士、山岡鐵太郎、薩藩、美玉三平(贈從四位下)佐賀藩、阪部長照(維新後會計検査院検査官た

門人

栗原信充

一四五七



りし人同藩、池田彌一(維新後裁判所判事たりし人)中島一三(書を以て島津家に仕へし人)等なり。  
(信和氏の記憶せらるゝ人二三を擧ぐ。)  
此稿をもものするに當り、武田信和氏、及び大槻如電先生の教を乞ひし事多し、謹て謝意を表す。

著書

〔同上〕 先進繡像玉石雜志

水雄岡志

刀劔圖考

一〇

兵家紀聞

五

鑿工譜畧

武器袖鏡

二

裝劔備考

一

木弓故實撮要

柳菴雜筆

三

鞍鎧圖式

一

軍防令講義

續武將威狀記

四

柳菴隨筆

一

重修真書太閤記(校訂)

八

重修續王代一覽(校訂)二〇

職原抄全部

名人忌辰錄(栗原信充の條に、「職原抄全部(薩州藩島津帶刀氏の開板)」)

日本紀私讀本

同書に曰、「同島津家に於て開板となる。但私讀本と稱するもの。」

令講義全部

同書に、「翁の七十年來丹精せしものは、令講義全部の著述にて、島津久光公の力に依て開板す、序文同公の撰する所なり。」とあり、薩摩府學に於て出版せしは、前に擧げし軍防令講義八卷のみなり。陽春虛雜考卷之二、法律史講究書目といふ條に、「軍防令八卷、徳川幕府の士、栗原信充の撰にして、此外に令全部の講義は寫本にて、稀に寫し傳へたるを一覽せしことあり。大内裡指圖及京師の地圖

名人忌辰錄に載す。  
御陵墓考全部  
同書に「但し、世上未詳の分迄を調せしものにて、其外親王以下陵墓の地位を調しもの。」

武家職掌考

柳菴雜筆卷の一に、「猶委しくは、武家職掌考に云へば略す。」

憲法詳註

柳菴隨筆、憲法といふ條に、「其詳なることは別に憲法詳註一卷あり、」

聖像考

同書聖像といふ條に、「余嘗て聖像考一編著はせり、」

古刻書跋

同書古刻本といふ條に、「余嘗て古板の跋を影抄し、其刻手の顛末を詳考し、古刻書跋四冊を著したり、」

上野國史稿

同書序文の中に、「十九著上野國史稿七十卷。」

皇朝三種尺圖說

〇、これより以下二十九種は、國學家略傳、栗原信充の條に載するところなり。

皇統相承譜

國史年表

官位令講義

日本外史正誤

京職圖解

應仁武鑑

鎌倉武鑑

鎌倉制度考

室町制度考

續將軍執權次第

法隆寺寶物考證

武林法量業書



古器圖編  
刀劍圖式  
保呂圖式  
上野國方諺  
律呂集義  
柳菴漫筆

古器圖式  
鞍鐙新書  
木弓故實  
樂器圖說  
柳菴續筆

甲冑圖式  
手綱圖式  
上野國產志  
樂流相承譜  
柳菴餘筆

遺書につきて信和氏の説に曰く、維新前後、彼是居所を轉々致し、且祖父歿後なるを以て、遺書等、散佚なく保存せんことを慮り、明治七年の頃、中島一三氏(柳菴門人にて久光公侍臣)に就き、久光公へ送呈し、永く府庫に留置を願置きたるに、不幸にして十年の兵燹に罹り、二の丸の倉庫に於て、烏有に歸し、今日弊家には遺著一も無之云々。とあり。或人の説に、島津家に送呈せし遺稿どもは、悉く反古紙を綴り、其裏に朱書せしものにて、大櫃一擔に充ちたりしといふ。惜い哉兵火の爲に蕩然たり。(以上、全篇、加藤雄吉氏)

### 島重老

生 二四五三、光格、寛政五年、  
歿 二五三〇、今上、明治三年一一、  
姓 出雲、通稱彈正、幼巴之助、後棟重、又重老、  
廬櫛廼舍、

(以上、櫛、一四)

學統  
千家尊孫と復古を唱ふ

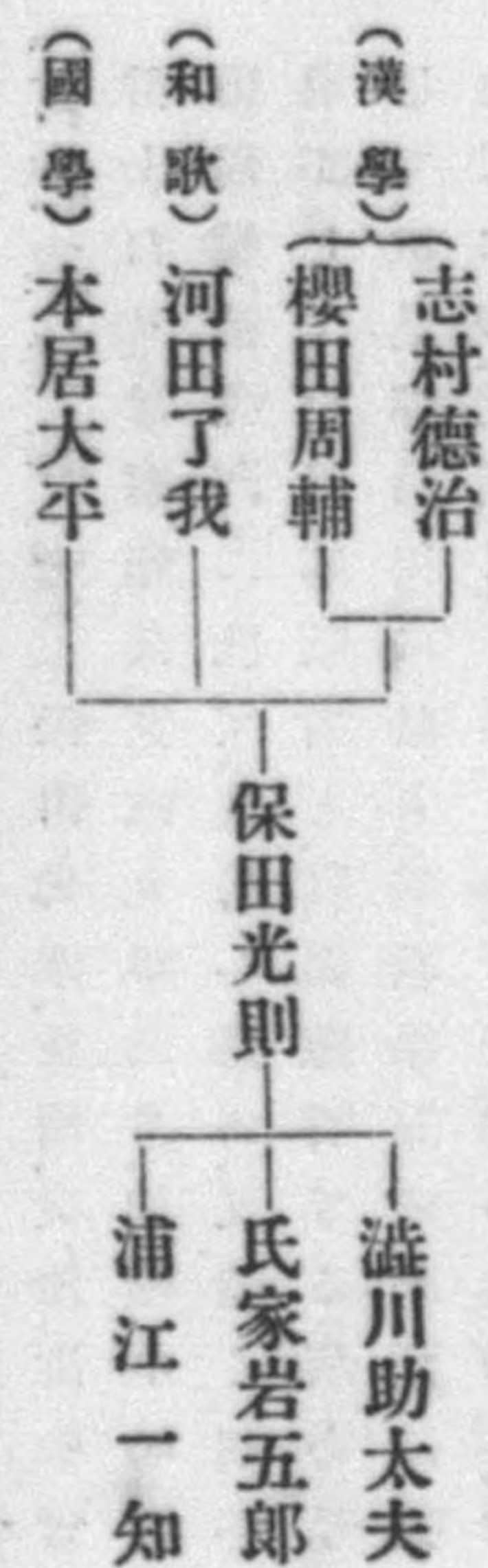
著書

〔櫛一四〕 世々出雲大社の上官なり。千家俊信について、ものを學ぶ、當時出雲の國は、専ら二派の歌學の行はれたりけるを、重老、千家尊孫宿禰と共に、大に復古を唱へて、つひに出雲の國の歌風を一變したり。傍ら、連歌をよくす。門人國々にあるもの甚だ多し。家集は、櫛之舍集六卷あり。したしき友は、本居内遠、加納諸平、石川依平、飯田年平、中島廣足、海野幸典等なり。(空中樓主)

〔慶著〕櫛舍集 三

### 保田光則

生 二四五七、光格、寛政九年三、  
歿 二五三〇、今上、明治三年三、一七、  
生地 仙臺中島町、仙臺新寺光壽院、  
通稱 貞治、光則、  
父 保田光利、世任仙臺藩大番士、  
母 齋藤氏、  
志村徳治、櫻田周輔、  
河田了我、  
本居大平、



(以上、言語學雜誌、一)

島重光 保田光則



總叙

〔言語學雜誌〕 保田光則、通稱、貞治、清の舎と號す。父通稱立之助、諱光利、世々仙臺藩に仕へ、大番士たり。母齋藤氏、寛政九年三月、仙臺中嶋町に生る。夙に和漢學に志し、碩儒志村德治(號不詳)櫻田周輔(號虎門)に就て、漢學を修め、又遠く刺を本居宣長翁に通じて、和學を研究す。爾後屢々書を飛ばして、平田篤胤翁と、質問應答する所ありたりと云ふ。文久元年、本藩一門、石川家の招聘に應じて、伊具郡角田に赴き、成教學館の學頭に囑託せられしも、所見囑主と協はず、歌を題して去る。次て本藩、境横目に舉られ、征谷關に赴任し、關谷日記を著す。關谷日記は、本町通小學校長伊藤賢氏所藏せり。後藩學養賢堂和學指南役、兼藩主慶邦公の師範役に舉られたり。藩政改正の際、本城二の丸留守居副役となる。著書百餘部、明治三年三月十七日、齡七十四を以て歿す。以上光則の孫、孝太郎の寄稿)

○保田光則貞治と稱す。幼にして志村石溪に學び、既にして長じて國典を研窮し、河田了我に従て歌詠を學び、又本居宣長の著書を好讀す。藩主慶邦公、擧げて歌道の師となす。其學該博にして著述を好み、増補雅言集覽、新撰陸奥風土記等は、最も其力を致す所なり。其他雜書五十部に過ぐ。雅言集覽一部は、維新の後これを文部省に納るといふ。光則琴を善くす。讀書に飽けば、則ち之を彈じ、以て自ら娛む。明治三年三月十七日歿す。年七十四。(鈴木正三氏の仙臺史傳)

附記(志村石溪、諱は弘強、通稱は篤治、石溪は其號なり。兄弟三人あり。皆當時の儒宗たりき。世稱して志村氏三珠樹といへりとぞ。石溪はその末弟なり。)

○保田貞治光則は、大番士にて、祿高百五十石なりしが、屋敷は當市中島町なりき。漢學の素養ありしかば、初(天保中)養賢堂當時その學頭は大槻格治——民治の子——なりき。に入りて、學問方指南役となり、次て和學指南役と云ふ者になりしが、後延壽院棟(樂山公御實母)御附人、樂山棟御歌御相手に擧げられたり。佐藤直翁は、保田先生の推薦にて、其跡を受けしなりといふ。和學は本居大平翁の門人(但、文通にて)なりしが、平田先生の著書を讀み、大に信仰したりしが如し。歌は最も得意なりしが、此は齋藤永文(永配、號を梅翁といひし人の子にて、保田先生には叔父に當るといふ。)に學びしなり。琴は某とか云けむ盲人に習ひて上手なりしが。女子二人とも(男子なし)能く彈きとりたり。女子一人は孝太郎氏の實母にて存生せり。先生の學友として名ある人は、猪苗代

逸話

鎌道(連歌を以て名ありし人なりしが、祿は三百石、京都に住居したりし由)及び錦織即休(狂歌師にて、祿は三百石ばかり、御醫師なりき)等、門弟には、澁川助太夫、黒川郡の人にて、今尙在り、秋山と號す。氏家岩五郎(百千と稱す、詠歌者なりきとぞ)浦江一知翁なども、教を乞へる者なり。墓所は新寺小路光壽院にありて、只「保田光則之墓」とあるのみにて、死にし月日もなければ、歿年は確に知れず。七十三とか七十四とか云へど、確かならず。

〔同上〕 性質は大どかにて、一向物には頓着せざりしかば、先生の風も見えざりしが、非常に強記にして、古今集を初め、新古今などを、暗に浮べ居られたりき。併し随分僻人にて、物を人に問ふときなどは、どこまでも根をほりて聞き、又人より問はるゝときは、不確かなる事は知らずと云ひて、直に之を調べては、其人の歸る跡より、やがて追ひ往きて、斯々なりと能く教へたる人なり。歌會などの時は、案外に式は厳しくて、詠草などを遠くに居て、先生の前に手を伸ばしやれば、無作法なりと叱られき。されど儉約家にして、尤も生計は可なりに暮し居たりきとぞ。今の折箱のやうなる菓子箱の隅に紙をはりて、硯箱としおき、之にすきかへし紙の疎末なる青き紙を詠草として、席に出さるゝが常なりき。(以上佐藤直翁の談)

○少女ありて門前に佇みけるが、保田さん私の傘でもよくば、貸して上げませうかと云ひしに、先生直に其士の玄關にいたり、家人を呼びて云ひけるやう「此方の御女は斯う」の事を云ひました。が、處女にはあるまじき言葉と思はるゝを、宜しく御用意されよ」と云ひて來りしときもありきとぞ。

又伊具郡角田町なる石川家より、彼地の手習の指南として、頼まれ往きし事ありけるが、初はさもなかりしかど、後には餘り丁寧なる待遇を受けざる様になりしを以て、面白からず思ひけむ、一首の歌を壁にはりつけて、暇をも告げずして立歸りける折もありきとか。其歌は「秋風の、まだふかぬまに、かへるには、しかずとやなく、山ほととぎす」とやうに覺え居れど、確かならず。(以上、伊藤質氏の談)

○光則翁、物聞かんとて、人を訪へるときは、先づ直に「やあ先生、斯う」の事はどういふ事を云ふのでせう」と訪ひかけ、其答を得て、分りたる處で、初て大小をときて脇におき、さて誠に有難う



とて會釋するが常なりきといふ。其學問に熱心なる、以て知るべきなりと、或る人より、嘗て聞きたる事もありき。(寄稿者併記)

〔慶著〕和訓栞後編

雅言集覽補遺 一三

言葉打合圖考 一

語例考

稱謂考 一

訓原

陸奥風土記

〔編者補〕脚結抄考

雅言集覽續編 三二

挿頭抄増補 一

### 古川松根

生歿

生 二四七三、光格、文化一〇年、

歿 二五三一、今上、明治四年正、二一、三五九、

住 肥前佐賀國鍋島閑叟侯の墓後、

姓名 通稱 與一、園楢園、又寧樂園、

(以上、國學家略傳)

經歷

〔國學家略傳〕鍋島侯の藩士にして、近習頭たり。松根、學問該博にして、非凡の神才あり。殊に國學典故に通じ、和歌をよくし、傍書畫を巧にす。松根の生るゝ、君侯に先づ一年、幼より君側にありて、輔導甚つとめ、影の形に従ふが如く、四十年一日の如し。偶々侯の薨るや、松根、葬事を主る。已に歿し畢り、舍に歸りて之に殉す。(古川松根純忠之碑)

著書

〔慶著〕初夢歌合

喪儀略

峨嵯のしをり 一

### 鈴木雅之

生歿

生 二四九七、仁孝、天保八年、

歿 二五三一、今上、明治四年四、二一、三五、

住 生地 下總國香取郡鍋木村、

(以上、國學家略傳)

總叙

〔慶著〕稱一平。下總人。伊能穎則門。明治之初爲大學少助教。後官宣教中講義生。

著書

〔同上〕古事記譯解

日本書紀名物正訓 一二

宮賣神考

天津祝詞考

同祝詞說略 一

撞賢木

靈魂說略

理學新論 一

史論

民政要治

治安策 三

活語全圖

詞の花筐

類題八代選

類題清風集

同二編

百體百首

花實百首

歌學正言

同新語 二

春秋贊義

論語辨

中庸辨 二

孟子辨

〔編者補〕四大恩書

客居偶錄

同雜錄



### 大館晴勝

生 歿

生 二四八四、仁孝、文政七年三二二、

住 所

歿 二五三一、今上、明治四年七六、**田**四八、

系 圖

**生地** 日向國都城、

學 統

○晴述四男晴勝四男

經 歴

新納時昇

著 書

千稱有功——晴勝

生 歿

香川景樹

著 書

〔**欄**三七〕

生 歿

壯年の頃より、公に仕へたりしが、後、遂に家老に進みぬ。三兄みな世を早くせしかば、止むことを得ず、家督をつぐに至りぬ。幼にして奇才あり。藩校明道館に漢學を修め、後天保十三年京都に上り、松園清根、穂井田忠友らと交る。家世々連歌師たり。故を以て歌に秀てたり。(加藤雄吉氏)

著 書

〔同上〕 都島集

生 歿

小門之汐干

著 書

〔同上〕 都島集

生 歿

大國野々隆正

著 書

小門之汐干

生 歿

生 二四五二、光格、寛政四年一一、二九、

住 所

**生地** 江戸櫻田津和野藩邸、東京赤坂靈南坂陽泉寺、

姓 名

藤原、**山**本、今井、野々口、大國、**編**一造、匠作、仲衛、**田**秀文、秀清、中、隆正、**田**葵園、真瓊園、

總 叙

〔好古類纂一〕 翁、初め秀文、又秀清といふ。字は子蝶、通稱仲衛、初め一造、總一郎、匠作、正作、仲の數稱あり。戴雪、天隱、如意山人、佐紀乃屋、葵園、居射室、真瓊園は、皆其別號なり。氏も最初は今井を稱し、中

氏 名

ごろ野之口と更め、終に大國を稱す。父を秀馨といひ、(天姓と號を以て名し、書あり)、津和野藩士たり。其先は、後村上天皇の裔に出づといふ。翁は、寛政四年壬子十一月二十九日を以て、江戸櫻田津和野藩邸に生る。同十二年庚申、年甫めて九歳、感を伊呂波歌に發す。享和二年壬戌、父秀馨、授くる

世 系

に五十音圖を以てす。翁、大に其音韻の神妙不測を知覺し、我國音、僅に五十の子母音にして、其活用變化の妙理に至りては、宇宙の間、万有の神理を包含する本源たるべきを感悟せりといふ。文

感 應

化三年丙寅、平田篤胤の門に入り、始めて、古道學を修む。是年、父の訓諭に遊ひ、昌平慶に入り、業を古賀精里に受く、同四年丁卯、深川富岡八幡宮の放生會に賽せんと欲し、永代橋を過ぐ。偶行客關

に 發 す

溢して橋梁斷つ。翁亦僕と共に水中に墜つ。幸に漁舟の救護を得て、生命を全うすることを得たり。同六年己巳、昌平慶、仰高門の試業に於て、孝經、孝優劣の章を講ず。畢て北寮に還り、以爲らく、不

皇 學

愛其親、而愛他人者、謂之悖德、不敬其親、而敬他人者、謂之悖禮と、然れば、則我皇國に生れながら、皇

志 志

學を修めずして、漢籍のみを學習するは、之れを悖學といふべきのみ。宜しく皇學を修めて、而し

書 畫

て後、漢土の書を學ぶべきなりと、憤を此に發す。是年、昌平慶の舎長と爲る。同七年庚午、昌平慶を

書 法

辭して藩邸に歸る。翁嘗て、書畫を好む。此間、畫法を長島の藩主、雪齋増山正賢氏に受け、名を戴雪

書 法

と號す。又書法を講ぜんと欲し、工に命じて板を削らしめ、之に書して學習す。また、菊地五山等に

書 法

交りて、屢々其詩會に列り、遂に普く江戸の文人墨客に交り、専ら風流韻事を事とす。既にして本

書 法

居宜長の、音韻學に精通なりしよしを聞きて、大に之を欽慕し、竟に名簿を其門人、村田春門に贈

書 法

春門に學ぶ



家名を繼ぐ  
西洋の理學を  
研究す

立志の歌

大に國語を研  
究す

亡命して仕へ  
ず

氏を野々口に  
復す

貧困子女を鞠  
育する能はず

りて、音韻學を受く。同十四年丁丑、父秀馨、老を告げて致仕し、翁家を嗣ぐ。時に名を秀文といふ。文政元年戊寅、藩の允許を得て、長崎に遊學すること五閱年、其間西洋の理學を吉尾權之助に質し、兼て梵書を涉獵す。又書法を清國人某に問ふ。清人、一日、翁に謂て曰く、貴國は自ら貴國の書法あり、刻苦して我清國の書法を學ぶと雖も、技能恐らくは、其右に出て難からん。蓋、彼我、各其長所を異にすればなり。翁聞きて大に悟る所あり。去て石見國津和野に抵り、後江戸に還り、遂に皇朝諸名家の筆蹟を學び、自ら一家を爲せり。此頃、翁立志の歌を詠ず。其詞に曰く、  
たてそむる、こゝろざしだに、たゆまずば、龍のあぎとの、玉もとるべし。

此よりその後、頓に文人の交際を止め、専ら神代の古事五十音圖に係る諸書を攻め、遂に我神代の古事は、獨皇國のみに止まらず、廣く地球万国に至る神理にして、我皇統の窮り無きは、偶然にあらざることを覺知し、五十音圖の絶妙大理を開發し、古傳通解、及、矮屋一家言の稿を起す。同八年乙酉五月一家言の第一卷、得經談を上梓して世に公にす。是より先、翁幼時の頃は、世人なほ、五十音圖を知る者稀なりき。其韻鏡に掲ぐるものを見ては、唯、字音の反切を知るものと思へり。本居氏の組鏡、玉の緒、八衢、富士谷氏のあゆひ、かまし二抄、相隨て成り、世に行はるゝに及び、聲々五十音圖は、我古言の活用に要あるものたることを知ると雖も、未だ其眞義を解するものあらざりしなり。同十一年戊子、藩、命じて大納戸武具役と爲す。固辭、聽されず。既にして同僚某私を謀る。同十二年己丑、翁禍の其身に及ばんことを懼れ、竟に亡命して仕へず。天保二年辛卯八月二十四日、父秀馨の病危篤に及ぶを以て、親族胥謀り、夜竊に翁を喚ぶ。是を以て、倉皇來りて湯薬に侍す。頃刻にして秀馨終に起たず。享年七十八。翁慟哭之を久うす。然れども、脱藩の身たるを以て、其喪に主たることを得ず。且他人を憚り、天未だ明けざるに、悄悄として去て心喪に服す。視る者、之が爲めに繼を沾さざるはなし。其後、氏を野之口に復す。蓋亡籍の故を以てなり。同三年壬辰正月、門生を徳島藩醫士、富永晋三が、榎町の家に會し、毎二七の日を以て、國典を講ず。後茅場町福田宗玄の家に於てす。後南八丁堀五丁目に移り、また、靈岸島長崎町に移居す。父物故の後、家漸く貧窶、殆凍餒に瀕す。二女あり、長をわかと曰ひ、次をしづと曰ふ。鞠養すること能はず。是に於て、妻瑛、二女子を携へて、其兄井上忠民、忠民、名は文覺、絞齋と號し、通稱直記、儒を以て岡山藩に仕へ、大名小路

妻子を残して  
大坂に赴く

國學を京攝の  
間に唱ふ

小野藩主に聘  
せらる

歸正館を起す

小野藩を辭し  
て京師に移る

岩倉卿入門す

の別邸に居るの家に寄食す。翁、獨居して常に室内の塵埃を欲めず。隣に隣近の饋遺に因りて飢を醫す。然れども、晏然として書を讀み、文を著し、毫も憂苦の色あること無し。人以て偉人と爲す。同五年甲午二月七日、火神田佐久間町に起り、延いて翁の家に及ぶ。翁之を忠民の家に避く。是に於て、學家井上氏に寄居す。越えて十日、火、復た其北隣、老中宮津侯の官邸より起る。翁時に出て外に在り。歸れば則、怡も其妻、門を出て、遁るゝに相逢ふ。即、挈けて千住驛、門人某の家に避く。此災に罹りて著書、器財、殆蕩盡し、復た家事を經紀すること能はず。意に妻子を忠民に託し、獨大坂に赴く。此時の歌に曰く、  
おもふ子を、おきていでにし、わがさとば、ひと杖ごと、に、遠さかりゆく。

翁、此行日毎に、詠歌の事を紀し、題して歌日記といふ。今世に行はる。爾來、國學を京攝の間に唱道し、門人日に進み、學業大に振ふ。稱して本教本學と曰ひ、名聲類に顯る。同六年乙未四月、江戸に抵り、妻子を携へて、大坂に還る。十月、書肆北尾某、兼好法師物語を携へ來りて、改書せんことを請ふ。翁、今新に居る此地に移し、座右引書を乏しと雖も、書肆の意に乖戻するも、亦他日の悔なきにあらずと考慮し、遂に之を諾し、九日稿を起し、其十五日に至りて成る。題して兼好傳考證と曰ふ。世に行はる。同七年丙申、播磨小野藩主一柳侯、土佐守末延、江戸より邑に歸るの途、大坂に過り、聘して賓と爲し、粟米五入口或はいふ七入口を給す。翁、乃ち其旨を承けて、和漢學校を創建し、號して歸正館と曰ひ、以て藩侯、及、藩士の子弟を教導す。八月、詞の正路第一卷を著す。此頃、一儒生、駁本居翁書と題せる書を筆し、其説を詰れり。翁、門生鈴木重胤の請を容れ、彼の駁者の徒、外來の教法に迷誤するを憐むの意を以て、憤駁者と題する書を著はし、之を反駁せり。同十二年辛丑、小野藩を辭して、居を京師に移す。歌あり曰く、  
うれしくぞ、都の人となりける、舌たみたりし、ことばながらに。  
是年、正三位前參議、岩倉具集卿、翁の門に入り、歌を詠じて與へらる。其詞に曰く、  
かげうつる、あやなきいろも、池水の、その心を、たのむふぢなみ。  
卿、また其後、苑の梅花を折り、添ふるに歌一首を以てす。名を驚鶯梅といふ。其詞に曰く、  
なしといふ、名にはあれども、君がため、たなるはやすき、梅にぞありける。



報本學會

因に云、天保十三年正月、正二位具集卿の書れたる嚶々筆語の序文にも、翁に就きて、學說を問はれけるよし、見えたれば、こゝに抄出す。曰く、此百とせ餘り、皇國學漸、ひらけてくらからずなり。にたり。世中のひらけたるをしらぬあたりおほかり。おのれ、是をうれひて、春のあした、菫摘にと、秋の夕暮は、百草の花に月みんと、をり、野之口にたちよりて、ゆけどもつきぬことの葉の道、あふげばたかき神代のふることを、とひきくついで云々、

翁、居を京師に卜し、其家塾を報本學會と號し、同十三年壬寅五月、自ら之が記を作る。其文に曰く、

報本學會記

父母ばかり、子をおもほすものはあらず。その君ばかり、そのしもを憐みたまふものはあらず。まれば、子のことをおもほさぬ父母、下をあはれみたまはぬきみもおはしませど、こなたよりはそむくべからぬものになん。このふたつは、本に報ゆるみちにて、もろこし人も、いみじきことにぞすなる。その忠孝の文字をかりて、おもふに、これをば、顯忠顯孝といふべく、この外に、幽忠幽孝といふべきものあり。わがすむ所の君、わが仕ふる君の君と、かぞへあやれば、そのもとは、天皇にておはします。そも、我、天皇は、このくにかぎりの天皇にておはします。そのゆゑよし、朝廷のみふみにも、しるしをかたまひ、世中にもいひつたへて、上代には、うたがふ人のなかりしを、今世はこのくにの人すら、よくもしらす、しりてもうたがひて、すすなるは、申昔より、外國々のをしへの雲、世にはびこりて、しばしくもれる故に、ぞありける。この木の光を世にあらはすものまなびを、幽忠といふべく、こそ、わか父母のおやのおやとめゆけば、その本は、産靈のかみにおはします。この神、あめつちを造りなしたまへるとき、人をものにすぐれて、かしこく正しくつくりたまひ、よろづのもの、皆人のために用ゐらるべく、つくりおきたまへるかむばかり、人とうまれたる身の、いかゞはおもはてあるべき。いかゞは、むくいせでありぬべき。そのかむわざを考へ、さとりものまなびを、幽孝といふべく、なん。かくいへばとて、顯忠顯孝をおろそかに、おもひひかめそ。かへすがへすも、顯忠顯孝を常のしわざとつとめはげみて、そのいとまのひまに、幽忠幽孝のすぢにかなへるものまなびをなすべきなり。まことや、唐土、天竺、その外、西のくに、

ていひといひ、つくりとつくるものも、ことわさもみな、わがむすびの神のみしわざにもれぬは、たゞしからぬをばしりぞけ、たゞしきをとり用ゐ、みくにのためになすべきなり。おのれ、このすぢのこと、をしふるところを、本に報ゆるまなびのやと名づけたれば、わがをしへにしたがふ若人、だち、おろそかに、おもひて、な怠りぞ。

野之口隆正書

天保十三年壬寅五月

長手武政の子を養子とす

諸藩に聘せられて國典を講

「倭魂」の書を阿部侯に呈す

是年、徳島藩(淡路國須木)士、長手武政の男、進を養ひて子と爲し、名を正武と更め、長女を以て之に配し、支族として小野に居らしむ。藩主一柳侯、擧げて士籍に列し、俸十石二人口を給し、歸正館教授と爲す。翁もまた、時に小野に來往して教授の事に従ふ。嘉永元年戊申、姫路藩に請せられ、國典を和學校好古堂に講ず。和學校の教師、齋藤守澄は、即ち翁の門人なり。又、福山藩主阿部侯、伊勢守正弘に聘せられ、老臣以下、其門に遊ぶ者、頗多し。是に於て、中國地方、皇學に志ある者、靡然として皆其高風を欽仰するに至る。翁、亦大に皇道の復興を唱へ、尙武の國體を講明し、諄々として、備まらず。福山藩の老臣相謀りて、其主、勢州侯に言ふ所あり。將に、慶米七人口を給し、延いて客たらしめんとす。適、翁、倭魂と題する書を著し、之を阿部侯に呈覽す。侯之を其藩費に下して、評論せしむ。儒員、江木繁太郎、鈴木平之助、北條新助の徒、大に之を辨駁し、以て異端の書と爲し、相俱に申して曰く、我侯斯の如き書を信じ、又斯の如き學者を聘したまはば、臣等決して教育輔導の任を盡すこと能はずと、侯、尙之を江戸藩邸駐在の儒員、門田行助に示して、其見る所を述べしむ。行助も亦等しく之を非とす。蓋、江木の徒、既に意を門田に致し、其申し、所を告ぐるを以てなり。侯また、前田夏蔭に示して、其説を問ふ。夏蔭は、江戸の人、國典に名あり。讀誦一過、大に翁の學識を感歎し、對て曰く、見る所固より小異なきにあらずと雖も、皇學の本源、實に此書に述る所の如しと。侯、頗惑ふ。是に於て、侯、復之を幕府の儒員、林大學頭に問ふ。大學頭は、筒井肥前、林圖書之助、佐藤捨藏等に示して、論評せしむ。皆以て異端の甚しきものと爲し、且つ曰く、平田篤胤の例に倣ひ、書を焚き、著者を流刑に處するを以て至當と爲す。侯、益處理に苦しむ。夏蔭、側に此内議を耳聞するや、大に駭き、私に救護の策を水戸藩士、西野新治に謀る。新治、之を其主、前中納言齊昭卿に聞す。卿、驚きて即ち阿部侯に内諭し、姑く其處分を猶豫し、先づ、其書を見んことを需む。然るに、筒井肥州等、相謀りて



關白鷹司公に  
調す

津和野藩原籍  
に復せしむ

國學を改めて  
本學と稱す

其書は、既に聖堂に隱匿し、致て他人に示さず。是に於て卿は、大坂城代土屋侯(采女正直)に頼り之を需む。土屋侯は座摩の社司、佐久羅東雄に囑す。東雄之を翁に需む。翁大に喜び、門生をして更に一本を贈寫せしめ、故らに標題を書せしめて之を呈す。卿一讀して親ら「やまとこゝろ」と題し西野新治に下し謂て曰く、是れ皇學の骨髓なりと。新治退いて、讀一過、嘆賞措かず。前田夏陸に告ぐるに、齊昭卿の評語を以てす。夏陸喜んで其狀を阿部侯に聞し、紛紜竟に寝み、翁に事無きを得たり。而して翁、未だ其事を知らず。後數日、人あり告ぐるに、此願末を以てす。翁聞きて大に駭き、因て以て前田、西野二人が知己の情を感じ、後年江戸に抵りて之を訪ひ、前日の厚意を謝し、又齊昭卿に小石川の第に伺候し、深く恩を謝す。同三年庚戌正月十四日、關白鷹司公(政通)に謁す。歌あり。其詞に曰く、

賤の身のせげき袖にはいとしくつゝむにあまるけふのうれしき。

爾來、常に公の門に出入して、皇典を講じ、皇室の復興を説く。同四年辛亥九月十五日、津和野藩主龜井侯(茲監翁の學識を嘉みし、諭して原籍に復せしむ。翁恩を謝して曰く、微臣、藩籍を脱せし以來、茲に二十有餘年、東奔西走すと雖も、未だ嘗て他家の士籍に列せず。聊以て、二君に仕へざるの微志を存す。今復歸して士籍に加列せらるゝは、洵に臣の光榮とする所、亦以て、舊恩に報ゆるの期を得たり。謹て其恩命の辱きを拜す。然るに、今や天下の志士たるもの、尊皇愛國の志念を養成し、大に俊魂を鼓舞作興すべきの好時機に際會せり。而して藩制の羈絆束縛を受け、進止自由ならざる時に、竟に蹶足を伸ぶるに由無らん。是れ甚遺憾とする所なり。故に請ふ。身藩の籍に在りと雖も、特に制外に置かれんことを。侯、則ち其請を容れ、舊に仍て京師に居らしめ、學費として廩米五入口を給し、藩費養老館國學教師と爲し、逐年、春秋津和野、及、江戸藩邸に至り、淹留百日を期し、子弟を教授せしむ。既にして、藩主、翁を正廳に延見し、命じて皇典を講ぜしめ、藩老以下士分以上、任意に之を聽聞せしむ。同十一月一日、翁嘗て、世に我古典を學ぶを、國學と稱するの妥當ならざるを辨じ、曩に姫路藩の好古堂、小野藩の歸正館等、皆發議して本學と改稱せしむ。今復た津和野藩の養老館に於ても國學を改めて本學と稱す。蓋し、古事記奏上序中に、所謂本教神理の語

「文武虛實論」  
を著して倭魂  
振起を論ず

震災にあひて  
西歸する能は  
ず

藤田東湖と語  
る

に探るなり。同五年壬子閏三月晦、復た津和野に至り、十月、江戸に赴き、外櫻田津和野藩邸に滞在すること百日許、去りて、兩國久松街、師岡理助の家に客居す。理助の男、節齋(名は正胤、醫を以て業とす)は翁の門人なり。同六年癸丑三月、水戸前中納言(齊昭)後苑の觀花に託して延見せらる。六月、米國水師提督彼理、相州浦賀に來て互市を請ふ。天下之が爲めに懸然たり。是に於て文武虛實論六卷を著し、海防の要は虚文武を斥け、實文武を勉むるに在るを論じ、且つ、儒佛は偏なり。西教は邪なり。而して我本教の正なる旨を詳説し、將た倭魂を鞏固にして、以て皇國をして、宇内に冠絶たらしめんと欲すること極論せり。即ち一本を作り、西野新治に頼りて、之を水戸侯に呈す。十月晦、江戸を發して西歸す。途中駿州原驛に於て、地大に震ふ。乃ち其驛に投宿す。夜に至るも震動止まず。旅亭家を擧げて難を外に避く。翁、獨り亭に止まり、自若として机に凭り書を繕閱す。既にして隨行の門生平田仲治(後ち片岡正占と更む)をして、寓を原驛植松某の家に請はしむ。植松某、亦門人なるを以てなり。某歡び迎ふ。此に淹留すること數日、此災東海道諸驛、人畜多く死傷し、道路杜絶し、西歸し難しと聞き、復江戸に還る。此震災の慘狀を見て、詠せし歌あり。曰く、  
嘉永六年十一月四日、いにしへよりまれなる地震にて、東海道のうまや、家たふれし中に、原はさばかりならざりき。おのれば、このうまやにて、そのなやみをさけて、都へのみちふさがりて、行きがたければ、立いてし、あづまへかへるとて、沼津三島のたふれし家どもをみて、

こん春は、さぞまどふらん、つばくらめ、そのまゝたてる、軒しあられば。  
後數日、藤田東湖を、小石川水戸侯の邸に訪ふ。東湖一見、其恙無きをよろこび、且つ曰く、吾子西歸の途に上るや、未だ幾くならずして、沿道地大に震ひ、死傷算無しと聞き、予甚だ、子の災に罹らんことを懸念せり。一日適、事を以て我主公に謁す。公曰く、今隆正は、當に途にあるべし。恐らくは、此災に罹りしならん。彼れが如きは、當世得易からざる人物なり。若し不幸にして、此災厄に罹らば、此洵に痛惜すべきなりと。憂色面に見はる。今子が恙無きを聞さば、公の悦、知るべきなりと。翁感泣して退く。翁自ら此事を其著、球上一覽中に記す。其文に曰く、  
いにし年、水戸の贈大納言のきみ、みづから、大きな地球象をつくりて、朝廷にたてまつりた



今上帝詔命

まへることあり。おのれ丑のとし、江戸にくだりて、藤田西野などいへる人によりて、其君にわが心ざしをもつげたてまつり、著述ものをもみせたてまつりて、かへるき、原宿にて地震にあひたり。地震に道のふさがりたるよしをきいて、ふたゝび、江戸にかへり、藤田にあひけるとき、このほど、前の中納言の君のみまへにいてしに、隆正はこのごろ、道中にてたてあるべし。外のものゝしにたらんも、不便は同じことなれど、隆正が死にたらんには、今かれにかはるべき人をおぼえず、をしきことにてあるべきなりとのたまへり。かくまた、ちかへり、江戸に來られしことを申さば、きこそよるこびたまふらめと、いはれしときのわがこゝろ、つれにおもひいて、わすられず。今また、球上のことをいふにつき、球象をつくりて、たてまつられしみるをおもひやりたてまつり、思ひいて、しるせるなり。これは、はじめの地震なり。そのつぎの地震に、藤田のあらすなられしことを、おもひいて、うちなげくことなり。この君に、贈官あらせられしよるこびば、われのみならず、よの中のものよるこびなるべし。

安政元年甲寅九月、露西亞國船、攝津近海に來航す。時に先帝震憂管ならず。關白鷹司公、御前に候し、旨を請ふに、詔命あり。翁陰に、之を聞き、恐懼措くこと能はず。書して同志者に頒つ。其文に曰く。

今上帝詔命

安政元年九月十七日、ロシアの船、難波のうらにきたり、都のさわぎ大かたならず。其時、鷹司關白政通公、大前に參り玉ひて、こと國のえみしども、なにはに來れる由、もしや都にせまりたらば、いかゞはからひ申さん。かれて、みゆきなさせ玉ふべき所を、關東へもいひやりて、あて置申べきや。叡慮のほど、こひ奉るとまを上げられければ、しばしは考へておはしけるが、たまへるやう、それまでには及ぶべからず。若しえみしども、都にせまりたらば、大宮の内にてとまかくもなるべし。わが行先は、泉涌寺より外にはあらざと、みことのりありければ、とかく申すべきよしなしとて、まかりたまへりとぞ。きく人、感涙ながさぬはなかりきとなん。

野々口隆正しるす

「本學學要」

同二年乙卯四月、本學學要二卷を著し、我皇國の宇内万国に卓絶する所以を述べ、遂に万国の推尊する所となりて、大帝國の地位に陞り、天壤と共に、無窮の皇位は、則ち世界万国に君臨したまふべき幽契、神理ある旨を説き、以て大に志士の義氣を作興す。其卷首に自詠の歌を弁して曰く。

本につき、かたみにすくふ、日の本のもつ教ぞ、みちのものとなる。

天地の、木つ教を、しらすして、末にまどへる、ひとぞかなしき。

附録一卷あり。題して「駁或問答」といひ、自ら外人と對話するに擬す。此書もまた、別に一本を装し、藤田東湖につき、水戸侯に呈す。其卷首に辨する歌詞に曰く、

安政二年四月、うちまつりしとき、よみてそへける歌。

「駁或問答」

濠にも、あらぬ心に、異國の、ふれはかゝりて、はなれざりけり。

是より先、醫師平田原亮、養氣説を著して、孟軻の所謂、浩然の氣を説き、以て自ら、古人未發の説と爲し、批評を翁に請ふ。是に於て、翁、別に學運論を著し、以て之に答ふ。原亮、大に悦服し、爾後門生と同じく、常に其講筵に列れり。翁、また學運論をも水戸侯に呈す。本論の要は、一万年を以て一元と爲し、五たび折半して、各、其年紀に當る皇運の泰否と、學事の盛衰とを詳論し、今は神武天皇即位紀元二千五百年代にして、正に皇運雄飛の盛時に際會する所以を述べ、亦以て志士の忠肝義膽を鍛鍊せしむ。十月、關東地大に震ひ、死傷甚多しと聞き、倉皇書を裁して、水戸侯の安否を候す。侯、復書して、異無きをいひ、而して藤田東湖の死せし由を報ぜらる。翁、前年の事を追懐して、哀悼に堪へざりきといふ。十一月二十三日、天皇新宮へ遷幸したまふ。翁、其幽簿を路傍に拜觀し、歌を詠ず。其詞に曰く。

「學運論」

花さけど、行幸のひびき、きこえれば、あらしの山の、かひやなからん。

又、牛の畫賛に曰く、

いにしへの、行幸の車、世にたえて、ひかぬをうしと、おもひわぶらん。

水戸侯の安否を候ふ

幽簿を拜して歌を詠ず

氏を大國と改む

閏八月、津和野に至る。藩主鷹、召見て諮詢する所あり。十二月、津和野を發し、石見國、邇摩郡、大國村を過り、八千矛山、氏宮の森、大國主神の故迹を發見し、大に喜び、獎諭して、其神社を改築せしめ、後、明治八年に至りて、成るを告ぐ。因て氏を改めて大國と稱す。蓋、昔時、摺神家、寺を建て、自ら之に居り、



國典を廣島藩に講ず  
王政復古を喜ぶ

南北兩朝の強

門人玉松操

寺號を以て氏に代ふるの例に倣ふなり。慶應三年丁卯七月、播磨小野に至る。時に廣島藩主松平侯(安藝守長茂、今の淺野侯なり)其學說を聽かんことを望まる。翁、諾して廣島に至り、慶國典を其藩に講ず。藩老淺野河内、上田主水を首として、諸士の聽聞する者甚多し。十月、京師に還る。時に形勢一變し、大政遂に朝廷に歸す。翁、歡喜雀躍、措くこと能はず。歌を作りて自ら喜を記す。其詞に曰く、

花さきぬ、牛となりても、大君の、行幸の車、ひかんとぞおもふ。

翁嘗て南北兩朝の強弱を論じて曰く、北畠氏は戎事方に股りなる時に際して、皇統の正閏を辨じ、以て順逆を明にし、名分を正す、其効甚だ偉なり。只惜むらくは、度量に乏しく、中興の業、竟に振ふこと能はず。而して北朝は、之に反し、武略ある者は、擧て之を用ひ、功ある者は、土地を賞與して吝まらず。故に天下義を輕んじ、利を重んずるの徒、相率めて之に屬す。強弱果して如何ぞや。彼の北畠氏の學識を以てするも、なほ、延喜天曆の跡に復るを知らず。神武の古に復ることを知らず。今天下の大勢を遠觀するに、皇運挽回は、日を期して俟つべきなり。然れども、其本を委ぬるに、博識大度の人を以てせざれば、或は中古の王政を摸擬して、南朝の覆轍を踐むの虞なしとせず。此論空しからず。大政歸朝の時、神武創業に基くの大號令を發せらる。是れ蓋し故右府岩倉具視公の客、玉松操の議に出るなり。操は則ち翁の門人にして、親炙聞く所を以て公に説き、建武中興は、空名姑息のみ、須らく神武の創業に基き、我より古を作すべしと唱道す。此議、遂に王政の主眼となるに至り。嘗て子爵井上毅氏、岩倉公の逸事を記する文中、此事あり。此に抄出して以て參考と爲す。

維新の初に神武の古に復るといふ大義を定められしは、この公の補翼の力にぞある。碩學野々口隆正氏の説に、建武中興の振はざりしは、當時の精神に其人なきに由れり。源親房卿は學識ありて、時の御覺もめてたかりしかど、その人の所見は、延喜天曆の跡に復るにありて、神武の古に復る事を知らず。さてこそ、公家武家の間に隙を生ぜしなれといへり。徳川氏の大政を返上せし際には、公は謡を蒙りて、久しき間、藤倉村に盤居し、天日をも見給はざりしが、俄かに召によりて、夜中參内したまひけり。此折、公は一の大囊を携へて、宮門に入り

「神祇官本義」

備前國に至り神道を匡正す

「當世要話」

學統

家訓

たまひしが、囊中の文書は、皆公の盤居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起卓せしめられたる。復古經綸の策案なりき。玉松操は、一の偉丈夫なりき。平生聲色を近けず。酒肉を嗜まず。書を讀むを樂とし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶、公に知られて、盤居の一室を貸し與へられ、起居を俱にし、畫策する所ありしめらる。公は、玉松の功を推して、おのれの初年の事業は、皆彼の力なりとまで、のたまへり。云々。

同十二月廿五日、神祇官本義を著して、議定職、總大寺中納言(實則)に呈す。是より先、朝議神祇官再興を決せらる。中納言之が總裁たるべきの内勅あり。是を以て、密に旨を告げ、所見を問はる。なり。尋て、神祇事務局を置き、神祇官を再興せらる。蓋し、翁の考案に基くなり。明治元年戊辰三月四日、徵士内國事務局權列事の命を拜す。十二日、神祇事務局權列事に遷る。翌月、老年にして劇務に堪へざるの故を以て、職を辭す。官其請を允し、時に神祇局の諮問に與らしむ。同二年己巳八月、東京に至る。是年、神道家、黒住宗篤の延請に應じ、備前國に至りて、其教法を匡正す。同三年庚午岡山藩大參事伊木長門の招きに應じ、往いて八神殿の義を、其藩廳に講ず。十月朔、當世要話を著し、副ふるに、自書、勤節志の三大字、及、詠歌二首を以てし、之を宮内省に獻ず。越えて八日、羽二重一匹、眞綿一屯を賜ひて之を賞せらる。十二日、宣教師御用掛と爲る。同四年辛未五月、津和野藩制を更め、米二十石を給す。六月、津和野藩を廢し、濱田縣に合併せらる。因て濱田縣貫屬士族と爲る。八月十日、病を以て東京外櫻田、舊津和野藩邸に歿す。享年八十。其明日、赤坂靈南坂陽泉寺城内に葬る。翁、容貌温雅、端正にして、資性寛厚、沈實なり。其學、管公の倭魂、一條禪閣の神理を本とし、木居、平田の二家を禪脱して、別に一機軸を出す。博聞強記、概ね書として窺はざるは無く、其繙閱の狀、所謂五行並び下るの概あり。又書を著すに當てや、別に稿を起さず。筆を操れば、文章立るに成る。或人怪みて其故を問ふ。翁、笑て之に答へて曰く、文は事に隨ひて自ら成る。唯、其一篇の立意を思案するに、多少の時日を費すのみと。翁常に、門人に授くるに、忠孝の大義を以てし、敬神愛國の志操を涵養し、隱然皇室の式微を慨き、大政復古を首唱す。家訓あり。其文に曰く、忠とは、君を思ふまこと、孝とは、父母を思ふまこと、義とは、筋道を分るまこと、敬とは、身なたも



肖像

門人尊氏の木像を鼻す

門人京師を守護す

著書

つまこと、まことを經とし、相扶くるを緯とす、本につくまことは、支那にていふ忠孝貞これなり。相助くるまことは、家内相助け、一村内同職相助け、日本國中相助け、然る後には、万國をも相助くべし。

人は、よろづ欲しと思ふ心あるにより、おのれを屈して人の爲になるなり。生業を勤むるを欲しと思ふ心なくては、勤めがたかるべし。其生業といふもの、皆相助け、相救ふ道に叶ふ仕業にてあるなれば、欲しと思ふ心ばかり、世にめてたきものはあらじと思ふなり。

翁、また嘗て、男、基正をして、肖像を畫かしめ、自ら之に賛して曰く、

をしへおく、道のさかえを、末とほく、しにてもしなぬ、よにありてみん。

幕府の末造、憂國の志士四方に起りて、尊皇攘夷を唱道するの時に當り、門人師岡節齋、正胤、長尾部三郎(武雄)の徒、足利將軍三代、木像の首を抜きて、之を三條壇に鼻す。其爲る所、曠る粗暴過激に涉ると雖も、幕府の借横不臣を責め、其反省を諷するの意に出で、亦以て士氣を鼓舞するの功なしと爲さず。又、文久壬戌初夏、薩長二藩、京師護衛の命あるに當り、津和野藩石河金左衛門正養、福羽文三郎(今の子爵福羽美静氏なり)、森岡新五右衛門(幸夫)大谷庄三郎(秀實)加藤玄順(達)等、前後國事に執筆す。此五人の者、亦皆門人なり。翁は、神典の蘊奥を極め、廣く之を支那の古典に考へ、又、西洋の窮理説に徴し、概ね古人未發の説にして、自ら之を書に著し、以て後進を奨勵す。(以上宮崎幸麿氏)

- 〔慶著〕神典究理説 一
- 神代校異傳幽契談 二
- 神道受用考證 三
- 本教神理説 一
- 三道三欲昇降圖説 一
- 神代校異傳 五
- 神書要領 一
- 八神傳 二
- 上古制度考 一
- 本學舉要 二
- 神代校異傳講義 一五
- 神道四靈考附圖 一
- 幽冥備考 五
- 古傳通解 九
- 入學舉要 一

- 理學直言 三
- 古今集評註 二一
- 中三代三百首解 三
- 源氏物語評註 三
- 正誤うたことば 六
- 結辭對格 二
- 候錄 五
- 語格直言 四
- 精選要用圖 一
- みちのながうた 一
- 鼻くらべ雙紙 一
- ささはふくにぶみ 五〇〇
- 〔編者補〕神字箋 一
- 言葉寄 二
- 話語活法活理抄 四
- 歌學入門 一
- 三代三百首解 三
- 歌日記 三
- 在五中將日記復古解 四
- 詞のまさみち 五
- 合語格 三
- 語釋直言 四
- 音圖神解 二
- 倫常真義 二
- 兼好法師傳考證 三
- 如意園雜記 一
- 玉也集 一
- 學運論 三
- 神字小考 一
- 萬葉長歌百首解 二
- 二代二百首解 三
- 冠辭考附説 三
- 自歌合 一
- 通略延約辨 一
- あかそこ對格 一
- 人爲天然分合對格 二
- 掌中用語説 二
- 憐取者 二
- 筆のゆくへ 一
- 古今雜談集 五
- 神理入門用語訣 二
- 天地神人名考 一



### 井上文雄

生歿 二四六〇、光格 寛政一二年、  
二五三一、今上、明治四年一一、一八、  
三七一、

居住 江戸、園江下谷中善光寺坂、玉林寺、

學姓名 元真、家號歌堂、又柯堂、  
文雄院歌先妙道居士、

岸本由豆流  
一柳千古  
—文雄

(以上、古學、下)

家集を愛読す  
景樹以後の歌人  
雜載

〔古學下〕 田安藩ノ侍醫ナリ。四十五少ヨリ和歌ヲ好マレ、初、岸本由豆流ニ學ビ、後、一柳千古ヲ師トシ、皇國ノ學ヲモイソシマレケリ。其ウチ和歌ニ最モ長ゼラレタリ。常ニ古人ノ家集ヲ愛ラレケリ。ソハ撰集ノ類ハ、撰者等所好ノ風ノミヲ取り、作者ノ眞面目ヲ失ヘバ、善惡トモ、家集ヲ讀ムニ如クハナシトナリ。又新古今集以前、寛治比ノ歌ノ常語ヲ、ミヤビニ甘ク取り回セル姿ヲ、好マレケリ。趣ハ替レドモ、景樹以後ノ歌口ナリト、人々取りハヤシケリ。文雄少カリシ時、任俠ノ風アリテ、然諾ヲ重ンジ。人ノ困難ヲ解クヲ以テ任トセリ。

〔同上〕 翁平生得意ノ歌數多アル中ニ、「いかならん、たえて櫻の、なしと聞く、唐土人の、春の心は、」

得意の詠

〔空言を、昔しの人には、いはざりき、誠に月は、今宵なりけり、杯最モ人口ニ膾炙セリ。又謡歌新聞ト云、草野御牧ガ著セル書ニ、文雄ノ歌ヲ載セテ、「行末の、頼みも今は、なかりけり、君が千代田を、人にかられて、」徳川の、濁りそとぐと、逢津川、潔き名を、世に流しけり、此歌ノコトニ付、一旦官ヨリ御不審ヲ蒙リシカド、幾程モ無クハレタリトソ。又「道ノサキハセト」云書ヲ著セリ。翁平生ノ志、此書ニ見エタリ。

著書

〔慶著和〕大和物語新註	五	冠註大和物語	三	大井川御幸考證	一
古今集序考	一	八代集評論	二	和學辨	一
續靈語通	二	詞林栞	一二	假字一新	一
名乗字引	一	名字彙	一	思草	一
サキハヒ草	二	道のサキハヒ	二	伊勢の家裏	二
摘英集	三	調鶴集	三	和字法帖	一
歌堂初學抄	二	歌堂隨筆	二	柯堂枕談	三
柯堂叢考		文雄翁家集			

### 間宮永好

生歿 二四六五、光格 文化二年、  
二五三二、今上、明治五年正三、  
三六八、

居住地 水戸、居住 東京、園谷中玉林寺、

井上文雄 間宮永好



### 井上文雄

生 歿 住 所 姓 名 學 統

生 二四六〇、光 格 寛政一二年、  
歿 二五三一、今 上、明治四年一、一八、  
住 居 江戶、  
姓 元真、  
學 岸本由豆流、  
統 一柳千古、

(以上、古學、下)

家集を愛読す  
景樹以後の歌  
人  
雜 載

〔古學下〕 田安藩ノ侍醫ナリ。少ヨリ和歌ヲ好マレ、初、岸本由豆流ニ學ビ、後、一柳千古ヲ師トシ、皇國ノ學ヲモイソシマレケリ。其ウチ和歌ニ最モ長ゼラレタリ。常ニ古人ノ家集ヲ愛ラレケリ。ソハ撰集ノ類ハ、撰者等所好ノ風ノミヲ取り、作者ノ眞面目ヲ失ヘバ、善惡トモ、家集ヲ讀ムニ如クハナシトナリ。又新古今集以前、寛治比ノ歌ノ常語ヲ、ミヤビニ甘ク取り回セル姿ヲ、好マレケリ。趣ハ替レドモ、景樹以後ノ歌口ナリト、人々取りハヤシケリ。文雄少カリシ時、任俠ノ風アリテ、然諾ヲ重ンジ。人ノ困難ヲ解クヲ以テ任トセリ。  
〔同上〕 翁平生得意ノ歌數多アル中ニ、「いかならん、たえて櫻の、なしと聞く、唐土人の、春の心は、

得意の詠

著 書

〔慶著和〕大和物語新註 五 冠註大和物語 三 大井川御幸考證 一  
古今集序考 一 八代集評論 二 和學辨 一  
續靈語通 二 詞林彙 一二 假字一新 一  
名乗字引 一 名字彙 一 思草 一  
サキハヒ草 二 道のサキハヒ 二 伊勢の家裏 二  
摘英集 三 調鶴集 三 和字法帖 一  
歌堂初學抄 二 歌堂隨筆 二 柯堂枕談 三  
柯堂叢考 文雄翁家集

### 間宮永好

生 歿 住 所

生 二四六五、光 格 文化二年、  
歿 二五三二、今 上、明治五年正三、  
住 生地 水戸、  
居 東京、  
園 谷中玉林寺、

井上文雄 間宮永好



姓名

通稱 一郎、又又左衛門 松の屋

(以上、忌辰、下)

小山田與清——永好

〔忌辰下〕和歌に長じ、筆札に妙を得たり。妻八十子と共に、其名大に掲る。明治の初年、神祇大史に任ぜらる。

著書

〔慶著和〕萬葉長歌部類 四

萬葉類語 五

萬葉地名抄

古今集新注 二

百人一首新注

和歌色葉集 七

日本紀竟宴歌 一

八洲文藻

八代集類語

掌中和歌年中行事 一

古今年中行事歌合三

自讚歌集

松蔭集

松屋歌集

箱根溫泉誌

參考歲時記 五

參考歲時記拾遺

今古讀法 一

品さだめ注 二

重行子の僧の集 一

編年菅公傳 一

神野山日記 二

職原鈔新注

### 平田延胤

生歿

生 二四八八、仁孝、文政一一年九、一三、

歿 二五三二、今上、明治五年正、二四、 四四五、

住所

東京、淺草橋場總泉寺、

(以上、忌辰、下)

性名

通稱 延麿 後延太郎

系圖

平田篤胤の系圖(一一一二頁)を見よ。

學統

(國學)平田 鏡胤——延胤

經歷

(兵學)山國兵部共昌——延胤

經歴

明治の初年、宣教判官に進み、御侍講となる。父、鏡胤に先ちて歿す。(以上、國學家略傳)

### 玉松操

生歿

生 二四七〇、光格、文政七年、

歿 二五三二、今上、明治五年二、一五、 四六三、

住所

京都、洛東靈山、

(以上、碑銘)

總叙

王政復古に當り獻替す

〔維新史料〕當國家非常之日。魁偉奇特之士。投袂而起。功名赫赫。射致顯榮者。不爲少矣。其運籌帷幄。運籌帷幄之間。參畫大言。而功成之後。超然遁世而不悔者。余見一人矣。玉松操。少爲醍醐寺僧。號猶海。以嚴正爲儔輩所忌。蓄髮改姓名。歸跡江湖。爲人慷慨尙氣節。當德川氏之末。傷王室式微。密圖恢復。東西奔馳。結交豪傑之士。或薦之岩倉公。時公爲時論所中。屏居北山。一見大奇之。引爲腹心。操披心輔翼。知莫不。大權復正。公首發大議。而操每參其帷幄。當是時。外內事務繁集。制詰文移。紛錯如織。操授筆立成。一日草數百言。無有稽失。復正之第三日。操進言曰。國家之患。未有甚於內謁賄賂者。覆轍可鑑。今也當大政反正之初。宜痛絕之。以杜禍原。因引建武之事爲證。朝廷深納之。於是丁卯十二月。有戒女謁之諭。戊辰正月。有禁賄賂請託之諭。宮廷疎然。迨今內謁苞苴。絕蹤清世者。雖由聖明之盛德。抑亦操之議。與而有云。明治二年正月。賞換參贊功。班堂上。任大學頭。賜錄位超等。然操快々不懼。有勇退之志。蓋



屏居して又時事を語らず

操初心端在外攘。而不<sub>レ</sub>是開港之議。見<sub>二</sub>朝議<sub>一</sub>。時一變。外交日密。乃歎曰。吁。為<sub>二</sub>英雄<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>售矣。自<sub>レ</sub>是罷<sub>レ</sub>官。家居。杜<sub>レ</sub>門謝<sub>レ</sub>客。不<sub>レ</sub>復言<sub>二</sub>時事<sub>一</sub>。無<sub>レ</sub>幾獲<sub>レ</sub>病而卒。操性寡欲。身生子<sub>二</sub>精神之家<sub>一</sub>。深惡<sub>二</sub>執務之風<sub>一</sub>。布衣蔬食。室無<sub>レ</sub>妾。夙講<sub>二</sub>佛乘<sub>一</sub>。去<sub>レ</sub>而讀<sub>二</sub>儒書<sub>一</sub>。博覽強記。旁通<sub>二</sub>天文算數<sub>一</sub>。而志在<sub>二</sub>濟世<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>屑<sub>二</sub>著<sub>レ</sub>書傳<sub>一</sub>名。平生所作之文。不<sub>レ</sub>留<sub>二</sub>其稿<sub>一</sub>。辭官之後。四壁蕭然。環<sub>二</sub>屏障<sub>一</sub>。讀<sub>二</sub>書其中<sub>一</sub>。如<sub>二</sub>樂以自忘者<sub>一</sub>。由是而言。豈所謂奇特之士。致力<sub>二</sub>于冥々<sub>一</sub>。邇<sub>レ</sub>世而不<sub>レ</sub>悔者非耶。余恐其湮沒。無<sub>レ</sub>聞<sub>二</sub>于後<sub>一</sub>。哀而傳<sub>レ</sub>之。

### 伊庭秀賢

生歿 住所 姓名 系圖 學統 著書

生 二四六〇、光格、寛政一二、  
歿 二五三二、今上、明治五年六、二八、<sub>三</sub>七三、  
生地 江戸、園淺草松葉町貞源寺、  
本姓 築山氏、養姓 伊庭氏、<sub>三</sub>通稱<sub>一</sub> 久右衛門、<sub>三</sub>初秀形、後秀賢、<sub>三</sub>號詞林園、  
舊幕ノ士、築山某ノ三子ニシテ、伊庭某ニ養ハル。  
村山素行——秀賢——鈴木重嶺  
小保景徳  
〔慶著<sub>和</sub>〕靈語指掌

靈語天格

四

武家位署式考

(以上、國學家略傳)

### 今尾清香

生歿 姓名 學統

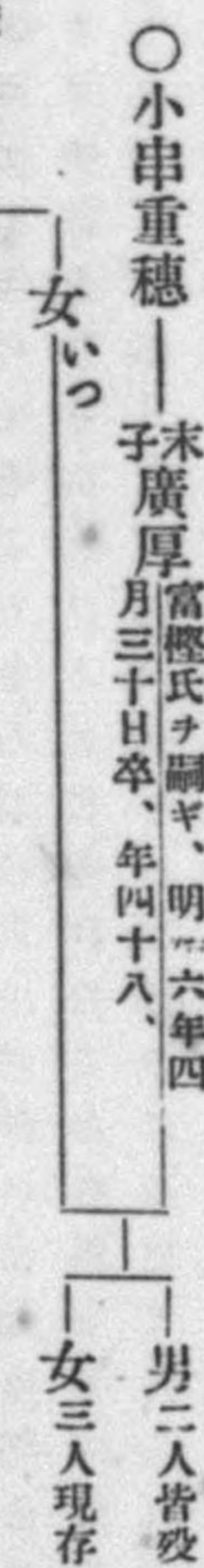
生 二四六五、光格、文化二年五、二八、  
歿 二五三三、今上、明治六年四、<sub>三</sub>六九、  
姓 古志氏、養家 今尾氏、<sub>三</sub>通稱<sub>一</sub> 逸平、<sub>三</sub>號瞿麥園、  
橘守部門<sub>醫祐庵ノ子ニシテ、</sub>  
下野足利ニ生ル、

(以上、日本人名辭書)

### 鬼島廣蔭

生歿 住所

生 二四五三、光格、寛政五年、  
歿 二五三三、今上、明治六年八、二四、<sub>三</sub>八一、  
生地 紀伊國和歌山<sub>木綿屋</sub>、<sub>三</sub>同居<sub>一</sub> 同上、伊勢松坂桑名、



(以上國學院雜誌、六、七)

系圖 總叙

〔編者補〕○鬼島孝廣——養廣蔭——  
廣陸長子歿  
廣就<sub>次子歿、鬼島氏ヲ嗣</sub>  
桑名ニ現存ス、  
〔國學院雜誌<sub>六、七</sub>〕廣蔭の家族並に修養時代

伊庭秀賢 今尾清香 鬼島廣蔭



木綿問屋の素町人

葉草履

冷水を燈火に暖めて勉學す

廣陸の如きも、其源を洗へば、紀州和歌山の木綿問屋に生れたる素町人なり。彼れ如何に天稟の才を振ふと雖ども、手を束れて、何ぞ能く短日月中に、國文語學の闡典を究むる事を得んや。されば五年たらずの中に、廣陸が、この位置にまで上りたるは、必ずや、之れにともなふべき、刻苦勉勵の裏面に最大要素を形成しつゝあるべきは、何人も疑ひを容れざる處なり。始め廣陸、藤垣内より移りて、鈴屋の門に遊ぶや。大平翁のもとより春庭翁の許に、故翁の供物の料として、年頃贈られけるを、故ありて、春庭翁より受けまじき由いひことわられたるを食料として、松坂に赴きたるも、其食料とて、始めの程こそ滞りなかりしも、其の久しきを經るに及びては、これとて十分ならざりしのみならず、一度、大平翁の嗣子たるを辭せし後の廣陸は、實に身を寄せて、己が研究の資を仰ぐ途なきに至りたり。然れども、彼が學事に熱中したる結果は、是等の些々たる事情に束縛せらるゝ事なく、眞箇に、其研究をつゞけたるは、左の逸話によりても、優に、確めらるゝ處ならずや。

廣陸、春庭の塾に通學するや、冬は一裘、夏は一褐、粗食に甘んじたるは、勿論なれど、彼が日頃穿ちたるは、最も粗造なる葉草履にして、頗る見苦るしき品なりしかば、春庭之を憐み、廣陸に與ふるに、一つの麻裏草履を以てせり。廣陸、其の志を謝し、爾後通學する途中は、舊來の葉草履を穿ち、其の門に至るに及び、師翁の賜物たる、麻裏草履にぬぎかへて、使用したれば、文政十一年、春庭の歿する迄、依然として、其の形を存して、穿用せられつゝありしとかや。此事たる些末の事實たるに過ぎざるも、亦以て廣陸の性質を洞察するに足るべきか。然して次の逸話は、一層、吾人の注意をひくに足るべき者にしあれば、序ながらに、掲げて讀者の聽官を驚かさんとす。春庭翁の門弟に、教鞭を取りし、大方晝間に、夜間は門弟各自の各個研究時間たり。廣陸、鈴屋の門に遊びしより、夜間机前に置ける行燈の上に、常に藥罐をつるし、之に冷水を充し下に燃ゆる燈火の熱によりて、上なる藥罐の冷水が、適當の溫度に達し、飲料に適する程あたゝまるまで、うますたゆまざ、勉勵して、遂に其のわれとわが規定せる掟にそむかず。其の冷水の熱する以前には、決して樽に入る事なく、往々、鷄鳴に驚かされて、眠につきし事、尠からざりしといふ。これ等の逸話は、我が父の常に語られ、且つは親しく廣陸の門に遊びたる故老より、余が幼時聞き及びたるものなり。

母の看病

淡路に後進者を導く

重胤廣陸の稿を盗みて出版す

詞の通路を校正す

母の病を看んとて故郷に歸る

母に永訣す

春庭病歿

此に於て、廣陸の門弟も、漸次其の數を増し、春庭翁の門弟中、錚々たる者として、當時人の尊敬を受くるに至り。然るに安政八年、同じき九年の間に、和歌山なる實母の重き病に煩ひたるを以て、茲に再び松坂を辭して、なつかしの故郷なる、和歌山に還りて、母の看病に又餘念なかりき。然るに幸にして、母の病の快方に趣きたるより、船路ちかき淡路島に渡り、こゝに同志を募りて、後進者を導きたるが、當時廣陸が専ら教導したるは、「詞八衢捷徑」と稱する者にて、後にものしたる「詞の玉橋」の巻の原本なり。然るに其の門に入り來りたる、山口敏樹といふ者あり。廣陸に乞ひて、「詞八衢捷徑」を借寫したるが、これ廣陸が日頃焦心して考へ出てたる己が説を、はしなく、他のえせ學者に盜奪せられし始めにして、同じく淡路の人なりといふ、鈴木重胤は、弘化二年に至り、此の山口敏樹の書寫本を得て、私に喜び、之に己が著なる由を署名し、其の書の名さへもとのまま、「詞八衢捷徑」と稱して、出版するに至りたり。兎角する程に、母君の病、全く癒えたれば、安政十年、春、又松坂に出て、當時春庭翁が著述せる「詞の通路」といふ書の草稿を取出て、之を校正せよと、春庭翁が命じけるまゝに、鈴屋に在りて、専ら、之が校正に従事し、之をして、殆んど餘蘊なからしめ、翌十一年の秋に至りて、遂に上梓するに達せしめたり。余が第一章に掲げたる春庭、廣陸贈答の歌は、實に此の頃に詠出せられたる者にして、斯道のため、僊ます屈せず、一途に我が國文語法を天下に公にせんと勉めたる勇氣の、藁々として詠上にあふるゝをうかゞふなり。然して廣陸が、「八衢醜男」の異名を負ひたるも、亦當時の出來事なりといふ。「詞の通路」の校正を成し終るや、廣陸は安政十一年の九月より、美濃國大垣に赴き、この地方の有志を導く事に勉めけるが、會、和歌山なる母君の病急なりとの報を得て、即日、大垣を辭し、末過ぐる頃より、海陸二十五里の路程を急ぎて、翌日の夕暮には、はやくも松坂に着したれば、春庭翁に暇を告げて、和歌山に向はんとせしが、春庭しきりに別離を惜みて、放つ事をせず。此に於て、止むなく、丑過ぐる頃まで、鈴屋に止まりて、道を談じけるが、かくてあるべきに非ざれば、駕籠に乗じ、晝夜を分かたず、若山に歸りたるが、憐むべし、最愛の慈母は、既に黃泉の客となりて、あはれや呼べど答へなし。自から深く、遠きに、翁俄に、かくれ玉ひぬ。と告げたれば、廣陸の悲歎例ふるに者なく、歎きに歎きをかされて、こと



宣長と春庭

本居有郷の後見

桑名に移りて妻を迎ふ

しは、わが一生のうき事を一つに集めたる秋なるべしと、くどげらも宜なる事といふべきなり。廣隆三歳にして父を失ひ、爾來親愛極りなき母の手一つに養育せられたるが、今其の慈母と別れし事の憂愁、やる方なきに折も折とて、教導の恩、限りなき春庭翁を失ひたる當時の心情思ひ遣るだに露けき秋といふべきなり。

春庭、父宣長の志を継ぎ、身は盲目の不自由を顧みず、刻苦して日夜、國文語學の研究に思を焦したるが、その研究のあがれる者は、實に千古未發の說にして、永く後世の語學界を裨益せるは、既にいふ處ありしが如し。これを父宣長に比せんか、宣長は頗る多方面の人にして、其の學術の範圍面積は、實に廣大なりといはざるべからず。此の點に於ては、宣長以前に宣長なし。宣長以後に宣長なしとも賞讃すべく、優に國學界の泰斗と仰がるべきの價値ありと雖、其の短所を指定せば、宣長の學は、其の面積の廣きだけ、比較的深遠ならざりしにあり。春庭は宣長翁に比すれば、學問の範圍は、頗る狭小なりといはざるべからざるも、其の研究は、決して宣長の如き淺薄なる者に非ず。蓋、宣長時代にありては、國學者といへば、神典より、歌學より、言語文法の研究まで、殘らず一人にて、遣らねばならぬといふ、八百屋的時代なりしが、子の春庭時代に至りては、國學界も大に發達して、其面目を改め、分業的に専門家を輩出するに至りたるも、これ時勢の學者に與へし影響にして、宣長春庭個人の得失にあらざるは、吾人の論を俟たざるなり。

春庭翁の訃音を聞き、とる物もとりあへず、使者と俱に松坂に到りたるは、十一月の二十日なりき。こゝに家人と等しく、規定の喪に籠りけるが、嫡子有郷は未だ幼少にして、本居家の學統を繼ぐに堪へざりければ、一族等は廣隆を推して、三代の鈴屋先生とあがめ、ひたすら家名を墜さずらむと欲し、廣隆も信實に、恩師の形見なる有郷を助けて、日毎の墓詣の道すがらにさへ、教導訓諭して、せめては、なき教の親の高恩に報ぜんと勉めたるが、歳末に至り、江戸より歸れる春庭翁の弟子、某の當時廣隆に比したらんには、人望學識は、遙かに及ばざりしも、我れ有郷の後見せむといひけるが、本居家の之を辭する能はざりし事情の有りしを以て、一度本居家を出て、獨立する事とはなりぬ。

物うかりし安政十一年も、過去の闇中に入りて、明くれば、十二年の正月、松坂より桑名に移りけ

著述時代

本居兩翁の遺志をつぐ

「辭玉澤」

るが、此の地の門人等の、こゝに止まらん事を乞ふ者多かりしかば、今は母も師も、此の世におはせざるを以て、所隔つるも心安からむと、其の請を容れ、門弟の一たる、多度神社の神主、小串肥後守の氏族と成りて妻をも娶り、去年の秋の物うき事のしげく、なりけるに、ひきかへて、梅姿驚舌、皆心ちよげなる初春に際し、目出度く華燭の典を擧げたるは、廣隆が三十七歳の時なりき。

伊勢に於ける國學界の發達は、長足の進歩をなし、宣長父子の力に依りて、最も語學界に斬新の氣風を鼓吹したり。然りと雖、春庭の歿するや、其研究を繼承して、斯學の蘊奥を究むる者なく、一時、華美なりし松坂の文壇も、今や寂として、只、飄々たる秋風は、是等、絶世の二文豪の墓側に立てる、寒樹の梢を音信るゝのみなりき。此に於てか、廣隆二翁の遺志を襲ぎて、せめては、玉澤、八衢二書の要領だに、廣く江湖に唱導せむと欲したりしが、同年(文政十二年)の冬、詞八衢捷徑、詞玉澤總括、辭玉澤を出版するに至りたり。

「辭玉澤」は、其の名の負ふ如く、詞玉澤と詞八衢とを總合して、一覽の便をはかり、五十音圖、五十音分生圖、四、詞、一、詞、伊、迂、詞、衣、迂、詞、變、格、詞、音、雜、詞、并、びに、辭、動、靜、の概略を表示したるものなり。廣隆は我邦の五十音は、其の分生の當時に於ては、「あいうえお」かきくけこと今日吾人が、常に認むる位置を取りしものに非らずとして、其の五十音分生圖には、「うおあえい」、「くこかけき」以下、徹之の位置を定めたり。其の他、大林に就て、玉澤の構造をいはゞ、詞八衢の四段活を四、詞、一段活を一、詞、中、二、段活を伊、迂、詞、下、二、段活を衣、迂、詞と改稱し、并に加行、佐行等の名稱を改めて、久の音、須の音、とよばしめたり。かく翁が殊更に、是等の名目を變更したるは、何が故ぞや。蓋、春庭翁が四段、一段の名稱を附したるは、其の活用變化の四段なると、一段なると等に依りて、各命名したる所なれども、元來、詞の活用は、奈行、變格を除くの外は、未然、續詞、斷止、續、體、已、然の五段に活く者なるは、勿論なれば、之を四段、一段の活等と稱するは、其の當を得ざる者となし、時に、あいうお四、詞に變化して活用するを以て、之を四、詞の活といひ、又は、「い」一、詞に變化するは、全く五十音分生圖の變更より來りたるものにして、廣隆は五十音圖の「うくすつぬむゆ



「詞の玉橋」

るうの十音を轉置したるをもつての故といはざるべからず、此外、八衢に於ける「行段」の名稱を「音韻」とせしが如き、皆其の理由の存する處なりと雖、餘りに管々しければ、茲に詳言するを欲せざるなり。當時、此の圖面の出版に盡力したるは、翁の門弟中、美濃の人吉田利幾、足立久景、久世御言の諸氏にして、此の人々等は、更に「詞の玉橋」の出版に就て、大になす處あらんとせり。

「辭玉橋」は、動詞、形容詞、并に辭に就て、其の活用と、相互の關係を表示したる者なりと雖、多數の後進者が、直に之にのみよりて、文法學を研究せむとするは、蓋難事たるを免れず。此に於てか、少くとも、之を説明する處の文典書の必要は、彼等門弟の中に起り來れり。是、實に「詞の玉橋」の依て成りたる所以なり。蓋、玉橋といふ名の附せられし理由は、詞八衢によりて、道路は、大方、整頓に近づきたるも、未だ、河流の横たはるあらむを慮り、茲に、架橋の功を奏して、八衢の餘業を繼承せんとすの意に出でたるなり。言幸舍塊老翁著述書目録に據れば、「詞玉橋」七卷と明記せられたるも、其の寫本として、門弟に傳へられたるは、僅かに二卷に止まれり。今、其の構成の概略に就て一言せば、翁は其の開卷の冒頭に曰へらく、

詞の活用の條理は、吾が師、後鈴屋（本居春庭）翁の詞八衢に、叮嚀親切に所諭て、殘有る限も無有めれど、彼の書は、義理深幽、詞辭簡約なれば、にや、世の識者だに、分辨難げにして、此道を踏分る事の、たゞ、しげなるは、慨して、初學にても、入立易有べく、鈴屋（本居宣長）翁の辭の例格を取教たる詞玉橋を、參互て、夫に古來未發説を加て、此玉橋は、造作たるなれば、玉橋を記臆て、夫を乘に渡見ば、志貴島の道の玄妙なる境にも、迷ぬべくなむ。

と、此の一言は、文典書の端書として、短簡に過ぎたるが如き感無きに非ざるも、以て玉橋の何たるを知るに足らむ。次に、翁は、全林「ことば」を、形式上より言、詞、辭の三種に區別して、世の中にありとある人、日毎に繁き事業に就て、思ふ心を見る物、聞く物に託て、歌に詠出で、文章に書著す徒は、更なり。吾が神作の言語にて、際限なき物事を云辨て、過生涯、人たらむ者には、何業より、最先、言の深意、詞の活用、辭の例格を教て、諸蕃國とは殊勝なる、神國の言靈の、神妙なるをしらせ、遠祖神の恩頼の廣大なる片端だに、慥に信せて、眞の道を進む階梯となさせ、ま欲き者なりと、翁は本居家の學系を繼承したる丈、其丈、保守的にして、且つ當時の國學者流の通弊たる、自尊的の性質

「詞玉橋」目次

は、避くる能はざりし者の如し。然れど、其の主義の保守的なりしにも拘はらず、其の研究の類る見處あるは、却て、後世人をして、其の異常に呆然たらしむるの觀なきに非らずや。或は、辭名目起源の事を論ずるに至りては、梅井一室の「手爾遠波網引綱」の説を採用して所謂「こと」點より出でたる事を説き、幽齋の「春樹顯秘抄」並びに「歌道秘藏錄」の説に反對せる等、此の他、注目すべき條件、一々枚舉に遑あらずと雖、そは後章「語學者としての廣蔭」に於て論ずべきを以て、茲には、只其の目錄を列舉するに止めんとす。

○上卷

- 一、緒論。
  - 一、言詞辭三種の差別の事。
  - 一、言五種の差別の事。
  - 一、詞六種の差別の事。
  - 一、辭五種の差別の事、並、辭名目起原の事。
  - 一、屬詞四種の差別の事。
  - 一、屬とならざる助辭四種の事。
  - 一、屬となる動辭九種の事。
  - 一、靜辭三種の差別の事。
  - 一、未然段、已然段、差別の事、並、辭に依て願となる事、並、婆の辭、未已繫様の事。
  - 一、續詞段、已下三段差別の事。
  - 一、加々理、半、須、毘の事。
  - 一、衣、迂、韻、都、音、屬辭の事。
  - 一、變格、奴、音、屬辭の事。
  - 一、動辭將活の屬辭事、並、過現末の疑辭の事。
- 下卷
- 一、仰となる詞辭の事。



- 一、禁辭二種の差別の事。
- 一、雅語を俗語に譯す事。
- 一、俗語にて雅語をしる事。
- 一、俗語に變例ある事。
- 一、らしらじ差別の事。
- 一、まし、まじ差別の事。
- 一、し、し、せし差別の事。
- 一、さむ、せむ、さう、せう差別の事。
- 一、のが用格差別の事。
- 一、四韵詞古き一格の事。
- 一、一韵詞古き一格の事。
- 一、言にて止むる歌の事。
- 一、兼用にて結ぶ歌の事。
- 一、と、かし、かけさまの事。
- 一、仰に變例ある事。

等にして、目錄に七卷とあるにも拘らず、今日に存するは、只二卷なるより考ふるに、廣隆の企圖は、七卷を以て完成せしめむとしたるも、未だ其の成功を見ずして、不歸の客となりし者の如く、該書中「後にいふべし」といふ事の、絶えて後章に於て見る事を得ざるは、蓋之が爲なるべし。此の二卷だに、出版の擧を見るに至らざりしは、吾人の最も遺憾とする處なり。是等の語學文法を始めとして、國學の神髓を以て、後進者を益する事、茲に日あり。遠近の志士、風を慕ひて、集る者多く、尾張名古屋には、殊更に出張所を設けて、附近の子弟を教導したるが、出講にのみ役せられて、桑名に在る事の、極めて尠少なるに至りしかば、此の地の子弟は一策を案じ、以て廣隆をして、桑名に定住せざるべからざらしむるの擧に出たり。

鬼島家か嗣ぐ

廣厚をして富樫家を嗣がしむ

叙任

著書を献す

「千百人一首」

桑名城下、總ての産土神と齋祭られて、世に三崎春日社と稱する、延喜式内、桑名神社、中臣神社の禰宜職にて、外に式内、額田神社その他、式外十社の神主を兼ねたる、鬼島と稱する舊家は、其の鼻祖を織部といひ、弘治二年に生れ、元和三年に歿せしが、此の年間に、同姓、鬼島より分家して、初代となり、累世、上記の神職として、奉仕し來り、十代藤原孝廣に至れり。然るに、孝廣、不幸にして嗣子なく、爲めに、一家廢絶せんとしたりしが、適門人等の勸に依り、廣隆、其の家名を繼ぎて、十一代の世嗣となりぬ。之より先、廣隆の室いよは、吉田氏にして、長女いづを生みたりしが、曩に廣隆が入りて氏族となりし、多度神社の神職、小串重穂の末男、廣厚に之を妻し、富樫家を繼承せしめ、自ら長子廣隆と俱に、彼の家に移り、鬼島倭と改稱して、専ら桑名附近の門弟を導く事に努め、兼れて神職を奉仕する事、茲に年あり、屢々奇瑞の事有りしを以て、安政二年七月三日、都に登り、鷹司關白殿下の執奏に依りて、同月の八日、申文奉りしが、同じき十日、從五位下土佐守に叙任の勅許を蒙りて、同十二日は、悅申に參内せしとぞ。當時地方人にして、かく速に事の成りしは、蓋、稀有の例といはざるべからず。時に廣隆

たかしとも、高きしるべに、位山、ふもとのみちも、なづまさりけり。

と聞え上げしが、關白殿下よりも、種々の賜物等の有りしかば、

から衣、袂ゆたかに、たてりとも、このうれしきを、つゝみ得めやは。

と喜悅の辭賦を呈し、合せて、自詠の類題歌集二卷、六帖題詠一卷(此は後に歌人としての廣隆といふ章に於て紹介すべし)並に、門人中の類題、千百人一首二卷を添へ、紫雲棚引く九重の奥に奉りぬ。然して廣隆の叙位といひ、彼等一門の諷詠が大宮人の手にもては、やされし榮譽は如何なりしか、乞ふ當時の記録に徴して、いふ處あらしめよ。

(上畧)又先に、自詠の類題歌集二卷、六帖題詠一卷に、教子の中にて、歌よむ人だち、千百人一首といふ類題二卷添へて、奉りけるを御覽じて、自の歌どもの愛らしきは更なり、此千百人一首は、一人に一首づゝにて、かく四時戀雜の題を揃て列れたるは、いか許りの歌の中より撰出づるにかと、尋ねさせ給ひければ、年比添削しつる、三十七萬餘首の中にて、その程々に、さもおもほゆるを、抄出おける三萬七千餘首の中より撰出つる由、申けるを見聞愛させ給て、執奏の氏



鳥丸光政卿の序文

人に、かゝる者の出来つるは、當家の面目とも思はし召させらるゝ由、兵部權大輔俊儒の朝臣以て、別ての仰言なり坐つる、學の親の面目は更なり。その千百人に加はれる教子の已等さへの面起しにて、いとく、忝く、有難きことにこそ……

職を子廣睦に譲る

既にして、廣睦職を子廣睦に譲り、自からは塊老翁と呼ばれて、富樫の家に移住し、女婿廣厚と共に、専ら斯道の普及に勉めたるが、廣睦が三十七歳より、六十五歳神職を辭するに至る迄、殆んど三十年間は、著述時代として、最も斯道に貢献する處ありたる時期といはざるべからず。

其晩年 熱海に遊ぶ

翁の晩年の生活も、精しく知るに由なし。されど、安政の末年、駿河に來り、和田宣和氏の家に止り、次ぎて伊豆熱海に遊びて、此處に殆ど一年の星霜を送りたるは、事實の明らかなる所なり。翁の熱海にあるや、和田氏に報いんが爲め、古事記正傳の著に染指せりと雖ども、駿豆の有志、説を聽

伊勢に歸る 嗣子廣厚卒す 翁の逝去 生家井出氏 著書

かんとして、門を叩く者多く、翁も亦斯道の講演を以て、唯一の娯樂としたるを以ての故に、遂に古事記正傳の著述に疎ならしめたるは、吾人の最も憾む所なり、言靈顯論も、亦當時の著述たり、次で翁の伊勢に歸りし頃は、討幕攘夷の論、近畿に囂然たりしを以て、世論頗る高く又學事に顧慮する者なし。此の門に於ける翁の消息は、如何なりしか、遂に知る能はず。明治六年四月三十日、嗣子廣厚卒す。歳四十八、二男五女あり。男は皆死し、女三人、今に生存すといふ。廣厚、翁の志を襲ぎ、常に翁の膝下にありて、言幸遇舎の業は、大方其の便する處なりしのみならず、學識頗る深く、大に望の存すべき所ありしも、遂に此壯年を以て逝けり。翁の落膽又懐ふべきなり。翁も亦其後を追ひて、同六年八月二十四日、遠逝す。歳八十一。壽なりといふべし。著述數十、生前の開版、僅に、詞玉禪、千百人一首二卷あるに過ぎず。惜哉、著書の多くは、今日其存在を知らるべからず。翁の次子(?) 廣就、鬼島家を嗣ぎて、今猶、桑名にあり。翁死して後四年、翁の出たる紀伊和歌山の井出家、他人の保證に失して、没落し、又た、すといふ。

〔同上〕 古事記正傳	五	古事記音義解	二〇	日本書紀私考	五
古語拾遺往存鈔	三	祝詞式撮要解	三	大祓詞音義解	二
萬葉集譯解	二〇	萬葉集類句	六	萬葉集類辭解	一〇
記紀歌類辭解	二	職原鈔部語要解	五	唐朝百官職掌圖解	大折本
神家至要祝詞案	二	民家祭神要略	一	詞解衣	五
類言詳解	三	類詞詳解	五	古今集遠鏡霧拂	三
古今集正正義	二	古今和歌集紀氏直傳解	三〇	八代集類辭解	五
百人一首活用解	二	土佐日記譯解	二	源氏物語大意鈔	五
源氏物語類語詳解	一〇	伊勢物語譯註	三	詞玉緒解纏	三

鬼島廣蔭



玉霞さめてのすさび	二	詞八衢蹈分	一
辭玉禮(再板一枚摺)	一	詞玉橋	七
五十音義	二	言靈幽顯論	五
韻鏡皇國用法	五	韻鏡捷見	一
字音假字格追考	一	言幸舍歌集初編	三
檉若葉二編	五	千人一首	二
三帖和讚活用解	三	塊老翁隨筆初編	三
		詞通路奥棗	三
		五十音分生順次圖	一枚摺
		神國音韵考	二
		韻鏡索字要訣折本	一
		檉若葉初編	二
		論語倭解	五
		(以上全篇、三浦雙鯉氏)	

### 八田知紀

生 歿

叙 總

藏役仰付らる  
桂門に入る

生 二四五九、光 格 寛政一一年九、一五、  
 歿 二五三三、今 上、明治六年九、二、  
 〔目醒<sup>四七</sup>〕 知紀は薩摩の藩士なり。幼名は彦太郎、後に喜左衛門と稱す。號を桃岡といふ。寛政十一年九月十五日、鹿兒嶋西田村に生る。(一代略記)  
 文政八年八月、京都藩邸藏役仰付られ、十日始めて京都へ上りぬ。  
 京都藩邸藏役被仰付……歌學執心の癖有之、類に上京の願心おこり、右通り及候。(一代略記)  
 天保元年十一月十六日、香川景樹の門に入りて、和歌を學ぶ。(桂園入門名簿)  
 これより前、知紀は、景樹と相識りたれども、離ることなどありて、入門はこの時迄、果たさざりしなり。

官歴

病歿

一族

貴賤通交帳(自筆)に  
 一、香川景樹先生  
 右文政九年戊戌、始めて、岡崎東鳩亭を訪ひ致相見候。  
 一代略記に  
 全(天保元年八月、香川家へ入門の事。尤、山田一郎左衛門(清安)殿、上京候より、書翰を以て相願候。先年拙者在京の時までは、景樹翁に、折々相見候までにて、入門の儀不相果候處、此節、彌々感服候譯有之、初て入門に及候事(清安)都に上りつきて、入門の手續を終りしは、名簿へ記載の日時なり。)  
 安政六年正月十五日、御廣敷番頭となり、慶應元年九月五日、御廣敷御用人に轉じ(一代略記)近衛家裏方(夏姫、後に光蘭院)に仕ふ。  
 しのぶ草、第三編に、  
 近衛殿の御うちの君につかへける時……  
 明治五年四月、宮内省八等出仕に補せられ、歌道御用掛を命ぜらる。全十月十三日、七等出仕に補せらる。全六年九月二日、東京にて歿す。祭料壹萬疋を賜はる(或人の日記)  
 享年七十五。墓は芝伊皿子大圓寺にあり。  
 父母妻子兄弟。父は善助、母は前田氏、知紀は其長子なり。父の歿年は明ならざれども、早世しぬとおぼし。母は天保十四年、鹿兒嶋にて歿りぬ。  
 「九月九日、たかきにも、えのぼらて、思ふ事ありてかける文」といへる中に、  
 老いたる母君、みやまひさへ、起りて、夜ひる苦しみ給ふ息の下にも、たゞおのが歸らん事をのみ、宣ひつゝ、吹風のたよりごとに、百千秋のなど、いひおこせ給ふ……天保十二年、錦のみたちにしてしるす。知紀。  
 しのぶ草、第二編に、  
 都の任にありしほど、七月ばかり、母君の身まかり給ひ、  
 しのぶ草、第三編に、



後妻加治木氏  
子女

門人

歌詠  
雜載

十七回忌(景樹)追悼、云々、  
その次に、  
同じ年母君の十七回忌に、……  
とあり。されば、母の歿年は、景樹と全じく、天保十四年なるべし。  
弟あり。名を逸す。

母乃自の七十の賀にといへる文の中に、……  
御手ひとつにて、ふたりの子をなて給ふに、……  
初娶りしは、何氏なりけん、さだかならず。後妻は加治木氏なり。長子は善助と稱し、知親と云へり。  
次子は幸輔と稱し、知義と呼べり。知義は戊辰の役に戦死す。

忍ぶ草、第二編に、  
戊辰の時のみいくさに、御たてとなりて、身をすて、人々のいさを、ほめ給ひ、……又、我  
子の知義も、かのなき数にいりしを悦びて、……

門人、原田豊秋、田代清秋、村山松根、澁谷國安、若松則文、田中國風、黒田清綱、高崎正風、福崎季連、  
山口利雄等をはじめ、諸國に多かりき。(以上、加藤雄吉氏)

〔柵三〕 桂園社中相集ひて、月前落葉を題にて、歌をよみけるに、  
知紀は先よみはて、暫く座を離れける後にて、熊谷直好、竊かに其詠草を取上て見れば、  
あしびきの、山の木枯、たちにけり、木の葉にくもる、ありあけの月。

とあり。直好いたく感じて、かゝる秀詠ある上はとて、自らは讀まざりしとぞ。  
西國御巡行をいはひ奉りて、  
ひさかたの、天の八重雲、ふみわけて、神代にかへる、おほみゆきかな。

こは、天孫降臨の御跡をしたひ給ふ、大御心はさらなり。神代の三陵をも、拜み給ふらんなど、おし  
はかり奉りて、ものし侍りぬ。又景行天皇、このかた、ためしなき大御幸なれば、國つ神たち、いかば  
かり悦ばせた、まふらんとおもひ、やり奉りて、  
このたびは、くにつ社の、かみくも、いづくかへん、君がみゆきを。

秀詠十首

壬申六月  
〔國光三〕 永孚(元田)そのかみ、侍講の職にありし頃、八田翁と相知る。一日、其秀詠をこひしに、直  
に十首の歌をかいて、贈られける。  
壬申六月 七十四翁 知紀

菅丞相

日の木の、こゝろをたれの、梅の花、からくれなゐに、かつ匂ひつゝ。

親房卿

さしげつる、ふみの林に、くらぶれば、よし野のおくも、端山なりけり。

楠公の大祭に手向奉れる

消てしも、玉の聲こそ、残りけれ、いくたのもりの、さみだれの露。

小楠公

二葉より、にほひける名は、樟の、くちてのちこそ、立まさりけれ。

村上義光

ひゞきにも、たればらわたを、たゞさらん、吉野のおくの、山びこの聲。

菊池武光

君がため、心づくしに、かゝやきし、弓はり月の、影のさやけさ。

爽齊

山ぶかく、折しわらびは、萬代の、道のしをりと、なりにけるかな。

黄石公、張良に一軸を授るかた

目に見えぬ、心のおくの、一まきは、つたへぬさきぞ、うけやしつらむ。

寄水祝

いくそたび、かきにごしても、澄みかへる、水や御國の、姿なるらむ。

山家月

桂折る、心もなく、すむ月の、かげしづかなる、山のおくかな。



著書

〔目醒<sup>四七</sup>〕版に上れる著書

水莖のあとをしたひて、いにしへの人の心のふかさをぞしる。(元田永孚)

都島集、二卷。門人並に親しき人々の歌を撰て、輯めたり。日向國、都の城郷の人々のを、むれと輯めつれば、かくは名づけつるなり。みやこじまは、やがて都の城郷の古稱なりとぞ。千種有功題歌。

小門の汐干、二卷。これも門人及び親しき人々の歌を撰びしもの。歌の主は皆薩人なり。この集の續編といふ書、二冊、れど、こは知紀の撰にあらず。

桃岡雜記、一卷。弘化二年稿。排儒の論どもなり。二編以下は版に上らず。天覽を賜ひしよし一代略記に見えたり。藤垣松苗序。

白雲日記、二卷。明治元年京都より始めて、江戸へものしつる往返の記なり。未だ富士山を見しことなければ、そこまでものせんの心ぐみなりしを、遂に江戸まで下りけるなり。税所敦子序。羽島春隆跋。

藤川紀行。(桂園遺芳)中に收めたり。天保八年一月、鹿兒嶋より薩摩郡なる、藤川神社境内の、梅見にもものしつる道の記なり。

吉野紀行。天保某年の八月、京都より、吉野へものしつる時の記なり。雜誌(國光)に出てたり。調の直路。(續歌學全書第十二編)に出てたり。歌のしらべをあげつらひし書なり。

調の説。(續歌學全書第十編)に收めたり。前に同じ。異本あり。

古今集正義補註論。全書の第六編に出てたり。熊谷直好が、正義の總論補註をものしつるを、評隲せしものなり。弘化二年九月稿。

三十六番歌結。雜誌(歌學)に出てたり。

未版の著書

未だ版にならざる著書

千代の古道。調の直路及び、調の説を補訂せし書なり。千家尊孫の序に、弘化三年二月とあり。

高千穂の山苞。文政四年二月、霧嶋山に登りけるをりの紀行なり。

坊津紀行。文政十三年一月、鹿兒嶋より、同じ國なる、坊の津へ遊びし時の記なり。

宇治めぐり。(年月不明)高崎正風、井上長秋、村山時村を伴ひて、宇治より、大津わたりへものしつる道の記なり。標題なきが故に、假にかくは名づけつ。

高尾紀行。元治元年九月、全じ人々と共に、高尾へ遊びしをりの記なり。

天降眞蹟考、二卷。白尾國柱(薩人)の著、鹿兒嶋藩名勝考にもとづきて、天孫降臨の地を考へし書なり。初名は、巖峯一覽とあり。平田鏡胤の序には、安政二年十一月と記るし、大館晴勝の跋には、嘉永五年十月とあり。

祓草。安政六年五月稿。六人部是香が、天降眞蹟考を難ぜしに答へつる書なり。

幽郷眞語。霧嶋山の惟談を聞書せしなり。平田篤胤の序に、天保二年夏とあり。

○都島集の前付の中に(八田知紀大人著述)とありて、左の如くしるせり。(前に掲けたるは略す)

桃園雜記第二編 近刻 全三編 同疑問辨 全

經義大意 近刻 泰伯論 菅家遺誠要文解 全

夢語 全 浮雲 全 上京日記 全

霧島紀行 全 右賢木園藏版 (以上、加藤雄吉氏)



### 吉岡信之

生歿

生 二四七三、光格、文化一〇年、

歿 二五三四、今上、明治七年六二、**目六二**、

〔**柵三**〕 千葉葛野——信之——福住正兄

學統

〔同上〕

吉岡信之翁は、予が歌の師なり。相摸國小田原の君に仕へて、世々三百四十石を食めり。通稱を儀太夫といひ、後に府生と改む。文化十年十一月に生れ、幼きより、篤學英敏のきこえあり。年十七にして、藩の學校、集成館の小幹事に擧げられ、屢擢ばれて、准小參事の官に至る。明治五年、藩の廢せられしとき、職を辭したり。翁性閑雅にして、歌學に志厚く、千葉葛野翁につきて國學を修められ、名四方にきこえ、翁の門に入るもの數百人、家を水善舎(みづのや)といひ、又、樞閣と稱す。明治六年七月二日、病て歿す。小田原城の西、板橋の常光寺に葬る。翁の師千葉氏は、初め補松有信ぬしに學び、後ち茂岳ぬしに從へりとぞ。さてこの樞閣の號は、師翁のなりしを、遺言のまゝ、家の名とせられしなりとぞ。

著書

〔同上〕 伊勢物語講義 四

實方集私記

三

假名考

一

しがらみ

一〇

(以上、福住正兄氏)

### 鹿島鶴翁 則瓊

生歿

生 二四四六、光格、天明六年、

歿 二五三四、今上、明治七年一一、二七、**目八九**、

〔**編者補**〕 天兒屋命——狹山命——則備——則峯——則峯實は春日社宮田光知の三子

〔**國學家略傳**〕 鶴翁年十九、父の後を繼ぎて大宮司となる。弘化中、從五位下に叙し、大和守に任

則峯實は春日社宮田光知の三子

鶴翁則

則孝——則文

(以上、國學家略傳)

系圖

總叙

訴訟を措辨す

致仕

從五位に叙せ

芝山持豐卿の

門

生歿

〔**國學家略傳**〕 鶴翁年十九、父の後を繼ぎて大宮司となる。弘化中、從五位下に叙し、大和守に任ぜらる。鶴翁少して、祖業を承け、一ノ宮官長となる。度量宏遠、喜怒色に形れず。時に幕府の季世にして、人情險薄、而して鹿島、健訟風をなし、動もすれば、起訴して長官を凌ぐ。幕府常に鶴翁を召して、措辨せしむ。依て江戸に往復すること、一歳、或は數次に至る。然れども、利害得失に於て、甚相計較せず。對考して命を請へば、則亦理によりて指示す。其僚屬に於ける、器を撰みて委任し、疑を容れず。故に人々力を出だし、慮を盡す。故に事常に克濟を得。在職殆六十年、郷里其德に薰じ、爭訟殆止む。安政五年致仕す。子則孝、襲きて大宮司となる。慶應元年、孫則文、祭儀を更革するを以て、罪を幕府に得て、八丈島に流さる。翁再起て大宮司たり。居ること二歳、王室中興、征東大總督有栖川親王、江戸に入る。翁即ち趨きて、大捷を賀す。時に年八十三、人皆其饗饌、健康に驚く。既にして、鶴翁を召還す。明年職を則孝に譲りて老す。鶴翁、夙に古典に涉り、尤詠歌をよくす。貧を中納言芝山持豐に執る。檢校堀保己一、僧立綱等と、贈答功送、終に其妙に造る。既に老い、讀書歌詠を以て自娛む。齡杖朝を過ぎ、而して、精神衰へざりきと云ふ。(墓表)

### 森 爲 泰

生 二四七一、光格、文化八年三、

吉岡信之 鹿島鶴翁 森爲泰



總叙

中村守臣千家尊孫に學ぶ  
〔出雲歌集〕

詠歌

著書

生歿

總叙

〔二五三五、今上、明治八年四、一六、目六五、

〔柵一四〕 爲泰(ためやす)は、出雲の人、森氏中興の祖、衛忠が六世の孫にして、文化八年二月に生る。初名は忠正、通稱は幼き時昌太郎といひ、後堀兵衛、又左馬之丞と改む。千竹園と號す。中村守臣、千家尊孫宿禰に從ひて、ものをまなび、又弓槍劍馬に秀て、出雲琴をよくす。門人二百人に餘れり。松江侯に召出されて、皇學館歌學訓導となり。出雲歌集を撰ぶべき仰を受く。明治四年三月、年六十にして、家を男永雅に譲り、朝夕歌と琴とをものす。明治八年四月十六日歿す。年六十五、墓は松江西光院にあり。爲泰嘗て石見國なる柿本神社に詣て、秀歌をよましめたまへと祈りけるに、神も至誠を感じたまひけん。  
高津のや、松のこのまに、かすむなり、おもへばとほき、春のよのつき。  
といへる歌を獲たり。

さゆりばに、波こす風の、ふかぬ日も、野鳥がさきは、あはれなりけり。  
いざわれに、なが翅かせ、あしたづの、たかゆく空に、うき世のがれん。

〔慶著和〕出雲歌集

### 大田垣蓮月

〔生〕 二四五、一、光格、寛政三年、

〔歿〕 二五三五、今上、明治八年、一二、一〇、目八五、

〔續日本歌學全書二〕 蓮月尼、祖先は山名持豊の屬下、但馬竹田の城主、大田垣土佐守古朝に出

家系

夫に別る

釘抜を以て齒を抜く

陶器を製す

東山寺院に住す

明治八年歿

著書

生歿

學統

づ。後因幡の鳥取に移りて、農となり、伴左衛門といふに至りて、其妻、名和と共に都に來り、東山の知恩院に住へたり。これ尼の父なりき。尼、寛政三年、三本木に生る。初の名は誠といふ。幼くして聰慧、和歌をよくし、又武技に通ぜり。父に男子なかりしかば、彦根の藩士、古川重二郎を養ひ、尼に娶はす。文政二年、重二郎病みて歿す。尼、子ありしかど、皆幼くて世を去りしかば、又同藩士の子、風見某の子を養ひ、古教と名づけ、己は父と共に剃髮して蓮月と號す。父は西心といへり。尼、容貌うるはしかりければ、書をおくり挑む者あり。尼、打泣きて、かゝる事聞くも、かたちにこそよるなれとて、釘抜もて自ら齒を抜とりしに、其音きし、と鳴りて、血出づる事おびだし。媒するもの、大に恐れて、のがれ去りしと云。尼、世わたるたづきにもとて、陶器を作る事を學び、陶器を製して、これに日頃よみし歌を、假初に彫りしに、文字の雅致なると、陶器の風致あるとによりて、買ふもの少なかられば、思の外に世を安く送りて、父は七十八歳にて身まかりぬ。のち東山の寺院の、あれたるに身をよせて、一鍋一椀の外、身につくる事なく、陶器を賣りて、得たる錢は、わづかに饑を凌ぐのみ。其餘は、盡く貧しきものにとらせ、身に一錢も蓄ふる事なし。又謙遜辭讓にして、人に驕る色なかりしといふ。明治八年十二月十日、やみてうせぬ。年八十五。世に菅薩尼とよべりとぞ。林鶴梁記蓮月尼時文に、其姓氏を詳にせずといひ、商家の女といひしは、傳の誤なり。(富岡鐵齋翁の談を、依田學海翁の記しおかれしものによる)

〔同上〕海士の刈藻

蓮月式部二女和歌集明治三十年刊

### 大畑春國

〔生〕 二四七八、仁孝、文政元年、

〔歿〕 二五三五、今上、明治八年、一二、一七、目五八、

野々口隆正の門人。

(以上、忌辰、上)



### 植松茂岳

生 歿 二四五四、光 格 寛政六年、  
 歿 二五三六、今 上、明治九年三、二〇、**四八四**、  
 住 所 尾張名古屋、**尾張愛知郡高田村**、  
 姓 名 **通稱** 庄右衛門 **四**茂岳 **四**豊眞菅彦根道起大人、  
 系 圖 小林和六名古屋 **二**茂岳 **一**有經  
養父 植松有信 藩士

〔日本教育史資料五〕 元名古屋藩士小林和六の二男たりしを、本居宣長の教子なる、尾張人植松忠兵衛有信が養子となり、同じく本居の門に入り、松坂にとゞまる事、年ありしかば、つひに國學に長じ、和歌に秀でたるを以て、名古屋藩主に徴されて、士籍に列せられ、慶應、明倫堂の教授に舉られたり。門人幾百人なるを知らず。平素、痛く勤王論をとなし、安政五年十一月廿六日、幕府の嫌疑に因て、幽閉を命ぜられしときの歌に、**かたぐに、わかれゆくこそ、悲けれ、ひとすぢならぬ、世中の道、其後五ヶ年を経、文久二年九年十七日、其幽閉を解かれて後も、いよゝゝ慷慨のこゝろ深く、國事に心を焦せり。維新の際、國事に盡力のよしをもて、藩主より賞典、若干を分與せられ、又大講義に補せられ、力を教導に盡せり。**

〔同上〕 天説辯 一

〔以上、日本教育史資料、五〕

### 熊代繁里

生 歿 二四七八、仁 孝、文政元年六、  
 歿 二五三六、今 上、明治九年六、**四四八**、  
 住 所 生地 紀伊國日高郡氣佐藤村、**居住** 紀伊和歌山、同田邊、同熊野、  
 姓 名 **通稱** 熊藏、後源藏、又四郎左衛門 **四**瑞穂、繁里  
 學 統 加納諸平 **一**繁里  
本居内遠 **一**繁里

〔日本教育史資料五〕 幼時ヨリ文學ヲ好ミ、漸ク長シテ、和歌山ニ遊ビ、後、京攝地方、及其他ノ諸國ヲ歴遊スルコト數年、以テ其學ヲ研修ス。

〔同上〕 和歌山藩ノ命ニヨリ、紀伊國名所圖繪續編撰述ニ從事ス。安政二年六月、田邊修道館皇學教官ヲ命ゼラレ、扶持米、及、俸銀若干ヲ受ク。因テ居テ田邊ニ移シ、所在ノ子弟ニ教授ス。時ニ名聲漸ク高ク、四方來遊ノ徒甚多シ。明治二年、田邊藩、學校ノ制ヲ改ムルニ及ビ、更ニ皇學教授ヲ命ゼラル。廢校ノ後、熊野坐神社權宮司ニ任シ、中講義ニ補セララル。

〔同上〕 早苗日記 常磐集 嘉永百人一首

〔以上、日本教育史資料、五〕

著 書 詞花集解 清渚集

植松茂岳 熊代繁里



### 伊達千廣

生 歿

二四六三、光 格、享和三年、

總 叙

養母の訓誨

官歴

大義名分を唱へて禁鋼せらる

〔國學家略傳〕 千廣は、通稱を藤三郎といひ、本名は宗廣、晩年に自得翁と稱す。紀州和歌山の藩士なり。實は、全藩士、宇佐美某の次男にして、姻戚なる伊達某の養子となりしなり。千廣、幼にして、岐嶷聰敏、養母頼る之を獎勵す。曰く、汝才識あり。一藩の偉人となりて、一生を終るべからず。須らく天下の偉人となりて、名を後世に遺すべしと。千廣、此教に依りて、學業に勉め、先づ漢學を修めて、漢詩をよくせり。後感ずる所ありて、本居大平の門に入りて、古學を研究し、拮据勉勵、夙に儕輩に擢んで、才學の譽高し。年十五にして、藩の老公の、扈從となり、十八歳の時、擢られて、監察の榮職に進み、勤勉衆に超え、公暇また學をつとめて、本邦古制度、及沿革の事に心を注ぐ。監察の職にある事八年、勘定吟味役等に轉じ、寺社奉行に進み、秩を加へて五百石に至る。もと二百石、本藩の老職、山中筑後守の知遇を得て、猷替する所、皆行はれ、山中氏及渥美氏(名は源五郎、千廣の後妻の父なり)と、三人相結託して、藩政を料理し、後更に文書頭格に昇り、勘定奉行、寺社奉行を兼ね、威權赫々たり。此時に方り、老公大に奢美を好みて、諸事京風を摸倣し、又京都の繪師家を招きて、和歌の浦の風光を遊覽せしめ、屢々盛宴を張りて、之を饗す。千廣、常に陪して、遂に繪師家に知己を得、之を以て、幕府の附家老、水野土佐守が、江戸にありて、遂に、山中氏等一派の權勢を挫かんとするに、拮抗せんとし、又暗に、大義名分を唱道せしかば、水野派は、之を好辭柄として、幕府を唆かし、御不審の筋ある旨を以て、山中、渥美、伊達の三家、皆嚴譴を蒙りて、禁鋼せられ、翁は、老職安藤家の采地、田邊に預けられたり。尋て、伊達家は改易せらる。是より後は、専ら風月に幽懷を遣られきとなん。其時の歌、

事にあたりて、田邊といふ所に、年あまたこもりて有りし程に、  
詠みける歌の中に、  
春來れど、籠にこめられし、鶯は、古巢戀しと、音をやなくらん。  
垣の外に、梅さけり、  
薰りきて、昔に似たる、梅が香に、袖はづかしき、わがやつれかな。  
落花の中に、  
ゆく水の泡とも消て、しがらみに、かゝれる花や、我身なるらん。  
禁鋼中、又大に佛典を講究して、造詣する所あり。かくて九年を経て、文久元年六月、觀自在院殿の、三圓忌法會により、救されて和歌山に歸れり。養子五郎宗興に、僅かに五人扶持を給せられたり。是に於て、千廣は、和歌山の城下はづれなる、太田村と云ふに、天目庵といへる書屋をいと好み、藩士等に、和歌、佛學など教授して、目をおくれり。文久三年には、六十一の還暦となりしかば、左の歌あり。

天目庵  
六十の賀

脱藩して國事に盡す

病歿

樂しきも、憂きの限りも、見盡して、昔にかへる、春は來にけり。  
千廣、長く草廬に老ひ朽つるものにあらず。歌あり。  
春毎に、つもる齡は、老ぬれど、ひとり老せぬ、ものもありけり。

此年十二月、國の爲め、一時脱藩の由を認めて、一書を遣し、五郎と、悠々常の旅行の如く出立ちて、京都に上りぬ。かくて千廣は、當時繪師家の中に、英邁の聞えある、姉小路痴の知遇を受くるのみならず、五郎を以て、中川宮の御内人となし、竊に縦横の手腕を振ひしかば、伊達父子の姓名は、いつしか、公武の間にかくれなく、彼の坂本龍馬の如きも、亦屢々翁の門に入せり。土佐の容堂公、伊達家の紀藩に歸參の事を周旋せられければ、翁父子は、表向に、公武合牀の事に盡力する事となりしが、又これが爲め、他日禁鋼の厄運に際會せりといふ。かくて、王政維新の運に際し、禁鋼を解かれ、王事に奔走する處あり。次に陸奥宗光、背雲の志を得るに及びて、東京に來りて、深川に住し、風月を友として、殘年を送れりと云ふ。明治十年五月十八日歿す。享年七十五なりと云ふ。遺骨を大坂天王寺畔、夕陽岡に葬る。(陸奥宗光)

### 伊達千廣



著書

〔同上〕大勢三轉考

餘身歸

隨々筆

### 伊能穎則 梅宇

生歿

生 二四六五、光 格、文化二年、  
歿 二五三七、今 上、明治一〇年七、一、  
田七三、

住所

生地 下總國香取郡佐原村、  
居 江戶本所龜澤町、  
香取郡牧野村觀福寺、  
通稱 三左衛門、後三造、  
菑村梅宇、降臨時人、

姓 名

神山魚貫、  
一穎則

〔以上、梅宇翁年譜略〕

經 歴

〔梅宇翁年譜略〕 嘉永元年、江戶本所龜澤町にうつり、皇學を教ふ。同六年、佐原に歸住す。元治元年、香取尙古館の學師となり、八月、香取神宮六郎祝欠職を襲ひ外記と稱す。明治元年、東京に出て、十二月、神祇官に任へ、同二年八月、大學大助教に任じ、御前にて令義解を講ず。十月、從七位に叙す。同五年、大講義に、同八年、香取神宮少宮司に任じ、次て權少教正に兼補せられ、地方の教導に心を盡したりしに、同十年三月より病みて、七月十一日歿す。

性 行

〔古學中〕 溫雅ニシテ、一點塵俗ノ氣ナク、畫家ノ大雅堂ノ類ナルベキニヤ。居官ノ頃、人々、天孫降臨時人ト云ヘリトゾ。古樸ニシテ時世ニ適セザルノ意ナルバシ。翁コレヲ喜バレ、或ル貴顯ノ人ニ、降臨時人ノ四字ヲ乞ヒ求メ、コレヲ座右ニカケテ安ンセリ。又印章ニモ降臨時人ト鐫セリ、其人ト爲リ思フベシ。余翁ト交ルコト五十餘年、故ニ翁ノコトヲ詳ニ知ル。學問ノ該博ナルト、記臆ノ細核ナル如キハ、共ニ驚異スベシ。歌ハ古今集ノ風ヲ好マレ、貫之朝臣ヲ慕ハレタレド、深人

天孫降臨時代の人

歌風

藏書を香取宮に納む

淺語ナシニテ、書卷ノ氣、全集ヲ貫徹セリ。下總地方ニテ、歌詠ム人ノ多クナリ、隨テ國書ニ志深キ輩ノ出來シハ、全ク魚貫、穎則、兩翁ノ薰陶ニヨレルナリ。香取宮所藏書籍、六國史以下數千卷ハ、梅宇翁歿スル前、多年儲藏スル書、空ク蠹魚ニ委スルニ忍ビズトテ、奉納スル所ト云。

明治二年八月、大學大助教ニメサレテ、ハジメテ令義解講セラレケル時、

香取の、しもとがもとの、落栗も、世にひるはる、時はありけり。

辭 世

足引の、病のとこに、世を思ふ、心ぞ神と、千世もあり經ん。

著 書

〔古學中〕史類名稱訓正續編 二

史類畧辨謬 二

香取鹿嶋二宮祭神說

歌語童諭

百人一首新釋 二

神道新論

夏衣

若干

歌文集

若干

此他、文貞公事蹟考、大嘗會ノ考ノ類ノ、何クレノ雜考、活語ニツキテノ稿本ナド若干種アリ。

### 梅本敏録

生 歿

生 二四九九、仁 孝、天保一〇年、

住 所

歿 二五三七、今 上、明治一〇年一〇、一、  
田三九、

姓 名

居住 江戸、越後蒲原郡新津、  
實業  
本姓 岡田氏、  
通稱 儀平、

學 統

林饒雄——敏録、

〔以上、梅、一二〕

伊能穎則 梅本敏録



雜載

〔欄二〕 幼時より専ら和歌を好み、日夜吟咏を怠ることなし。傍ら吹笛を嗜みて、頗る堪能の間  
えあり。明治の初年、越後蒲原郡新津に住める實兄の家に假寓し、疾て同地に歿す。年來の詠草夥  
多ありしに、過る歳、祝融の災に罹りて烏有に歸し、僅かに詠草一卷と、短冊數葉を剩すのみ。

著書

〔同上〕 詠草

(以上、梅本望成氏)

### 中根雪江

生歿

生 二四六七、光 格、文化四年七、三、

總叙

歿 二五三七、今 上、明治一〇年一〇、三、 目七一、

刻苦勉勵

國事に參畫す

〔國學家略傳〕 雪江、名は師實、通稱を初め七郎右衛門といひ、後親貞と改む。雪江は、晩年の號なり。其先は從五位下、讃岐守、平忠正より出づ。曾祖、兼美、祖、兼久、父は兼譜、母は平木氏、越前福井藩士なり。雪江、文化四年丁卯七月三日を以て生る。幼より學を好み、日夜刻苦、務めて書を讀み、和漢の書を涉獵し、最心を國典に潜む。壯年に及び、笈を負うて東に遊び、平田篤胤の古典に精しきをきき、就きて學び、晝は公務に服し、夜は則、師の家に通學し、酷寒烈暑、風雷雨雪の日といへども、一日も怠ることなく、從遊年あり。業大に進み、好みて尊王の說を主張す。後劇職に在りと雖も、鉛槧倦色なし。其詞賦唱酬は、直に肺腑を吐き、雕鏤を用ひず。嘉永六年夏、亞米利加合衆國の使節、浦賀港に來り、通商を要求す。邊境驛驛、幕府列藩に命じて、防海を議せしむ。時に雪江、江戸にあり。當路の人、就て以て諮詢す。雪江、利害得失を詳述して、遠す所あるなし。而して其言皆肯綮に中る。聽くもの、嘆服せざるものなし。是より其名世に顯る。慶應の年末、幕府選政の議起るや、廷議、列公及び有志者を京師に徵集し、遍く意見を問ふ。時に雪江、亦徵されて、參典職に拜す。明治元年正月、徵士となり、屢々京濱の間に往來し、庶政を料理し、尋て驛遞租稅等の事務を管し、皆始めて端緒に就く。其職を罷めて郷に還らんとするや、辱くも拜謁を賜ひ、賞するに物を以てす。二年九月、特に勅

病歿

して、祿四百石を賜ふ。三年四月、藩侯亦賞典祿百五十石を給す。此に於て、邸宅を城北坂井郡に買ひ、以て投老の地となす。暇あれば、則ち山に弋し、水に釣り、優游自適、亦世務の何物たるを知らざるもの、如し。明治十年春、上京して恩を謝し、留まる事經月、偶疾に罹り、遂に寓館に歿す。事聞す。内廷震悼の餘、金若干を賜ひ、以て祭米を助く。時に十月三日なり。享年七十一。超て明治三十一年、雪江の勳功を誦し、孫己巳を特に華族に列し、男爵を授けらる。(碑文)

### 加藤千浪

生歿

生 二四七〇、光 格、文化七年、一一、一九、

住所

歿 二五三七、今 上、明治一〇年、一一、一八、 目六八、

姓名

生地 奥州白河、**国** 東京日本橋藥問堀、**園** 深川臨川寺

通稱 彌三郎、鹽荻園、

- 伊東祐命
- 中島歌子
- 本郷銈子
- 伊東千勢子
- 吉野義卷
- 池田勝輝
- 鶴久子

學統

岸本由豆流——加藤千浪

中根雪江 加藤千浪



總叙

幼年の苦學

岸本弓絃の學  
僕となる

予が父義卷は、加藤千浪翁の門人であつたから、幼年の時分から、翁の經歷などを聞かされて、一月に、東京日本橋で居るから、それをお話しませう。翁は文政七年に奥州白河で生れて、明治十年十一月に、東京日本橋でなくなられたのである。通稱は彌三郎、本姓は藤原氏で、家號を萩園と呼ぶが如き赤貧であつたといふとてある。十一二歳の時、江戸に出て某呉服店の年期小僧になつた。が暇があれば色々な書物を讀んで、少しも怠り眠らなかつた。所が書物に乏しく、購求する錢がなかつたから、其主人の用で使に出る時は、道筋の古本屋の前に立つて、書籍を求め、やうな状態をして、店前の本を取つて二三枚讀んで、それから負かりそうもない値を附けて、其所を去り、又次の書店へ行つて、前の店で見つた本を取つて、其次きを二三枚よんで、又安い値をつけて去る。先生の學を嗜むさまは、概ねこんな有様であつた。所が其仕へて居た、呉服店の主人の倅といふのが、彼の有名な岸本弓絃先生の門人であつたから、翁は其御供をして、始終弓絃先生の家へつれられて行つた。翁は此時分から歌を嗜まれたと見えて、題詠などある毎に、常に紙片を執て歌を書き附けて居たので、終に弓絃翁が夫れを見て、汝も歌に志あるかと尋ねられて、其紙片を取り上げて見ると、命意といひ、措辭といひ、平凡の口つきでは無かつた。そこで翁の奇才に驚かされて、其學僕に使うことになつた。且翁に謂はれるには、師弟となるから、禮として束修を行はなければならぬから、汝酒一升だけ整へて來れと謂はれたので、翁は大に悦ばれて、一枚の衣服を質に入れて、其金で僅かに一升の酒を求めて、束修の禮を行はれて、遂に弓絃翁の門下に列するを得た。此時に師弟贈答の歌がある。

人しれぬ、野中の里の、埋れ水、くまると折に、あひにけるかな。

弓絃

本堂親久

笹村良昌

須賀子

人しれぬ、野中の里の、埋れ水、くまると折に、あひにけるかな。

千浪

宮中より聘せ  
られしも應ぜ

其居所

萩園の三秀才

不忍池畔の會

これが翁の入門迄の經歷である。明治五六年の頃、翁の歌名益世に現はれた。此時分、宮中から禮を厚うして聘せられたが、翁は固辭して遂に應じなかつた。此時の歌に、

高きにも、のぼらんものを、心がら、里のかきねに、なるうぐひす。

以て翁の心を見るに足るであらう。後又宮中から、八代集を書寫せよとの仰せがあつた。翁頗る其煩に耐へないで、多くは門人をして代り書かしめて、自ら筆を執つたのは、極めて勤なかつたといふとてある。

或時門人等、先生の家に集つて歌合の會を開いた。所が先生の家は、日本橋の薬研堀町にあるので、人馬の往來が繁華で、頗る喧噪で、構想に不便である所から、門人等、とてもこんな所では歌はよめるものではないと嘯て居た。先生之をきかれて、笑つて斯かる場所にて歌をよまなければ、歌人とはなれないと言はれたので、門人等、語が塞つて、一言もなかつたといふとてある。

先生の門に學ぶもの頗る多く、當時の華族、家令は大抵其門人であつた。今其主なる人々を擧げんに、笹村良昌、伊東祐命、中島歌子、木郷銚子、伊東千勢子、吉野義卷、池田勝輝、木堂親久、鶴久子などである。此内、伊東祐命は歌を以て、池田勝輝は博學を以て、吉野義卷は手跡を以て、萩園の三秀才と稱せられて居た。女流歌人として、頭角を現はして居たのは、鶴久子と中島歌子で、ことに中島歌子は予が母と同じ門人であつたから、委しく聞いて居るが、先生のことには、意を用ひて教育せられたさうである。歌子はもと他に嫁して居たのであるが、或る事情、今云ふを憚るから離別となつたから、獨立して、天晴れ歌人として世に立たんと欲し、遂に先生の門人となつたので、翁も歌子の教育には尤嚴肅で、他の門人に異なる指導をせられ、常に我が枕頭にすゑて、親切丁寧に、或は源氏物語を教へ、或は文法を講じ、或は和歌を添削したので、歌子女子の今日あるは、實に翁の恩によるのである。然るに後年、伊東祐命と或る關係が出来た所から、萩園門下が二派に別れて、相凌辱するに至つた。或日上野不忍池畔の長蛇亭で、あやめ合せの會があつた。此席上に於て、遂に兩派が衝突して、一大議論が持上つて、翁も非常に困つたといふとてある。此時のあやめ合せ

加藤千浪

一五二五



其風采

の詠草は、現に予の家に蔵して居る。翁の風采は頗るあがらない。背が低くて、鼻が甚だ大きく、一見田舎の野夫のやうであつた。が才氣は横逸して、歌は極めて自在で、見るに隨ひ、聞くに隨つて、之を咏するに、百首二百首立るに成り、少しも苦吟の跡を留めなかつた。先生の詠歌は非常に多く、予が家に遺れるだけでも二萬餘首もある。不遠校訂して出版する積りである。先生の著書は詠史百首が一巻あるばかりである。先生、子孫がなく、關戸雄を養つて嗣子とせられたが、後故あつて難縁した。先生の遺書は、この戸雄氏と予の家とに、其大部が残つて居る。

奥州白河には先生の墓碑がある。又向島の三國神社内には、予が父の書いた墓碑が立てゝある。予が記憶して居るのは、大畧以上の如くて、尙故郷へ歸れば、澤山材料もあるが、それは更に調べて遺稿出版の折、詳傳を添へやうと思つて居る。先生の歌で今耳に残つて居る二三を、

○ 立花の花さきしより、五月やみおぼつかなくも、よはなりにけり。

○ 心して、見れば教へとなりにけり。みちをたがへぬ、ありのゆききも。

○ 思へかし、うるを心の、かり人も、袖にかくるる、鳥はとらぬを。

○ 書 ふみわけて、など見るここの、かたからん、かき残したる、人もあるよに。

○ ますらをが、城をまくらと、なししより、やすくれらるる、世と成にけり。

○ ほととぎす、なきつる野邊に、駒とめて、むなしき空を、あふぎつるかな。

○ 蛙の自畫自跋 酒のみは、とかくにあとを、ひきがへる、かへるかへると、いへどかへらず。(以上、吉野盛氏談)

雜載  
碑文の一

加藤千浪翁碑

萩園のあるじ、加藤千浪ぬしは、もとみちのくなる白河の人なり。幼き時より、書よみ、歌よむ事を好み、由豆腐翁のをしへ子となりしより、もはら、師のこゝろざしをつぎて、よく勉め學びてありければ、つぎとに、其名聞えて、大江戸のうちにしては、一人ふたりと、かざまへらるゝ大人となりき。歌はみづから得たる一つのしらべをなして、小麓の外山の春の月、えむにうるはしく、ふりはらふ袖の涙、哀にかなしき言の葉ども多かり。水くきのあと、はた、萩の下水の流れきよく、なつかしかりければ、其をしへをうけ、その筆の跡をこふ人、高きみじかき、遠き近き、日毎に其門になむ集ひける。これらの事は、何がしのしるせる、から風の詞に、くはしければいはず。かくて、ことし十一月十八日、齡六十八にして、身うせられしかば、教子ら、相議りて、深川なる臨川寺の墓に、さめて、しるしの石たてむとするに、はやく世にきこえし、げせを翁の碑の、いたくかたすみ、に埋れたるを見出たれば、その學びのすぢは、たがへど、共にみやびなる、言葉の花の友なればとて、やがて同じところ、にうつしたたりといふ、後、見む人、此事をしも、あやしむことを思ひて、そのゆゑよしを、しるしそへてよと、かのをぎぞの、教へ子らが、こふまゝに、此詞をものすとて、さやかなる、聲をのこして、八月の、かげふきかへせ、をぎの上風。

明治十年十一月ばかり

本居豊顕しるす

萩園加藤先生碑

先生諱千浪。通稱彌三郎。號萩園。藤原姓。加藤氏。考曰：美方。妣綠川氏。以文化七年庚午十一月十九日。生。先生於陸奥國白河。先生幼好學。師事淺田山豆流。先生篤信古道。傍善和歌。兼通臨池之技。俱極其妙。從花晨月夕之會。至遂涼賞雪之宴。婉麗之曲。適美之態。隨口而出。應手而成。以此馳名海內。四方聞之。執贖受業。者殆于有餘人。而摺紳公子。遊其門者。亦不少焉。先生爲人。卓犖不羈。有弱者輔之。強者撓之。之節。往々有諸侯厚聘之。徹託病辭之。語人曰。與其貧人之富貴。以屈己之志。孰若安我之貧賤。以樂其道也。優游自得。可謂有古人之風者。明治十年丁丑十一月十八日。遭病而卒。享年六十有八。以禮葬。深川臨川寺。追諡曰詠聖。初娶三宅氏。無子。以故養關氏葦雄。繼家。門人等相謀樹石。銘曰。道誼端正。

加藤千浪

一五一七



著書

志氣雄壯。詞才如海。萬里千浪。  
明治十年十二月  
(以上二石碑は、向島、牛の御前社内に、相並びて建てり)  
萩園歌集  
詠史百集

服部謙撰 卷菱潭書  
續詠史百首  
(以上全篇、編者見聞録)

### 増田宋太郎

生歿

生 二五〇九、孝 明、嘉永二年、  
歿 二五三七、今 上、明治一〇年、目二九

總叙

増田宋太郎、豊前中津藩士なり。嘉永二年に生る。父は久行、母は渡邊重名の女刀自、世々奥平氏に仕ふ。幼より従兄渡邊重石丸に就いて國學を脩め、傍漢學をなす。人となり篤實沈勇、夙に意を國事に用ゐ、慨然として幕府の專横を憤り、國權の振はざるを憤慨す。明治三年、藩命を以て學に京都に遊び、皇學所に入る。明治四年、中津藩知事に建言して、皇學校を設立す。來學の學生數百、頗盛大を極む。明治七年四月、薩摩に到り、桐野利秋に面會し、六月、中津に歸り、共憂社を設く。蓋臺灣の役より、我が國清國と葛藤を生じ、物議洵然たるを以て、緩急に供ふるなり。九年、中津田舎新聞の社長となる。明治十年、四郷隆盛、征韓の議、廟堂に合はずして、兵を擧ぐるや、宋太郎同志と薩軍に投じ、同軍奇兵救應隊の總軍監となり、各大隊の勤惰を監察し、又中津隊を率ゐて、轉戰劇團、勇烈全軍に冠たり。城山遂に陥り、銃丸雨の如く下り來り、數所の劇創を負うて斃る。年廿九歳。宋太郎國歌を善くす。いづれも慷慨憤世、至誠の發する所にあらざるはなし。

城山の露と消

殘花

後れじと、人な智めそ、おくれても、一たびは散る、山櫻ばな。

陰曆七月十五夜によめる  
獨のみ、言學しつゝ、歌ひつゝ、月に心をあかす、夜半かな。(渡邊重兄氏、寄)

### 北條時隣

生歿

歿 二五三七、今 上、明治一〇年、

(國學家略傳)

總叙

〔慶著和〕常陸人。小山田與清門。

著書

〔同上〕鹿島名所圖會 三 相馬日記註 二

### 齋藤幸成

生歿

生 二四六四、光 格、文化元年、  
歿 二五三八、今 上、明治一一年三、六、目七五

住所

生地 江戸神田雉子町、居佳同上世々名主 園淺草報恩寺中、法善寺、  
通稱 市左衛門、園月岑、翟巢松濤軒、

姓名

幸雄 幸孝 幸成

系圖

〔慶著和〕東都歲時記 五 江戸名所圖會拾遺 五 武江年表 一〇續四  
幸雄 幸孝 幸成

著書

聲曲類纂 六 武江賑災記 五 松濤軒雜纂 四  
(以上、忌辰、下)

増田宋太郎 北條時隣 齋藤幸成

一五一九



翟巢漫筆

### 岡本保孝

生 歿 二四五七 光 格 寛政九年、  
二五三八、今 上、明治一一年四、五、  
國八二、

江戶本郷壹岐殿坂園淺草北松山町東國寺、

父 若林氏 家 岡本氏、  
母 縫殿助、後勘右衛門、  
保孝、  
況齋、  
麻志天乃屋、  
歲計草堂、  
戒得居士、

學 統

清水濱臣、  
狩谷望之、  
岡本保孝

(以上、帝國文學、二ノ八)

總 叙

〔帝國文學、三八〕 慶長以來諸家著述目錄を通覽せし人は、必ずや、その著書目錄の大凡十六頁に涉り、その種類の無慮五百八十に及びて、その夥多なること、實に同書中第一等なる一大著述家、岡本保孝といふ人ありしを記するなるべし。且つ、その著書名によりて見れば、此人は、學和漢に通じ、最も考證に長じ、音韻言語の學にさへ、精しかりしが如きをも知るべし。予此人の傳を知らんと欲すること久し。偶ま文學士上田萬年氏、近頃岡本氏の舊知某氏、故ありて今氏名を匿くすに邂逅し、乃ち屬してその傳を得て、予に示されたり。予大に喜び、遂に請ひて之をうつして、茲に世に公にすることゝしつ。  
因にいふ、岡本氏が未定稿の一大日本辭書言體は、自筆稿本のまゝ、今は上田氏の有に歸したり。されば岡本氏が、語學上の効績の如きは、追て同氏より世に紹介せらるゝことあるべし。

るべし。

岡本氏が著書目錄は、中根肅治編『慶長以來諸家著述目錄』漢學家の部、上の百九十四丁にあり。就て見るべし。岡田正美識

坐右の箴

岡本保孝翁は、況齋と號し、或は麻志天之屋といひ、或は歲計草堂といひ、或は拙誠堂といひ、晩に戒得居士といふ。通稱を縫殿助といひ、晩に勘右衛門といふ。江戸將軍に仕へて、所謂小普請支配の列なり。俸米二百俵を賜り、本郷壹岐殿坂に住しけり。翁はもと同トキ麾下の士たる。若林某の二男にて、岡本氏の養子になりけるなり。

家政整理

若林氏に在りしほど、先妣の墓詣せし歸るさに、とある骨董肆の店頭に、一片の柱かくしあるを見るに、上のかたに、しめ繩を張り、燈明をそなへ、下のかたに、年たけたる翁の手に、牙籌を執りて、珠のあたり指さしつけ、物おもはしげなるさましてあり。其かたへに、大年の病は、つねの不養生、とかきさしたるを、翁の心に深くしみて、其の直を問へば、十六文と答ふる儘に、購ひ求めて家に歸り、坐右の箴と爲つゝ、此時よりむねと理財を心がけて、この戒に違はじの心おこされけり。かくて岡本氏を襲けるに、家に宿債いと多く、數千金に上りたり。加之に當時の米價は、俸米の二百俵を、僅かに八十兩の内外に易ふるをりなりしかば、一とせの收納は、百金に満たざるに、麾下の士人は、餘に應じて多少の奴僕を養ふべき定なれば、いかでかゝる薄祿にて、かゝる鉅債を償はるべき。されば家事を改むる手はじめに、朝の飯を粥になし、をのれは更なり。奴婢等まで、皆これを食はせける程に、いつしか壹岐殿坂の「かゆやしき」と、其の邊の人のいひはやしけり。永

壹岐殿坂のかゆ屋敷

き年月、一日も財務を忽にせず。年ごとの收納を量りて、債主にあつべきもの若干、衣食住の費若干、子女教育の費若干と、それごとくに分ち定め、其の足らざるは、足らざるまゝに耐忍びて、妄にこれを變ぜず。おひめを償ふすべとて、世の常の人とはうらうへにて、初め債主に約するに、殊さらにもその期を延べ、つとめておのれが費を厭ひて、賠償の數を増し、われから其の期を縮むるも

のから、債主もこれをめめて、母錢の額をそこばく減じけるほどに、思ひしよりは速に之を結了せり。さて、袴衣糶食の惡に耐て、資を積みつゝ、後には富める身となりて、男子五人ありけるを、夫々にさるべきほどの家の養子とは爲たりけり。

岡本保孝

一五二一



挿架の初  
藏書數万卷

はじめ若林氏の家に在し時、月ごとに二朱のこがねを、親びとより賜りたるを、一とせが程、貯へて、一部の史記を購ひぬ、これぞ挿架のはじめなりとなん。晩年に家道やうやく裕くて、年ごろ蒐集せるふみども、數萬卷に及び、都下には稀なる藏書家といはれたり。來りて見むと乞ふものあれば、これを見するを惜まざるといへども、借りて往なんと乞ふものあれば、いなみて貸さず。己れが見たしと思ふものを見得ること幸ならぬ。來りて誦讀するも可なり。就きて抄寫するも可なり。借りて往きなんといふほどの人は、はや其心怠りて、持歸りたる後は、讀みもせず、促されて後、あはたしく、ひるがへすもあり、或はそれだに得せて還すものなきにもあらず。さればこれを貸さぬこそ、反りて求むる人の爲めに、よけれといへり。さはいへど、されど其は人に因る事と覺し。翁の友人、小島尙賢も、また、壹岐殿坂に住す。或人其の居を訪ふに、几邊に奇書どもの積てありけるを、さても珍らしき書籍を所藏せらるゝものかなといふに、尙賢笑ひて、吾が家は貧なり。かかる書どもを購得せんや。これは皆岡本氏より借る所なりと答たりとなん。さては貸借の嚴なるも、人を教ふるに、苟ならぬを見るべし。

其住家

翁の書を藏するは、俗士の如く、箱などうつくしくつくりて、牀のあたりにかさり置く事をせず。常にいへらく、古書を校合するに、他本數種あるものは、必ず何本の何卷、幾張の表裏と、其の所在を記すべし。しからざれば、世上に傳布せる刊本と、張數表裏を異にするをもて、人をして疑惑を生ぜしむるの患ありと、繙閱の際意に任せて校語を標記し、差誤を訂正する毎に、巨額の金幣をもて購ひたる典籍といへども、少しも惜しと思はて、雌黃を施しけりとぞ。家は甚だ陋隘にて、屋宇荒廢すれども、聊意とせず。坐敷とも、居間ともわからぬ所を、大かたは本箱を置きかされたれば、いと狭き中に、極めて粗造なる白木の机を置き、麻小紋の上下の、古びやぶれたる下げかりをばき、煙草入は猪口箱を用ひ、叩きつぶれたる眞鍮の煙管にて、煙りを吸ふ。屋根の破るゝ事などあれば、工夫を招きて、ふきかへの費をはかり、あらかじめ保存の年限を約し、一たび工に命じたる後は、その成し終るまで、さらに顧みず。屋根屋は屋根をふくぞよき。おのれは書を見るこそよけれといひし。

清水濱臣、狩  
谷望之を師とす

佩文韻府、康  
熙字典を校合す

ふみどもを研究し、皇朝の方は、清水濱臣ぬしを師と頼み、彼土の方は、狩谷望之ぬしに従事爲たり。また月ごとに、四九の日を定めて、友びとを會す。其の樂の深かる事、さながら手の舞ひ足の踏むを知らざるばかりなりき。世の常の人の來りて談話する時は、言べき事を聞畢へて、其の他の冗語を要せずして、もうおはなしはそれぎりてござりまするか、ごめんなされといひて、さらに机に向ひ、讀書筆記せり。齡七十にあまりて、後、學を勉むる事益篤く、あしたにはまだきより、圖書堆裏に坦坐し、諸書を校讎し、夜は夜半にいたりて、はじめて巻を掩ふ。夜のものとして、鹽のにぎり飯、二つ三つを用意す。燈心はふとやかなるを一とすぢにて、眼鏡をも用ゐず、よく蠅頭の文字を寫せりといふ。

翁の篤學なることにつきては、驚服すべきこと多かり。淺野梅堂ぬしの寒檠瓊綴に、翁が佩文韻府を、一々原書に就て校訂せしに、差誤多きよし話せりと記せり。編者嘗て翁の舊藏に係る、康熙字典の手澤本を見るとき、のありしに、通編に校語を標記す。其中に就て、後學の爲めに益ありと覺ゆるは、字典に唐韵とて引用せるを、唐韻は元明の頃は絶えたりと思ふに、康熙字典に、折々引用するは、いかにといふに、五代の徐鉉が説文眞本には、唐韻の音を載せたり。これによりて、説文に收めたる字には、唐韻何々切と記さんと、怪しむとなし。しか心得てあらんに、説文に收ざる文字に、唐韻を引けるあり。これは唐韻といふべきを、たまゝ誤て、唐韻とかけるにやと、年久しく疑て居たるに、偶然に自得せる事あり。其は説文にある文字にて、徐鉉が某々切と出たる、其文字をたづねて、廣韻の音の反切と同じければ、其同案の文字は、説文に收ざる字にても、唐韻といふべき理りなりと考へたりといひ、また、手抄十一畫に、據字を補ていふ。即據(見十二畫)五經文字云、據作、據。干祿字書云、據(上通下正)。廣韻云、據(昌據切)據俗詳此諸書。處之俗作據。故後人誤以爲據。亦宜从處。遂作據。按梁丘據(昭廿年左氏)或作梁丘處(一)投壺釋文。則據之作、據亦似有由來。然處齒音。據牙音。時而有相通耳。其所从者相似而異也。書家宜辨源委而作字。といひ、心部假字の注に、泥孃二母微音既同。次濁又同。最易相犯。然泥母舌動而音在舌端。孃母舌靜而音在舌上。二母雖次濁。泥輕而孃尤輕。とあるに、泥孃いづれも清濁音にて、音近けれども、孃は泥にくらぶれば、彌音輕きよしなり。これらのも、甚細密のこにて、本邦の人には、いよゝゝ解得しがたきを、磨光韻鏡に黒字



太耶と大耶の

は音重く、白字は音輕き定なり。無相氏の説のあやまらざるを證するに足れりとあるなど、小學の懸眼とも稱すべきなり。

翁は小學に委しく、最も説文解字を講究せり。これに就てをかきし談あり。翁の長子を信大耶と呼ぶ。さるに大耶とかきて、太耶とかもす。これは翁の持説に、大字を太とかく事は、上古になき事なり。後世目印に、大字の下に點を加へたるなれば、大の俗字なり。これは何の目印ぞといふに、大耶は、二耶三耶に對し、第一の意なれば、太とかくもわるからず。字治拾遺に、大耶とて、いみじきぬす人の大將軍ありとあれども、大耶とかく事は、名は實の實にて、假初の事にも、俗をすて、正に付けんの微意にて、其上に小學すたれたる世なれば、大耶とかくを、人々疑ひて詰難せんに、上件のことわりをとききかざば、小學の階梯ともならんかと思ふ。一片の老婆心なりけり。近き頃、屋代輪池翁も、通稱を大耶とかきて、太耶とかいざりき。輪池の尺牘は、人間にあれば、尋ねて見るべしといはれけるに、安政三年十二月に、信大耶ぬし、小十人組に御番入をして、翌年夏四月、御切米を下さるゝに付て、參政より御藏方に御證文下りて、此者に米をわたせとあるに、信太耶とかきてけり。岡本氏よりは、信大耶とかきて出たるに、文字違ひあるにて、手數多くかゝれり。翁の事を聞て、文字はいかにかきてもよしと思ふ時勢、歎息に堪へずとて、信大耶ぬしの長子を、一耶と名付て、これにて後日の手數はなくてすむべしとて、或る人に物語られけるは、一片の老婆心に、小學を人に示さんには、我が子の名にかざる事にもあらば、通用のよき事を專一にすべきにや。されど、これもかれも、かゝる意になるより、彌ます、小學すたれて、遂に大道を害するに至る。これも、福津ひの御神の御意にこそとて、笑てやみけるとぞ。

天保の初年に、古筆了伴の家藏なる、公任卿自筆の和漢期詠集を、將軍家に進らせんのあらましなりけるに、前田夏蔭ぬし來りて、翁に物語りけるは、了伴が訪ひて、彼の期詠集を見つるに、詩と歌とあり。假字の様も、すべて古にたがはず。公任卿の筆のあと、は思はれど、さはいへど、おほくは時へだゝらぬなるべし。歌を添へたるは、公任卿にあらすとも、やゝふるし。また期詠といふ事は、歌にてもいはるべしといふに、翁はうべなはて、歌に期詠といふ事、いかゞあるべき。和漢

公任自筆の期詠集

論疑符

といふは、唐土と本邦との、詩文の句を撰たるよりの名目にて、詩と歌との事にあらぬをば、先輩もはや、やくいへり。歌を添へたるは、いつばかりの事ならんと思ふに、範兼が童蒙抄卷二に、「かすみはれ、縁の空も、のどけて、あるかなきかに、遊ぶいとゆふ。期詠下にありといふ、文みえたり。この範兼は保延五年に卒したり。公任卿卒してより、保延まで九十年ばかりなり。其の頃はやく、歌の添はりたること、これにて知らる。思ふに、新撰期詠の撰者なる、基俊卿の跋に記されたる長承四年は、やがて保延元年のとなり。基俊卿は、期詠集に歌のあるを見て、これに従ひて、歌を添へられけるものならんといへば、夏蔭ぬし、さなり、新撰もとより歌はありたるならんといふ。翁さては、基俊卿、和漢の二字の義をとりたがへたるものなるべし。されど、其の時代、みな見識なきもの、みにもあらば、義理をたがへざるものありけん。保延より二十年ばかりおくれ、應保年間に、信阿といふもの、私注をかけるに、これには歌はなし。期詠は和漢の詩文なるといふも、さらなりといへど、夏蔭ぬし、なほ意に投ざるおも、ちなりければ、さらば狩谷先生に問べしとて、掖翁のもとに行て、質疑するに、掖翁笑て、岡本ぬしの考はさるとなり。されど、岡太夫といふ狂言にも、期詠とは詩と歌と、云詞あれば、一概にはいひきりがたしと答けり。其の後に、この期詠集は、將軍家の文庫に收まりぬるとぞ。

翁は人を教ふるを、教ふるとはせず。おのれが進學のたよりと思はれて、問はるゝ事は、力の限り尋考へ、必割記して問ふものに示したるを集めて、冊子となして、他日考證の用に供へ、之を名づけて論疑符といふ。こは顔氏家訓に、人の才思なくして、惡詩惡文を漫に世に流布するものを、江南の地に號して論疑符とすとあるによりて、おのれが答ふる説どもは、あながち詩文にあらざるも、疑なる符を論ふ笑をば免れずとてなり。此ふみ巻を果れて、數十冊となし、漸考據に富しかば、後には人の問はるゝに答ふるは、おほ方この冊子のうちより取出て、事足りしとぞ。大政復古のはじめ、一たび大學の中博士となり、後また編輯寮にありて、語彙編輯の事にあづかれり。明治十一年四月五日、病みて小石川なる柳町の儒居に歿す。享年八十二。淺草北松山町の東國寺に葬る。翁の著す所、國典凡百五十種、漢籍凡二百種、釋書凡五十種、自餘況齋集若干卷、又いまだ稿を脱せざるもの、無慮百餘種あり。生前一部をだに刊せず。おのれ百年の後は、覆誦の用に過ぎず。いか

大學中博士となる



著書

てをこがましく、櫻木にわざはひすることかほと、遺言せられけりとなん。

〔慶著〕周易註疏考 <small>附錄一全</small>	三	易音考	一	易類書目	一
尙書註書考	二	春秋會盟	二	春秋語例	一
左氏傳註疏考	三	左氏傳考	二	穀梁傳註疏考 <small>附錄一全</small>	三
公羊傳考	一	論語註疏考	一	孟子劄記 <small>補共三</small>	三
孝經註疏考	一	學海堂經解目次	一	經義述聞同異攷	一
論法考	二	九服考	一	親族稱謂攷	三
親族譜 <small>補共四</small>	二	讀家語	一	荀子考 <small>補共六</small>	六
荀子續補遺	一	論衡考	一	新書考全攷文一	二
賈子考本	三	說苑考	三	管子纂註楚撞	一
顏子家訓考	一	中論考	一	呂氏春秋考	三
晏子春秋考	一	晏子春秋音義補正付校說一	一	淮南子疏證 <small>補遺共四</small>	四
淮南子音讀出典考	一	韓非子疏證全補遺一	六	墨子考	一
申韓考	一	子華子考	一	韓詩外傳考全攷異一	三
程朱新釋攷	一	小學雜錄	三	謝啓昆小學攷目次	一
讀初學課業次第	一	讀書階梯	一	讀書漫錄	二
博士讀攷證	一	日本書紀攷文全補遺四	一		

日本紀通證引用書目全補遺一	一	三代實錄攷文全補遺一	三	續日本紀攷文全補遺三	三
續日本後紀攷文全補遺一	三	大鏡攷	二	文德實錄攷文全補遺一	二
現今類聚國史目次一	一	榮花物語抄全附錄一	一	大鏡系譜	一
增鏡攷	一	三種考	一	平治物語考	二
平家物語考	一	續異稱日本傳	四	皇統譜付武家譜	一
皇統世數異同表	一	冠位叢話	一	施藥悲田兩院考	一
泰平年表抄出	一	漢書攷文	一	御當家初例考	二
史記攷文	一	後漢書筆記	二	漢書筆記	二
漢書百官表攷	一	續漢志百官志攷	一	後漢書攷	二
續漢志攷文	一	晉書攷文	一	新唐書攷文	二
三國志攷文	一	國語考	一	晉史乘楚史檣杙出典攷一	一
逸周書攷文	一	戰國策攷異	四	國策遺考	一
戰國策集註	二	春秋繁露攷文	一	戰國策集註後付	一
戰國策章次	一	少微通鑑攷異	一	通鑑考	三
通鑑節要續編攷異	一	歷代畧譜	一	通鑑錄目次考	一
歷代通覽	一	明季清初事蹟攷	一	歷代避諱攷	六
十八史略校異 <small>附十九史略攷異</small>	一			讀三事忠告	一

岡本保孝



稱號攷	一	姓氏考	一	姓序捷見	一
姓氏急就篇押韻考	一	姓名錄抄	一	逸姓氏	一
漢公主	一	西漢外戚傳譜	一	後漢公主	一
晉公主	一	唐宰相世表捷見	一	唐諸公主捷見	一
宋百家姓押韻攷	一六	明千家姓押韻攷	一	清百家姓押韻攷	一
人名考	一六	人名相對考	一	清人小傳	一
烈女傳考	二	高士傳考	一	英雄記出典攷	一
現存諸侯略譜	二	輿地攷證	一	四夷考	一
國郡鄉名攷	二	諸大名居城及在所	一	江戶地名攷	一
前漢郡縣聲類	一	續漢郡國志攷	一	晉志郡縣聲類	二
李唐郡縣聲類	三	唐州府廢置考	一	天經雜話	一
太歲	一	分野譜	一	律呂上生下生	一
地有四遊	一	讀蔡氏月令	一	和漢時令	一
歷書大餘少餘	一	漢書律歷志國志解	一	周尺攷辨	一
地震說	一	醫談	一	濟急方摘錄	一
本草沿革攷	一	本草綱目々次	一	本草纂聞	一
證類本草引用書目佚考	一	物產捷見	一	物產聲類目次	一

物產聲類	一	釋茶	一	豆腐	一
玄應音義目錄	一	慧琳音義目錄	一	慧琳音義藏氏本跋尾	一
諸子瓊林顛末考	一	正續三綱行實顛末考	一	諦觀四教儀略解	一
法華經傳來攷證	一	日蓮宗必讀書目	一	戒壇	一
釋迦譜逐條出典攷	一	釋迦譜攷付引用書目	一	三寶感應錄考	一
譯經圖記攷異	一	梵語聲類	二	釋氏要覽引用書目	一
翻譯名義抄引用書目	一	往生要集引用書目	一	文字般若	一
淨土三部經註脚書目	一	妙法蓮華經考	一	安國論攷	一
第二義	五	寺社考	一	彼岸津撥	一
法念上人勅脩御傳	一	法真寺觀音緣起	二	災異記出典攷	一
父子問答	一	沙石集攷	一	長明發心集考	一
西行物語攷	一	天主教	一	補註蒙求校本	一
蒙求押韻攷	一	佩文韻府目次	一	冊府元龜顛末考	一
說郭正續顛末考	一	稗海顛末考	一	數雅	七
事物權輿	二	物品名數	一	髓腦聲類	二
起頭聲類	二三	崇文總目存疑	一	四庫未收書目	一
四庫全書總目異同	一	四庫全書提要存疑	一	讀書志	六



群書糾謬	二	又續彙刻書目	二	歷代書目類聚	一
經籍考	一	經籍雜考	一	經籍目錄	八
書籍目錄	一	况齋讀書志論語	一	撰定書目	六
蕭蘭竝編	三	珉玉雜陳	二	御本日記附註摘錄	四
古書類考	一	讀愛日樓藏書志	一	長崎朝鮮蝦夷書目	一
偽書妄作之姓氏	一	偽書目錄	一	古佚窺班引用書目	一
異稱日本傳引用書目	一	拾芥抄引用書目	一	漢書註引用書目	一
四書集註鼈頭引用書目	一	史記 <small>集解索</small> 引用書目	一	通鑑胡註引用書目	一
後漢書劉李二家引用書目	一	三國志註引用書目	一	唐末叢書顛末考	一
經義考引用書目	一	世說註引用書目	一	拙誠堂叢書中各補遺	一
漢魏叢書緣起	一	說郛目次	二	和語省約例	五
活板考	一	倭字考	一	古音攷	一
和語延約	一	發字攷	一	四十四音論辨誤	一
古讀考	一	古言梯補遺	一	字音假字用格存疑	一
撥韻假字攷存疑	一	本朝和名攷異	一	靈語通礙錄	一
詞八衢補正	三	冠辭考存疑	一	虛字重語套 <small>並補</small>	二
轉音攷存疑	一	和名抄聲韻	二		

斷前歌後攷	一	語釋考	三	語例	一
言靈	一九	眞橫通音 <small>シキク以下合六種考ト名ク</small>	一	假字用法	一
シキク	一	用ノ假字	一	五種加良	一
自他ニアツカラヌ延約	一	ツマク詞ヨリト、ウクルカ文字ノツカヒザマ	一	詞ノフク	一
詞ノ古格	一	重言重句	一	歌ノイヒカケ	一
ノニノ意	一	西行定家例ニナリカヌル古書中假字タガヒノ歌	一	用意ノ詞アル	一
打聽	一	ツルヌル <small>附サキ</small>	一	說文解字段註考	一
文ノイヒカケ文法	一	有無カ、ハラヌ	二	段註補正隨見錄	一
文ト歌ノ詞カハル	一	廣韻反切	一	韻鏡攷	一
說文新附字攷證	一	段註幾部誤脫考	一	落久保物語攷	一
字說雜錄	一	文字正俗辨 <small>附說文舊音補</small>	一	取替婆也物語年立系譜	一
磨光韻鏡考	一	音韻考	一	宇治拾遺物語攷	一
落久保物語系譜	一	取替婆也物語攷	一	空穗物語校註	一
濱松中納言物語系譜	一	今昔物語出典攷	一	狹衣物語校註	三
秋夜長物語釋文	一	源氏物語存疑	一	古文眞寶顛末考	二
枕冊子存疑	一	徒然草攷	一		
偽書物語存疑	一	文選考	一		



本朝文粹校本	一	古佚窺斑目次	二	白氏諷諭考	一
朗詠考	二	歲計堂詩話	一	作文秘訣	一
古文兩可並補	二	文ノイヒカケ	一	俊頼口傳集攷	一
俊頼口傳集目次提見	一	六帖類句	一	類句出典未詳者	一
古今等類歌遺補	一	袖中抄目次提見	一	類句凡四十五部	二
萬葉集略解札記	二〇	山家集攷	一	月清集攷	一
長秋詠藻備考	一	百首要解	一	堀河百首校註	一
後拾遺金花葉詞千載和歌集存疑	一	歌ガタリ	一	桂園一枝糾謬	一
旋頭歌不一樣	一	文字考	一	マシテノ屋ノ集	三
俳諧七部集打聽	八	書譜	一	六書雜考	一
古今字樣	一	茶事打聽	二	四譜考	一
琴操考	一	洞溟記考	一	謠曲校本	一
桓譚新論補遺	一	水滸傳考	一	西京雜記考	一
神仙傳考	一	正續博物志考	二	續齊諧記考	一
搜神記考	二	簾中抄出典考	一	讀容齋隨筆	一
今世說存疑	一	世諺問答集釋	一	十訓抄攷	一
十訓抄典故攷	一			古事談攷證	一

續群書類從	一	甲冑着用次第	一	藐姑射秘言出典	一
開目抄	一	常談	一	雜攷	二
辨駁難陳	一	彫蟲錐鑿	一	與日尾邦子文	一
與石場氏書	一	駁全齋讀例	一	經濟	二
一標手半攷	一	花ノ名タテ	一	今樣	一
松風	一	諗癡符	二〇	諗癡符補遺	二〇
諗癡符未定稿一六	一	諗癡符又續	一五	難波江補遺	一
况齋雜話	九	難波江未定稿一九	一		

### 千家尊澄

生歿 二五三八、今上、明治一一年八、二一、  
 總叙 〔忌辰下〕 出雲の國造にして、大社の宮司なり。系遠く大國主尊ト出づ、木居内遠の門に入りて、古  
 典を修め、又詠歌に堪能なり。

### 志賀異軒

生歿 二四九一、仁孝、天保二年、

千家尊澄 志賀異軒



總叙 〔慶著和〕 二五三八、今上、明治十一年、**四九**、  
 〔慶著和〕 號喬木、筑後人、柳河藩士。  
 〔同上〕日本書紀註釋 三 巽軒歌集 一 巽軒文集 二

### 那珂通高 梧樓

生 二四八八、仁孝、文政十一年、  
 歿 二五三九、今上、明治一二年五、一、**五二**、  
 生地 陸中盛岡、居住 京都、東京、**東京青山**、  
 通稱 初江幡五郎、**關梧樓**、  
 通誠  
 通高 養通世文學博士  
 安積良齋  
 森田節齋 通高  
 〔譚海四〕 那珂通高、神原芳野、合傳  
 那珂通高、號梧樓、初稱江幡五郎、陸中人、梧樓俊邁有禮畧、芳野神原小心謹慎、蓋性相反、而并精國典、博覽多識、凡經籍佛乘、諸子百家、神史傳奇、音樂舞曲、種樹養花之書、至鄙俚猥褻、閭巷坊市之談、無所不讀、無所不通、或問以一事、必博引群籍以答、瀾々如貫珠、一座傾聽忘倦焉、朋友相談及一難義、

博覽多識 總叙 學統 系圖 姓名 住所 生歿  
 〔慶著和〕 二五三八、今上、明治十一年、**四九**、  
 〔慶著和〕 號喬木、筑後人、柳河藩士。  
 〔同上〕日本書紀註釋 三 巽軒歌集 一 巽軒文集 二

必曰、是非那珂先生、不能不知、不則神原君、若二君不知、天下無復可問之人矣、其爲人所信如此、梧樓父某、以醫仕南部侯、梧樓不屑其業、好讀書、工文章、從安積良齋於江戸、然家貧無資、常執厨役、後從森田節齋於京都、窮益甚、爲人按摩、肩背以自給、或至絕食、以腐洋充饑、氣不少屈、性任俠、自喜、好與無賴徒遊、與書戒之、梧樓感激、折節改行、業乃大進、初梧樓有兄、曰通誠、以論藩事、忤權臣、下獄以死、訃至、梧樓悲憤不自禁、即日東歸、變姓名、棄其所學、出入下野、陸奧、數年、欲報之、久而不發、人疑其藉以哺啜、梧樓不較也、既而權臣敗、兄子復祿、乃釋去、來東京、下帷教授、藩主聞之、召督藩學、時年三十五、居八年、有伏見之變、與羽諸道、連合以抗王師、梧樓有重名、首參其謀、戰不利、藩主降、梧樓就擒、幽囚四年、有以其才學薦者、官於大藏省、尋遷文部、同芳野數置修古事類苑、未成而卒、時明治八年也、梧樓晚年嗜酒、最甚、杯杓不離於口、稍成病、醫爲禁之、未幾病癒、復飲、一日飲友人家、歡甚、噱々笑不已、既舍杯而伏、久不起、驚見之、則逝矣、梧樓亦無子、義子通世、通洋學、今爲東京女子師範學校長、百川曰、余識二君於洋々社、有年矣、每有一疑、必問之、而今則亡矣、爲作之傳、直書不事虛譽、可以見其人、可以傳其學矣。  
 (參照) 神原芳野の條下——一五四五頁。

〔慶著和〕和漢一致博議 一 漫筆 はゞかりながら 一  
 〔編者補〕古事記便要 餘國旅の苞 一

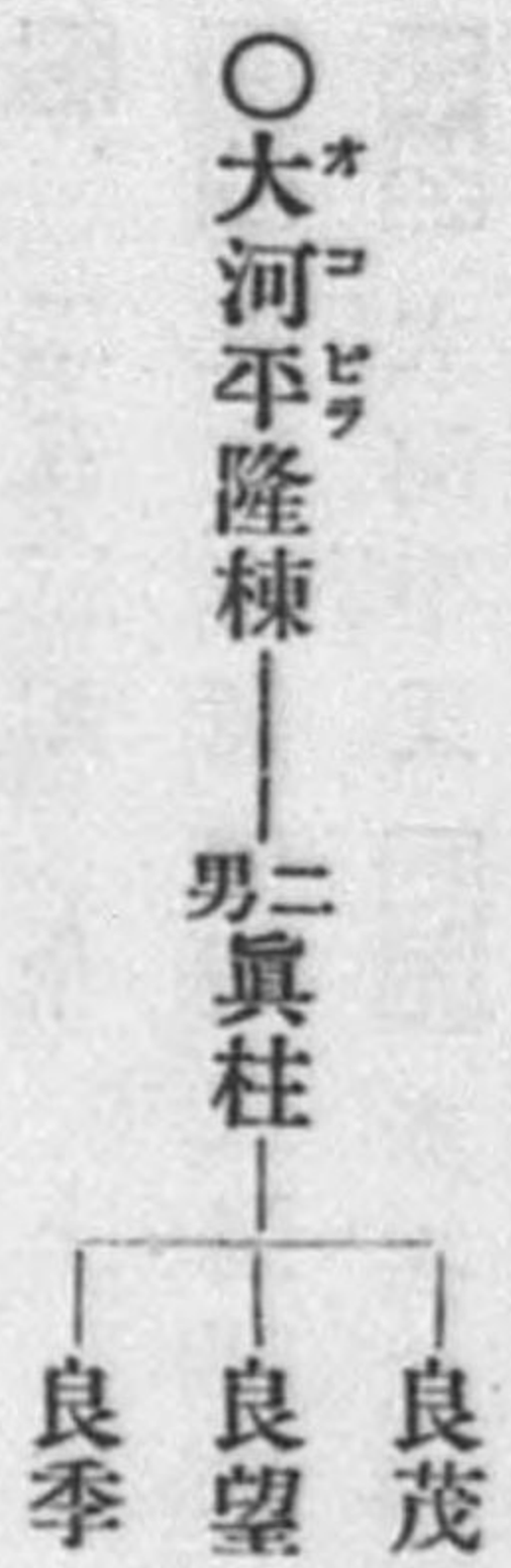
### 後醍院眞柱

生 二四六五、光格、文化二年一二、二、  
 歿 二五三九、今上、明治一二年六、一二、**七四**、  
 居住 東京、後備中國賀陽郡眞金村、  
 本姓 大河平氏、**通稱** 彦次郎、**初** 隆武、又隆風、後眞柱、**關** 玉廼舍、後自凝屋、

那珂通高 後醍院眞柱



系圖



(以上、欄、二二)

平田篤胤——真柱

平田篤胤門

〔欄三〕 三十七歳の時、後醍醐院家を嗣ぎたり。薩摩の藩士にして、稚き時より、學を好みけれども、父夙く歿し、家甚貧しかりければ、志を遂げてありけるが天保十年、三十五歳にして、始めて江戸に出て、平田篤胤に従ひて、學ぶこと一年、國に歸りて、暫く微職に服し居りけるを、藩主齊彬公、擢て、造士館の訓導となし、國書を講ぜしめらる。さるは藩士が當時、漢學をのみ力めて、國典に暗きを嘆きたまへばなり。其後同館の助教となり、後京に上りて、皇學所御用掛、同所の講官、大學校中助教、大助教、教部大録、日本紀取調掛、并に神名牒編纂掛、備中國吉備津神社宮司、兼、少教正を歴任す。(加藤雄吉氏)

〔慶著和〕日本紀訓點校正

神代山陵誌及圖考

參宮日記

にひひら

藤川紀行

### 上田及淵

生歿 住所

生 二四七九、仁 孝、文政二年、

歿 二五三九、今 上、明治一二年六、**目六一**、

生地 肥國前天草郡志岐村、**居** 初備中國窪屋郡酒津村、後備前國岡山街。

姓名

總叙

醫學を學ぶ志を古學に起す

學派

池田侯に仕ふ

明を失ふ

名幼名忠矣、**嬰**翁、

〔日本教育史資料五〕

肥前國天草郡志岐村、平井恭輔ノ二子ナリ。文政十一年、同郡高濱村醫師、上田公鼎ニ就キ、漢學及ヒ和漢洋折中醫術ヲ研究シ、傍ラ荷田大人、岡部大人、本居大人等ノ古道ノ著書ヲ閱シテ、大ニ感發シ、志ヲ古學ニ起シ、修業スル數年、天保六年四月、遂ニ上田公鼎養嗣子トナリ、同家相傳ノ眼科ニ習熟シ、其秘訣ヲ極ム。同九年、養父ニ隨從シ、居テ備中國窪屋郡酒津村ニ轉ス。同十二年六月、養父歿シテ遺業ヲ繼續シ、仁科白石ニ從ヒ、漢學ニ勉勵ス。又、笈ヲ瓦ヲテ京攝ノ間ニ遊學シ、平田篤胤ノ學派ヲ慕ヒ、皇典學ニ熟達シ、醫業ノ間隙ヲ以テ、皇漢ノ學ヲ自脩シ、終ニ其蘊奧ヲ究ムト云フ。嘉永四年、備前國岡山街ニ徙居ス。元治元年、舊岡山藩主、池田備前守茂政ニ事ヘ、儒員タリ。慶應元年九月、學校出仕、明治元年、藩命ヲ以テ、和氣清麿、兒島高德等ノ事跡ヲ調整シ、同年十一月、神祇官備勤ノ命アリ。同二年九月、本縣式内社取調ニ方リ、會、眼疾急劇、症ニ權リ、纒カニ三時間ニシテ失明ス。然レモ、多年苦學練磨、脩業ナルヲ以テヤ、明日ノモノニ授業スルニ至ル。其博學多識ナル知ルベシ。故ニ尙、文學ニ等教頭ヲ奉職ス。同八年十月、教部省ヨリ特命ヲ以テ、權大講義ニ補セララル。

(以上、日本教育史資料、五)

### 清宮秀堅

生歿 住所 姓名

生 二四六九、光 格、文化六年、

歿 二五三九、今 上、明治一二年一〇、**目七一**、

下總香取郡佐原村、

**通稱** 秀太郎、總三郎、利右衛門、**目** 穎栗、**嬰** 棠陰、**繆** 浦漁者、

上田及淵 清宮秀堅



系圖

(父) 清宮尙之 — 秀堅 — 堅直  
 (母) 田口氏 — 妻久保木氏 — 女某

(以上、古學、下)

總叙

〔古學下〕 祖父棠陰翁小傳

其父母

經濟に志す

地理に精し

著書

翁諱秀堅。字穎栗。小字秀太郎。後改總三郎。襲稱利右衛門。清宮氏。號棠陰。別號浦漁者。下總香取郡佐原村人。考諱尙之。號滄洲。好學而孝友。善詩及書。母田口氏。翁年甫四歲。母氏大歸。九歲喪父。獨依祖母鞠育。家產頗荒。翁黽衣糲食。拮据經營。家道漸復。少好學而無所師事。讀父遺書。刻苦勤精。近邑有久保木竹窓。以經學德行稱。常陸有宮本茶村。長詩文史學。翁皆就而質疑。其志在經濟。常與鄉人伊能德輝親善。年廿七。爲里正。二年辭職。邑主津田君。許署姓帶刀。及壯喪祖母氏。翁事祖母。愛敬篤摯。奉養無不至。至是悲哀不能措。刻其遺歌。終身誦之。天保十三年。津田君修家政。擢翁爲給人格。管其事。翁乃規畫數年。而金穀有贏餘。賜金及章服刀劍。賞其勞。後列士席。邑君之爲駿府加番。歷從半年。翁管津田氏財政。前後二十餘年。終始與德輝協心計畫。裨益不尠。屢被賞賜。終進物頭席。文久三年。水府浪士。劫掠四方。佐原尤受其害。村吏逃匿。翁與德輝挺身應接。入服其贖畧。尋堀田侯。代津田氏領佐原。討浪士。翁運糧食。差役夫。周旋甚力。侯賜書賞之。後又嘉賞其學業德望。許署姓帶刀。賜謁見。翁平素用心於地理。明治五年。印旛縣。召翁問地理。乃條陳之。六年。新治縣。徵翁爲地理編輯。許家居從。事。因歷訪匪徒。海上。香取三郡。著三郡小誌。明年辭職。翁晚補權中講義。著三條餘論。國體正論。及景教辨。此年翁捐私財。修道路。自木村至十七村。官賜銀杯。有詩紀之。八年。料理村事。首省冗費。其他多所釐革。官方改正地租。丈量田畝。翁雖老矣。矍鑠強健。自當其勞。戴星出入。督勸村人。散金數百圓。助其費用。佐原新田。廣袤數里。隣邑接壤。犬牙相錯。甚苦丈量。翁乃便宜交換其地。彼是便之。(下略)。

明治十九年九月

不肖孫立謹識

著書

- 〔同上〕 古學小傳 三 新撰年表 一 下總全圖 一
- 近世詩鈔 四 雲烟略傳 二 外史劄記 一

北總詩誌

一

三家文鈔

一

香取新誌

一

(以上既刻)

下總舊事考未刊 一〇

横山由清

生歿

生 二四八六、仁 孝、文政九年、

歿 二五三九、今 上、明治一二年一二三、四五、四、

居住 東京、園谷中天王寺墓地、

系圖 ○桂子屋 — 養由清保三 碩

學統

(學國) 本間游清 —

伊能穎則 — 由清

桂 子 —

(和歌) 井上文雄 —

經歷

大學中教授、元老院少書記官に累進し、從六位に叙せらる。

(以上、忌辰、上。慶著、和)

著書

- 〔慶著〕皇位繼承編 一〇 纂輯御系圖 二 刑法篇 四
- 戶籍篇 二 田制篇 二 住居篇 三
- 貸借篇 六 質物篇 二 後見人篇 一

横山由清

一五三九



商法篇	二	皇權篇	一	後宮篇	三
勳位考	一	元服沿革	一	佩刀沿革	二
繼嗣法略	一	婚禮通考		本朝戶口考	
食貨志略		日本人種論		上古賣買起源	
流刑舊例		貨幣度量權衡考		歷朝政治沿革史	
活語自他捷覽	一	尙古圖錄		魯敏孫漂流記	

### 近藤芳樹

生 歿  
住 所  
姓 名  
系 圖  
學 統  
經 歷

生 二四六一、光 格、享和元年五、  
歿 二五四〇、今 上、明治一三年二、二九、**目八〇**、  
**生地** 周防國岩淵、**居住** 東京、**園** 青山墓地、  
**通稱** 晋一郎、初田中原吾、**寄居** 子庵、  
芳樹——芳介——久敬  
(國學) 本居大平——芳樹  
(律令) 山田以文——  
〔續日本歌學全書二〕 毛利敬親卿に召され、明倫館の教官となり、明治八年九月、官内省に仕へ、

(以上、續日本歌學全書、一一)

著 書

文學御用掛に任ず。九年、東國行幸に供奉し、十一年、北陸行幸に仕へ、十符の菅薦(四册)陸道の記(二册)を記し、又皇后宮の仰によりて、明治孝節錄(四册)を著す。本居豐穎翁の撰みたる碑文あり。  
〔慶著和〕大祓執中抄 二 標註令義解校本 六  
源語與旨 一 和歌類題風月集 二 標註職原抄校本 六  
古三體考 一 十符の菅薦 四 冠禮考 二  
婚禮考 二 大江匡房傳 一 征韓起源 二  
類題雪間の若菜 六 寄居歌談 五 陸路廻記 二  
薰風集 二  
〔編者補〕淫祠論 一

### 僧辨玉

生 歿  
住 所  
姓 名  
總 叙

生 二四七八、仁 孝、文政元年、  
歿 二五四〇、今 上、明治一三年四、二五、**目六三**、  
**生地** 江戸淺草、**居住** 下谷清徳寺、芝増上寺、神奈川三寶寺淨土宗、  
**姻大熊氏** **俗名** 鐵之助、**法名** 辨玉和尚、慶阿上人、  
〔柵一四〕 我東國之人。資性輕薄。雖有才慧。不能耐事。故於商賈亦難成業。况於技藝乎。余之舊識僧辨玉者。久寓芝山。與余來往相熟。然不知其善國歌。不知其爲東京之人也。一別杳然。絕無信息。側聞其隱

(以上、柵、一四)



守部門

棲于神奈川。又聞善歌之名。余欲訪之。而事業倥傯。不得命駕也。庚辰四月二十五日。溘然頓逝。現六  
十三年。其徒某。具小行狀。而請余碑文。余閱之。則辨玉爲東京淺草之人。大熊卯八之次男。幼稱嚴之助。  
十歲役於下谷清德寺。就大潮和尚。受戒。既長。而梵誦之餘暇。入橋守部之門。而學和歌。又接先輩  
定玄東平。以傳承歌法。殆經十六年。是故得臻妙域。而四方來學者。得數百人。嗚呼。東京之人。而成此偉  
藝。豈不奇哉。豈不奇哉。辨玉長在芝山僧寮。意住檀林。而披香紫。至于其極。則可董增上智恩。大刹。而著  
朱緋。此段榮則榮矣。然較之善歌不朽之名。則固不待言也。今春既已建碑。又無幾。而當刻歌集也。辨玉  
之靈。含笑于泉下。可知耳。余於東京。會與善歌人締交。其尤者爲游清遊翁文雄。此三人住京之故。其名  
赫矣。然至于伎倆。則未勝辨玉也。今時現存之歌人。碌々不足數耳。余謂辨玉若住東京。則其來學之多。  
不止於數十百人乎。抑辨玉愛神奈川之佳景。而不欲住東京也。可謂清矣。可謂高矣。余欽仰之餘。乃  
爲之銘曰。

神奈川濱 隱殆三紀 梵唄纒終 古歌便起 唯娛水石 豈念桑梓  
玩東海光 契西行旨 齡欠修遐 名數遠邇 此勤貞珉 不朽足特  
維時明治十六年。歲次癸未春三月。東京下谷隱士。秋山大沼厚撰并書。

### 高橋熊彦

總叙

〔言語學雜誌三〕 殘夢の子にして、父と同じく景樹の門に入り、萱園と號す。大坂淀屋  
橋筋に住み、時計修覆を營みて、明治十三年八月三十日歿す。

(參照) 高橋殘夢——一二七七頁。

### 渡邊重蔭

生歿

生 二四五二、光 格、寛政四年一〇、一八、  
歿 二五四一、今 上、明治一四年二、五、  
目九〇、

渡邊重蔭は重名の子なり。寛政四年壬子十月十八日生る。年十九にして家を續ぐ。文化八年七月  
從五位下に叙せられ、越後介に任ぜらる。重蔭、拮据勉勵、重名の後を承けて家學を奉じ、家道を振  
興しき。男重春、龍田神社大宮司に任ぜられたるを以て、大和國平群郡立野村に僑居する事數年。  
明治十四年二月五日、該村にて卒す。享年九十歳。同村今井の山上に葬る。重蔭また、咏歌に敏捷、咄  
嗟口を衝いて發す。辭世に、

こゝも亦、同じみくにの、内なれば、旅に死ぬとは、思はざりけり。  
子重春、重石丸あり。(以上、渡邊重兄氏寄)

### 高畠式部

生歿

生 二四四五、光 格、天明五年、  
歿 二五四一、今 上、明治一四年五、二八、  
目九七、

〔續日本歌學全書二〕 高畠式部は、幼名をとみといふ。大阪の醫師、石井某の女にて、千種家、家來  
針醫、高畠清音の妻となりぬ。天明五年に生れ、明治十四年五月二十八日に歿す。享年九十七歳。京  
都東山長樂寺に葬りぬ。歌は、香川景樹翁に、翁歿後、千種有功卿に、琵琶は綾小路有長卿に、笙は林  
廣守の父に、大曲傳授す。足柄の傳も書は庭田從一位に、茶は速水宗匠に學びて、いづれも、其奥儀  
を極めたりき。又彫刻にも、畫にも達したりといふ。刀自の嗣なる高畠千畝氏の筆記による。  
歌は、夢の舍集の外、蓮月式部二女歌集に、いさゝか見ゆ。また論語の章句を歌によまれし、かたみ  
の賦一卷あり。こは明治三十年の春、刀自が十七回忌に、千畝氏の刻せられしなり。家集上木後の

歌集

高橋熊彦 渡邊重蔭 高畠式部



詠草は、千五百餘首ありと云ふ。

### 渡 忠 秋

生 歿

生 二四七一、光 格、文化八年二、一〇、

住 所

歿 二五四一、今 上、明治一四年六、五、  
生 地 近江、**居** 京都、**園** 南禪寺中天授庵、

姓 名

**本姓** 鳥居氏、**通稱** 新太郎、**園** 楊園、**桂蔭** 宗嵐居士、

系 圖

○鳥居政舍——忠秋——忠純

雜 載

〔柵 四〇〕 先生、諱忠秋、號楊園、考諱政舍、近江人。至先生、移住京師。其先鳥居氏、住三河渡村。因爲姓渡

墓誌

壽藏碑

或曰、先生、學歌道於香川桂園翁。遊事故右府三條公、其爲歌也、孰厚雅正、旨藹然乎言外。是以世之嚮慕其風者、爭而師之。至稱一世歌宗。朝廷聞其名、徵仕宮內省。後以病致仕、特旨叙正八位。初先生、愛嵐峽堰水之勝、卜地於妓王寺新田左中將社傍、自建壽碑、勸歌一首、碑陰以示終焉意。蓋追慕左中將故址也。延元中、亘忠景、從左中將於難險之際、左中將亡後、足利氏管轄天下、故其徒、秘跡息影。復匿三河。長享中、移近江舟木村、稱渡太郎左衛門。然而渡氏之弗顯於世、蓋五百有餘年矣。夫前世有忠義之行、者、子孫必有顯者焉。今先生以歌道顯於世者、固不爲無謂矣。先生所著有桂蔭集、讀史有感集、先入抄、及妍哉抄等、因亦自號桂蔭宗嵐居士。以文化八年二月十日生。年七十有一。明治十四年六月五日歿。遺言葬于南禪寺中天授庵。先生娶族家女、生一男、曰忠純。銘曰。

天生若人。

湖山鐘秀。

忠義遙貫。

歌林領袖。

〔柵 四一〕 京都妓王寺なる壽藏碑には、表に、のちの世も、またゆめならば花にとぶ、さかの蝶と、われはなるらん。

明治三年秋忠秋六十歳書

著 書

〔慶著〕讀史有感集

先入抄

妍哉抄

桂蔭集

### 榊原芳野

生 歿

生 二四九二、仁 孝、天保三年、

姓 名

歿 二五四一、今 上、明治一四年一、二、四、  
通稱 高藏、**園** 琴洲、**高齋**、**櫻舍**、

總 叙

〔譚海 四〕 那珂通高、榊原芳野、合傳

(依田百川氏)

博識

性行

發狂

榊原芳野、號琴洲、通稱高藏、江戸之人。小心謹慎、精國典、博覽多識、朋友相會、談及一難義、必曰、是非、那珂先生、不能知、不則榊原君、若二君、不知、天下無復可問之人矣。其爲人所信如此。芳野父曰、爲謙、善俳歌、母某氏、讀書善國雅、教芳野甚嚴、芳野奉訓、刻苦甚昂、業成、以其所得授徒、然家素貧、其在木所、屋壞雨漏、適客至、張傘而坐、不以爲意、又近世朝服、循洋式、人多剪髮、不結、芳野固守不剪、常服用白、外袴、緣人或擲、揄之不顧也。中興初、入仕大學、遷文部、同梧樓數輩、修古事類苑、俸錢所入、舉以購書、所藏數十卷、歲甲戌遭災、不存片紙、再蒐數年、至七千餘卷、而自經史子集以下、雜錄傳記、諸曲、俚詞、無一不備也。性謹飾、雖好酒、畧無醉容、而梧樓則飲量甚洪、不審書冊、其相反如是。芳野後於梧樓五年、忽發狂、居動無常、然與人談、古典、旁引博證、無一差訛、施及人事、則癡狂如故。居歲餘而歿、無嗣。友人大槻修二、文彦兄弟、經紀喪事、納其藏書於書籍館、蓋芳野之志也。

渡忠秋 榊原芳野

一五四五



著書

- 〔參照〕 那珂通高の條下——一五三四頁。
- 〔慶著〕 太古史略 五 文藝概略 一 文藝類纂 八
- 小學讀本 八 詩繪集說 一 醫油集說 一

村山松根

生歿

生 二四八二、仁 孝、文政五年九、  
 歿 二五四二、今 上、明治一五年一、四、  
 日六二、

總叙

〔柵一八〕 君諱松根、樺山資滿第三子。鹿兒嶋藩士也。幼字三之助。年十八。出嗣木村氏。改稱仲之丞。嘉永二年。藩内黨與之變。幽囚經歲。脫檻遁之。筑前。竊謀除奸黨。百方辛苦。未嘗一日寧處。變名北條右門。及四郷氏獲罪。君亦謫於姫島。乃糞笠釣竿。以自給。既而召還。改稱村山齊助。爲京師留守居副役。專參機務。後爲中川宮御附。昇供頭。轉京都藩邸作事奉行。爲近衛家典用人。格董其家事。戊辰一月。伏水戰起。大坂藩邸。金穀告乏。君盡力周旋措辦。入其服。才幹。後歷諸職。至於廢藩。任松原神社祠官。改名松根。又轉霧島神社少宮司。無幾。拜宮内省九等出仕。爲梨木宮家令。明治十年。本省官制之改。更補御川掛梨木宮御附。准奏任官。後爲西京華族歌道師範。特旨叙正七位。君以文政五年九月生。以明治十五年一月四日歿。葬于紫野聚光院。享年六十一。

〔柵一五〕 翁、姓は神門區。幼名磐二郎。稍長じて富得と稱し、後ち、文太夫、又、三千雄と改め、然後實名、守手を以て通稱となす。先是、實名を守正とも稱せり。號して西涯、甲文丘、カメナカ、又、鼎山と云ふ。元と出雲國飯石郡里坊村住、永井氏の二男なりしが、十三歳にして、中村守臣の養子と成れり。幼にして皇學、井和歌、音韻の義を守臣翁に學びて、遂に奥處を窮め、儒學は尾張の藩士秦世壽(ヨ)、ホギ氏に就て學ぶ。其他、易學、軍學、茶道、本草、生花等に精し。翁天質溫和、達識にして物に於らず。明治二年、學識拔群なるを以て、出雲大社中より、舊松江藩に聘せられ、格式譜代士に列し、修道館學校教授を命ぜらる。十年十二月、熊野神社宮司に復任し、十四年、兼權少教正に補せらる。安政年間、尾張大納言の特遇を蒙り、屢、金鱗城に登りて、聊に謁す。且つ恩賜あり。

維新前、四力に奔走して、大に勤王を唱ふ。舊松江藩に聘せられてより、松平侯の指南役となり、毎に侍候して、皇典を講じ、數々恩賜あり。又嘗て、尾張に於て、學舎を開き、門生を教授し、皇學を擴張す。其他、神教に關し、力を盡し、こと夥からず。著書數十卷あり。門人凡そ千を以て數ふ。翁、文政三年二月十二日を以て生れ、明治十五年二月四日病死す。時に齡六十三歳なり。島根郡奥谷山に葬る。追諡して、龜岡廼幸大人といふ。(空中樓主)

景恒及知紀門

中村守手

生歿

生 二四八〇、仁 孝、文政三年二、一二、  
 歿 二五四二、今 上、明治一五年二、四、  
 日六三、

住所

出雲國飯石郡里坊村、島根郡奥谷山

姓名

磐二郎、文太夫、西涯、甲文丘、鼎山、龜岡廼幸大人、

總叙

〔柵一五〕 翁、姓は神門區。幼名磐二郎。稍長じて富得と稱し、後ち、文太夫、又、三千雄と改め、然後實名、守手を以て通稱となす。先是、實名を守正とも稱せり。號して西涯、甲文丘、カメナカ、又、鼎山と云ふ。元と出雲國飯石郡里坊村住、永井氏の二男なりしが、十三歳にして、中村守臣の養子と成れり。幼にして皇學、井和歌、音韻の義を守臣翁に學びて、遂に奥處を窮め、儒學は尾張の藩士秦世壽(ヨ)、ホギ氏に就て學ぶ。其他、易學、軍學、茶道、本草、生花等に精し。翁天質溫和、達識にして物に於らず。明治二年、學識拔群なるを以て、出雲大社中より、舊松江藩に聘せられ、格式譜代士に列し、修道館學校教授を命ぜらる。十年十二月、熊野神社宮司に復任し、十四年、兼權少教正に補せらる。安政年間、尾張大納言の特遇を蒙り、屢、金鱗城に登りて、聊に謁す。且つ恩賜あり。

維新前、四力に奔走して、大に勤王を唱ふ。舊松江藩に聘せられてより、松平侯の指南役となり、毎に侍候して、皇典を講じ、數々恩賜あり。又嘗て、尾張に於て、學舎を開き、門生を教授し、皇學を擴張す。其他、神教に關し、力を盡し、こと夥からず。著書數十卷あり。門人凡そ千を以て數ふ。翁、文政三年二月十二日を以て生れ、明治十五年二月四日病死す。時に齡六十三歳なり。島根郡奥谷山に葬る。追諡して、龜岡廼幸大人といふ。(空中樓主)



### 羽田野敬雄

生歿

生 二四六一、光格、享和元年、

住所

三河國渥美郡羽田野、

姓名

源氏、**通稱**常陸、**字**榮木、

學統

平田篤胤——敬雄

花田文庫

著書

〔大日本人名辭書〕羽田野の里なる神明宮、及八幡宮等の祠官たり。少時より學を好み、古典を攻究し、刻苦勵精して、學業大に進み、其名世に著はる。性篤實にして、ものと競はず。衆人其徳に服せり。明治元年の冬、皇學所御用掛を命ぜられ、尋て講官となり、又力を宣教の事に盡せり。明治六年十月權大講義となり、十四年十二月、權少教正に進む。敬雄曾て庭中に文庫を築きて、書を蔵し、花田文庫と號す。其數積んで二千五百十五部にして、一萬三百七十七卷の多きに達せりと云ふ。  
〔慶著和〕三河國官社私考一

（以上、大日本人名辭書）

### 平田鏡胤

生歿

生 二四六一、光格、享和元年、

歿 二五四二、今上、明治一五年一〇、二五、**目**八二、

住所

生地 伊豫新谷、**居住**東京本所柳島横川町、**園**淺草橋場總泉寺、

姓名

**通稱**内藏介、後大角、**字**初篤眞、後鏡胤、

系圖

平田篤胤の系圖を見よ——一—二頁。

先人歿後門人

〔玉禪一〕父君御在世の門人、及び御歿後の入門の員は、既に上に記せり。斯て、御一新後、去し戊辰の春の初より、今年己巳の六月末まで、西京及び此地にて、入門の人々、合せて一千四百二十四人なり。但右は己れ門人といふことにはあれど、鏡胤不肯、自ら學び得たりと思ふ事一つもなく、皆先考の遺教を傳ふるのみ。夫故に其由申し断りて、悉く先人歿後門人とは稱するなり。  
明治二年七月中旬、東京表三番町の旅館にて之を記す。  
從六位侍講兼大學一等教授 平朝臣鏡胤

（以上、國學家略傳）

經歷

（參照）氣吹舍門人錄——本書卷末に載す。

〔國學家略傳〕伊豫新谷藩士、碧川某の子にして、文政七年正月十五日、平田篤胤翁の養子となる。明治元年二月、參典神祇事務局判事に任ぜられ、後、内國事務局判事に遷る。二年正月、侍講となり、全七月、大學大博士に進む。三年六月、職を辭し、十二年二月、大教正に補せらる。鏡胤父の業を繼ぎて、其名世に高く、來て弟子たらんことを乞ふ者、陸續絶えず。其數、無慮四千人の多きに及ぶと云ふ。

### 物集高世

生歿

生 二四八三、仁孝、文政六年、

歿 二五四三、今上、明治一六年二、二、**目**六一、

羽田野敬雄 平田鏡胤 物集高世



住所  
姓名  
系圖

豊後國杵築

通稱 丈右衛門 菴葎屋

高世——高見文學博士

其師

赤貧

述懐歌

著書

〔日本教育史資料五〕 物集高世、丈右衛門ト稱ス。杵築ノ商人ナリ。藩ノ儒士元田百平ニ從ヒ、漢學ヲ受ケ。又豊前企救郡定村直好ニ就キ、神典歌道ヲ學ブ。慶應四年、豊前宇佐學館ノ招キニ應ジ、神典ヲ教授ス。同年五月、舊杵築藩ヨリ命セラレテ、神官教授方、并、國學教授トナル。明治二年、朝廷ヨリ神祇官宣教使拜命。之ヨリ先キ藩主命ジテ士族ニ列ス。同三年一月二十七日、宣教權少博士トナル。同十六年二月二日卒ス。高世、爲人清廉ニシテ求ル處ナシ。篤ク學ヲ好ム。嘗テ故アリ、破産シ赤貧洗フガ如シ。其子ヲ教育スルヤ、燈火ノ資ナシ。松根ヲ燒キ明ヲ取リ、以テ書ヲ講ズ。當時頗ル世人ニ嗤笑セラル。而シテ毫モ意ニ介セズ。恰モ其貧ヲ知ラザルモノ、如シ。述懐ノ歌ヲ詠ジ、壁間ニ掲ケ。歌云、なにせんに、玉の臺も、葎生に、心やすくて、我はすみてん、葎生ハ號ナリ。以テ其志ヲ知ルニ足ル。最モ歌ヲ能クス。言辭ノ浮華ヲ去リ、眞ノ感情ヲ賞ビ、一家ノ風ヲ成ス。世人普ク知ル處ナリ。又中年ニシテ、我邦言語ノ學、未ダ明ナラザルヲ憂ヒ、慨然トシテ自ラ任ジ、普ク古近ノ書ニ涉リ、潛思研究スルコト、數十年ニシテ、遂ニ先學ノ誤ヲ正シ、自ラ發明スル處頗ル多シ。就中、互爾乎波ノ格ヲ定メタルガ如キハ、實ニ此人ヲ以テ嚆矢トス。

〔同上〕 說教話柄 一 邪教拔萃 一 口辭格考 二  
 本言考 一 神道本論 五 耶蘇叢書 一  
 十七問題辨說 一 岩崎八幡宮由來記 一 世界轉覆論稿 一  
 熟語彙 一 奈多八幡宮詳細記 一 外教秘書 一  
 教義之說 一 消息文梯 一 玉かつら 一

(以上、日本教育史資料、五)

生歿  
系圖  
雜載

宣教講本 一 宣教追加 一 葎屋文集 一  
 葎屋家集 一 說教本稿 一 文珠詣之記 一  
 祈禱文章 二 本教諄辭 一 神道餘論 一  
 神學百歌 一 神學指要 一 妖魅論 二  
 〔編者補〕 辭格考抄本 二 歌學新論 一

### 畠山如心齋

生歿 二五四三、今 上、明治一六年六、二七、  
 系圖 常操——某——如心齋  
 雜載 祖父常操の業を繼承して、故實に精し。

(以上、忌辰、上)

### 村上忠順

生歿 二四七三、光 格、文化一〇年、  
 系圖 二五四三、今 上、明治一六年、  
 雜載 忠順國承卿、蓬蘆、

(國學家略傳)  
(詠史河漢歌集)

畠山如心齋 村上忠順



系圖

忠順三河刈谷藩——八千代  
三千代同藩

(同書作者姓名録)

著書

〔河藻歌集〕蓬廬村上翁著撰書目

古事記標註	三	散木棄歌集標註	四	名所栞	一一
類頭玉藻歌集	三	類題玉藻集二編	三	類題菅藻集	三
嵯峨野歌集	二	千代の古道集	二	詠史河藻歌集	二
元治元年千首	一	雅語譯解拾遺	二	喻草	一
標註新葉集	四	標註金玉集	一	三鳥考	一
蓬之柚	三	蓬之門	三	言之幸	
三河雜鈔	五				

猿渡盛章

住所  
系圖  
學統  
經歷

武藏國府中、  
猿渡盛遠二十八世——盛章——容盛——盛愛  
小山田與清——盛章  
府中、大國魂神社の祠官、近江守。

(以上、續日本歌學全書、一一)

著書

〔慶著〕神代俚談 三  
〔續日本歌學全書二〕 縦の下枝

總社或問

武藏總社誌

三

猿渡容盛

生歿

生 二四七一、光格、文化八年五、  
歿 二五四四、今上、明治一七年八、八、目七四、

(以上、續日本歌學全書、一一)

住所  
系圖  
經歷

東京、後武藏國北多摩郡府中町、  
猿渡盛章——一五五二頁を見よ。  
〔續日本歌學全書二〕 明治二年八月、大學中助教に任ぜられ、十一月、諸陵允、兼宣教少博士に任ず。のち諸官を經、專ら諸陵の事務を掌りき。同十二年、職を辭し郷に歸りて、老を養ふ。

吉村春峰

總叙  
著書

〔慶著〕稱嘉之助、土佐國吾川郡人、明治十七年歿。  
大和國榮山寺官符代々國判二  
大和國安居三時勤行云々經部一

土佐國群書類從 一九七

猿渡盛章 猿渡容盛 吉村春峰

一五五三



### 吉川樂平

生歿

生 二四七六、光 格、文化一三年九、

生歿

歿 二五四五、今 上、明治一八年六、一四、**目七〇、**

住 所

**生地** 尾張名古屋、**居** 東京、**園** 下谷金杉上町萬德寺、

姓 名

**號** 柿園、**法號** 積善院博譽兼濟樂平居士、

學 統

植松有信、**樂平**

經 歴

富樫廣隆

著 書

明治の初年、東京に出て、女子高等師範學校の講師となり、國語教授法を研究せり。其墓は、下谷區上金杉町の萬德寺にあり、碑面に「**吉川樂平之墓**」と刻し、碑陰に、

先君以文化十三年九月某日、生于尾張名古屋、以明治十八年六月十四日、卒于東京、享年七十。諡曰積善院博譽兼濟樂平居士。

とあり、其傍に「吉川登紳之墓」といふあり。裏面に「教善院貞譽博愛妙樂大姉」とあり。これ、その室なるべし。

不肖女 若菜 泣血建之

國語教授法 五 國語教授式捷徑 一 (以上、全篇編者見聞録)

### 久保季茲

生歿

生 二四九〇、仁 孝、天保元年五、一二、

生歿

歿 二五四六、今 上、明治一九年三、五、**目五七、**

住 所

東京、**園** 谷中墓地。

姓 名

**本姓** 源氏、**通稱** 鎮吉、**玄貞**、**號** 琴書、杉乃舍、杉庵居士、玉甌道人、水玉老人、鹿住里人、**諡** 道隈豐

系 圖

開別大人、

總 叙

○德 潤 季茲 惠鄰

官職

母德永氏、**〔國學家略傳〕** その考、名は德潤、妣、德永氏、家、世々、徳川幕府の醫員なり。季茲、人と爲り、沈黙寡黙、幼より多病、常に、藥餌を廢することなし。然れども、性好て書を讀み、夜以て晝に繼ぎ、病痼に苦むも、手なほ卷を釋てず。初め、漢籍、及醫術を家庭に學び、後幕府の醫官、矢部泰安に従ふ。十歳にして父を喪ひ、母の蕭陶を受く。母氏、深く神道を信じ、皇學の衰頹を憂ひ、國典を研究せんことを勤む。年十五、始めて、古事記傳を讀み、大に悟る所あり。專心を國典に潜め、益研究して、忘らず。弱冠なる時、豐後の人、鶴峰、戊申を邸中に置きて、悉曇及籌算を學ぶ。故を以て、世人鶴峰の門人となす。雖も、季茲、毎に曰く、悉曇、籌算は、實に戊申を師とす。皇學に於ては、素より、常の師なし。然れども、斯の學を研究し得たるものは、古事記傳の實なり。若し、強て、予が師を問はば、古事記傳なりと答へんのみと。嘉永以來、國事紛擾なるに當りて、季茲、毎に皇室の式微を歎き、俗吏の專横を憤り、切りに、尊王の大義を唱導して、大に幕吏の忌諱する所となる。慶應三年、幕府の政權を奉還するや、季茲、暇を請ひて、歸田し、武藏國入間郡なる下新井に隱退す。後、靜岡に歸藩し、士族に列す。明治元年十二月、朝廷召して、神祇官の書記となす。果進して、大學大助教となり、宣教權中博士、教部省出仕を兼ね。後、又、皇典講究所の設立せらるるや、文學部の教授を擔當し、專力を生徒の養成に盡した

吉川樂平 久保季茲

一五五五



病歿

リしが、明治十九年三月五日、病を以て卒す。享年五十七。東京谷中の墓地に葬る。私に諭して、道隈豊開別大人と云ふ。

著書

〔慶著和〕古語拾遺講義

三種神寶論

稜威口誥

神德略述頌

古道訓蒙頌

祝詞略解

萬葉山常百首解

洋教辨略

杉菴雜攷

〔編者補〕神武天皇紀講義一

大日本史補

### 飯田年平

生歿

生 二四七〇、光格、文化七年

歿 二五四六、今上、明治一九年六、二六、至六七

〔生地〕因幡國氣多郡寺内村、居住東京、園東京青山、

通稱 七郎、關石園、

勝幸——信秀——秀雄——二年平

學系

本居大平——

伴信友——一年平

加納諸平——

(以上、欄、一九)

經歷

大平及び諸平に學ぶ

〔欄一九〕世々、加知彌神社の祠宮にして、父秀雄は、梓齋と號し、衣川長秋、本居大平に古學を受け、尤も歌詠をよくす。翁、生れて聰敏にして、歌才あり。五六歳の時、母白岩氏、古今集を教へしに、背誦一句を誤らざりしといふ。十四歳の時、和歌山に赴き、本居大平を師とせしが、數月ならずして、大平歿す。時に加納諸平、紀藩に在り。才學秀絶の名高かりしかば、之に就きて歌學を修む。當時の歌

暮るとあくと、めがれぬ梅の、匂ひかも、あかつきことに、あらたまりつゝ。

歌人三平

病歿

逸話

天下を歴遊して、名勝舊跡を訪ふ

朽にける、梢と見えし、やまがきの、風やどすまで、しげるころかな。

といへるなどは、諸平の尤も稱賛せし詠なりとぞ。後數年にして、郷に歸る。これより屢、和歌山に往來し、又、伴信友に従ひ、古道を問ふ。然れども、家貧しくして、資に乏しく、永く一所に留まる能はざりしが、志業挽むことなく、才藻日に加はり、遂に諸平、及び、石川依平と共に、歌人三平の稱あるに至れり。斯くて萬延元年三月、藩主池田侯、辟して、祿を賜ひ、士班に列し、國學所の教授となす。後命を奉じ、小谷古陸等と、伯耆志を編輯せり。明治維新の後、徵士となり、史官に拜し、尋て神祇大史に任じ、從七位に叙す。既にして神祇大錄式部大屬等に歴任し、十二年九月、病を以て職を辭し、更に式部寮御用掛となり、十六年三月、特旨を以て正七位に叙す。十九年二月、非職となり、六月、病革る。同廿八日、又、特旨を以て從六位に叙せられ、即日卒す。年六十七。著す所、訂正祝詞式、祝詞捷徑、新姓氏辨、啓蒙大旨、駁異外患通論、石園歌話、石園集、同續集、石園隨筆等あり。翁、終身娶らざりしかば、子なし。片山某の子を養て、嗣となすと云ふ。

〔同上〕一、翁少くして、漫遊を好み、諸國を廻りて、遍く名勝遺蹟を探り、傍ら名流の門を叩く。其間幾多の辛酸を嘗むるも、泰然として憂愁を歌詠に附す。嘗て近江篠原に至り、身體疲勞せしも、囊底を拂ひ盡して、如何ともする能はず。路傍に困睡して歌あり。

長閑にも、あらぬ心を、をり／＼は、かすめてけりな、松の月かけ。

又攝津湊川を過ぎ、楠氏の墓に詣て、

これやこの、人の涙の、湊川、いくよかなしき、わたりなるらん。

越前金崎を経ては、新田氏の墳を叩ひて、



歌風

都邊の花ともちりて消えはてし、越路のゆきの、惜しくもあるかな。  
二、翁の歌は記紀萬葉を根元となす。風調蒼勁典雅、寧樂の響あり。文は延喜式、祝詞を本宗となす。職を式部に奉ずる十餘年間、宣命祝詞の草案、翁の手にならざるなし。明治四年十一月、今上の大嘗會を行はせらるゝの時、命を奉じて、主基方の歌を作る。

清貧

主基方の歌  
なくはしき、蓬が鳥は、君が代の、ながきあがたの、神やつくりし。  
是は安房國長狹郡蓬島を詠せしなり。

伴林光平と兄弟の交を結ぶ

三、翁人となり、樸野恬淡にして、物に拘らず。性飲を嗜み、生産を事とせず。稜々山骨を帯ぶ。常に腋細袍を衣、釜甌屢空しけれども、晏如たり。或歳の除夜、負債を促らるゝと、殊に劇しかりしも、戸を閉ぢ、自若として戀歌百餘首を作り、或は貧乏歌五十首を詠じて、辭物の氣を遣るなど、襟度の一斑を窺ふべし。平素酒を得ざれば、蓋爾凍蠅の如きも、酒を被り、氣熱すれば、談論風生し、戲語百出す。忽ち起て角觚の状をなし、忽ち坐して俳優の聲を擬す。人目して青天の霹靂と稱せりとぞ。  
四、伴林光平は、奇節の士にして、河内の人なり。初め眞宗の僧侶にして、大雲と稱し、攝津に在り。會ま鹿野光輪寺の僧侶、無蓋伊丹に來り、古學を講ず。無蓋は、翁の父樟齋に從學せし者なり。大雲、其説に感じ、無蓋と共に、因幡に赴き、樟齋に師事し、古學を受く。深く翁の人と爲りを喜び、結んで兄弟となる。大雲曰く、余未だ還俗する能はざれども、姓名なかるべからず。子幸に之を擇べと。翁曰く、聞く、君の郷に、伴林神社ありと。蓋し君も其氏子ならん。宜しく之を姓とすべし。且僕の名は、年平にして、七郎と稱す。君既に長にして、推して兄となす。六郎光平とせば、如何と。大雲喜て之に從ひ、遂に佛教を斥け、還俗し、陳雷の交、最も深かりしといふ。(十百舎)

著書

〔慶著〕祝詞式

祝詞式捷徑

新姓氏辨

啓蒙大旨

馭異

外患通論

石園歌話

石園隨筆

石園集

### 近藤眞琴

生歿

生 二四九一、仁孝、天保二年、

總叙

歿 二五四六、今上、明治一九年八、四、  
〔國學家略傳〕眞琴は、幼名を鑄之助と云ひ、後、芳隣と稱す。志州鳥羽の藩士なり。蘭學、數學、國學に精通す。徳川幕府に召されて、海軍教授となり、維新の後、海軍兵學校一等教官に累進し、正五位に叙せらる。公務の餘暇、攻玉塾を開きて生徒を教授し、又、假名の會を創設す。博學多通にして、數學、航海術に關する著書殊に多し。

假字の會

著書

〔編者補〕ことばの園 六

### 權田直助

生歿

生 二四六九、光格、文化六年一、一三、

住所

歿 二五四七、今上、明治二〇年六、八、  
〔生地〕武藏國入間郡毛呂本郷、  
〔居住〕相摸大山、  
〔同〕大山町赤松山麓、

姓名

名 直助、  
〔隱名〕越舎、

系圖

○休立——直教嘉七——直助——  
年助——一作  
女二人

近藤眞琴 權田直助



學統

(醫術)野間廣春院將軍侍醫

(漢學)安積良齋

直助

(以上、名越舍先生履歷及碑文)

(國學)平田篤胤

經歷

〔名越舍先生履歷〕

名越舍先生履歷抜粹

(逸見伸三郎氏)

平田門に入る

先生は、武州入間郡毛呂本郷の生にて、父を權田嘉七郎と云ふ。文化六年正月十三日生る。家世々、醫を以て業とす。年十五にして江戸に出て、幕府の侍醫、野間廣春院に従ひ、漢方醫道を學び、兼て安積良齋に通學し、漢學を修む。年廿二の時、業成て郷里に歸り、絶て久しき木朝古醫道を起さんとして、標を其門前に掲げ、一家を爲すと云ふ。

天保八年三月、伊吹舍翁の門に入る。文久二年十一月、五條家の召に應じて上京す。是より先、數々其筋より召され、又自らも上京して、世の爲になす所あらんと思はれしが、母上孝養の爲、其の志を果すと能はず。然るに此年、母上逝去せられしかば、終に斷然袂を拂て途に就かれ、五條家に至り、大に眷遇を蒙られ、東西二京の間に奔走して、天下勤王の士を鼓舞せられたり。時に醫業を廢されしは、人病は猶小也、國病は甚大也とてなり。〇慶應四年二月、落合直亮氏と共に、某公の内命を承けて、東下せんとせられたり。時に同志の者曰く、去冬某邸の事件より、大に東方の嫌疑を受け、其危きも、矢石に向ふよりも甚し。若し已むを得ずして關を越ゆれば、一日の無事を保つべからずと。先生答て曰く、余全く天下の大事に係る。假令死すとも辭す可からずと、遂に意を決して東行し、百方賊地の内情を索り、再び上京して復命せられたり。〇明治二年正月、白川家の學館を預り、皇學を教授す。同年二月、刑法官監察司知事に任ぜられ、五月、御用を以て東下す。七月、木官を以て上京仰付けらる。此の月、大學中博士に任ぜらる。十月、從六位に叙せらる。皇漢醫道御用掛を仰付けらる。十二月、木官を免ぜられ、更に醫道御用掛を仰付けらる。〇四年四月、故有て職務を免ぜられ、位記返上す。〇六年七月、縣社阿夫利神社祠官に任ぜらる。八月、兼大講義に補せらる。〇八年一月、少教正に補せらる。〇九年六月、神奈川縣神道事務分局長擔任。〇十年四月、權中教正に

官歴

雜載

病歿

性行

補せらる。〇十二年二月、權大教正に補せらる。十一月、三島神社宮司に任ぜられ、阿夫利神社祠官を兼ねらる。十二月、正七位に叙せらる。〇十三年三月、伊豆國神道分局長擔任。〇十四年三月、願に依て三島神社宮司を免ぜらる。十二月、籍を大山に移し、終焉の地と定めらる。〇は門人並に氏子等の乞によりてなり。〇十五年九月、神奈川縣皇典講究分所委員を申付けらる。十一月、皇典講究所文學部教授を申付けらる。〇十七年六月、神道事務局諮詢申付らる。十月、神道本局顧問。此の月、大教正に補せらる。十一月、神道本局編輯掛擔任。〇二十年四月、一等學正に叙せらる。

〔同上〕 先生嘗て、本年は上京して、大に爲す所あらんとせられしに、猶三月中、神道管長より上京すべき旨、達せられしかば、病中ながらも、其の準備をなされたり。先生の病は、本年一月三日に發す。其の症は、初めは假令の感冒の餘にて、中頃足部に癩衝を發し、苦痛甚しかりしが、終には脱したれども、高年にて數月の被辱故か、六月八日、朝、喫飯後、忽然變症を來し、人事不隨、終に午後一時、歸幽せられたり。相模國大住郡大山町赤松山の麓に葬る。既に五月中、門人諸氏他より相會會し、懇親會を開きたる。前後は、病も大に怠りたれば、平愈も不日ならんと、一同喜び居たりしに、此の不幸の來りたるは、實に道の爲、悲哀限りなき次第なり。又先生は常に強壯にして、道の爲、學術の爲に付ては、壯者も及ばざる程なりき。其病中、常に膝上に在て、著述に従事せられたり。又談學事に至れば、言語快爽、氣力豐饒として、平素に異なるとなし。其の逝去せらるゝ前日も、坂正臣氏の質問に應ずるの案をなされたり。

又先生常に語て曰く、神にも人にも、我が心にも恥ぢざるを以て心とすと。通常の人の企て及ぶ所にあらずるなり。病中一日、鎮魂祭の事を内海政雄氏に語りんとして、侍者に扶けられて膝を去り、席を改め、假に袴を着し、盪嗽して正肅端坐し、以て其談を終られたり。事神祭に及ぶが故なり。又嘗て醫術を研究致し居られければ、病に臥すと雖も、自ら古醫道經驗術に由りて調劑し、決して他の醫藥を服されず。其苦痛に堪へざるときは、嘗て神の篤きを知るべし。又先生の徳望は、今更云ふに及ばぬ事ながら、門人を初め、會葬するもの三百餘名にして、又送葬に臨むや、老若男女道路に踴躍して、柩を拜する、恰も神輿の渡御に於けるが如し。以て其一斑を知る可し。

權田直助

一五六一



碑文

〔東洋學會雜誌三三〕 權田直助翁の碑文

(井上頼因氏)

惟神の古醫道

神道万經驗抄

國事に盡す

語學の研究

源朝臣權田直助大人は、武藏國入間郡毛呂本郷の人也。祖父休玄翁の代より、醫を業とす。幼より智深く、書讀むを好み、手能く書れき。十七歳の時、父直教ぬしを喪ひ、慕哀む事、尋常ならず。十九歳の時、憤を起し、我學未足らず、業も精しかられば、其師に就て問はむとて、妻を設て、母に仕しめ、將軍家の侍醫、野間廣春院の許に行て、三年が間勤勉め、扱後四方を行廻りて、家に歸り、再業を開かる。二十三歳の時、思はれけるは、神州の醫にして、漢洋の技を假むは快らず。惟神なる古醫道こそ興さめとて、平田篤胤翁の弟子となり、皇神の道の蘊奥を學明め、其外、此道の補翼にせむ爲に、眼科、外治方、産科等も、遺る限なく學究て、其業日に特に進み、其名四方に聞え、病る人等遠近より集つ、且暮暇無りければ、斯ては書を著し、道の後世に傳ること能はずとて、治療を門人に、家事を妻に打委せ、一室に指籠りて、書を著す事に勞き、神道万經驗抄十卷を作り、京に上りて、錦小路頼易君に呈られしに、君甚賞て、序文など賜へり。此外古醫道に就て、論注されたる書、三十部も有べし。大人の家は、富に非らねど、門人又は、病客の貧しきには、衣食を授て、教もし、療もせられけり。さる間に、將軍家の政漸衰へ、見聞に堪へぬ事多かりければ、深く慨憤り、人の病は、小く、國の病は大也。吾其小を後にし、大なるを先にせむとて、文久三年の春、初、京に上り、錦小路五條の諸卿を始め、廣くまめ人等と交り、天皇の大稜威を、古に復奉むと、專相謀られき。慶應三年の秋の末、再、荆田積穂と名を變て、江戸三田なる島津家の邸に入り、又、京に上り、明治元年五月、錦旗奉行、五條爲榮君に從ひ、姫路に抵り、二月には、岩倉具視君の命に依て、江戸に下らる。是より先、島津邸の亂有て、徳川家の浪士を追捕る事、極て嚴なれば、朋友等深く危み、頻に留けれども、大人は此役こそ、天下の大事なれば、縱、死とも辭可らずとて、遂に下りて、其任を盡さる。斯て新き大御代と成ぬれば、監察司知事、大學中博士、從六位、皇漢醫道御用掛など云官位に召されしに、明治四年の四月、嫌疑に依て之を罷られ、前田家の邸に幽閉られぬ。茲に大人、熱世の勢を思ひ、古醫道の行難きを知り、又後世に遺べき書も、大抵記了たれば、此の幽閉を好機として、語の學を講明むと、夜晝の別無く勉學び、一年許有て免されし後、益之に心を盡さる。さて明治六年七月より、此阿夫利神社に仕奉り、又十二年より、十四年の間は、伊豆國三島神社の宮司ともなり、正七位に叙られ、教職は、大教

容貌 敬神 妻

著書

正に至り、皇典講究所にては、一等學正たり。十四年十二月、戸籍を此地に移し、二十年一月三日より病て、同六月八日歿らる。文化六年十二月十七日に生れ、此時七十九歳也。業を換てより、著されたる書、神道に係るもの凡十種、語法に係る者、凡廿種、孰れも天地の眞理に本きて、論徴されたり。大人の母刀自は、武藏國高麗郡高萩驛、佐久間氏の長女、名を久良子と云。大人、齡五十を踰らる、迄、恙無りしかば、朝夕の萬の事、人に委せず。皆夫婦にて、忠々しく仕られき。大人、軀幹短く、色赭く、目口小く、鬚髮雪の如く、老て後、腰屈まず。強健にて、眠ること少し。常に曰く、書を讀には、未明と深更とを用ふべし。人の憩時に勤ずば、笑か人に秀る事を得むと。病に臥しても、尙、手に筆を放ずして、著述せられき。大人の皇を尊ぶ心の厚きは、孝明天皇崩御の折、憂歎て病に罹り、神を敬ふ心の深きは、此山に登るは更也。尙神を拜むには、必沐浴し、病中と雖も、情事無りしにて知るべし。天性斯の如くにて、聊か撓飾るに非ざれば、門人等、其徳に懷きて、敬ふ事神の如くなりき。大人の妻、幾久子は、武藏國入間郡成瀬村、目崎氏の女、大人に先て亡る。一男二女有り。男は年助、即一作の父なり。長女毛登は、飯能村早川舟平に嫁ぎ、二女波留は、將軍家の臣、倉谷清四郎の妻となれり。

- 〔慶著〕詞の經緯圖 一
- 語學自在 二
- 國文句讀者 一
- 體用辭圖解 三
- 國文學柱 三
- 形式言八衢 三
- 語學問答 三
- 熱海日記 三
- 用言分類 三
- 祭典修禮書 三
- 醫道百首解 三
- 詞の眞澄鏡 一
- 國文和讀例 一
- 詞の玉緒頭注 七
- てにをは品定め 一
- 助字分類 一
- 心の種 一
- 醫道百首 一
- 詞の八衢頭注 三
- 詞の通路頭注 三
- 躰言分類 三
- みまたのふゆ 三
- 葬儀式 三



古醫道經驗略

くずしの一言

名越廼舎老後集

〔編者補〕 童蒙語學問答一

古醫道法則 一

古醫道法則略註 一

### 堀秀成

生歿

生 二四八一、仁孝、文政二年一二六、

住所

歿 二五四七、今上、明治二〇年一〇三、  
生地 江戸大名小路、居住 江戸、  
通稱 内記、八左衛門、茂足、秀成、鬮琴舎、

年譜

〔帝國文學三〕 堀秀成翁略譜

(以上、略譜)

文政二己卯年十二月六日、江戸大名小路、古河の藩邸に生る。一歳。  
 全三庚辰年八月四日、母死す。行年十九歳。石河侯の重臣石河大耶女也。二歳。  
 壬午全五年、異腹の弟生る。後、己が後を繼げる堀重清也。四歳。  
 乙酉全八年、異腹の妹生る。後、古河藩、山下淳左衛門の妻となる。七歳。  
 丙戌全九年、小山霞外を師として習字を始む。八歳。  
 丁亥全十年、古河藩、土岐丹次郎を師と爲て、馬術を學び始む。同藩、小松尙七を師と爲て、漢籍を始む。九歳。  
 戊子全十一年、古河藩、鈴木準藏を師と爲て、鎗術の術を學び始む。十歳。  
 庚寅天保二年、始て君侯の近習に奉仕す。十二歳。  
 甲午全五年、納戸役に進み、公用方見習を兼ね、浪士、谷正太夫を師と爲て、山鹿流の兵學を學ぶ。十

六歳。

乙未全六年、本年より和歌を詠み始む。十七歳。  
 丙申全七年、職原抄支流を見て、制度學の志を興す。十八歳。  
 丁酉全八年、馬術の師より免許を得る。兵學の師より開傳を得る。十九歳。  
 戊戌全九年九月四日、父重遠死、行年三十八歳。十月父の遺跡を襲て、先鋒の隊長に進む。廿歳。  
 己亥全十年、古河城に移る。古河藩、池田數馬を師と爲て、弓箭の術を學ぶ。廿一歳。  
 庚子全十一年、鎗術の師より免許を得る。伯父、小杉敬長死。五月十六日、行年五十。廿二歳。  
 辛丑全十二年四月致仕、弟重清家を襲ふ。廿三歳。  
 壬寅全十三年、皇典學に志して、古河城を退く。廿四歳。  
 癸卯全十四年五月一日、祖母死す。行年七十八。廿五歳。  
 戊申嘉永元年、天保十三年より、七年間諸家に就て勤學す。卅歳。  
 己酉全二歳、陸奥國涌谷に、二月より十一月まで、書を講じて滞在す。此時鹽竈、松島等を遊覽す。音義考の草稿を起す。卅一歳。  
 庚戌全三年、駿河國江尻驛に卜居して、近郷の弟子を教示す。助辭音義考を著す。卅二歳。  
 辛亥全卅年、尾崎氏の女を妻とす。甲斐國市川に卜居す。卅三歳。  
 壬子全五年、本年より別て苦學す。蘿蔓を著す。卅四歳。  
 癸丑全六年、榎の板屋、稻種考、萩の上風を著す。卅五歳。  
 甲寅安政元年、三種類辭を著す。卅六歳。  
 乙卯全二年、衣文千經一編、古道提綱を著す。卅七歳。  
 丙辰全三年、甲斐國御嶽神官數輩の請に依て、其社中に滞在す。茂足を改めて秀成とす。狩衣問答、神名考、音義微を著す。卅八歳。  
 丁巳全四年六月、景山源烈公の召に應じて出府。古事記、井、音義を進講し、醜御楯二巻を書きて奉る。種々の物給りて、八月甲斐國に歸る。音義本末考、假名本末考、異音圖考、醜御楯を著す。卅九歳。  
 戊午全五年、武藏國八王子駒木野等の弟子の請に依て、四月より八王子に滞在す。本年數々江戸



己未全六年、春相模國大山の社中の請に依て、神事の古式を傳へに行く。此は白川殿に申請ひ、其殿の囑に從ひてなり。弟子落合直亮、同直澄、尾崎行義從へり。祝詞名義考「類語索引」朝ねがみ「二説辨」「三捷徑」「詞八衢補正」「音圖大全解」を著す。四十一歳。

庚申萬延元年、富士吉田の社中に、神事の古式を教示に請れて行く。弟子落合直澄、同直吉、佐藤正雄從へり。落合直亮が妹を後妻とす。十一月廿九日、藤太郎秀雄生る。官職大意「朝家儀例」「軍防令圖式」「さき草」「語格圖彙」を著す。四十二歳。

辛酉文久元年、職原抄問答「難語本義考」「陳志編」「名目二百首」「武備百首」「いめのをつゝ或問」「ひとひのすさび」を著す。四十三歳。

壬戌全二年夏、上野國草津に湯治す。甲斐國弟子四人從ふ。七月、病麻疹。藤次郎秀延生る。十月、江戸に歸り住む。「制度圖式」「有職圖式」「濱千鳥」を著す。四十四歳。

癸亥全三年六月、諏訪の藩の請に依て至る。歸途、再草津に湯治す。八月上京、冬まで在京。十二月、奈良の舊都を見る。神宮を拜して江戸に歸る。四十五歳。

甲子元治元年、春、甲府に滞在す。落合氏離別後、芦野氏を妾とす。後妻に改む。「音義講錄」「古今序新註」を著す。四十六歳。

乙丑慶應元年六月廿五日、藤三郎秀勝生る。九月、磯山の紅葉を見んと、駿河國に行き、舊門人を訪ふ。弟子一人從ふ。「五氣論」「神籙考」「淹滯考」「かやり草」「六音假字考」「紅葉記」「草津繁昌記」「類語或問」「古傳顯幽考」「古今序文義考」「古言類韻」「大祝詞文義考」を著す。四十七歳。

丙寅全二年四月、甲府を立て、伊豆國熱海に湯治す。冬、武藏國奈良の里に滞在す。「磯山千鳥」を著す。四十八歳。

丁卯全三年春、脚疾を病む。十年、箱根に湯治す。歸途、江ノ島、鎌倉、金澤等に遊ぶ。藤四郎秀行生る。十一月、上野國館林の池庵に滞在す。古道提綱「概略言靈妙用論」「池庵漫筆」を著す。四十九歳。

戊辰明治元年春、脚疾再發。九月、下野國佐野に滞在す。「校正韻鏡」「音圖略說」「音圖指掌」「客中文集」「演風」を著す。五十歳。

己巳全二年、諸國皇學校建設の公命に依り、下野國皇教示になりて、赤見の里に寓居す。六月、建言書を待詔局に出す。「自序文集」「三令圖式」「塾則」「位階沿革論」「聖問略疏」「民憲畧疏」等を著す。五十一歳。

庚午明治三年正月、下總國葛飾郡野田町に滞在す。三月廿三日、宣教の大講義生に任ぜらる。五月廿四日、權少博士に進み、七月廿日、少博士に進む。十月廿一日、女子米子出生。十二月廿四日、人員減少に付免ぜられ、即日權少博士拜命。「神魂演義」「神魂俗論」等、命を受けて著す。五十二歳。

辛未全四年、去年十二月より、諸藩宣教係出京を命ぜられ、其係を務む。「明教百首」「兩朝着目標」命を受けて著す。五十三歳。

壬申全五年正月三日、於 御前神武記を講ず。權判官小野述道を以て、御稱譽を蒙る。三月十四日、廢省。五月四日、絹地、並、金四十圓を賜はる。全廿九日、教部省十等出仕、兼補中講義。六月廿日、兼補大講義。十一月廿四日、判任官一同免職。即日如故拜命。五十四歳。

癸酉全六年三月十三日、藤五郎生る。全廿三日、大教院講師長を兼務す。全三十一日、函館出張を命ぜらる。四月十九日、全二十三日着。「説教林裁論」「教名考」「山路の物語」「いめの直香」を著す。五十五歳。

甲戌全七年四月廿六日、函館出帆。五月一日、歸京。全十四日、褒賞として金五十圓給はる。十一月二日、出仕免ぜられ、本省雇月金五十圓可相渡旨辭令書給はる。十一月、褒賞として金四十圓給はる。「説教林裁論拾遺」「音義綱領」「教憲本據」「三林説教」を著す。五十六歳。

乙亥全八年十一月十四日、皇大神宮禰宜に任ぜられ、全廿日辭表奉る。全三十日、願に依て本官を免ぜられ、大講義專補。此年大に學風を改む。「言語八種考」「音圖餘話」「甲斐日記」「琴舍文集」二の卷「靈氣考」を著す。五十七歳。

丙子全九年五月廿二日、太政官より權少教正に補せらる。八月十八日、女子稻子生る。「五十音大意」「話學階梯」を著す。五十八歳。

丁丑全十年一月、初めて朝賀天顏を拜す。五月四日、學習院語學教示を兼る。開院の時、太后宮の御前に、皇國語法の總論を講ず。十月、本務多端を以て、學習院を辭す。本年公務の間を以て、大に皇語の學を擴張せんとして、所々に之を講ず。英國公使附屬の「エルネスト、サトウ」等も、甚だ



之を信す。九月語學所を假に妻戀坂の上に設け、十二月淺草七軒町に移す。新律圖式を著し「南山事略」の草稿を起す。日本文典辨誤「雅俗文法式辨誤」詞彙「詞經緯圖辨誤」を著す。五十九歳。戊寅全十一年六月廿日、講師長を辭す。年來勉強の旨を以て、金若干を贈らる。八月十二日、内意に付、語學類の著書を宮内省へ奉る。和田二等屬之を取次。七月岡田文子入室。十月廿一日、女子穎子生る。母は延子、十二月一日、女子谷子生る。母は文子、十二月十七日、神宮教院に附屬す。弟子伊澤昌壽迎に來る。全廿日、東都出立、全廿六日著。「音義講録」「萬葉集類語」「記紀類語」「祝詞類語」「大政詞正義」「文法本義論」「神賀詞文義考」「政林經緯論」「語學問答」「助辭分類」右の他、通計十二部を著す。己れ著書を始めてより、如此卒業せしは始めての事なり。此は講師長を辭したるに依るなり。六十歳。

己卯全十二年五月、廣島に行き、六月歸る。直垂地一反、神宮教院より贈らる。「さゝ栗」「あし分舟」「大概餘論」「説教四要論」を著す。六十歳。

庚辰全十三年五月、阿波國初め所々に請はれ行き、歸途四京滞在。久邇宮へ進講。七月岐阜縣、十月伊賀國に行く。普布教の爲なり。五月命に依て、寫眞を宮内省に奉る。八月廿五日、谷子死す。二月講義録百號卒業。七月より「刑法圖解」を編し、十二月迄に十卷成る。六十二歳。

辛巳全十四年、早春、心臓病に罹り、四月十六日、宇治出立、西京病院の治療を受け、五月十一日歸る。六月廿七日、あや子分娩、男子出生、慶と名付く。「刑法説論上言書」を總裁宮に獻る。八月八日、死す。七月初、美濃國へ行き、九月初歸る。東京大學の間に應じて「言語遷易の考」を出す。學藝志林「甲の部に選抜になり、金拾圓、並本誌七本を賜ふ。十二月十日、御分靈供奉、美濃國大垣に到り、全廿二日歸る。三月「古文語脈考」四卷卒業、目的の三條の注を書く。「病問大教本論」「國橋論」二卷を述ぶ。六月「假字比例」を再撰す。八月九日、刑法の講録を作る。十月「刑法原理圖解」を著す。十二月「古律影蹟」を著す。六十三歳。

壬午全十五年四月廿四日、備後國へ出立、四月廿六日歸る。藤三郎、横濱羽衣町四丁目四十一番地中島元久の養子となる。五月神宮を辭す。慰勞金百圓を受く。全廿七日出立、六月五日、岐國琴平に着す。全所の招に應じてなり。七月十日出立、布教の爲、因幡出雲より巡りて、秋田縣に

赴く。十二月四日、琴平に歸る。「刑法暗記便」「皇國辨弊」を著す。旅中に「法律各目」を著す。六十四歳。癸未全十六年一月廿六日、去年派出の慰勞として、金圓を本部より贈る。所勞に依て、三月十五日、高松病院に入る。四月廿二日、琴平に歸る。六月五日、本務の餘暇を以て、皇典學會へ出勤を定めらる。全月、東京大學より應問の「源語考」を、學藝志林に登載に付、本誌並金圓を送附あり。七月全所「事物名義考」登載に付、金圓本誌を送附あり。「言語正訛辨」も全じ。十二月九日、女子琴子生る。「法律大意」を著す。「刑法圖解」十卷再調畢る。「語源考」「事物名義考」「正訛辨」は、東京大學應問の爲め著す。「音圖大全解」を七月卒業。「政教圖説」を著す。六十五歳。

乙酉全十八年一月、大患に係り、全下旬全癒す。三月眼病、五月に及て癒ゆ。昨年より編輯せる「六史類編」二月に到りて略成る。「法律要目」「瓊矛之理」「民事摘要」「古文語脈考」第五の卷「六音經」「教語」「祝詞異見」を著す。六十七歳。

丙戌全十九年一月、赤痢大患、一百日引籠、四月十七日初めて出勤。六月十日、秀子出生。七月、野延子離別。其弟、野浦山より申來りし件有てなり。十月、琴平山を辭す。金百五十圓、慰勞として贈らる。全廿日、讃岐國香川郡高松に移る。有志者の請ひによりてなり。「音義本末考」を改正す。「神理律大意」「加微之名義」「昏病床」に在て著す。一昨年より從事の「六史類編」三十卷、五月卒業。「神名考」を著す。「音圖大全解」五の卷を追加す。「及門須知」を著す。「刑法圖解」十卷清書成る。「古史要節解」二の卷「古今序新註」を著す。六十八歳。

丁亥全二十年二月、米子を東京芝濱町二丁目九番地、田中清兵衛次男、田中政次郎妻に嫁す。稻子を全日本橋區馬喰町廿一番地、平民山木金太郎養女とす。穎子を全日本橋區元柳町三十六番地、平民三留きみ養女とす。八月二十二日、眼病、五六日にして癒ゆ。腸病となる。九月二十二日、一度床を收めたる翌日より、病床にありて、病院長山根文策の治療を乞ふに、腸潰瘍となり、十月三日午後三時遂に死亡。享年六十七歳。十一月、西濱村西方寺墓地に葬る。琴平より松崎保、石井謙藏來りて祭事執行。「語格略註」「治教論」これら病中の草稿にて、少かに清書成る。兼て志の通り、田中賴庸、稻葉正邦、廣島神道分局等に送る。十一月六日、今の地に改葬。

著書

〔帝國文學〕 音義部



音義書

音圖大全

内命ニ依テ、明治十一年七月、宮内省ニ奉ル、一枚

五十音圖の大全なるものにて、各音に意義を具へたるを始め、開合清濁、輕重出入、昇降縮張の六種を分ちてしるせるなり。抑音圖は人爲に成れるものならず、天神の人類に授けたる所の聲音の位置を表したるものにて、其位置に天地の眞理を具へて、奇々妙々なるものなれば、邦語の原義を究むるは、五十音義に據らざればあるべからず。實に本邦の皇統の不易なると、五十音の傳來するは、萬國無比の美譽といふべし。

音圖大全解

五卷

音圖の解を委曲に辨じ、併せて五十音は、固なり人類の音聲に、自然備りたる固有のものにて、一説の如く悉曇より出たるものとする説の、僻が言なる由を辯明爲たるなり。

音圖略說

一卷

音義本末考

一卷

此書、已に上木すと雖も、脱したることなきにあらざれば、近頃改正したるなり。今は上木の方をば廢したるなり。

語學總論

一卷

語學打聞

一卷

此書は、文部省御雇獨逸人コルシエルト氏の爲に講じたるを、傍にて門生の筆記したるなり。此時和田維四郎通辯す。

語學問答

四卷

此書は、己が門人に成りし英國書記官、エルネスト、サトウ氏の囑に依りて作れるなり。

言靈妙用論

二卷

組音法

一卷

五言を聯れて一段となり、五段を重ねて一章となり、九章を合せて一行となり、九行を統て二

千二百二十五言となる、本邦語の總數を包括する法を書けるなり。

靈氣考

二卷

音圖指掌

一卷

音義綱領

一卷

此書は、己れ學習院に於て、音義を日講したる時、先づ大綱領を説む爲め、此書を本文に建て、講じたるものなり。

音圖餘論

二卷

諸家の五十音説を擧げて、其可否を論じたるなり。

音圖餘話

一卷

神代のをつゝ

一卷

古語の木義を明らかに、古典を見る時は、遠き神代も、今現に比しきものとなる由を書けるなり。

古言類韻

十二卷

韻に循ひて、悉く古言を集へ、古書を證し、且、言詞の本義を解せるなり。

難語本義考

三卷

類語索引

四卷

助辭音義考

内命ニ依リテ、明治十一年七月、宮内省ニ差出シタル内ノ一部、二卷

助辭の意を、音義に據りて、其本源より説明したるなり。

五名考

天神米歌數名の、五名の言義を説けるなり。

言語變遷考

一卷



東京大學の應問書なり。明治十四年三月、甲の部に授撰、學藝志林中に登載に付、文部省より該書七本、及金拾圓を賜ふ。

源語考 一卷

明治十六年二月、全所の應問として送附す。同志第七十卷に登載。

事物名義考 一卷

全志第七十一卷に登載。

言語正訛傳 一卷

全志第七十二卷に登載。

源語考以下送附に付、該志、及、金拾五圓を賜ふ。

詞の運轉 一卷

一音の加り、或は省り、或は全音全韻に轉じて、其語意小さかづ、變りゆくことを、圖になして言語の妙用を明せるなり。

いつらのこゑのうた 一卷

五十音經緯の意を、三百二十九句の長歌によみて、五十音の最も貴きものなることを、あらはしたるなり。

音義答問 一卷

ある人の許より、問におこせたる、音義のこと々もを答ふるとして、其人にかきておくりたるなり。

音義講録 三卷

全大意講録 一卷

此二部、講席の料なれば、關外不出とす。

語格書

語格部

語格全圖 一卷

全解 一名日陸憂 內命ニ依テ、明治十一年七月、宮内省へ差出シタル内ノ一部、二卷

語學階梯 二卷

語學試驗概目 一卷

此書は、神宮育材課の囑に應じて書けるなり。

語法本義論 三卷

世の語學家の語法を解するもの、單に詞の解剖をなして、何の詞は何の活用等いふに止まりて、語法の然る原義に及ばざるは、本を捨て、末を取るの謬を免れず。故に今此書、語法の原義を明にして、其然る由を辯明したるなり。

朝ねがみ 一卷

詠歌作文に名あるも、語格に熟せざれば、誤ある由を示さむとして、有名の人の歌文の誤を辯じたるなり。

三集類辭 四卷

三代集の歌を、助辭に循ひて、漏さず類聚し、其助辭の活動を始め、名詞動詞を受る格、又下へ續く例等、詳細に分ちて、助辭用法の證とす。

同類言 一卷

助辭分類 二卷

助辭に動靜二十種あるを分ちて、證歌を擧げたるなり。

ことばのりのうた 一卷

ことばの學の山口、ふみそむる人に示さむ爲め、三百十一句の長歌によめるなり。

日本文典辯誤 一卷



文法書

- 初學日本文典辯誤 一卷
  - 日本辭典辯誤 一卷
  - 雅俗文法辯誤 一卷
  - 十符の菅菟文詞論 合一卷
  - 伊勢の家づとの辯 合一卷
  - 語學階梯異見答書 合一卷
  - 語學暗記章 一卷
  - 詞八衢補正 二卷
  - 萬葉集類語 三卷
  - 祝詞類語 合一卷
  - 記歌類語 合一卷
  - 日本小文典辯誤 一卷
- 此はチャムアレン氏が、文部省の囑に依りて書けるものなるが、誤謬甚だ多かれれば、それを辯じたるなり。
- 文法部 五卷
- 古文語脈考 一卷
- 我文章に法あることを、未だ先輩云へることなし。獨、北畠守部が、撰格の著ありと雖も、單に對句、疊句等を擧るに止りて、段落、枝條等をはじめ、文法の要點に遺せるもの尠からず。又近時諸家文法の著書ありといへども、未完全なるものにして、文章の模範とするに足らず。故に今、古文中に具備する所の法を悉く輯め、委しく其例格を示して、作文の規範とするなり。

文 範 一卷

文法教授の料に備ふるなり。

同 自 註 一卷

竹取物語語脈考 一卷

古文私選 二卷

古文中にて、殊に勝れたるものを採りて、古語古文を口習らばしめむ爲め、素讀本に備へたるなり。

伊勢物語章段 一卷

大祓詞文義考 一卷

出雲國造神賀詞文義考 一卷

古今集序文義考 一卷

祝詞異見 一卷

今人の作れる祝詞を見るに、祝詞の體裁を失ひ、或は文格に違ひたるが多かるを慨然して、其由を痛論したるなり。

香川景敏

總 叙

〔大日本人名辭書〕 香川景敏は、敏恒の子なり。高崎正風に學び、歌に巧なり。宮内省御歌所に出仕す。明治二十年十月廿四日歿す。  
〔柳の一葉〕 十月廿六日、香川景敏のなくなりけるをいたみて、

伊東祐命



ふをおほふ、かけともなれど、いはひつる、わかきのかつら、かれにけるかな。  
敷島の、みちのさかえの、見ゆる世に、をしき人をも、なくしつるかな。

### 矢野玄道

生 二四八三、仁 孝、文政六年、

歿 二五四七、今 上、明治二〇年、**三六五**、

住 所 伊豫國喜多郡久米村字阿藏、**居住** 京都、後東京紀尾井坂、**園** 伊豫國喜多郡久米村阿藏故宅前山、

姓 名 **通稱** 茂太郎、**園** 谷蟬、天放山人、梅屋、子清、神臣、

系 圖 **仙左衛門道正** 玄道

總 叙 **幸男** 太郎

學 統 **國學** 平田篤胤

總 叙 **漢學** 昌平黌 玄道

(以上、東洋學會雜誌二、及、編者見聞録)

〔東洋學會雜誌ニ「**三〇**」〕 翁通稱は茂太郎、愛媛縣の人なり。夙に學問を好み、平田篤胤翁の門に入りて、國學を修め、後、昌平學校に入りて、漢學を古賀洞庵に學ぶ。翁、家資饒ならず、久しく京都鳩居堂の客となり、伴信友氏に授け、又、縮紳及び社寺に就て、古書を講究し、大に得る所あり。嘗て廬山寺にありて、一切經の校合を了へたり。翁博聞強記にして、一たび涉獵せし書は、決して忘るゝとなかりきといふ。維新前後、玉松操、樹下茂國等と國事を議し、建白書數通を上り、爲に近藤勇に捕

國事を建白して捕へらる

客を謝して著述に従事す

終身娶らず

絶吟

へられしとあり、明治元年、神祇官に出仕し、同三年、大學中博士に任じ、從六位に叙し、後、宮内省へ召し出され、專ら御系譜編纂に従事し、十七年、圖書寮御用掛被仰付、十九年、非職となり、

國のため、君のみためと、おもふ身も、おき所なく、なりにけるかな。

と一首の歌を詠じて、京を去りぬ。さて郷里にかへりては、專ら母氏を看護し、其玄關に自ら長談いやの數字を書して著述に従事せられたり。其著す所、神典翼、皇典翼、國史私記、神功皇后御傳記、應神天皇御傳記、王神御傳記、しきのくがだち、しひがたり、玉矛物語、大道のしるべ、天璽長言、拂妖纂語、神仙傳、逸記、古文彙、正保野史等あり、又、麻生のした草、さくらふ等の隨筆あり。天放雜集といふ詩集あり。平田翁歿後、古史傳の補正は、皆翁の筆に成れりといふ。翁、神采秀て、儼として威容あり。常に云ふ、余性質蒲柳にして、酒を嗜む。若し女色を近づけば、宿志を果はすとあるべしと。終身妻を娶らず。其鳩堂居にありし時、主人勸めて婚をなさしむ。翁乃夜遁れ去れりといふ。亦以て其人となりの一斑を知るに足るべし。翁昨年、明治二十年、春、病て歿す。時に年六十五。其臨終の時、病床の障子に、

富貴何足慕。貧賤何足悲。惟有神隨道。長樂真可期。誰道人生短。我與天地生。春秋各代謝。寵辱何足驚。誰道五洲大。大倉粟不如。方寸容天地。包弘尙有餘。

おもひよる、千々のひとつも、もしは草、かきつくさむる、とをしぞおもふ。

と云へる數首の詩歌を書き付けられて、溘焉として逝けりといふ。昔、顔回死せし時、孔子喪子の嘆あり。蓋其道を共にする者なきを悲むなり。今翁の死する、顔回と異なりと云へども、余輩は我道の爲め、斯る人を喪ふを、悲まざるを得ざるなり。

著 書

- 〔慶著〕皇典翼 三 續日本紀私記 五 文德實錄私記 二
- 三代實錄私記 二 日本逸史私記 八 釋日本紀私記 三
- 神功皇后御傳記 二 護王神御傳記 一 應神天皇御傳記 一

矢野玄道

一五七七



正保野史 一 正保遺事 一 神仙傳  
 天靈畏言 玉矛物語 大道の知るべ  
 古文彙 逸記 しひがたり  
 麻生のした草 しきのくがたち  
 拂妖纂語

### 僧行誠

生 二四六六、光 格、文化三年、  
 歿 二五四八、今 上、明治二十一年四、二五、  
 生地 武藏國豊島、居住 兩國回向院、傳通院、芝増上寺、總本山知恩院、  
 因 福田氏、行誠、字 晉阿、建運社立譽、  
 〔編者補〕 飯田厚比——福田行誠

(以上、行誠上人全集)

姓 所 住 所  
 姓 名 住 所  
 學 統 住 所  
 經 統 住 所  
 回向院住職と  
 なる

〔行誠上人全集〕 上人、諱は行誠、字は晉阿、建運社立譽と號す。幼にして小石川無量山に投じ、剃染就學す。年や、長じて、京師に遊び、嵯峨の立道隱士に遇ふ。領解練行、頗る得る所あり。既にして小石川に歸り、鸞洲上人に隨て、宗乘及相宗の蘊底を盡し、又東叡山の慧澄和尚に參して、天台及俱舍の奥旨を極む。時に山衆群集して講授を要む。上人遁れて處淨院に入り、又清淨心院に隱る。然れども尙大衆追隨して、講筵虛日なし。會ま、兩國の回向院、主席を虚うす。檀信舉て上人に歸依し、懇請至誠に出づ。上人遂に之に應ず。自ら歎じて曰く、予曾て以爲らく、生涯必ず檀家あるの寺院に住すべからずと。然るに今本院に主たらざるを得ず。蓋し業報の然らしむる所、また如何と

増上寺住職

總本山の門主となる

遷化

羅漢行誠

釋門の泰斗 其歌咏

雜載

自像之贊

辨玉に綿子を贈る

もするを能はずと、幾くもなく、明治維新の運に當る。諸宗碩學、共同して一社を結び、同盟會と曰ふ。乃ち上人を推て教頭となす。尋て大教院建つ。又教頭となる。遂に傳通院に遷り、増上寺に進み、大教正に補す。時に明治十二年なり。當時都下篤志の居士等、各宗管長等と晉謀り、弘教書院を興す。十九年三月、徵恙あり。深川本誓寺の隱居に通る。然れども、佛天なほ未だ光を緝むを許さず。翌年四月、總本山知恩院門主となる。乃ち淨土一宗の管長として、數千萬の門末檀徒を調御し、盛んに祖風を扇揚する。殆ど一年、此年十二月、病に罹る。廿一年一月、傳宗傳戒の要領を述作して、後鑑に貽す。三月に至て稿成る。名て傳語と曰ふ。四月、病いよ、重し。然れども、尙例規に依て、祖忌を修す。二十五日は、其當日なり。上人、斯日正午、頭北面西、右脇に臥し、掩然眠るが如く、正念往生の素懷を遂げられたり。世封八十三。舍利を得て本山に葬る。上人行解相應して、德望諸宗に冠たりしが如きは、今敢て贅言せず。天性穎敏活達にして、顔容甚だ温和、言行拘はる所なく、灑々落落、遺遠自在、人呼て羅漢行誠と稱す。上人また、諸大阿羅漢を尊信し、曾て俗弟子菊池容齋の畫きたる、五百應眞を得て、毎年春秋、さかんに之を供養す。然れども、敢て儀式を設けず。恰も花前月下に賓客を招きて、俱に歡を盡すが如き景情あり。上人、結を淨門に掛て、其貫主たりと雖も、固より宗派の見あらず。常に葛城慈雲尊者の宗風を學び、十善法語を講演すると、數回に及ぶ。故に諸宗の編素、皆仰て以て釋門全林の泰斗となす。即禪林の奕堂環溪、獨園諸老、日宗の薩師、台家の唯我翁、密門の雲照公等、皆和上を敬愛して、常に道情を欣慰す。上人、淨課の餘暇、和歌を詠じて、其志を述ぶ。未だ嘗て師傳を得ずと雖も、唯嗟に語を爲して、金聲り玉振ふ。蓋、字々皆般若、句々皆解脱なればなり。故に、當時詠歌を以て一世に名ある、高崎正風、税所篤子諸氏、皆交りを上人に得て、其高風に服す。

〔同上〕

自像之贊

〔同上〕

何者來造 如是幻姿 誓不念食 夜不脫衣 耳與聽別 眼與視違 不思善惡  
 不爭是非 罵之無患 譽之無娛 謝我井法 自不知誰 勿言吾影 吾不及面  
 神奈川の邊に、辨玉となん呼べる歌よみありけり。上人厚く彼れを愛したまひしかば、

僧行誠



同地通行の節は何時も訪問し給ふとなるが、一日立寄りせらるべき暇なかりしかば、せめては何ぞ物贈りて過ぎんと思召しか共、生憎、遣はさるべき品のなかりしかば、自ら召しつゝあられし「わた子」をぬぎて、それに

横濱の、濱の濱風、寒ければ、このわたこきて、埋火によれ。  
との一首を添へて遣されしと。後高崎正風氏、この一首を見て、其眞摯なるに感じ、上人詠草中、稀に見る所の傑作なりといへりしとぞ。

〔高崎正風大人講話筆記〕 行誡上人の歌の事

上人は、近來僧中の歌よみにて、よき歌多し。釋教百首などにも、まことの歌と思はるゝが少からず。上人の親友、僧辨玉、また歌を嗜む。横濱に住めり、ある時上人の京都へ上らるゝ途次、辨玉を訪ひ、綿子を壹領贈るとて、よまれたる歌、

横に吹く、濱風いかに、寒からむ、この綿子きて、埋火によれ。

此の歌を示されし時、已いはいはく、此の四五の句、眞率にして、老友相憐む情愛、自ら溢れて感ずるに堪へたれど、初二句の「横に吹く濱かぜ」とは、いとことやうなり。雨こそは横雨ともいへ。そは雨はまづ、縦に降るが常なればなり。風は縦横定なく吹くものなるに、殊更に横に吹くといふといか。上人の心を推測るに、此は只横濱の紛擾の地なるをもて、その名を避けて、殊に構へられたるたくみ事にはあらざるか。それかへりて穩ならず。地名など雅馴ならずとて、何かあらむ。たくみてことやうならむより、其まゝいばむ方然るべし。自然にそむきて構へ出る時は、そのことわりさへ、斯くたじろぐに至る。恐るべきとならずや。こゝも「横濱の、濱風いかに、寒からむ」とあらば、誰もきゝ感ふふしなく、感情言外にあらはれ、めてたき歌なるべし。同じ上人の歌に、

埋火の、たえたるを、つぐ、炭はあれど、おこしがたしや、すたれたる道。

此の歌などは、實に碩徳の歌といふべし。此の第四句、もとは「おこしがたきは」とありしを、同じくは、歎辭のやあらまほしとて、今の如く、己改めつ。これらの外、なほ

いたづらに、枕を照らす、ともし火も、思へば人の、あぶらなりけり。  
又江島にて、風波あかりし時、舟中にて、

耳遠くて筆談をなす

法のため、身をすて小舟、同じくは、このあらいそに、朽ちれとぞ思ふ。

〔同上〕 (上略) 人情學に就きて一話あり。東京増上寺の住職にて、福田行誡上人といへりしは、七十餘歳の老僧にて、耳遠くして、人と對話するに、石盤を備へおき、それに答を需めき。この人かつて、己が門人たらむとを乞はる。己例の如く、斯道において、師弟などいふ事のあるまじきよしをいひ、且、さきに申し、如きことを、二三話に及びしに上人いふ。先生は佛道を修業せられたるか。

己答へて云ふ。いな、和漢の書は、すこしばかり學びたれど、佛道は露しらず。若き時は、水戸風の學を好みたれば、いはゞ守屋大連の黨にして、經卷などは手にしたるをなしといひしに、上人、さるにても先生の説の、佛道の奥義に異なる事なき、不思議さよといふ。兩者ともに人情を本として、人を迦は、一切衆生を濟度すといひ、孔子は、この民をすくふといふ。兩者ともに人情を本として、人を感化したるなれば、釋迦も孔子も、共に人情の大學者なり。歌即ち人情の學問なる故、兩者と少しも違ふ所ある筈なし。上人何ぞ己の門に入ることを須めん。佛道即ち歌道なりといひしに、上人も大に悟られたりき。

著書

〔行誡上人全集〕

雪窓答問

いり日の光

梅檀瑞像傳

大日本國佛法傳

法語筆話

緣山法語挾註

傳語

をみなへし

死牛渡

寒林集詩文集

釋教百首

於知葉集

後於知葉集



### 餘輝道人

生歿 二四七〇、光格、文化七年一、

因 二五四八、今上、明治二十一年一二、目七九、

總叙

〔柵一三〕 道人、名は峻嶺、眞宗の學師にして、越前國坂井郡春江村、順教寺に住す。歌名は、學問道徳のため、にけおされて、知れる人少きが如し。おのれ、道人に親炙して、年比きけることあれば、茲に筆をとりて、かゝいしるすになん。

道人九歳の時、隣村なる儒醫が許へ、ものまなびに通ひけるが、道すがら、うららかなる野邊にて、雉の聲をきき、げんげん、となく聲きけば、云々。とくちすきみて、さて歸りて、祖母に語りけるに、祖母いさゝか、歌の事を心得たりければ、大によろこびて、これより毎夜、百人一首を解きて、きかせけり。

加茂季鷹を訪ふ

十七歳にして、京師に上り、加茂季鷹を、三條木屋町の居におとなひて、和歌のうら、きよき清に、船出して、いざひろはゞや、珠のかずく。

とよみて贈りけるに、季鷹かへし、  
打よする、老の年波、いとせしく、その玉藻は、ひろひかれつゝ。

佐々木景欽の門に入る

其後、四條高倉に住める、佐々木景欽(かげよし)と云へる人の門に入りて、歌をまなぶこと數年、業大にすゝみけり。生れは文化七年一月、歿りしは明治二十一年十二月なり。享年七十九歳。歌集を〔同上〕椎の舎集

著書

〔同上〕椎の舎集

### 伊東祐命

生歿 二四九四、仁孝、天保五年、

因 二五四九、今上、明治二十二年一〇、目五六、

總叙

〔柳の葉一三〕 およそ、世の中の人、才ながきものは、齡みじかく、藝能に巧なれば、富貴に拙く、二つながら、全きとはいとく、かたきわざになむありける。柳園伊東君、なかりし年、わづかに、五十六なりき。はやくより、菖蒲の事に力を盡されて、夙に才名あり。其後、世移りて、時いたらず、空しく、下僚にのみありて、をばられしは、いと口惜しき限りになん。されど、こゝにたらばぬは、かれにあまりあらせんとの、あめのなしならんかし。君、わかきより、歌に志ふかく、はじめ、なれと共

加藤千浪門  
御歌所出仕

に、郷戸久敬翁の門に入り、又、前田夏隆にしたがひ、つひに宮内省に召されて、御歌所勤務の首坐となり、其名四方にかくれなし。高崎(正風)所長も、二なきものに思はれ、うち、きさいの宮の、御歌會などにも、をにめされて、身もやゝなり出て、ぬべきいざみにいたりて、ゆくりなく、病ひにかゝりて、うせられしは、さらになげきて、あまりあり。君、はじめより、終りに至るまで、この道の爲に、心をつくしておこたらず。又、人を教ふるに、ぬもごろにして、倦むをなし。やごとなきは、更にもいはず、遠近したがつて、教へを受くるもの、數を知らず。よみ歌も、いとおほかれど、みづから、書板をかかれしは、いとわづかのものにして、あかすおほゆるに、こたび、門人達のいひ合せて、その外のおちより、えりそへ、一巻となし、櫻木にえりて、世に公にするとは、なりぬ。いてや、おのがどちの、しのびがたみは、さるものにて、世に歌よまん人のためにも、こよなきしをりにこそ。君の歌における、近世風指の上手なりしことは、皆ひとの知れる處なれば、更にいはず。おのれ幼きより、のちなみに、このおくに一言を添へよと、人々のせちにいはるゝに、いなびがたくて、よしなしこ

餘輝道人 伊東祐命



雜載  
柳の一葉緒言

とを書いつくるものは、君が竹馬の友だちにて、君よりさきにうまれしと、一年はやく、君におく  
るゝと、今年、七年になりぬる、えせ翁なり。かぶるなる、かじくのほかに、なに一つ身にそふ光もな  
く、ながらへて、うめきありくを、なきたまも、いかにをこなりと、わらひたまふらんかし。  
わがために、君がとおもひし、ことのはを、我かく世こそ、かなしかりけれ。

くちなし園のあるじ 小出 榮

柳の一葉叙文

〔同上〕 おほよそ、初學びのともがらを、教へみちびきて、よき歌よませむとするには、其の教ふ  
る人、先づみづから、上手ならざるべからず。世にかれがしは、みづからよむ歌こそよかられ。ひと  
のをなほし、つくろふとは、上手なりとて、従ひ學ぶ輩のあるは、心得がたし。さりながら、同じ上手  
の中にて、とりわきて、人を導くものすべし。さしもあるは、心得がたし。さりながら、同じ上手  
るとなりけり。柳園のあるじは、自らもよくよみ、又、人を導くわざにも、たけたりき。さるは、うまれ  
つき、極めてこの道を好み、ねてもさめても、忘るゝをなかりしかば、いはゆる、すきこそものゝと  
かいふ筋にて、しか上手にはなられしなり。又、教へ子らのほ、更にもいはゆる、すきこそものゝと  
も、いみじと覺ゆるがある時は、おのれの詠み得し如く、打喜び、ほめたゝへておかず。又、悪しきふ  
し、見出してし時は、さまゝ、思ひめぐらして、これをなほしつくるは、るゝによりて、教子等も、皆其  
れもころなるに、感じたりき。あはれ、この翁をして、今日まで長らへしめなば、自らの歌は、更なり。  
教子等の中にも、勝れたるが、數、さばに出できたらましを、惜きかな。いにし明治二十二年の秋、ま  
だ六十にもたらぬ齡にて、身まかられたり。まことに、この道の不幸にこそ。其後、追悼の會など、所  
所にて催されしも、またその遺稿の世にあらはれぬを、誰もゝあかぬとに思ひ居りしに、こた  
び、世繼のぬし、教子らとはかりて、あつめ撰び、ずり巻にせんとして、おのれに序をこへり。おのれ  
さきに、翁を御歌所に推薦せしちなみもあり、かつは、親に師につくさるゝ人々の、まめごゝるを  
めて、得もいなく、思ひよれるまゝを、いさゝかして、師につくさるゝ人々の、まめごゝるを  
〔柳の一葉叙〕 伊東祐命ぬしの、加藤千浪の門にあそびしころ、己もかの園、立ちならしつゝ、あ  
りければ、したしうかたらひ、二なき言の葉の友と、むつびかはしたりき。ぬし、世にありしとき、い  
ひけらく、わがなき後には、年比、よみおける歌ども、家集めくものにしてよと、いはれしを花より

歌詠

さきと、しらぬ我身をとて、假初にきゝながしつるを、誠のゆひごととなりしかば、今更に夢の  
心地して、いとほはかなく、かなしき限りにこそはありけれ。さて、其遺稿ども、とくものすべか  
りしを、何くれとさばるとどものありて、心の外におくらかしつるを、こたび、ゆかりある人々と  
かたらひ、かきあつめたるを、高崎御歌所長の君に、見せまぬらせ、いとれもころなるはしがきを  
さへこひ得たれば、亡き人のためにも、こよなきほまれなりかし。又、小出榮ぬしは、もとより同じ  
國人にて、おほやけにも、わたくしにも、へだてなき友なりければとて、こまやかなるおくがきを  
さへくはへられたれば、言の葉の露の玉の光も、いよゝま、さきりてみゆるを、苦の下にも、いかに  
かり、よるこびおもふらんと、おのれさへ、うれしきみおもふ餘りに、一言をかくなん。(中島歌子)

祐 命

著書

〔編者補〕 柳の一葉 二

澁谷國安

生歿  
學統  
總叙

生 二四八五、仁 孝、文政八年、  
歿 二五四九、今 上、明治二二年、 六五、  
八田知紀 一國安  
香川景樹 一國安  
〔欄三〇〕 澁谷國安は、薩藩の士にて、富豪の聞えありけるが、いつの頃よりにか、家産漸く衰へし

(以上、欄、二〇)



かども、なほ、西京に上りて、大臺ヶ原の開拓など企てけるが、是れも敗れしかば、遂に心地狂ひて  
歿りぬ。忍草第五編の草稿、其他知紀、國安の遺稿ども、あまた今大坂西區南堀江通り六丁目、澁谷  
國秋が許に残れり。國秋は國安の甥なり。

### 長谷川保樹

生 歿

生 二四六九、光 格、文化六年、

住 所

歿 二五五〇、今 上、明治二三年一、九、日八二、

姓 名

周防國岩國、

學 統

通稱 理平、國壽山、又櫻戸主人、

二條家——保樹

辭世

後、縣居、桂園を折衷して、一家をなせり。

樂しきは、さこそとおもへ、後の世も、花と紅葉の、山かげにして。

(以上、忌辰、上)

### 渡邊重春

生 歿

生 二四九一、仁 孝、天保二年三、一〇、

歿 二五五〇、今 上、明治二三年五、九、日六〇、

總 叙

渡邊重春は、重名の孫、重隆の長子なり。母は竹田津重任の女、加壽、天保二年辛卯三月十日生る。幼  
名竹之丞、幼時、中津の藩士手島某に就きて、漢學を修む。十八歳の時より、豐前京都郡津積村、定村  
直孝(重名の教子)に従ひて、國學を修め、誦勉最力む。直孝、其才學を愛し、教導する事、極めて懇篤な  
りき。家號を櫻園と負せられき。また、自ら唐めける名をつけて、欽英書屋と云ひき。後大に悟ると  
ころあり、廣く大家に交らひ、學の蘊奥を極めてむとて、あながちに父に請ひて、嘉永三年四月、浪  
華に起き、萩原廣道、櫻東雄、松浦道輔などの人々に逢ひ、京に上りて、野々口隆正にも逢ひて、皇國  
學のすべをも問ひき。それより伊勢國山田の里なる、足代弘訓の門に遊ぶ。

足代弘訓より  
の書信

この時、足代より重春の父重隆への來書に、  
御子息上野介殿(重春を云ふ)遠方御來臨、留學の儀、御奇特の御儀に、御座候。至極學問御出  
精に御座候。唯今の通、御勉強御座候は、末々は屹度、其效相見え申すべく候。拙者儀、男女の子  
供を三人失ひ、はかなく存じ候ほどなれば、遊學の御方を、我が子の如く存じ申候。それ故、御子  
息へも、何事も少しも御遠慮なく、御家内同然になされ候やう、家内の者へもさやう申付候。  
拙者儀、三十頃は、大天狗に御座候。四十頃より、江戸へ参り、柳營の御學風をも、ほゞ承り、なほ、芝  
山老侯を始め、諸大家に交らひ、五十に至り、又京都へ参り、禁廷の御學風をも、ほゞ承り、其後は、  
大に先非なくやみ、少しも天狗氣無之、知らざる事は、誰れにも相學び、今年は六十八に相成候  
へども、白髮の出生の心持に、御座候。御一笑下さるべく候。

健亭翁より、傳へ申候鈴屋大人の口授口傳の儀は、世に絶え候事、まことに歎惜致候。何とぞ御  
子息へ、残らず御傳申度候。云々。

されど、弘訓の學、專考證類聚を務む。而して重春のむれとせる所は、古典を究め、皇國の大道を明  
らむるに在り。其説合はぬ筋あり。ほどなく同じ里なる御歴清直の許に行き、從ひ學ぶ。また重春  
の期する所に協はず。後故ありて郷に歸り、平田篤胤の書を讀むに及びて、大に感ずるところあ  
り。わが道とすへきは、茲に在りて、其息、鏡胤に請ひて、歿後の門弟となる。其學統を重ずること、  
斯の如く、遂に伊吹屋門の巨擘となれり。

弘化四年丁未三月、從五位下上野介に任ぜられ、明治二年九月、中津藩知事より、皇學師範方を命

皇國の道を明  
にせんとす

平田門に入る

長谷川保樹 渡邊重春